
破滅の断罪者

斬空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破滅の断罪者

【Nコード】

N2875P

【作者名】

斬空

【あらすじ】

白銀の髪の少年はイレギュラーで在りながら存在し、黒髪の少女は少年を支えるために、金髪の少女は大切な二人を護るために存在する。

少年と少女達が集うときその物語は幕を開ける。

『破滅の断罪者』その者はその目に何を見る。

注：この小説は世界観設定と登場人物の一部を辰巳結愛さんから許可を貰いお借りしています。そのところをご了承ください。

初めに

初めに

この小説は辰巳 結愛さんの許可を貰い世界観がいつしよにカテゴリーページの皆様が登場します。

主人公は多分最強に近いです。

序盤は海人さんの作品「魔法少女リリカルなのは Strike
r S Sweet Songs Forever」から主人公である「不破飛翔」の過去の姿が出てきます。
(世界観がいつしよなので)

登場人物の話し方におかしな箇所が出るかもしれません。

過去については後に本人達の口から語られる予定です。

投稿は不定期になるかもしれません。

間違いなどがあるかもしれませんが一生懸命頑張るのでどうか温かい目でよろしく願います。

プロローグ（前書き）

連続投稿！

でも、長いです。

プロローグ

そこは神々に統治されていない世界の一つ、そこには、周りの自然に不釣合な研究所があつた。

そして、その研究所の奥深くの部屋に二人の子供がお互いに見つめあっていた。

一人は白銀の髪に右目だけ紅の瞳をもつ少年で、もう一人は緑色の液体が入ったカプセルの中にいる黒の長髪で翡翠の瞳をもつ少女だつた。

《お前は一体……誰だ》

俺はカプセルに入っている少女を睨みながら言葉を放った。

《……私は貴方の生体制御ユニット『サヤ』》

だが、少女は動じずに言葉を淡々と返してきた。

これが、俺と少女の初めての邂逅だつた。

*

この邂逅から三年の月日が流れたある日、研究所の前に男女合わせて四人がいた。

「ねえ、スーちゃん本当にここで合っているの？」

と隣にいる玄金武士くろがねたけが私、白刀風虎はくとふうこに聞いてきた。

「私が場所を間違える訳がないだろ。それにその呼び方はやめると言っただが？」

「えー。別にいいでしょ。僕がどう呼ぼうかなんて。それに反応が小さかったから本当に間違えたなかった心配してたんだよ。ほら、そういう顔してるでしょ」

と底が見えない笑顔をしながら答えてきた。私がそれを冷たい目をしながら見ていると

「ほおら。今はそのことより目の前のことでしょ。いるにしろ、いないにしろ確認が仕事なんだから。それに今回ばかりはここに何かあると思うから」

真剣な面持ちでいったのは青器龍水だ。あおきりゅうづみ

「確かにそうだな。幾ら反応が小さかったにしろ俺等『カテゴリーページ』が間違えるとは、思えねえからな」

後ろにいた朱杖炎雀しゆじやうえんせきが龍水の言葉に付け足すように言った。

「そうだな。では早く行動を起こすとするか」

……間に合っていればいいが。

*

「ドゴン」と上の方から爆発音が聴こえてきた。どうやら誰かが襲撃してきたらしい。次第に部屋の外が騒がしくなってきた。

「どうした。何事だ」

「どうやら侵入者が四人正面から乗り込んできたのようです。只今、侵入者対処に警備の者を動かしています」

と研究長が部下の研究者に報告を受けているのが聞こえた。それにしてもたったの四人で此処に乗り込んでくるなんて変な奴らがい

たもんだ。

「だが、丁度いい。少し早いが俺もいや、俺達もこれを機に動かせ

てもらうか」

と言いながら、俺は素早く二人の後ろに付き一瞬で気絶させた。
「悪いな。俺を今まで実験体にしてた報いだ。俺は此处をでさせてもらうぜ」

俺は捨てゼリフを吐きながら、ひとまずいっしょに出る仲間のもとに向かった。

*

「はあ、本当五月蠅いやつらだね。僕達は下に用があるんだけど」
襲いくる奴等を吹き飛ばしながら玄金は言った。とそのとき不意に彼等しか感じられないような力の波動を彼等は感じていた。

「これはまさか。白刀」

「ああ。やはり此处だったようだ。アイツがいるのは」

「そおと分かれれば、一気にいくぞ武士」

「君に言われなくても行くさ」

四人は自らを鼓舞しあつて先へと進んでいった。

「ふう、こつちまで警備の奴等がくるなんて聞いてないんだけどな」
と俺は襲ってきた奴らを倒しながらぼやいた。

「まあ、良しさ。上も騒がしくなってきたしさつさといかしてもら
うぞ」

俺は手から黒い波動（バットファンガイアの手からだす波動のよう
な）をだし、周りの敵を撃退して先へ進んでいった。暫くすると
やっと目的の部屋に來れた。

「ふう、やつとか」

俺は部屋へと入った。そこは周りが機械に埋め尽くされその中心
に緑色の液体が入ったカプセルがあった。俺はカプセルに近ずきそ

の中にいる『少女』に話しかけた。

「よう、『サヤ』。ちよつと早いが此処を出るときが来たようだ」
すると、少女の口は開いていないのに声が聴こえてきた。

《そのようですね、『マスター』。では行きますか？》

「ああ、そうだな」

俺と少女『サヤ』は手をカプセル越しに重ね合つたすると、そこから光が放ち、収まつた瞬間、黒い服を着たサヤが俺の目の前に立つていた。

「いくぞ」

「はい」

俺とサヤは出口に向かって走り出した。

*

「此処はホールか？」

そこはかなり広いホールだった。どうやら私達は、敵の罠にかかつてしまったようだ。

「おいおい、えらく殺風景なところだな。それにしても風虎、あれは大丈夫か？」

「私が自分の作つた物を壊す訳がないだろう。それより今は、周りを注意しろ」

とそんな、話をしていた時、別の通路から私達が探していた拘束服を着た少年と黒い服を着た少女がやってきた。

「風虎ちゃん、あれあれ！どうやら無事のようだよ」

後ろにいた玄金武士がはしゃいでいた。

「ああ、どうやらそのようだな」

柄にも無く安堵した私達は二人に近ずき

「久しぶりだな、黒滅刃^{こくめつじん}。無事だったようだな」

と言つただが、その反応は期待を裏切るものだった。

「誰だ、お前等は何故俺の名前を知っている」

＊

俺とサヤは出口に向かつて走っていた。だが、たどり着いた場所は出口では無くかなり広いホールだった。そしてそこには侵入者と思わしき四人の男女がいた。四人は俺を見ると何故か安堵してこっちに近づくなり白に近い銀髪に上から下まで白一色でやや吊り目気味の女が言葉を放った。

「久しぶりだな、黒滅刃。無事だったようだな」

久しぶり？だが、俺には、記憶が無かったので

「誰だ、お前等は何故俺の名前を知っている」

と言ったすると黒髪に、さっきの女みたいに上から下まで黒一色でそのうえに白衣を着た男が、

「は？君、何を言っているの頭でもおかしくなったの？」

と言い返してきた。俺、本当に記憶にないんだが。どうやらこの四人は俺が記憶を無くしてしまっていることを知らないようなのでそのことを話すと四人一斉に、「は？」って顔をされた。そんなに驚かれても困るんだが。すると、青髪で青一色の服装の女が、

「本当に私達のこと、覚えてないの？」

「ああ、さっきも言ったとおり俺は今、記憶がないんだ。どうやら此処に連れてこられる前からだったらしいから此処でのことはあんまり関係ないらしいが」

すると、サヤが、

「どうやらマスターの記憶にはロックがかかっているようです。なにかのキーワードがあれば外せるのですが」

と言った。それにしてもキーワードねえ。確かにこの四人には、何か感じるがそこまでは。と考えているといきなり、

「其処までだ。Ωにその四人は動かないでもらおうか」

と俺の研究コードを叫びながら気絶させたはずの研究長が怪人共を引き連れてホールに立っていた。

「く、どうやら此処までか。おい、あんたら早く俺達をおいて逃げたほうが身のためだぞ」

と俺が叫ぶと、

「ふざけんな。てめえを置いて逃げられるかよ。何のために此処まできたと思っただよ」

と赤髪の子供が叫んできた。

「なんで、其処までして俺を助けようとするんだよ」

「貴方が必要だからでしょ」

な。俺が必要だと。確かこの言葉、前にも何処かで……、

《貴方が存在するということは、貴方が必要ということ》

「ぐ、今のは俺の記憶か？あれは確か『皇帝』だったか」

どうやら俺の記憶が戻り始めているようだ昔のことが頭に浮かんできた。もう少しした後、一つきっかけがあれば、だがそんな暇もくれずに研究長が、

「何時まで、喋っているつもりだ。やれ怪人達よ。奴らを殺してしまえ。しかし、Ωと制御ユニットは殺すなよ」

と怪人共に命令し、襲い掛かってきた。

*

「はあ、こうなったら仕方ないね。こつちも本当の姿でいきますか」

「そうだな、この二人を守るためだ。しかたない」

「ああ、さっさといくぜ」

「後方支援は私に任せて」

と私達が前に出ると、黒滅刃が、

「おい、何やってる。早く逃げろよ」

「ふん。ここは私達に任せて貴様は其処にいる。青器龍水」

「はいはい」と龍水が刃達に水の膜をはり私達はアンデット本三の姿に戻り前に走り出した。

四人の姿が変わったと同時に俺の頭に激痛がはしった。

「があああああああああああああ………」

「マスター！」

サヤが心配そうに聞いてきた。

「はあはあはあ、大丈夫だ。今、記憶が戻った。俺は元々存在することがなかったはずの存在だったんだ。だが存在し、なおかつ『神々の力』を持ってしまったことでやつらに捕まり、お前を作りださせるきっかけになってしまった。すまなかったな」

俺がサヤに謝るとサヤは、

「謝らないでください。私はマスターのおかげで存在することができのですから。これはマスターのおかげなのですから」

「サヤ」と俺が言うとサヤは俺を抱きしめながら、

「私は、いつでもマスターと共にいます。ですからマスターも自分を責めないでください」

「ああ、分かった。いっしょに戦ってくれ。サヤ」

「はい。マスター」

「「ユニゾン」」

俺とサヤは融合し、俺は髪が一房黒が入り左目が翡翠色になっていた。

「いくぞ」

《はい》

俺は龍水がはった水の膜からでて、戦場にいった。

＊

「はあああああ」

私達はアンデットの姿になり戦っていたが、敵がなかなか減る様子が無く消耗していた。

「く、敵が多すぎる」

「だけど、此处でやられるわけには」

すると、姿が少し変わっている刃がこの場に現れた。

「何をしている、黒滅刃。貴様はあそこにいるといったはずだ」
すると、刃は私に笑いかけながら、

「大丈夫だ、風虎。俺の記憶は元に戻った後は任せろ」

と言い、その身をアンデットの姿に変えた。だがその姿は私達が知っている姿ではなく、胸に紅い宝玉をつけ、全体的に黒い騎士のような姿をしている『ナイト・ジョーカー』になった。

その姿を見た私達は、

「馬鹿な、奴は『フェンリルアンデット』ではなかったのか？」

「なんだあの姿は」

「どういう事なのこれは？」

「まさか！」

と反応しながら言われたとおり下がっていった。

俺は黒い剣（クウガのタイタンソードを黒くしたやつ）を使いながら敵を切り倒していた。だが残り十体前後になったところで、俺の体に異変が起きた。

「ぐ、サヤどうした？」

《まだ、完全に制御できているわけではないので今の状態を完全に維持できません》

すると、怪人共が俺を袋叩きしてきた。

「ぐ、がこの糞が」

俺は辛うじて吹き飛ばすことができたがその反動でサヤとのユニゾンがとけ元の姿に戻ってしまった。

「くそ、どうすれば」

すると、風虎が「黒滅刃、これを使え」とある物を投げてきた。

それはカメラ型の黒いバツクルと銃剣型の武器だった。それを見た研究長が焦りながら、

「馬鹿な、それはわが組織が作った『ディガイドライバー』と『サモンドライバー』何故、貴様が」

「私が作ったのだから、私が持つていて何が悪い」

「だが、それは余りに力が強すぎて封印された試作機^{プロトタイプ}、奴に使えるものか」

「それでも、使ってやるさ。みんなの期待に答えてやるために」

と俺はバツクルを腰につけたするとベルトが伸長して装着され、

右腰にサモンドライバー、左腰に『ライドブッカー・プロト』が付いた。

「そんな、まさかそのベルトが装着できるものがあるなど」

「これが、人がもつ想いの力だ」

「貴様、一体何者だ」

「ふ、俺は全てを断罪する仮面ライダーだ。記憶に刻み込んで」と言い放ち、俺は言った。

「変身」

『KAMEN RIDER DEGAIDE』

とベルトから電子音がすると回りに十個ぐらいの黒い残像が重なり、黒いライドプレートが顔と両肩に刺さり複眼が青で基本カラーが黒の騎士のような『仮面ライダーディガイド』に変身した。

「さあ、裁きの時だ」

「馬鹿な、こうなれば私自らが」
と研究者は何かが入った注射を自らに打ち込みその身を怪人に変貌させた。

「ふう、とりあえずこれからいつてみるか」

俺は左腰のライドブッカー・プロトを取りガンモードにしながら一枚のカードをベルト差し込んだ。

『ATTACK RIDE BLAST』

電子音がカードの名を告げ、ライドブッカー・プロトを撃つと銃身が分裂し弾を複数放った。それは再び襲い掛かってきた怪人共を吹き飛ばしさらに二、三体爆発させた。

「凄いなこの力、じゃあ次はこれかな？」

俺はソードモードに変え、再びカードを差し込んだ。

『ATTACK RIDE SLASH』

そして、近くにいた敵に切りかかったら今度は刀身が分裂し複数回切り裂いた。それを確認すると、右腰のサモンドライバーも取り、近くの敵を切ったり、遠くの敵は撃つを繰り返した。そして残すは研究長がなった怪人ただ一人となった。

「くそ、こんな筈じゃ。なかったのにこうなれば、私一人でも逃げ上に伝えなければ」

と逃げようとしたところ、俺は脚をライドブッカー・プロトとサモンドライバーで「逃げさねえよ」と撃ち抜いた。

「ぐわああああああああああああああああああ」

と叫び転んだ研究長に言いつつ、紋章が金色で描かれたカードをベルトに差し込んだ。

「これで、終わりだ」

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE DE GAIDE』

すると、俺の目の前に十枚の3Dカードが現れた。俺はジャンプして3Dカードを潜る度に威力を上げる『ディメンションキック』

を放った。

「はあああああああつ」

「ぐぎゃあああああああああああああああ」

キックは研究長に当たり爆殺させた。

戦いを終えた俺は変身を解いてみんなの前に立った。

「すまん。みんな、色々と迷惑かけて」

「いや、貴様のおかげで助かったのはこっちだ。そんな事を言うな。それより教えてもらうぞ。貴様に何があったかを」

「ああ」と俺は答えこの三年間で何があったかを四人に話した。そして全てを話し終え、これからどうするか話あった。

「黒滅刃、これからどうするんだ？」

「とりあえず、世界を回ってみるよ。自分の力を完全にしたいしな」
「そうか、わかったでは、我々は陛下を探しつつ『始まりの地』を守護する」

「ああ、頼んだぜ。風虎、武士、龍水、炎雀」

「わかってるよ。ほらそういう顔してるでしょ」

「まったくよ。私達は私達でやるから。貴方は貴方をお願いね」

「そおいうこった。またな」

「と言い四人は『始まりの地』に帰っていった。俺は後始末で研究所を完全に破壊した。

「さあ、これで終わりだ。じゃ、行こうか。サヤ」

「はい、マスター」

こうして、『破滅の断罪者』と呼ばれるものの物語が始まった。

プロローグ（後書き）

刃「ついに始まったな。」

斬「そうだな。」

刃「ところで作者、後書きはどうするんだ？」

斬「補足や質問に答える場とするか。」

刃「そうか。それじゃ、」

刃・斬「質問や感想をお待ちしております。」

第1話『頼まれたら、断れない』（前書き）

第1話目です。

ちなみにこの回と次回は戦闘はありません。

第1話『頼まれたら、断れない』

研究所を出てから更に三年経った現在、刃はサヤともう一人の仲間を連れて『始まりの地』に帰ってきていた。

「ふう、流石にこれだけ帰って来ていなかったから町並みも変わっているな。」

と俺が感慨深く言うと

「それは仕方ないですよ、マスター。三年も経っているのですから。」

とサヤが淡々と言った。いや、そうだけでも感慨にふけさせくれないと思うが。

「それはそうと、どうだ始まりの地にきた感想は『レヴァ』。」

俺は、後ろにいるこの三年間で新しく仲間になった『ヴァティ・レン』、通称『レヴァ』に声をかけた。

「おーここが始まりの地か。見た目は今まで回ってきた世界とあんまり変わらないから実感がわかないけど。」

「まあ、それは仕方ないだろ。言ってしまうえば、お前の元々の世界のように、統治されていない世界が例外なだけだしな。」

「それはそうだけだな。」

とレヴァの声が小さくなってしまったのを聞いて、

《あつ、しまったな。この話はするんじゃないかったか。》

《マスターはデリカシーがないんじゃないですか？》

いや、あるからな。

「すまん。この話はするんじゃないかったな。」

「いや、あのときの事なら気にしないでくれ。あれは仕方ないことだと分かっているからな。」

「まあ、暗いお話はここまでにしまして、そろそろ行きましょう。」

場所は分かっているのですか、マスター。」
「ん、ああ、そろそろ行くか。」

*

『ミルクディッパー』いや、まさか最初は、一般人で『野上良太郎』の姉である『野上愛理』さんが『皇帝』だったとは、あいつらも大変だったんだろうな。と思いつつ『ミルクディッパー』の扉を開けるとそこには、『皇帝』である野上愛理と『皇帝の下僕』である青器龍水がいた。

「あれ、龍水じゃないか。久しぶりだな。そして、お久しぶりですね、陛下。」

「ほんと、久しぶりね、黒滅それにサヤ。そして、初めまして、レン。青器龍水よ。」

「初めまして、ヴァティ・レンです。ん？なんで私の名前を。」

「ああ、それは黒滅に事前に連絡をもらっていたからよ。」

「ああ、そうだったんですか。」

と二人が話をしていたとき、

「そろそろ私も言いかしら？」

と陛下が声をかけた。

「すみません、陛下。私の話に夢中になって。」

「いえいえ、いいわ。それじゃ改めて、久しぶりですね。黒滅君にサヤさん。初めまして、レンさん？でいいですか。」

「あ、はい。レンがファミリィネームなので。」

「それにしてもなんで、龍水がいるんだ。」

と俺が疑問を言うと、

「それは私が答えるわ。」

と陛下が答えた。

あの後、陛下に「立ち話をなんだから座って下さい」と言われたので今はカウンターに座っているわけだが、ここで良太郎がいなかったことに気が付いたので、伺うと、

「良ちゃんなら買い物に行っているわよ。」
なるほど、それなら納得だ。

「それでは、陛下。俺をここに呼んだ理由と龍水がここにいる理由を伺いたいのですが。」

「ええ、まず青器さんがここにいる理由は私への定期報告よ。そのついでにコーヒーでもとね。」

なるほど、それなら納得だな。

「それでは、俺を呼んだ理由は一体？」

「貴方に頼みたいことがあるの。」

頼みたいことは？何か起きたとは思えないが。

「それは、一体。」

「ある子を導いてほしいの。仮面ライダーがこういうものか教えるために。」

は？導くだって。

「ソレハ、ドウィウイミデスカ。」

「どういうってそのままだの意味だけど？それよりなぜ片言に？」

いえ、陛下。導くですよ。俺みたいな奴に頼むことですか？

「駄目なの？（´；ω；´）うるうる。」

何故、ここで涙目？そこまでされたら、断れないじゃないですか。
「はあ、分かりました。引き受けましょう、陛下の頼みなのだから。」

「ありがとう。黒滅君。」

「して、その子は今何処に？」

「ええ、『十番目』と一緒に世界を回っているわ。」

＊

とある世界、そこには『十番目』仮面ライダーディケイドである『門矢士』が世界を救うために仲間たちとともに旅を続けていた。

「あんたが偽物でしょ。」

「あんた、こそ。」

と二匹？の白い蝙蝠が言い争いをしていた。

「まさか、またワームの擬態？」

「どっちが本物ですか？」

「ほんと、どっちが本物なんですか？」

そこには見慣れない赤髪の少年がいた。

「どっちでもいい。いいか、『飛翔』。真実はそれだけだ。」

と士は言いつつ、天を指し示すポーズをとっていた。

「ま、ま、ま。おいおい。二人ともとても綺麗ですよ。」

と光栄次郎が言つと、

「どっちもじゃ、駄目よ。」

と吹き飛ばされ、そのひょうしに背景ロールの鎖に触れ背景が変わってしまった。

その背景は、森の真ん中に大きな太鼓があるという絵だった。

第1話『頼まれたら、断れない』（後書き）

刃とサヤは一回『始まりの地』に帰っており、『野上愛理』が『皇帝』と知っています。

第2話『行動開始』（前書き）

第2話です。

戦闘がないのはこの回までです。

それでは、どうぞ。

第2話『行動開始』

ところは、戻って『ミルクディッパー』

「十番目？ああ、デイケイドの事ですか。」

と俺は少し声を低くしつつ答えた。

「マスター。やはり、あのとき。」

「完全に消したと、思っていたんだがな。」

俺は三年前に自らが、潰した施設を思い返していた。

「まあ、これのことを試作機プロトタイプと言っていた時に気付くべきだったんだがな。」

と俺はドライバーをカウンターに置きながら言った。

「でも、貴方はこれのおかげで『皇帝に愛された子』と『皇帝の下僕』^{ソット}として存在することができんですから。」

「そうなんですけども。」とぼやきながら、陛下が淹れてくださったコーヒーを飲んだ。

「それで、その少年はライダーの力を持っているのですか。」

「ええ、彼と同じ、十番目の力を持っていますよ。」

「そうですか、では先回りして置きましょう。彼等は今この世界に？」

と陛下に聞くと龍水が、

「それは、私が。今彼等は『カブトの世界』にいるわ。」

「なるほど。じゃあ、『響鬼の世界』だな。彼等が次に行くのは。ではそろそろ行きますか。陛下、コーヒーありがとうございました。行くぞ、サヤ、レヴア。」

「はい、マスター。では、愛理さん、龍水さん、また会いましょう。」

「ええ、愛理さん、龍水さん、コーヒーありがとうございました。」
と俺達は挨拶して『ミルクディッパー』を出た。

＊

だが、店を出てしばらく歩いていたとき、いきなり目の前に灰色のオーロラが現れた。

「？マスターですか？」

「いや、俺はまだ何にもしてないぞ。」

すると、オーロラから、茶色のフェルト帽とコートを着て眼鏡をかけている中年の男が出てきた。

「お前は、『魔術師^{マギス}』！いや、今は『鳴滝』か。なんの用だ。」

「黒滅くん。『断罪者』である、君に頼みたいことがあるんだ。」

俺に頼みたいことだと？こいつ、何を考えているんだ？

「言ってみるよ。」

「実は『世界の破壊者』であるディケイドを倒してもらいたいんだ。」

「は？ディケイドを倒してほしいだと。」

「お前、俺が『皇帝の下僕』だと分かったうえで言っているのか？」

「ああ、だがそれに加えて君は『断罪者』でもある。だから、君はディケイドを倒す権限があるはずだ。」

確かに断罪者の俺にはその権限があるだが、その前に俺は皇帝の下僕だ。そんなことをするわけがない。まあ、悪のライダーは別だが、

「断らせてもらう。お前の願いを聞く道理がない。それにディケイドはこれといった罪をやっていないからな。」

「く。」と鳴滝は言い、再びオーロラを出しながら、

「今、無理にとは言わないだがこの先ディケイドを野放しにしていると大変なことが起こるぞ。」

と捨てゼリフを言いながら消えていった。

「大変なこと？それはこの頃進んでいる世界の融合と関係しているのでは？」

「さあな。だがそれは渡達の仕事だ。俺の出る幕じゃない。」
話していると、後ろから、白刀風虎が来た。

「おお。久しぶりじゃないか、風虎。」

「ああ。久しぶりだな、黒滅刃、サヤ。そして、初めましてだな。
白刀風虎だ。」

「はい。初めまして、ヴァティ・レンです。」

再開を喜ぶのは良いが、こっちとしては、急いでいるからな。

「どうした？一応、俺等は急いでいるんだけど。」

「陛下から話は聞いている。実は渡したいものがあつてな。」
渡したいもの？はて？

「これなんだが。」

と風虎はハンドバックの中から紅い剣型のドライバーをだしてきた。

おいおい、どおやったらそんなものがハンドバックに入るんだよ。

「これは『大ショッカー』が作った『解析』のドライバーの試作機
で『ディザンドライバー』だ。もともと『解析』の能力自体は搭載
されていないがな。」

「それで？」

「これをお前達に渡そうと思つてな。」

うーん。それじゃ、

「レヴア、お前が使えるよ。」

「え………私がか？」

「ああ、戦い方は後々、俺が教えてやるから。」

「それだったら。」

とレヴアは風虎から『ディザンドライバー』を受け取った。

「もう、行くのか？」

「ああ、そろそろ行かないとな。」

「そうか。気をつけろよ。」

「またな、風虎。」

そして俺達は、灰色のオーロラを発生させ、『響鬼の世界』へ向かった。

第2話『行動開始』（後書き）

斬「はあ。」

刃「どうした、作者。ため息なんて。」

斬「いや、感想とかが少ないからさ。」

刃「いや、それは仕方ないだろ。まだ始まって間もないし、

駄文だし。」

斬「それを言うなよ。こっちも頑張っているんだから。」

刃「まあ、それもそうだな。さて、御礼でも言えよ。」

斬「ああ、そうだった。海人様、感想有難う御座います。」

刃「次回はどうすんだよ。」

斬「とりあえず、キャラ紹介と続きかな？」

刃「そうか。」

斬・刃「」では次回で。」

『キャラ&mp・ライダー紹介』（前書き）

注意！！

ネタバレを含みます。それでもよろしい方のみお読み下さい。

『キャラ&ライダー紹介』

「と言う訳で今回はキャラ紹介です。」

「何がと言う訳なんですか。マスター。」

いや、俺も何が何だかよく分からないんだが、

「まあ、作者が『オマエラ、そろそろ自分たちのことを紹介しろよ。』と言っていたのでさっさと終わらせることにしよう。」

「それもそうだな。」

「まずは、俺だな。」

黒滅 刃 こくめつ じん

年齢・16（あくまでも外見は！）

性別・男

容姿・白銀の髪に紅の右目で両腕に蒼色の入れ墨がある。中性的な顔立ちでどちらかと言えば女性より。服装は主に上下黒に黒の袖が短くフードがあるコートを着ている。時々、上が白になる。

詳細

もともとは、存在しなかった筈の「ワイルドスート」のカテゴリページ『ページ・オラ・ラフェイク偽りの小姓』だったが、『二十二の神々』の力と『大シヨツカー』の実験（ダクバのアマダムや平成怪人の細胞を埋め込む）により、力が変異して『ジョーカー化』してしまう。当初は他のページ達四人とは最初はあるまいうまくいっていなかった（ワイルドスート自体がイレギュラーな存在のため）が、ある出来事を境に同等の存在として認められる。がその後に『大シヨツカー』に捕まってしまうため音信不通だった。

性格は冷静で仲間思いだが、仲間を傷つけられたり侮辱されたりすると冷静なままだが残虐的になる（ジョーカー化の影響により）。

残虐的になっているときは紅の目は金色になっている。

神の力により、自分の意思で世界や生命を消滅させることができるので『断罪者』と呼ばれる。

決め台詞は「全てを断罪する仮面ライダーだ。記憶に刻み込んでけ。」

「と「さあ、裁きの時だ。」

一応、家事全般が得意。特に料理が。

ナイト・ジョーカー

刃のアンデットとしての姿。もともとは『フェンリルアンデット』だったが前条の影響によりこの姿になった。黒い騎士のような姿で胸に紅い宝玉がある（ここにダグバのアマダムもある）。主に能力で作った剣や両腕についている鎌で戦う。黒い翼を生やすことができる。

もちろんページ共通の『PRISON』も使える。刃の場合は波動で敵の動きを完全に止める。

実験の影響で他の怪人の能力も使える。例としてダグバの超自然発火能力やワームのクロックアップなど。残虐的のときは宝玉の色が金色になる。

腰に『ナイトラウザー』と呼ばれるものが付いている。

「おい、俺の顔が女よりってどう言うことだよ。」

「え、私は良いと思いますけど。」

「作者に寄れば『三人が並んで歩いていると姉妹と見られることがある。』とか。」

「作者のやるーーーー。」

「次はわたしですね。」

サヤ

年齢・？（造られた存在のため）

性別・女

容姿・『鋼殻のレギオス』に出てくるサヤと同じ容姿

詳細

刃の生体制御ユニットとして『大シヨツカー』に造り出された存在。擬似的にイマジンの力を持っている為刃と後述のユニゾンを行う事が出来る（なので原則的には他の人にもユニゾンする事が出来る）。刃をコントロールする為のシステムをつけられる予定だったが、その前に逃げたのでつけられていない。

刃と『ユニゾン』（元ネタはリリなのとイマジンの憑依から）することで刃の神の力を最大限に使うことができる（この時の主人格は刃となる）。

刃の細胞を元に造られたのでカテゴリーページ由来の防御系の力や補助（回復）系の力を持っている。

残虐的になった刃を止められる存在。刃の事を想っており、無茶をしないように見張っている。

「少ないですね。」

「まあ、そう気を落とすな。」

「力に関しては、本編で出てくる度に解説するらしいぞ。」

「最後が私だな。」

ヴァティ・レン（通称レヴァ）

年齢・15

性別・女

容姿・『鋼殻のレギオス』に出てくるレヴァンティンとニーナ・アントークを足して二で割った感じ。

詳細

旅の途中で行った神々に統治されていない『滅びゆく世界』出身。自分の世界があると理由で滅んだために刃達についてゆく。親は幼い頃に他界している。

幼い頃から自らを鍛えていたため剣術や体術は達人級。何かしらの力を持っているが詳細は不明だが、自分の世界が滅びる時に何かと出会っているらしくそのことが起因している模様（刃達には話していない）。

秘かに刃の事を想っているが、なかなか口に出せない。

性格はニーナの性格とレヴァンティンの性格が合わさっている（仲間には、ニーナの性格、他人や目上の人にはレヴァンティンの性格）。

家事は大体できるが、料理は苦手。

「サヤもそうだが、レヴァも元ネタ『鋼殻』かよ。」

「私は別に構いませんけど。」

「そのことについては、作者が『鋼殻のレギオス』が好きだかららしいぞ。」

「そうなのか。まあいいか。最後にライダー紹介だな。」

仮面ライダーディガイド

基本カラーは黒。ディケイドのプロトタイプなだけあって腕部や下半身は同じだが胸部に十を模したラインが無くどこことなく騎士を思わせるような姿で頭に一本、両肩に二本ずつライドプレートが付く。目は赤色。

元々はディケイドのプロトタイプとして開発されたが、スペックを高く作ったことで変身者がいなかったことなどの問題点で封印されていた。

能力は基本的にディケイドと同じで平成ライダーへの変身とサブライダーとダークライダーへの変身能力を持つ。他にも隠された力があるらしいが詳細は不明。

専用ツール

ディガイドライバー

ディガイドの変身ベルト。ディケイドライバーと基本的に形は同じ。相違点は色が黒くなり、クウガからキバの紋章の外側にダークライダーの紋章がついている。

ライドブッカー・プロト

ディケイドのライドブッカーのプロトタイプ。モードはブックモード、ソードモード、ガンモードの三形態。斬撃、銃弾の色は黒。性能自体はディケイドの持つものと変わらないが、威力はこちらの方が高い。

サモンドライバー

銃身が銀色で刀身が黒の銃剣型のドライバー。一応、ディエンドライバーのプロトタイプとして開発されたためライダーを召喚することができ、リボルバー部にカード挿入口がある。

このドライバー用の『SLASH』や『BLAST』のカードが存在する。『BLAST』は誘導性が付加されている。

『FINAL ATTACK RIDE』は銀色の紋章になっている。斬撃、銃弾の色は黒みがかった銀色となっている。ライダーカードを複数枚使うことが可能。

変身前でも武器として使用可能。

仮面ライダーディザンド

基本カラーは紅。仮面ライダーグレイブを紅にして両肩をディエン

ドの様にした姿。

辰巳さんの作品に出てきたディコードのプロトタイプだが『解析』のシステムは外されているがその代わりにライダーの召喚をすることが出来る。

身軽さを利用した戦いを行う。

専用ツール

ディザンドライバー

長剣型のドライバーで柄の部分にカード挿入口がある。変身前でも武器として使用可能。

基本は近接戦だが、『ATTACK RIDE』のカードで遠距離もある程度は可能。

『FINAL ATTACK RIDE』は、そのまま斬るバージョンと斬撃を飛ばすバージョンがある。

斬撃の色は紅。ライダーカードを複数枚使うことができる。

『キャラ&mp・ライダー紹介』（後書き）

今回は連続投稿です。

第3話『鬼の力』（前書き）

連続投稿！！

今回から『D C D 響鬼の世界編』です。

第3話『鬼の力』

『響鬼の世界』のとある森の中に灰色のオーロラが出現した。人がいれば大騒ぎになるところだが、周りに一人としておらずそんな心配は杞憂のようだ。すると、そのオーロラから刃達が出てきた。

「どうやら無事に着いたようだな。」

「此処が『響鬼の世界』か」

「ああ、『恋人』が創り出したな。」

俺は周りを見渡しながら、

「さてと、ここなら修行にちょうどいいし早速やりますか。どうせデイケイド達来るのももう少し先だし。」

と言うと、レヴァが、

「え、もうやるのか？私としてはもう少しこの世界のことを知りたいのだが。」

「それは修行の合間に話すさ。サヤは周りのことは任せた。さあ、修行開始だ。」

俺は悪魔のような顔をしながらレヴァの修行を始めた。

*

それから、数日どうやらデイケイド一行がこの世界に着いたようだ。

「ん、どうやら来たようだな。」

「そうですね。どうするのですか？マスター。」

「そうだな。とりあえず移動するか。レヴァ、行くぞ。」

と俺は修行でうまく立てないレヴァを立たせた。

「ああ、ありがとう、刃。」

そして、その場から移動した。

しばらく歩いていると木の板を太鼓にみたたてて撥で叩いている少年がいた。

「僕は鬼になる。なつて・・・みせる。」

すると、その後ろから一人の男が近づいてきた。

「少年、何やってんだ？」

「何って鍛えてるんです。」

と言うと男は少年から撥を取り捨てつつ、

「やめろ、やめろ。疲れるだけだ。」

と言い木の板まで取ってしまった。

「ヒビキさん一体どうしちゃたんですか？最近おかしいですよ。真っ直ぐ僕を見てくれないし、鍛えてくれないし。」

と少年は声を荒げながら言った。そんなやりとりをしている中、後ろから、海東大樹が現れた。

「お宝の巻物はあの中か。」

すると、ヒビキと言われた男はいきなり海東にディスクを投げつけた。

「今日はやけに客が多いなあ。」

「誰なんですか？」

「そうだ。丁度いい、少年。たった今、お前を破門する。」

「え。」

「新しい師匠はあの人だ。」

と海東を指差した。

「そんな、無茶苦茶ですよ。」

「よろしく願います。」

と言うとヒビキは去っていった。

「おじさんのくせに、隙がないな。」

「ヒビキさん。」

「あの人、自分勝手すぎないか？師匠と慕っている少年をあんな男に任せるなんて。」

あんな男って海東も言われ放題だな。

「マスター。あのヒビキと言う人。」

「ああ、この世界の響鬼だな。しかもあの気配、どうやら自分の鬼の力を制御できていないな。」

と俺が言つとレヴァが小首を傾げながら、

「？どういうことだ。」

「自分の鬼の力を制御できない鬼はその身が魔化魍になってしまふ。だから鬼達はそうならないように日々己を鍛えているんだよ。」

「そうか、それでどうするんだ。」

「とりあえず、ヒビキを追いかけるぞ。まだ近くにいますはずだ。」

俺達はヒビキの後を追った。

しばらく進むと川岸にテントを張り休んでいるヒビキを見つけた。

「また客か、本当に今日は多いな。」

「初めましてだな、ヒビキさん。俺は黒滅刃、隣にるのがサヤとレヴァだ。さて、俺は遠まわしに聞くのが嫌いだから単刀直入に言う。あんた、鬼の力が制御出来なくなってきたているだろ。」

と言うとヒビキは目を見開きながらこっちを見た、

「少女？いや、その格好と声を聞く限り少年か。何故知っているのか聞かないが、そうだな君の言うとおりだ。俺の鬼の力が強くなり過ぎている。」

「やっぱりか。それかあの少年を遠ざけている理由は。」

「見ていたのか。そうだ、俺はアスムを俺のようにしたくない。だからあの青年に任せた。」

見ず知らずの男に任せるのもどうかと思うがな。

「どうするつもりだ。」

「俺は鬼を引退するよ。」

「だが、そんなことをしても魔化魍はお前を狙ってくるぞ。それにわかってはいるはずだろ、あの少年の純粋で優しい心なら鬼の力を制御できると。」

「……………」

ヒビキは黙ったまま川を見つめていた。

「答えないか。まあ良いさ、決めるのはあんだ。俺はこのことを言いたかっただけだしな。行くぞ、サヤ、レヴァ。」

俺達は川を見つめているヒビキを置いてその場を後にした。

しばらく、森の中を歩いているとレヴァが、

「いいのか。ヒビキをあのままにして。」

と言ってきた。

「大丈夫だろ。俺等が動かなくてもディケイド達が動くだろうし、それに…………ちつ。」

言いかけたところに二匹の魔化魍が姿を現した。

「はあ、なんでこんなときに。レヴァ、修行の成果を見せるときがきたようだぞ。」

俺は『ディガイドライバー』を出しながら言った。

「ああ、修行の成果見せてやるさ。」

とレヴァも『ディザンドライバー』を出しながら言い返した。

「じゃ、行きますか。」

「ああ。」

「「変身」」

俺はバックルにレヴァは柄の部分にカードを差し込みながら言った。

『KAMEN RIDE DEGAIDE』 『KAMEN RIDE DEZANDE』

俺は『仮面ライダーディガイド』にレヴァは仮面ライダーグレイブを紅にして両肩がディエンドのような『仮面ライダーディザンド』

に変身した。

「さあ、裁きの時だ。」

俺は『サモンドライバー』をレヴアは武器でもある『ディザンドライバー』を持って切りかかった。

「はあ。」

「やあ。」

「ぐぎゅるる。」

二匹はほぼ同時に切られた。

「さて、さつさと終わらすか。」

と言うと俺はカードを取り出す。それを見たレヴアも一枚のカードを取り出し、俺は『サモンドライバー』にレヴアもドライバーに装填した。

『ATTACK RIDE SLASH』

俺は黒みがかった銀のレヴアは紅の斬撃を叩き込んだ。

「はああああああ。」

「やああああああ。」

「ぐぎゅうううううううう。」

二匹は同じ場所に吹き飛んだ。

「決めるぞ。」

俺はレヴアに銀色の紋章が描かれたカードを見せいった。

「ああ。」

そして、レヴアも自分のカードを差し込んだ。

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE DE
GAIDE』

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE DE
ZANDE』

俺は半透明のカードが照準となって標的を補足しビームを放つ『ディメンションシュート』をレヴアは斬撃を飛ばす『ディメンションブーム』を放った。

「はああああああああああ。」

「ぎゅっっっっっっっっっっっっっっっ」

二匹の魔化魍は落ち葉となり消滅した。

「よくやったな。」

俺は変身を解き、初めての实战にはよくできたレヴァの頭を撫でた。

「あ、ああ。」

レヴァは顔を紅くしながら答えた。なんでだ？

「さて、急ぐぞ。こっちに魔化魍がきたには、ヒビキのほうにきていな

いとも限らないからな。」

俺達は急ぎながらヒビキの元へ戻っていった。

第3話『鬼の力』（後書き）

斬「ごはあ。」

刃「どうした、作者いきなり。」

斬「いや、なかなか本編に矛盾が生じないように書くのも大変だから、疲れたんだよ。」

刃「お前、それはこの小説を書く時に分かってた筈だろ。」

斬「いやー、そうなんだけど思ってたより難しくてなその分楽しいけど。」

刃「そうか、それなら大丈夫だな。ほれ感謝コーナー。」

斬「海人様いつも感想有難う御座います。刃を使いたい時はいつでも良いので一声よろしくお願いします。」

刃「次回は？」

斬「『牛鬼襲来』だな。」

刃・斬「それでは、次回で。」

第4話『牛鬼襲来』（前書き）

第4話です。

文章力が、文章力が欲しい…………。

それでは、どうぞ。

第4話『牛鬼襲来』

案の定、ヒビキの所に戻ってきたら予想どおり魔化魍に襲われそうになっていた、しかもあのアスムという少年も一緒だった。

「早く、助けないと。」

とレヴァが切羽詰った声で言い行こうとしたところを押さえながら俺は「まで。」と言った。すると、レヴァはこっちを睨みながら「何故だ。早く助けに向かわなければあの二人が。」

と声を荒げながら言ってきた。俺は向こうを見ながら

「いや、その心配はなさそうだ。」

と言った。その時、すぐそばの森から『十番目』門矢土の仲間である小野寺ユウスケと光夏海そして見知らぬ赤髪の少年が出てきた。

「ヒビキさん？」

と夏海が言うといち早く状況を理解したユウスケと赤髪の少年は走って向かった。

ヒビキは変身するのを躊躇っていた。

「ヒビキさん。どうして鬼にならないんですか。」

ヒビキの手は音叉に触れたが、

「逃げるぞ、少年。」

と言ってアスムを抱えて逃げようとした。しかしそのことに気づいた魔化魍によって森に吹き飛ばされてしまった。

「ヒビキさん。」

そこにユウスケが走っていった。夏海も駆け寄っていきこうとしたがその前に鳴滝が現れていた。

ヒビキは魔化魍に首を絞められ危ない状況になっていた。ユウスケは急いで、

「変身」

仮面ライダークウガに変身した。

「あれは？」

「あれは仮面ライダークウガ。古代の人々が創った戦士さ。」

クウガは魔化魍に蹴りをいれ、そのまま殴ったり蹴ったりして魔化魍を吹き飛ばし、ヒビキに駆け寄った。

「大丈夫ですか？ヒビキさん。」

「だ、大丈夫だ。」

だが、そこを魔化魍は後ろからクウガを掴み殴り返してきた。さらに木に押し付け首を絞めてきた。どうやら、力だけなら魔化魍の方が上だったらしい。

「あ、ぐ、が、あ、あ。」

それを見ていたヒビキは一筋の音を聞き、少し苦しんだ後何かを決心した表情になり、音叉を取り出し氣に叩いた。

「キーーーーーン」と澄んだ音を出す音叉を額に掲げるとヒビキの額に小さな鬼の面が現れその身を紫の炎で包んだ。

「ふっ。」

炎を払ったヒビキの姿は鬼である仮面ライダー響鬼になっていた。響鬼は魔化魍を蹴り飛ばしそのまま怒涛の攻撃をし、弱った魔化魍に腰に付いている小鼓を取り付けた。すると小鼓は大きくなり魔化魍の動きを封じ、そこに響鬼は後ろに付いていた『音撃棒・烈火』を叩きつけた。

「音撃打・火炎連打の型」

と叫ぶと響鬼は烈火を『音撃鼓』に叩きつけ清めの音を流し込み魔化魍を倒した。だが、その瞬間、響鬼は頭を抑え苦しみだした。それを見ていたクウガは、

「どうしたんですか？」

「言い、俺は、」

「あの馬鹿、変身したらこうなるって分かってた筈だろ。」
と叫んでいた。

「ヒビキさん。」

とクウガが言った瞬間、響鬼の体が突然変わりだしその姿は伝説の魔化魍『牛鬼』へと変貌した。

「がああああああああ。」

牛鬼は叫びながらクウガへと襲い掛かった。

*

そのころ、アスムと赤髪の少年『飛翔』は、三人を探していた。

「ヒビキさん、ヒビキさん。」

「ユウスケー、夏海さん。」

すると、アスムは地面にディスクが落ちているのに気が付いた。

「アスム、これは？」

「ヒビキさんのディスクアニマルだ。」

「とおりゃーー。」

すると、どこからともなく声と武器をぶつけ合う音が聞こえてきた。不思議に思った二人が辺りを見渡すと、すぐ近くでディケイド達が戦っていた。アスムと飛翔は近くに走っていった。

「やつぱり、俺様が最強だー。」

「なんで、貴様が最強だ。」

としばらく、戦っているとそこに突如、牛鬼が乱入してきた。

「ぐ、ぐおおおおおおおお。」

「なんなんですか？アイツは。」

「あれは、確か。」

「伝説の魔化魍『牛鬼』です。」

「牛鬼だって？」

すると、突然牛鬼は斬鬼と威吹鬼に襲い掛かり二人を吹き飛ばした。そしてそのままディケイドにも襲い掛かってきた。

「くそ、牛には闘牛士だ。それと飛翔、手伝え。」

とカードを取りながら言った。

「はい。」

飛翔も『デイケイドライダー』を付けながら答えた。

「変身」

『KAMEN RIDE DECADE』

『KAMEN RIDE RYUKI』

飛翔は士と同じデイケイドに士は『仮面ライダー龍騎』に変身した。

「はっ。」

そして、D龍騎はポーズを決めつつ、

「さあ、来い。」

といい、再び戦いが幕を開けた。

開始早々、牛鬼は二人に突進して二人を吹き飛ばした。だが、二人はすぐに起き上がりそれぞれカードを装填した。

『ATTACK RIDE STRIKE VENT』

『ATTACK RIDE BLAST』

D龍騎はドラグクローを飛翔デイケイド（以後Hデイケイド）はライドブッカー・ガンモードとディエンドライダーを構えそれぞれ『ドラグクロー・ファイヤー』と『デイケイドブラスト』を放った。

「うおおおおお、はあああああ。」

「はあああああ。」

だが、牛鬼はそれを物ともせず突進し二人を角でほおり投げた。そして、牛鬼は言い合っている斬鬼と威吹鬼に向かって進んでいった。その目の前にアスムが現れ、

「みなさん、逃げて下さい。」

と叫んだが聞いてもらえずに牛鬼が近づいてくると、

「アスム君は俺が守るっす。」

「私も手伝います。」

とトドロキとアキラはザンキとイブキから鬼笛と鬼弦をとり、それぞれ鳴らした。トドロキは雷をアキラは風を身に纏って、トドロキは『仮面ライダー轟鬼』にアキラは『仮面ライダー天鬼』に変身した。

二人はアスムを逃がし牛鬼に立ち向かったが牛鬼は強く吹き飛ばされてしまった。だが、その二人を守るようにD龍騎とHディケイドが立ち、

「闘牛士がダメなら金太郎だ。」

「なら、僕は桃太郎ですね。」

とカードをドライバーに装填した。

『FORM RIDE DEN-O AX』

『KAMEN RIDE DEN-O』

二人はD電王AXとHD電王に変身した。二人は一度牛鬼を捕まえるが振り払われてしまうが、すぐにカードを装填した。

『ATTACK RIDE TSUPPARI』

牛鬼の突進をD電王AXはつつぱりでHD電王はライドブッカー・ソードモードで止めたかに見えたが力負けして吹き飛ばされてしまった。しかしそこを轟鬼と天鬼がそれぞれの武器で攻撃し、ついに牛鬼を捉えた。

「音撃射・疾風一閃」

「音撃斬・雷電激震」

二人は自らの清めの音を牛鬼に浴びせた。しかしそれでも牛鬼を倒すことができず、牛鬼は逃げていった。

「今だ、牛鬼を追うぞ。」

「ええ！こっちはいいのか？刃。」

とレヴァは驚いた様子で聞いてきた。

「ああ、こっちは後で合流すればいいしな。あの赤髪の『飛翔』って言う奴は気になるが、今はヒビキさんのほうだな。」

俺は牛鬼を追って森の中に入って行った。

《それにしても、あの飛翔って奴どうもアイツから『女教皇』の力を感じるが？ということなんだ。》

と俺は飛翔を見て感じたことを考えていた。

第4話『牛鬼襲来』（後書き）

刃「ついに、やったな。」

斬「だって、仕方ないだろ。原作に飛翔がないから違和感ないように」

俺は頑張ったんだ。少しはこっちの苦勞をねぎらえ。」

刃「わかったから、お前は頑張った。ほれ感謝コーナー。」

斬「まったく。海人様有難う御座います。」

刃「次回は？」

斬「次回は『師匠の想い、神の思惑』だ。」

刃・斬「それでは、次回で。」

第5話『師匠の想い、神の思惑』（前書き）

どうも、第5話です。

そろそろ『DCD響鬼の世界編』も終わりです。

それでは、どうぞ。

第5話『師匠の想い、神の思惑』

暫く走っているとき近くの森で倒れているヒビキを見つけた。近くに行こうとすると、

「ヒビキさん！」

「大丈夫ですか！」

ユウスケと夏海が来たので、一先ず彼等に任せて様子を見ることにした。すると、ヒビキは、

「近寄るな。」

と言いユウスケの胸ぐらを掴みながら、

「見ただろ。俺の正体を。」

と言った。しかし、ユウスケは

「だからって、ほっとけませんよ。」

ヒビキを立ち上げらせようとした。

「君達を危険な目に会わせたくない。」

「その時はその時です。さあ、俺の肩に捕まって下さい。」

と言いヒビキを立たせ、

「取り敢えず安全な場所に行きましょう。」

とヒビキをテントの場所まで連れて行った。

*

夜になり、ヒビキ達は三人で焚き火を囲みながら話していた。

「どうしてこんなことに？」

と夏海はヒビキに聞いた。

「俺達は魔化魍を倒すために鬼になる道を選んだ。鬼として戦うか

らには正しい心で鬼の力を制御しなければならない。」

「正しい心？」

「だが、己を鍛え続け相手を倒そうとする気持ちが強くなりすぎると鬼に心を奪われてしまう。」

「それであんな風に。」

「だからヒビキさんは鍛えるのを止めてしまったんですね。」

ヒビキは悲しげな表情のまま、

「おそらく次に牛鬼になってしまった時はもう戻れないだろ。」

「そうなんだー。」

いきなり、海東が出てきた。

「大樹さん。」

「何のようですか。」

ユウスケは警戒しながら海東に聞いた。

「少年君が正式に鬼を継ぎたいんだってさ。」

と海東はヒビキに告げた。するとヒビキは焚き火をいじりながら答えた。

「少年は俺と同じ道を歩んでほしくない。」

「そっかあ、残念だな。」

ここで海東はヒビキの様子を見つつ、

「若い世代で音撃道を一つにするって燃えてたのに。」

と言った。ヒビキは考えながら、

「少年が？」

と聞いた。

「みんなの中心になって頑張ってるよ。」

と言い歩き始めた。だが、その前にヒビキが立ち塞がり、

「分かってるよ。お前の狙いは響鬼流の巻物だ。」

「さすがだね。」

「お前、いい加減にしろよ。」

「よせ。」

ヒビキは怒鳴るユウスケを抑えた。

「ヒビキさん？」

「響鬼の変身音叉だ。」

と海東に音叉を見せた。

「僕はそんなの要らないよ。」

「少年に渡してくれ。」

笑いながらヒビキは言った。

「確かにアイツの優しさがあれば鬼になっても心を奪われないかもしれない。」

「でも、ヒビキさんはアスム君に同じ道を歩んで欲しくないって。」
「それは少年が選ぶことだ。正しい心で鬼を制御できるなら鬼に、出来なければ諦めるんだ。」

と何処かにいるアスムのことを思いながら言った。

「少年に伝えてくれ。俺はアイツに止めを刺して欲しい。それが俺の魂を受け継ぐと言うことだ。」

ヒビキは海東に音叉を託した。

「良いこと言うな、ヒビキさんは。」

近くの森から見ていて俺に隣からレヴァが言ってきた。

「そうだな。」

「これからどうするのですか、マスター？」

俺は二人に、

「もうしばらくは見ておくぞ。不測の事態が起きる可能性があるからな。」

と言った。

*

次の朝早く、テントから出てきた夏海は焚き火の様子を見ているといきなり周りが燃えた廃墟に変わった。そこに鳴滝が現れた。

「このままデイケイドが旅を続ければ取り返しのないことにな

る。」

「取り返しのつかないことって？」

「君が止めるのだ。」

「えっ？」

「ディケイドを止められるのは君だけだ。」

「私が？」

すると、いきなり炎が夏海を襲った。

「きゃ。」

次に夏海が辺りを見渡すと元の場所に戻っていた。

「夏海ちゃん？どうしたの。」

ユウスケが心配そうに聞いてきた。

「うっうん。何でもないです。」

夏海は隠すように言った。

*

「これで夏海ちゃんが止めてくれると良いが。」

と鳴滝は森の中にいた。

「お前、何を吹き込んだ？」

俺は鳴滝の前に出てきた。

「吹き込んだとは人聞きの悪い。ディケイドがいかにも恐ろしいか教えてただけさ。それに君こそどうしてこの世界にいる？ディケイドのことは断っていたはずだが？」

と聞いてきたので俺は、

「士と一緒にいる赤髪の飛翔を迎えにきただけさ。陛下に言われてな。」

と答えると鳴滝は、

「ああ、『旅人』のことか。だが、今の彼はディケイドと一緒にいて彼自身もディケイドだ。いかに門矢士と違えど連れて行ってもらっては困る。」

と言ってきた。少し頭にきたので、

「そう言うお前は、仮面ライダー皇帝に愛されし子」だと知っていたの行動なら俺に断罪されても文句は言えないよな。」

とディガイドのカードを見せながら言った。そうすると鳴滝は諦めたように、

「わかった。飛翔君のことは諦めよう、だがディケイドだけは始末させてもらうぞ。」

と言い、オーロラを出して消えた。

「ちっ。腐っても神か。」

俺はサヤとレヴアの元に戻った。

第5話『師匠の想い、神の思惑』（後書き）

刃「なあ、作者。」

斬「なんだ？」

刃「このごろ、俺等の扱いが空気すぎないか。」

斬「それは仕方ないだろ。なるべく原作を壊さないようにしているんだから、それに此の世界が終わった後は空気じゃなくなるから。今は我慢しろ。」

刃「くつ、それなら仕方ないか。ほれ、感謝コーナー。」

斬「はいさ、海人様有難う御座います。」

刃「んで、次回は。」

斬「次回は『旅の終わり』だな。」

刃・斬「それでは、次回で。」

第6話『旅の終わり』（前書き）

第6話です。

ついに破壊者との邂逅です。
それでは、どうぞ。

第6話『旅の終わり』

どうやら俺が離れている間に事態が動いており既にヒビキは牛鬼とかし、士と飛翔はディケイドに変身し戦闘に入っていた。

二人は果敢に牛鬼に攻めるが力は牛鬼の方が強く、二人は牛鬼の角によって吹き飛ばされてしまった。二人を吹き飛ばした牛鬼は目標をアスムに変えた。だがそこに銃弾が牛鬼を襲った。

「海東、どうゆう風の吹き回しだ？」

「どうやら撃つたのは海東だったようだ。」

「折角奪ったお宝を見てみたくなつてね。」

「まあいい、いくぞ飛翔。」

「ええ、士さん。」

二人は再び牛鬼と戦い出した。

「ヒビキさんがなんで牛鬼なんかに？」

アスムは戦いを見ながら呟いた。

「鬼の力を制御できなくなったのさ。」

「鬼の力を？」

「でもヒビキって人はこうも言ってた。」

「正しい心で鬼の力を制御できるなら鬼となって俺を倒せって。」

「僕がヒビキさんを？」

アスムは戦いを見ながら、

「そんなの、できる訳ないじゃないですか。」

すると海東は少し考えた後、

「それでいんじゃない。」

と言った。

「え？」

「その優しさがあれば鬼に心を奪われることのないってさ。受け継ぐのは鬼の力だけじゃない、ヒビキって人の魂を受け継ぐ事なんだ。」

すると、ディケイドとHディケイドは吹き飛ばされながら、

「海東、俺の台詞奪ったな。」

「そうですね、海東さん。」

と言った。すると海東は二人に指を向けながら、

「言っておくけど、僕は君達よりもずっと前から通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ。」

と言い、カードをディエンドライバーに装填した。

『KAMEN RIDE』

「変身」

『DIEND』

海東は『仮面ライダーディエンド』に変身し銃弾を牛鬼に放った。

「ぐあああああ。」

「後は君が選んだ。鬼になるか、ならないか。」

ディエンドはアスムに音叉を見せた。アスムは考えた末に答えた。

「僕は鬼になります。」

と言いディエンドから音叉を受け取った。

アスムは岩に登り、音叉を指で弾いた。

「キーン。」と澄んだ音の鳴る音叉を額に持つていくと額に小さな鬼の面が現れ、アスムの体は紫の炎を纏った。

「はあ。」

アスムはその身を『仮面ライダー響鬼』に変えた。

「うおおおおおおおお。」

「はああああああああ。」

響鬼と牛鬼は戦いを始めた。

「ヒビキさん。」

「お前に俺は倒せない。なにしろこの身体はヒビキのものだからな。」

「牛鬼は何度も響鬼に突進して、吹き飛ばした。だが、すぐに三人がフォローに入り攻撃を仕掛けた。」

『『『ATTACK RIDE BLAST』』』

三人の武器が一斉に火を吹き、牛鬼にダメージを与えた。

「やるんだアスム、このままじゃ、ヒビキの魂まで失われるぞ。」

響鬼は考えた末に烈火を抜いて、

「うおおおおおおおおおおおおおお。」
叫んだ。

響鬼は烈火で何度も牛鬼を攻撃し、その身に音撃鼓を取り付けた。

「猛火怒涛の型。」

何度も烈火で音撃鼓を叩き、ついに牛鬼を倒した。

「ヒビキさん。」

すると、牛鬼を倒したのもつかの間、いきなり地面からバケガニが現れた。

「おのれ、デイケイド。このバケガニで始末してくれる。」

と叫び鳴滝は姿を消した。それを見ていた俺は、

「あの馬鹿が、折角の雰囲気全台無しにしゃがって。」

と殺気を出しまくっていた。するとレヴアは怯えながら、

「そ、それはそうと手伝わなくていいのか？」

「ん、ああ、大丈夫だろこれくらい。」

と最後まで傍観することを決めた。

戦線は轟鬼と天鬼が加わったが、苦戦していた。

「音撃道のお宝ね。」

「どつという意味だ？」

「簡単な謎々だよ。はっ。」

とデイエンドは手に持っていた巻物を投げ、ドライバーで撃ち抜いて行った。すると、切れ端が『音撃道』と言う文字を作っていた。

それを見たディケイドが、

「三つの流派が一つになること。それが真の音撃道ってことか。」

「そうか。」

そして、ディケイドとHディケイドがカードを取るとカードは絵柄を取り戻した。するとディケイドはそのうちの一枚をとり装填した。

『FINAL FORM RIDE HI・HI・HI・HIBI
KI』

「ちよつとくすぐったいぞ！」

ディケイドが響鬼の背中を叩くと響鬼は『ヒビアカネタカ』に変形した。ヒビキアカネタカは吠えるとバケガニに体当りを食らわしバケガニをひっくり返した。その隙にディケイドとHディケイドはカードを装填した。

『FINAL ATTACK RIDE HI・HI・HI・H
IBIKI』

電子音が鳴り響くとヒビキアカネタカは『ヒビキオンゲキコ』に変形し、バケガニの腹に付いた。

「飛翔、行くぞ。」

二人は烈火を持ちバケガニの腹に乗り、ヒビキオンゲキコを叩きだした。すると、今度は轟鬼が列雷を弾き始めた。その隙に天鬼を烈風を吹き出した。さらにディエンド、ザンキ、トドロキと加わりそこは鬼の大演奏会になっていた。それに耐えきれずバケガニはディケイドのフィニッシュとともに消滅した。

「すごいな。まさかこんな演奏が聴けるなんて。」

とレヴァは感慨深げに言った。

「そうだな。俺も初めて聴いたよこんな演奏は。」

と俺も感想を言つと、隣からサヤが、

「そろそろ動かなくていいのですか？早くしないと移動してしまうのでは。」

「それもそうだな。良し行くか。」
俺達は行動を起こすために移動した。

*

そして、その後俺達はアスムや海東達と別れた土達と出会った。

「なんだ、お前達は？」

「土君の知り合いですか？」

「知るかこんな奴ら。」

「じゃ、ユウスケですか？」

「俺じゃないぞ。」

「じゃあ、飛翔君ですか？」

「まさか、それに僕は記憶喪失しているんですよ。」

「じゃあ、貴方達は一体何者ですか？」

と正体を聞かれたので、

「俺達はその赤髪の飛翔を迎えにきたのさ。」

と答えた。

第6話『旅の終わり』（後書き）

刃「ついに士達と邂逅か。」

斬「ああ、これでお前達が空気になるということはない
安心しろ。」

刃「まあ、そうだなっていか主人公が空気っていうの
はそもそもお前の責任だろ。」

斬「ははははははは、何の事かな？」

刃「ちつ、惚けやがって。感謝コーナー。」

斬「海人様、有難う御座います。」

刃「次回は？」

斬「次回は『断罪者VS破壊者』だ。」

刃「まで、それは戦うということか？」

斬「それは次回のお楽しみだ。」

刃・斬「「それでは、次回で。」」

第7話『断罪者VS破壊者』（前書き）

どうも、第7話です。

今回は断罪者VS破壊者になります。

どうなるでしょうか。それでは、どうぞ。

第7話『断罪者VS破壊者』

「俺達はその赤髪の飛翔を迎えにきたのさ。」

と俺は答えた。

すると、士が、

「なんだ、見ず知らずの少女三人が来るなんて都合がよすぎる。大体、俺達はお前達なんて知らないぞ。」

俺は士の言った『少女』と言う部分に反応してしまった。

「俺は……少女じゃねー……」

「ああ、少年だったか。そうならそうと最初から言えればいいものを。」

「て、てめえ……潰すぞ。」

俺は今にをキレかけていて、右目が紅から金にかわろうとしていた。

「マスター、落ち着いて下さい。今はキレル時じゃありませんよ。」

「……ああ、そうだな。」

俺はサヤに言われ冷静に落ち着いた。

「……ふう、俺達は『紅渡』の知り合いだ。」

「『紅渡』だと。」

士は目を見開きつつ言った。

「大体分かった。それで、お前達は飛翔に何の用なんだ？」

「言ったとおりだけどな、それと飛翔の『記憶』にことさ。」

「僕の記憶ですか？」

「ああ、まあそっちはついでだが。」

と言うとユウスケが、

「そっか、じゃあ飛翔とは此処でお別れになるのか。」

寂しそうな感じで言った。

「確かにそうだな、だが本当にお前達に任せて大丈夫か？」

「ん？どういう意味だ。」

「お前達に戦う力があるのか？と言う事だ。無かつたらむしろ飛翔の邪魔になるだけだろうしな。」

「面白い。じゃあ士あんたが試してみるか？」

俺は『ディガイドライバー』を腰に付け、カードを見せながら言
った。

「あれは？」

「まさか、あの人もディケイドなのか？」

すると士も『ディケイドライバー』を腰に付け、カードを取り出
し、

「いいぜ、叩きのめしてやるよ。」

と言い、二人は同時にカードを装填した。

「変身」

『KAMEN RIDE DEGAIDE』 『KAMEN RID
E DECADE』

刃は漆黒の断罪者 仮面ライダーディガイド に士はマゼンダの
破壊者 仮面ライダーディケイド に変身した。

「さあ、いくぞ。」

「どっからでもかかってこい。」

こうして断罪者と破壊者の一騎打ちが始まった。

『『ATTACK RIDE BLAST』』

二人はほぼ同時に『ディガイドブラスト』と『ディケイドプラス
ト』を放った。だが、ディガイドの方はライドブッカー・プロトと
サモンドライバーの二本で撃っていたので競り勝っていた。

「おい、汚いぞ。武器を二本も使うなんて。」

「は、あるものを使うそれが戦いだろ。」

士の文句を流しつつ俺はディケイドに向かって撃った。だが、銃弾に当たりつつもカードを装填していた。

『ATTACK RIDE ILLUSION』

電子音が聞こえるとディケイドの姿は四人になっていた。

「分身か。」

「いくぞ。」

四人のディケイドはそれぞれ武器を持ち、その内二人はライドブツカー・ソードモードを構え突っ込んできた。

俺はソードモードにしたプロトとサモンドライバーで防いだが、直後残りの二人がライドブツカー・ガンモードで撃っていた。

「があっ。」

だが、俺も受け身をとrittつ、一枚のカードをドライバーに装填した。

『KAMEN RIDE DARK KABUTO』

俺は暗黒神 仮面ライダーダークカブト に変身した。

「黒いカブトだと？」

どうやら士はこの姿を知らないようだ。俺は驚いている隙に素早く二枚目のカードを装填した。

『ATTACK RIDE CLOCK UP』

そして俺は高速の世界に入った。

一瞬の内に四人のディケイドは吹き飛ばされ元の一人に戻っていた。

「ちっ、クロックアップか。」

俺は少し距離を取ったところに出現した。

「くそ、これで終わらせてやる。」

士は金色の紋章が描かれたカードを装填した。それを見た俺も同じように黒色の紋章が描かれたカードを装填した。

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DE

C A D E 』

『FINAL ATTACK RIDE DARK KA・KA・KA・KABUTO』

ディケイドの前には十枚の3Dカードが俺の足にはタキオン粒子が集中していった。そして、ディケイドとDダークカブトは同時に飛び上がった。

「はああああああああああああああああ。」

ディケイドの『ディメンションキック』とDダークカブトの『ダークライダーキック』はぶつかり合い、接触点は爆発に吞まれた。

「土君！」

「マスター！」

夏海とサヤが叫び、爆発が収まると二人は立ったまま変身が解けていた。

「飛翔のこと、頼むぞ。」

「ああ、分かっている。」

こうして、断罪者と破壊者の戦いは終わった。

そして、別れの時が来た。

「元気でいてくださいね。」

「飛翔、風邪とかに気をつけるんだぞ。」

「夏海さん、ユウスケさん、そして土さん今まで本当に有難う御座いました。」

と飛翔が御礼を言うと土が、

「いいか、飛翔。どんなに離れていても俺達は仲間だ。そのことを忘れるんじゃないぞ。」

と言い、首から下げたカメラで一枚の写真を撮り、写真館に戻って行った。

「もういいのか？」

俺が飛翔に聞くと、

「ええ、ここからは僕の道ですから。」

と答えた。

「じゃ、私達も行きましょうか、マスター。」

「ああそうだな、行こうか刃、飛翔。」

「そうだな。」

と俺が答えると、飛翔が、

「どこから、行くんですか？」

と聞いてきたから、

「まずは、『始まりの地』さ。」

と言い、俺は灰色のオーロラを出し、そのオーロラに潜っていた。

第7話『断罪者VS破壊者』（後書き）

（後書きコーナー）

サ「どうも、今回から後書きを任されたサヤと」

レ「レヴァことヴァティ・レンだ。」

サ「それにしても、今回はマスターが少女と間違われましたか。」

レ「そうだな。私達は気にしないんだが刃は異常に気にしているかな。」

サ「それに破壊者と言われている土さんとの戦いですか。」

レ「ああ、あれは刃の方が上手だっただろうな。カードもディケイドより多いし、囲まれても簡単に逃げられるだろうからな。」

サ「そうですね。それでは、感謝コーナーです。」

レ「ああ、海人様、白蓮様感想有難う御座います。」

サ「今回は『過去への出発』です。」

サ・レ「それでは、次回で。」

第8話『過去への出発』（前書き）

第8話です。

今回は戦闘はありませんのであしからず。
それでは、どうぞ。

第8話『過去への出発』

『始まりの地』ここは『二十二の神』最強と言われている皇帝が統治する世界、そこに唐突に灰色のオーロラが現れ、その中から四人の少年、少女が出てきた。

「ここが『始まりの地』ですか？刃さん。」

と四人の中で一番年下で赤髪の少年の飛翔が隣にいる刃に声をかけた。

「ああ、まあ今までの世界とそんなに変わらないだろ。」

「ええ、余りに変わっていないものなので逆にビックリしましたよ。」

と二人で話をしていたら後ろの二人から声がかかってきた。

「そんなことよりマスター、これからどうするのですか？」

「そうだぞ刃、私達はこれからのことを聞いていないのだが？」

サヤとレヴァは不機嫌な声で聞いてきた。

「ん、そのことならもう少しここで待ってれば武士が来るはずなんだがな。」

俺は辺りを見渡しつつ答えた。すると、空の空間が歪みそこから牛の鳴き声の様なミュージックと共にゼロライナーが出てき俺達の前で止まった。その中から通称『白衣の変人』玄金武士が出てきた。「やあ、久しぶりだね。刃君、サヤちゃん。そして、初めましてだね、ヴァティちゃん、飛翔君。」

武士は俺から見たら嘘らしい笑顔を振りまきながら挨拶していた。

「久しぶりだな、武士。時間通りなのは相変わらずで。」

俺は素っ気なく返事をしながら皮肉を言った。

「刃さん、この人は一体誰ですか。それとこの列車も。」

「そうだな、刃説明してくれ。」

と飛翔とレヴァに言われたので、俺は

「この人の名前は玄金武士、通称『白衣の変人』って言われている俺達の……仲間だよ。」

と若干、間をあけて説明した。そうしたら、

「ちよつと今の間はなんさ。流石に酷くない。」

と言われた。だが、俺はそれをスルーしつつ、

「ゼロライナー、貸してくれて有難うな。」

と一応礼を言った。

「さっきのはスルーですか。まあいいけど、それと陛下から伝言だよ。」

「伝言？」

珍しいな、陛下が言い忘れたことがあるなんて、

「『過去に行くのであればついでにその『物語』に関わってならない怪

人を倒しておいてね。』だってさ、それとこれもよろしくって。」

武士はカードの束をこっちに投げた。

「ん？これは絵柄がないカードと……『ワイルドスート』のラウズカードだって。」

馬鹿な、これは陛下に封印してくれって渡していたのに。

「陛下が『本来は貴方が管理するものです。アンデット達も貴方に使われたがっているから使ってあげなさい。』って言っていたよ。」

陛下、恩にきります。俺はカードをしっかりと懐にしまい、ゼロライナーに足をかけた。

「有難うな、武士。何から何まで。」

と俺が礼を言うと、

「何言つてんの君と僕の中じゃないか。」

と嘘らしい笑顔を俺に向けつつ言った。俺はそれに笑いかけつつゼロライナーに乗り込み、発車させた。

「さて、目的の時間までまだ時間があるし飯でも作るか。」

と言い刃さんは奥に引っ込んで行った。

「え、刃さんって料理作れるんですか？」

と僕が二人に聞くとサヤさんが、

「ええ、マスターは家事スキルが半端ありませんから。」

と答えてくれた。するとヴァティさんは苦虫を噛み潰したような顔をしつつ、

「ああ、刃には家事では敵わないからな。良いんだが、女としては複雑だな。」

と言った。暫くすると刃さんが料理を持ってきた。

「ほれ、出来たぞ。」

そこには、数々の和食や洋食、中華が並んだ。

「さて、食うか。まずはそれからだ。」

刃さんが言ったと同時に食事が始まった。

それから、暫くして食事は終了した。みんなの食べっぷりを見る限り好評なようで安心した。食器はレヴァとサヤが洗いに持っていたため、ここにいるのは俺と飛翔だけになった。

「突然ですけど、この列車ってなんなんですか。どうもデンライナーに似ていますし、それに、刃さん達も一体何者なんですか。」

飛翔は落ち着いた様子で聞いてきた。どうやら、対外のことでは驚かないらしいな。

「分かった、一つずつ話そう。まずこの列車は『ゼロライナー』と言ってデンライナーとは異なる時の列車さ。」

「デンライナーと鬼の戦艦以外にもあったんだ。」

「続けるぞ、で俺達が何者かって言う質問だが、そうだなこれに関しては一概には言えないな。言えるとしたら俺達はお前や士のように

世界を旅していることと俺とサヤは人間じゃないってことぐらいか。

「なっ。」

飛翔は目を見開いてビックリしていた。

「そ、そんなことを僕に言っただけで良かったのですか？」

「ああ、レヴアには言っているしな。」

「でも、人間じゃないってその姿はどう見ても。」

「俺は人間になれるジョーカーさ。」

「なっ。」

俺の言葉を聞いた飛翔は絶句した。

「ジョーカーって確か『ブレイドの世界』のBOARDの社長が変身した人造アンドロイドじゃ。」

俺はその言葉を聞くと少し考え、

「そうか、あそこじゃそうなってるのか。だが、俺が知る限り本来ジョーカーは元々存在するか人になるかのどっちかだ。因みに俺は前者の方だな。」

と答えた。それを聞いた飛翔は、

「じゃあなんで人間じゃないのに、人間を護る仮面ライダーなんですか？」

と聞いてきた。俺は真っ直ぐ飛翔を見つ、

「それが俺の使命の一つだからさ。このことはあんまり言わないでくれよ。」

俺は飛翔に念を押すように言った。すると飛翔は、

「凄いですね、刃さんは。」

と俺を尊敬するような感じで言ってきた。

「そうでもないさ。サヤとレヴアが支えてくれるから、あの二人がいるから俺は強くなれるだけさ。」

「それでもですよ。」

俺は飛翔に目を向けていた。

「な、なんですか？何か顔に付いていますか？」

「いや、思ったんだがその敬語はどうにかならないか？俺的には敬語じゃなくていいんだが？」

と俺が言っていると飛翔は暫く考えた後に、

「分かった。敬語は止めるよ、でもさん付けだけはさせてくれ。」

「ああ、そのほうが俺も親しみやすいからな。改めて宜しくな、飛翔。」

「こちらこそ。ところでどこから行くんだ聞いていなかったけど？」

俺は外の景色を見たまま答えた。

「《全ての敵》をも受け入れた者、仮面ライダーブレイドの物語さ。」

そして、ゼロライナーは牛の鳴き声に似た汽笛をあげ、目的の時間に辿り着いた。

第8話『過去への出発』（後書き）

「後書きコーナー」

サ「私、サヤと。」

レ「レヴァの。」

サ・レ「後書きコーナー。」

サ「つとということで、後書きです。」

レ「いきなり、テンション戻したな。」

サ「いいんですよ、あんなテンションあつて無いようなものですか
ら。」

レ「まあ、そうだね。えー今回は『ワイルドスートのラウズカード』がでたな。サヤ説明よろしく。」

サ「はい。これはまだレヴァさんが仲間になつていない頃に行ったある世界で手に入れたものです。といっても封印した後は皇帝である野上愛理さんに渡していたそうですが。」

レ「ワイルドスートはイレギュラーだから本来、存在しないはずじゃ。」

サ「それは、マスターが存在している影響のようですよ。ですよ、作者さん？」

斬「いきなり、呼ぶなよ。」

レ「うお、いたのか作者。」

斬「基本はいるよ、二人に任せたとっても心配だからね。」

サ「そうですか、では感謝コーナーをお願いします。」

斬「OK。海人様、感想有難う御座います。」

レ「次回は？」

斬「次回は『鏡からの奇襲』だ。」

サ・レ・斬「『それでは、次回で。』」

第9話『B・鏡からの奇襲』（前書き）

第9話です。

今回から『過去の物語編』へ突入します。

それでは、どうぞ。

第9話『B・鏡からの奇襲』

ゼロライナーが止まった所は都会なのにまるで謀ったように人がおらず騒動になることはなかった。

俺は外に出ようとした飛翔を呼び止めた。

「飛翔、これをお前に渡しておく。」

俺は、絵柄がないカードの束を飛翔に渡した。

「え、これは刃さんが武士から貰ったカードだろ。いいのか？」

「ああ、俺の分はここにあるし、枚数的に見てそれはお前の分だと思っしな。」

俺は自分のカードを見せながら、言った。

「それなら、遠慮なく貰っておくよ。」

飛翔は、カードの束を懐に入れた。

「さて、行きますか。」

俺達は外に降りた。すると、ゼロライナーは降りるのを待っていたかのように、全員が降りるとまた歪みの空間に消えていった。

「あれ、勝手に動いていたけど大丈夫なのか刃？」

「ああ、大丈夫だ。ただ、宿を探さないといけないがな。」

俺達は暫く町中を歩いていたが進路を変えて森の中に入っていた。

「なあ、刃さん。なんで、こんな森の中を歩いているんだ。」

「ああ、それはな……。」

と俺が言いかけると、「キーン、キーン。」と金属音が聴こえてきた。

「マスター。まさかこの音は。」

「ああ、どうやらお出ましのようだ。」

俺の言葉を待っていたかのように近くにある道路鏡や壊れた鏡が

ら一斉にミラーモンスターである『レイドラグーン』が出てきた。
「あれは？まさか、ミラーモンスター？」

「武士が伝えてきた伝言は覚えているだろ。この世界は全ての仮面ライダーが存在する代わりに敵も全て存在しているんだよ。だからその時間のライダーの敵以外が表舞台に出ないように駆除する。この旅はその意味があるんだよ。」

レイドラグーンの群れは一斉にこちらに襲ってきた。

「く、流石に多いな。サヤこの辺りに結界を張れ。レヴァと飛翔はミラーワールドにいる分を頼む。俺は今、外にいる奴らを片付ける。」

「はい、マスター。」

「分かった。飛翔いくぞ。」

「ええ、レヴァさん。」

「変身」

『KAMEN RIDE DECADE』 『KAMEN RIDE
DEZANDE』

二人はディケイドとディザンドに変身して、ミラーワールドに入って行った。

「行ったか。さて、俺は新しい力を使わせてもらうか。」

俺はWA「チェンジエインヘリアル」を取り出し、腰に『ナイト
ラウザー』を出現させカードをラウズした。

「変身」

『CHANGE』

俺の姿は水飛沫のエフェクトとともにカリスとグレイブを足して二で割り基本カラーを黒と金にした姿になっていた。

「これが新しい姿か。名前はそうだな・・・レイブン、いやこれは不吉だな、じゃレイブだな。」

俺は前を向いた。

「俺は仮面ライダーレイブ、さあ、裁きの時だ。」

俺は『ミラーモンスター
試練の獣』に突っ込んでいった。

ミラーワールドには、まだ脱皮していないシアゴーストの群れがいた。

「まだ、こんなにいるのか。くそ、いくぞ飛翔。」

デザイナーとディケイドはそれぞれの武器を持って切りかかっていった、しかし、シアゴーストは数で押そうと次々と増えていった。「くそ。それならこれだ。」

デザイナーは一枚のカードをドライバーに装填した。

『ATTACK RIDE SONIC BOOM』

電子音が聞こえたと同時にドライバーを振ると斬撃が飛び、前方のシアゴーストを切り裂いていった。それを見た飛翔も、
「なら、俺も。」

とカードを装填した。

『ATTACK RIDE SLASH』

カードの効果でライドブッカーの刀身が分裂し、次々と切り裂いていったが、焼け石に水しかならずいつしか二人に疲労が見えてきた。

「くそ、まだいるのかこいつらは。仕方ないあの手でいくか、飛翔、離れている。」

デザイナーは隣にいるディケイドに言うと、ドライバーにカードを装填した。

『KAMEN RIDE ZORUDA』

電子音が鳴り響きデザイナーがドライバーを振ると幾つもの残像が現れそれは一つにまとわり 仮面ライダーゾルダ が現れた。
「これで、終わりだ。」

デザイナーは再びカードを装填した。

『ATTACK RIDE CROSS ATTACK』

すると、ゾルダはベルトに付いているカードデッキから一枚のカードを取り出し、銃型のバイザーにベントインした。

『ADVENT』

するとゾルダの前の足元に水溜まりの様なものが出現し、中からミノタウロスと二足歩行のロボットを融合したような姿のバツファロー型モンスター マグナギガ が現れた。すると、ゾルダはもう一枚、バイザーにベントインした。

『FINAL VENT』

ゾルダがマグナギガの背中にバイザーを装着すると、マグナギガの両腕や頭にエネルギーが溜まっていき、胴と両足の砲門が開き一斉にビームやミサイルを発射する、エンドオブワールド が発動された。

シアゴーストの大群は声にならない悲鳴をあげ消滅した。

「レヴァ……さん、あんなカードがあるならなんで早く使わないで

すか？」

飛翔が エンドオブワールド の威力に若干怯えながら聞くと、
「ん、だってあれを使っても自分が倒したと思えないだろ。」

とレヴァはさも、「何を聞いているんだ？」という顔をしながら答えた。

それを聞いた飛翔は、

《ああ、レヴァさんって自分で倒す方を選ぶんだ。》
と思った。

「と、とりあえず刃さんと合流しましょう。」

「ああ、そうだな。」

ディザンドとディケイドは現実世界の方に戻って行った。

第9話『B・鏡からの奇襲』（後書き）

（後書きコーナー）

サ「さて、後書きです。今回は私の能力に触れたいと思います。」

レ「ああ、今回でた『結界』についてだな、それでは作者頼む。」

斬「おう、今回でたのは『結界』主に周りへの被害を最小限に減らすときや防御に使われるな。また、今回のように結界に閉じ込め外に出さないようにもできるぞ。」

サ「他にも、結界内の生命反応を調べたりもできます。」

レ「流石、サポートのエキスパートだな。」

サ「当たり前です。大切なマスターやレヴアさん、仲間を助けるためならこれくらいやりますよ。」

レ「そうだな、私も頑張らなければ。それでは、感謝コーナー。」

斬「海人様、感想有難う御座います。」

サ「今回は？」

斬「今回はレイブの設定と『力』の一端、そして接触』だな。」

レ「？誰かと会うのか。」

斬「それは、見てのお楽しみですよ。」

サ・レ・斬「「「それでは、次回で。」」」

仮面ライダーレイドの設定（前書き）

仮面ライダーレイドの設定です。
少しネタバレも含まれます。

それでも、良い人のみどうぞ。

仮面ライダーレイブの設定

仮面ライダーレイブ

刃がナイトラウザーとワイルドスート（W）のカテゴリAのカードで変身する仮面ライダー。変身は擬態化能力ではなく純粹なライダーシステム。モチーフは不滅の戦士エインヘリアル。外観はWを象った黄色の仮面がグレイブの様に付き正面に黒い宝石が付きカリスの色が黒になった角が付いている。体も顔と同じ様にグレイブと同じ様にWを象ったものが付いている。なお肩部はカリスの装甲と同じものになっている。ぶっちゃけカリスとグレイブを足して二で割った感じ。基本カラーは黒と黄色。

右腰にラウズバンクがある（中身はワイルドスートのカード）。

専用武器・レイブラウザーを用いた剣術と銃撃戦を得意とし、（W）6「CHAOS」から得られる「闇」、「光」、「炎」、「氷」のエネルギーを主軸にして戦う。

ナイトラウザー

刃の意思に呼応して、腰に装着された形で浮かび上がるように出現するベルト型カードリーダー。WA「CHANGE」をバックル部分にラウズすることで「CHANGE」の音声とともにレイブに変身する。WJ「FUSION」又はWK「EVOLUTION」をWQ「ABSORB」を所持した状態でラウズすることでジャックフォーム又はキングフォームもしくはワイルドフォーム（全ワイルドスートとの融合した）にパワーアップすることができる。カリスとは違いこれ自体にAPは存在しない。本来は刃の正体である『ナイト・ジョーカー』の腰に存在するもの。

なお、カテゴリAのカードがあれば色が黒くなり、所々棘々しくなったAバー^{アナザー}ジョンのブレイド、ギャレン、カリス、レンゲルに変身可能。

醒銃剣レイブラウザー

レイブ専用の銃剣型カードリーダーであり、レイブの脳波を受けて手中に浮かび上がるように出現する。初期APは8000。高エネルギーのフォースショットを発射する銃と剣としても使用可能で、地球上の固形物質全てを切り裂くことが可能。スラッシュ・リーダーにカードをラウスすることでベスタの効果を発揮することができる。

形はブレイドラウザーとギャレンラウザーを足して二で割った感じ。

ラウスカード一覧

WA「チェンジエインヘリアル」『CHANGE』

ナイトラウザーとの組み合わせで使用することで、使用者をレイブに変身させる。

W2「スラッシュガルム」『SLASH』

レイブラウザーの切れ味を増幅させる、斬撃攻撃「ガルムスラッシュ」を発動させる。

消費APは600FP

W3「ナックルサイクロプス」『KNUCKLE』

腕力を強化する、パンチ攻撃「サイクロプスナックル」を発動させる。

消費APは800FP

W4「セパレードオルトロス」『SEPARADE』

実体のある分身を作り出す又は武器を複製する「オルトロスセパレード」を発動させる。

消費APは1000FP

W5「スマッシュムスベル」『SMASH』

脚力を強化する、キック攻撃「ムスベルスマッシュ」を発動させる。
消費APは1200FP

W6「カオスキマイラ」『CHAOS』

周囲一帯に閃光や暗黒、吹雪や燃えさかる炎など現象を発生させる
「キマイラカオス」
を発動させる。またレイブラウザーに炎や氷の力を宿らせ攻撃することもできる。

消費APは1600MP

W7「ミストフェアリー」『MIST』

体を霧状にする又は銃弾を拡散弾にする「フェアリーミスト」を発動させる。

消費APは1600MP

W8「バリアセイレーン」『BARRIER』

任意の対象、範囲に使用者にしか見えない障壁を発生させる「セイレーンバリア」を
発動させる。消費APは1800MP

W9「マッハスレイプニル」『MACH』

使用者の速度を上げる又は銃弾の速度を上げる「スレイプニルマッハ」を発動させる。

消費APは2200MP

W10「スローアヌビス」『SLOW』

任意の対象、範囲のあらゆる時間を限り無く遅くする「アヌビススロー」を発動させる。能力の効果には軽度から重度が存在し、軽度

だと動きに制限かかる程度だが重度だと生体時間まで遅くなる。消費APは2400MP

WJ「フュージョンワイバーン」『FUSION』
ラウザーのAPを3400チャージさせる「ワイバーンフュージョン」が発動させる。

また、WQのカードを所持した状態でナイトラウザーに使用することで、ジャックフォームへの強化変身が可能となる。

WQ「アブソブミア」『ABSORB』
ラウザーにAPを3000チャージさせる「ミアアブソブ」を発動させる。

また、このカードを所持しWJ又はWKのカードをナイトラウザーで使用することでジャックフォームへの強化変身・ワイルドフォームへのパワーアップが可能となる。

WK「エボリュションバハムート」『EVOLUTION』
ラウザーにAPを5600チャージさせる「バハムートエボリュション」を発動させる。

また、ワイルドスートのプライムベスタをすべて所持している状態でナイトラウザーにラウズすると、全てのカードと融合したワイルドフォームへパワーアップする。

ワイルドスートをすべて揃っていないでWQのカードを所持している場合のみカテゴリーK単体と融合したキングフォームになる。

第10話『B・力の一端、そして接触』（前書き）

第10話です。

今回から題名の前に今いる物語のライダーのイニシャルを入れます。

それでは、どうぞ。

第10話『B・力の一端、そして接触』

俺は無手の状態でレイドラグーンの群れに突っ込んで行った。しかし、レイドラグーンは羽根を使って空中に飛び空中から攻撃してきた。空中からの攻撃は避けることしかできなくこちらから攻撃できない状況になってしまった。

「ち、それならこっちだって。」

俺は専用武器である醒銃剣レイブラウザーを手中に呼び出し、撃ち落とすために一匹のレイドラグーンに撃った。

「ぐるるるるるるるるるるる。」

すると、レイドラグーンは一発で爆発した。

「はっ。一発で倒せるなんてどんだけの威力だよ。」

それをみた他のレイドラグーンは一斉に動き回って狙いを付けさせないようにしてきた。だが、俺は冷静に右腰のラウズバンクから一枚のカードを取り出し、レイブラウザーにラウズした。

『CHAOS』

認証音声と共にW6のプライムベスタに封印された「キマイラアソデット」の力が辺り一帯を覆った。すると、辺りを猛吹雪が襲い、収まった時にはレイドラグーン達は凍りつき、身動きを取ることが出来なくなっていた。

「これで、終わりだ。」

俺は、レイドラグーンを一掃するためにラウズバンクから三枚のラウズカードを取り、レイブラウザーのスラッシュリーダーにラウズした。

『SEPARATE-DO』

一枚目、W4の「オルトロスアソデット」の力が解放され、

『CHAOS』

二枚目、W6の「キマイラアンデット」の力が解放され、
『MIST』

三枚目、W7の「フェアリーアンデット」の力が解放され、解放された三つのちらからは一つのコンボを完成させた。

『ENDLESS SQUALL』

新たな認証音声と共に二本のなったレイブラウザーに四属性の力が宿った。

「はああああああ。」

俺は上に向けてレイブラウザーを撃ち放った。すると、上空に行った銃弾は上空で拡散し、雨のようにレイドラグーンの群れに降り注ぎ一斉に倒した。

俺は変身を解かずに辺りを警戒したまま、サヤに聞いた。

「サヤ、辺りはどうだ。」

「レイドラグーンの反応でしたら、現実世界とミラーワールドどちらにもありません。しかし、人の反応があります。」

「何っ。」

すると、レヴァと飛翔も変身を解かず戻ってきた。

「刃、どうやら無事倒したようだな。」

「どうやら、助けは要らなかったようだな、刃さん。」

二人が俺に言うのと近くの茂みから一人の男が出てきた。

「へえー。ねえねえ、君達、仮面ライダーなの？どうやらそっちの君が使っているのはラウズカードみたいだけど。」

男は俺を指差しながら言ってきた。

「誰だ、あんたは。」

「ああ、自己紹介が遅れたね。僕は白井虎太郎。ライターを目指しているんだ。ねえ、ものは相談なんだけどさ、家にこない。実は君達以外のライダーもいるからさ、話でも聞きたいんだけど？」

俺達は変身を解いた。

「いいのか？」

「ああ、いまさら人数が増えたって大丈夫でしょ。」

俺達はなしくずしのまま、虎太郎の家に行くことになった。しばらく歩いているうちに俺は疑問に思ったことを聞いた。

「なあ、虎太郎。あんたは彼処に何しにきたんだ。」

「人を探してたんだよ。」

「人？」

「ああ、相川始つていう、上が下着で下がジーンズの男なんだけど見ていないかな。」

「いや、見ていないな。」

俺達は会話をそこそこ切り上げて道を進んでいった。

暫く進んでいると、大きな病院が見えてきた。

「ん、なんで病院なんだ？」

「ああ、実はさっき広瀬さんから剣崎君が倒れたってきいてね。どうせなら先に会ってもらおうと思ってね。あ、因みに剣崎君が仮面ライダーで、広瀬さんはサポーターね。」

俺達は病院に入って剣崎さんの病室に向かった。

「ああ、ここだね。」

俺達は虎太郎の後に続いて病室に入っていった。

「白井くん！？」

「どうしたの、剣崎君？」

「寝てるだけだから、大丈夫。それよりどこいつてたの……。」

「

広瀬という女の人はそこまで言うその後ろにいる俺達に気づいたようだ。

「ちよつと、白井君。誰よ後ろの人達は？」

「ああ、実はこの人達も仮面ライダー見たいでさ。戦っている所を出くわして、来てもらったんだよ。」

「そんな、まだ他にライダーシステムを使う人がいたなんて。」

広瀬さんは驚いているようだ。まあそれも仕方ないと思うが。

「自己紹介がまだでしたね。俺は黒滅刃です。」

「サヤです。」

「私はヴァティ・レンです。レヴァと読んでください。」

「俺は飛翔と言います。」

「ええ、刃君にサヤさんにレヴァさんそして飛翔君ね。私は広瀬栞よ。それで、貴方達はBOARDのライダーなの。」

広瀬さんは疑問に思ったことを聞いてきた。

「いえ、俺達が使っているものは確かにカードを使いますがBOARDとは似て非なるものですよ。」

「え、でも君は確かラウズカードを使っているのを僕は見たけど。」

と虎太郎は思い出そうとしながら答えた。

「ああ、僕の場合はカリスと同じ様な存在ですからね。」

「え、それはどういうことなの？」

「これ以上はすみませんが、答えることはできません。」

俺は広瀬さんの質問を遮った。

しかし、広瀬は、

《カリスと同じ様な存在？まさかこの子『ジョーカー』だっていうのもそしたらサーチャーに反応する筈だし、考えすぎよね。》
と疑問を募らせていた。

「それより、剣崎さんは寝てるだけですか？」

飛翔が言っていると広瀬は考えるのを止め、

「ええそうよ。ただ寝てるだけだから大丈夫よ。」

と広瀬さんが言っていると

《寝てるだけなら、キングフォームの影響か。だとしたら、今はまだ大丈夫だが酷使しすぎるとジョーカーになるかもな。》
と考えていた。

「それより、どこ行ってたのよ？」

「それが、相川始を見つけてずっと探していたんだけど。」

「・・・始。」

どうやら、剣崎さんが起きたようだ。

「剣崎君。」

「始がどうしたって。」

すると、虎太郎は座りながら、

「何時、自分がジョーカーに戻るか解らないから帰れないって、新しい大きな力が出現したからどうのって。」

「それ、どうゆう意味？」

と広瀬さんが言うのと突然広瀬さんのカバンから警報が鳴り響いた。広瀬さんがパソコンを出し調べると、どうやらアンデットサーチャーが反応していたようだ。

「アンデットの反応……五体!？」

「く……よし。」

と言うと剣崎さんは起き上がり病室から出て行ってしまった。

「飛翔こつちも剣崎さんを追うぞ。サヤとレヴアは広瀬さん達と一緒ににいる。」

と言って俺と飛翔も病室を出た。

外に出ると剣崎さんはバイクに乗って行くのが見えた。

「刃さんどうするんだ？こつちはバイクなんてないぞ。」

飛翔は焦った感じで言ったが俺は冷静に、

「大丈夫だバイクならある。」

と言ってオーロラを呼び出した。するとオーロラの中から一台のバイク　ディガイザー　が現れた。すると飛翔はそれを見ながら啞然としつつ、

「はは、刃さんって何でも有りなんですね。」

と乾いた笑いを出していた。俺はそれを軽く無視しつつ飛翔にヘルメットを一つ渡しつつ、

「とにかく追いかけるぞ。飛翔、後ろに乗れ。」

飛翔を後ろに乗らせ剣崎さんの後を追って行った。

デイクイザーに乗って進んで行くと橋の近くで剣崎さんと走っていたジョーカーを見つけた。

「新しい力は危険……。」

「大丈夫ですか、剣崎さん。」

すると、剣崎さんは驚いた様子でこちらを見てきた。

「お前達は？確か虎太郎が連れてきた。」

「自己紹介がまだでしたね。俺は黒滅刃、そしてこっちの赤髪が。」

「飛翔です。」

「刃に飛翔だな。俺は剣崎一真だ。」

「それよりさっきのジョーカーが相川始ですか？」

俺が聞くと剣崎さんはまた驚きつつ、

「お前、アンデットの事知っているのか？」

聞いてきた。

「ええ、剣崎さん達のことも知っていますよ。ですがあの人は危険な状態ですね。ジョーカーを制御することが出来ていませんね。」

「刃、ジョーカーを止める方法を知っているのか？」

剣崎さんは切羽詰ったように聞いてきた。

「ああなつては一度暴走を止めないと。まずは大きなダメージを与える必要が有りますね。」

「大きなダメージか……。分かった取り敢えずまずは始を追うぞ。」

剣崎さんと俺達はジョーカーに戻ってしまった始さんを追っていた。

第10話『B・力の一端、そして接触』（後書き）

（後書きコーナー）

サ「さて、後書きです。」

レ「ああ、今回は刃が使ったコンボについてだな。作者よろしく。」

斬「うーい、分かった。」

『ENDLESS SQUALL』『エンドレススコール』340
OAP

『SEPARATE-DO』『CHAOS』『MIST』の三枚で行う
カードコンボ。二本になったレイブラウザーより放たれる銃弾に「
闇」「光」「炎」「氷」の四属性が付加され相手に一斉に放たれる。
そのまま相手に放たれるタイプと一度固まりを放ってから拡散させ
るタイプがある。

サ「今回は後者のほうでコンボが使用されました。」

レ「確かに敵が多いときはいいな。」

サ「見てて凄かったですよ。感謝コーナー。」

斬「海人様、有難う御座います。」

レ「次回は？」

斬「題名は決まっていらないが、ジョーカーの暴走を止める予定だな。」

「

サ「あんまり、待たせないくださいね。」

斬「ぐつ。」

サ・レ・斬「「「それでは、次回で。」」」

第11話『B・力の真実』（前書き）

さあ、第11話です。

今回はタイガーアンデットが登場！

それでは、どうぞ。

第11話『B・力の真実』

暫く走っていると港で他のアンデットを倒して封印しているジョーカーを見つけた。全てを倒したジョーカーは目標を幼い少女に向けてた。

それを見た剣崎さんはジョーカーの前に立っていた。

「天音ちゃんのこと解らないのか。」

そう言うと剣崎さんはプレイバツクルに？1「チェンジビートル」のカードを装填し ターンアップハンドル を引いた。

「変身」

『Turn Up』

すると目の前に オリハルコンエレメント が現れそれを潜ると剣崎さんは 仮面ライダーブレイド に変身していた。

「あれが・・・」

「ああ、あれが仮面ライダーブレイド。」

それを見ていた飛翔は、

「刃さん俺達も行こう。」

とディケイドライバーを出しながら言った。だが、俺は手で制しつつ、

「いや、ここは剣崎さんに任せておこう。」

と言った。するとブレイドは左腕に付いているラウズアブゾーバーから二枚のカードを出し、一枚を装填し、もう一枚をラウズした。

『ABSORB QUEEN、EVOLUTION KING』

ラウズアブゾーバーから合わせて12枚のカードがブレイドの周りを飛び回りカードはあるべき位置を見つけたかのようにブレイドの体に取り込まれ・・・黒を基本色とし金の鎧を身に纏う戦士、『仮

面ライダーブレイド・キングフォーム』になった。

その瞬間俺の中の 何か が反応した。

「くっ。《なるほど、ジョーカーの闘争本能が反応しているのか。

俺はまだ大丈夫だがカードが足りない始さんでは耐えられんな。》」

「思い出せ、お前はジョーカーに戻りたく無かった筈だ。お前は人間になろうとしているんじゃないのか？」

だが、ジョーカーは剣崎さんの言葉に反応せず襲い掛かっていた。
「俺はお前を封印したくない、聞いてくれ。」

ジョーカーはそれでもなおブレイドに攻撃しつづけた。そんなとき、再び「キーン、キーン」と言う金属音が聴こえてきた。すると、近くの反射物からレイヨウ系のミラーモンスターであるギガゼールとメガゼールがブレイドに襲ってきた。

「くっ！？なんだ此奴らはどっから出てきたんだ。」

「ほれ、飛翔。俺等の出番がきたぞ。」

俺は デイガイドライバー を取り出した。

「分かっているよ、刃さん。」

飛翔も デイケイドライバー を出して腰に付けた。

「「変身」」

『KAMEN RIDE DEGAIDE』 『KAMEN RIDE
E DECADE』

俺は デイガイド に飛翔は デイケイド に変身して、二匹をブレイドから離れた。

「お前等その姿は一体・・・？」

「説明は後です。俺達に此奴らは任せて、貴方はジョーカーを頼みます。」

「分かった。そっちは頼んだぞ。」

これで良しと、さてこっちも始めますか。

「行くぞ、飛翔。」

「おう。」

俺達はミラーモンスターと戦い始めた。

名前にギガと入っていて 仮面ライダーインペラー の契約モン
スターになっただけあつて多少は強いようだ。

「だが、俺の敵にはまだまだ遠いぞ。」

俺はサモンドライバーとRB・プロトの二刀流で切り伏せていた。
「さて、お前にはこの姿が良いかな。」

RB・プロトから一枚のカードを取り出しドライバーに装填した。
『KAMEN RIDE NIGHT』

虚像がオーバーラップして俺の姿は疾風の騎士 仮面ライダーナ
イト に変身した。

『ATTACK RIDE SWORD VENT』

俺はナイトの武器であるウイングランサーを呼び出し再び切りつ
けて行った。

刃さんがもう一匹の方と戦っていた時、俺はメガゼールと戦って
いた。

こいつはレイヨウの特徴であるジャンプ力で俺を翻弄していた。
「くそ、でもミラーモンスターならこの姿でしょ。」

俺は一枚のカードをドライバーに装填した。

「変身」

『KAMEN RIDE RYUKI』

俺の姿は 仮面ライダー龍騎 になった。そしてもう一枚装填し
た。

『ATTACK RIDE ADVENT』

無双の名を持つ龍 無双龍ドラグレッダー を呼び出し、一気に
メガゼールを吹き飛ばした。

俺はウイングランサーでギガゼールに必殺の突きを放ち吹き飛ばした。

すると、丁度そこにメガゼールも吹き飛ばされ飛翔が変身したD龍騎が出てきた。

「ナイスタイミングだ、飛翔。決めるぞ。」

「分かっているよ。」

そして二人揃って、カードを装填した。

『FINAL ATTACK RIDE NI・NI・NI・NI
GHT』

『FINAL ATTACK RIDE RYU・RYU・RYU・RYU・RYUKI』

Dナイトの背中に契約モンスターである ダークウイング が変化したウイングシールドというマントが付き、D龍騎の周りにドラグレッダーがきた。DナイトとD龍騎は同時にジャンプし、Dナイトはウイングランサーを芯にマントをドリル状に変形させて突撃する「飛翔斬」を、D龍騎はドラグレッダーのエネルギーを受けながら敵に飛び蹴りを決める「ドラゴンライダーキック」を二匹同時に食らわせた。

「はああああああああ。」

「やああああああああ。」

二匹は爆発を起こして消滅した。だが、それを見ながら俺は考え込んでいた。

《なぜ、今になってミラーモンスターが出てくるんだ。ミラーワールドは消滅している筈なのに。くそ、疑問が増えるばかりだ。》

「刃さん。どうしたんだ、妙に考えこんで。」

どうやら俺は考えごとに夢中で飛翔が読んでいたのを気づかなかつたようだ。

「いや、大丈夫だ。剣崎さんの所に向かおう。」

俺は変身を解きながら言い、剣崎さんの方へ足を向けた。

着いた時にはジョーカーは倒れ、ブレイドはコモンブランクのカードを持ちながら封印するかどうか迷っているようだ。

するとジョーカーの姿が揺らめき、人間の姿である相川始になった。

「始。」

だが、再びジョーカーの姿に戻り立ち上がり雄叫びをあげ今にもブレイドに襲いかかろうとしていた。

「くっ！？剣崎さん。」

「ブレイド！？」

そのときトラの祖であるタイガーアンデットが現れ、ブレイドと共に転がった。

「アンデットとの融合を解け。」

「アンデット？」

その時、ブレイドはタイガーアンデットの後ろを確認したが、すでにジョーカーはいなかった。

「？始。」

その後観念したかの様にブレイドは変身を解き、タイガーアンデットも人間態である城光 じょう ひかる の姿に戻った。

「どういふつもりだ。」

「ジョーカーにあれ以上狂暴になれたら困る。」

「なんだと。」

「まだ解っていないのか？人間になりかけていたジョーカーが何故その本性を取り戻してしまったのか。」

「お前、始の事を？」

剣崎さんは目の前のアンデットが始さんのことを知っていることに驚いていた。

「アンデットを舐めないで欲しいな。ジョーカーはこの戦いの最後

の切り札、折角勝ち残っても奴に負けたら全て終わり、注意を払って当然だろ。」

「始は何故ジョーカーに戻った。」

「お前の新たな力の所為だ。」

城光は剣崎さんを指差しながら答えた。

「俺のキングフォームの所為で。」

「お前の力はジョーカーのそれに非常に近い。」

「ジョーカーに近い？俺が。」

「その力がジョーカーを目覚めさせた。」

「どうすれば良い？」

「知らないな。」

城光は立ち去っていかうとした。

「待て！？」

剣崎さんは追いかけようとしたが、突然倒れてしまった。すると

城光は直ぐ側にいた俺達に向きながら、

「お前達もだ、何者かは知らないがこちらの邪魔はしないでくれ。

特に。」

ここで言葉を切り、俺に指さしながら、

「特にお前は何者だ？アンデットの本能がお前を危険と叫んでいる。

」

と言ってきた。だが、俺はその質問に対して、

「そうだな、お前達に近しいが権利を持たない者と答えておく。」

その言葉に城光はいぶかしんだが深く問いつめず去っていった。

「刃さん、あの人刃さんの正体に気づいたんじゃない？」

「さあな、だが大丈夫だろ。」

暫くすると、広瀬さんと虎太郎がやってきた。

「剣崎君。」

「剣崎くん。」

俺達は二人と一緒に剣崎さんを虎太郎の家に運んでいった。

第11話『B・力の真実』（後書き）

（後書きコーナー）

サ「さて、今回は私達が一切登場しない回ですね。」

レ「そうだな、これは一体どういうことだ作者。」

斬「し、仕方ないじゃないですか。物語の都合上この様なことがあるのですから。」

サ「それにしてもタイガーアンデットが登場しましたね。」

斬「ええ、彼女の存在は不可欠ですから。」

レ「それにしても、大丈夫なのか？剣崎に刃と飛翔の変身した姿を見せて。」

斬「それでも、物語はTV本編と同じように進んでいくので大丈夫ですよ。あくまでこれは過去の話ですから。」

サ「そうですか。」

斬「ええ、海人様、有難う御座います。」

レ「次回は？」

斬「次回は『B・心の弱さと打開策』です。詳しいことは言えませんが。」

サ・レ・斬「「「それでは、次回で。」」」

第12話『B・心の弱さと打開策』（前書き）

第12話です。

今回は甘い展開（？）っていう感じです。
それと始を元に戻す打開策が出てきます。

それでは、どうぞ。

第12話『B・心の弱さと打開策』

その日の夜俺達は虎太郎の家に泊まることになった。あの後、虎太郎がどうせなら泊まっていけばと言ったのでゼロライナーがないから宿を探さなければいけない手間を省くために言葉に甘えた。そして、今は俺と虎太郎と飛翔の三人で料理を作っている。

「それにしても刃君も飛翔君も料理うまいね。」

「いや、俺に関しては旨くないと逆に危ないからさ。」

「俺は最初からできるのでなんとも。」

と俺は過去を思い出しつつ、飛翔は苦笑いしつつ答えた。程なくして料理もでき、六人ですべて平らげた。

その後、俺達は情報交換をしていた。俺達は伝えられることのみを話、広瀬さん達からは今までの事を話して貰った。

そして、広瀬さんはこんな事を言ってきた。

「ねえ、貴方が持っているラウズカード見せてほしいんだけど。」

これには正直、迷った。確かに見せても問題はないだろうが、本来は存在する筈がないラウズカードである、だが広瀬さんがしつこかったので根負けして、見せることにした。

「これです。」

俺は机の上にカードを並べた。

「これが、貴方の持っているカードか、確かにラウズカードね。でも現存生物じゃなくて、神話上の生物っていうのはどういうこと。」

「それは答えられません。」

「そっか、ありがとう見せてくれて。」

「いえいえ、泊めてもらうのでこのくらいの事でしたら良いですよ。」

と言つて俺はカードを懐にしまった。そしてこの話もここでお開

きになりみんな寝室にいった。

深夜、俺は眠ることができず外で星を見ていた。すると、後ろから声がかかった。

「眠れないのか？」

「レヴァか、そっちこそどうした？それにサヤは？」

後ろから声をかけてきたのはレヴァだった。

「サヤならぐっすり寝ているよ。私も眠れないんだ、隣いいか？」

俺はちよつと横に動き場所を開けた。そして、横にレヴァが座ってきた。

「それで、どうしたんだ刃？」

「ん？」

「お前が眠れないってこと何か考えているってことだろ。」

「え、どうして分かったんだ。」

「馬鹿、一年も一緒にいればそれくらいわかる。」

俺はレヴァに向きながら目を見開いていた、けどすぐに「ふっ

と空に顔を向けると、俺は告げた。

「そうだな、俺は考えことをしている。」

「考え事？なんだそれは。」

「え？それは、えと、その。」

俺がなかなか言おうとしないとレヴァが、

「さっさと言え、どうした何時もの刃じゃないぞ。」

と怒った様に言ってきた。それを聞いた俺は吹っ切れた。

「何時もの俺じゃないか。そうだよな、こんなのは俺じゃないよな。よし、実は考えていたのはお前のことなんだよ。」

すると、今度はレヴァが驚いていた。

「は、私が一体どうしたって言うんだ。」

「お前がこんな危険な旅にいることさ。」

俺は少し冷たくなりながらも言葉を続けた。

「サヤはともかくお前は元々普通の人間なんだ、例えライダーの力を持っていたとしても人間なんだよ。それなのにこんな旅まで連れてきてさ、やつぱり『始まりの地』に戻った時に陛下に預けておけば良かったと思うようになってさ。」

「じゃ、じゃあ飛翔はどうなんだ、あの子だって普通の人間じゃないか。」

レヴァは言葉が震えながらも言った。

「飛翔のことは陛下が決めたことだから仕方ない、それにどうも飛翔は普通じゃないような感じがするからな。」

と俺は飛翔が『女教皇』の力を持っているかもしれないことをレヴァに告げた。

その後、暫く黙っていたが不意にレヴァが立ち俺の胸ぐらを掴み地面に押し倒してきた。

「じゃあ、私の今までは何だったんだ。私は刃と一緒にいたくて頑張ってきたのにそれすら否定するのか。」

声には怒気が含まれ、眼には涙が溜まったレヴァの顔がすぐ近くにあった。

「レヴァ……。すまん、お前が俺の為に一緒にいてくれることに気づけなくて。だが、良いのか本当に俺と一緒にいるとお前まで危険な目に合うかもしれないんだぞ。」

俺はレヴァを抱きしめながら聞いた。するとレヴァも俺を抱きしめ返しながら、

「いいんだ、そんなこと最初から分かっていたからな。それにいざつて時にはお前が護ってくれるだろ？」

レヴァは俺の顔を見ながら聞いてきた。俺は答えとしてレヴァの顔を手で俺の顔の前まで近づけ唇にキスをした。レヴァは驚きながらも俺になされるがままになっていた。十数秒後、俺は唇を離して言った。

「ああ、俺がお前もサヤも護ってやるさ。」

レヴァは顔を赤くしながら、俺の胸に顔を埋めていたが小さな声

で、

「うん。」

と返事をした。

「さて、そろそろ部屋に戻るか。」

俺は立ち上がりながら、レヴァの手を引いた。するとレヴァはまた顔を赤くしながら、

「あのさ、刃。一緒に寝てほしいんだけど。」

「え。」

これには俺も顔を赤くしたが別に断る理由もないので、

「いいぞ。」

と返事をした。

こうして、俺とレヴァは一緒に布団で寝ることになった。

翌日、どうやらレヴァはサヤから、

「マスターと一緒に寝たなんてレヴァだけですよ。」

と俺がいないところで怒られたとき。

レヴァがサヤに怒られてから暫くして俺達はリビングにいた。

「剣崎さん、まだ起きないな。」

「そうだな、思った以上にキングフォームの負荷がきているってことだろうよ。」

飛翔の独り言に俺は相槌をうつた。すると、上から物音が聴こえてきた。どうやら、剣崎さんが起きたようだ。暫くすると、三人は上から降りてきた。

「剣崎さん、大丈夫ですか？」

「ああ、心配かけたな。俺は大丈夫だ。」

広瀬さんはパソコンを起動していた、どうやら昨日きていた烏丸所長からのメールを剣崎さんに見せるようだ。

「ラウズアブゾーバーは上級アンデットの力を使いこなすため開発

したものだけど、剣崎君がしたような十三体のアンデットとの同時融合なんてあり得ないって……」

「そうなんだ……」

「だけど俺は確かに……」

剣崎さんは思案顔で答えた。すると広瀬さんは剣崎さんを見ながら、

「所長が考えていたキングフォームは、あくまでもカテゴリーキングと融合することだけ。でも、剣崎君のキングフォームは完全にそれを超えている。」

それを聞くと剣崎さんは考えこんでしまった。すると何を思ったのか虎太郎はカードの一覧を開いていた。すると剣崎さんはそれを見て何かを閃いて顔になった。

「そういえばさ、橘さんも始ももうそろそろ十三枚のカード揃うよね。そしたら同じことが起きるのかな？」

「そうだ、それだよ虎太郎！」

「え？」

「もし、始が十三枚のカードを手に入れたら、そのとき俺と同じように別の形に進化するかもしれない。」

「待つてよ。それって、ジョーカーがもつと恐ろしい怪物になってしまうだけじゃない？」

すると、剣崎さんはそれを否定するように、

「いや、カリスやヒューマンアンデットの力でジョーカーを抑えこんでいたように強い力で元の始に戻るかもしれない！きつとそうだ！よし！」

「確かにその可能性はありますね。」

俺は剣崎さんの言葉に同意した。すると剣崎さんは家であろうとした。

「剣崎君、どこ行くの？」

剣崎さんは広瀬さんの方を向き、

「睦月から始のカードを取り戻す。それから……」

「どうして……。剣崎君がそこまでしなくちゃいけないんだよ、始のために……。」

虎太郎は何故剣崎さんが始の為にここまでやるのか解らないらしい。

すると、飛翔まで、

「虎太郎の言う通りだ、何故全ての敵であるジョーカーにそこまでのことをしようとするだ。」

反発した。

「なんの確証もないんでしょ？」

「それでも俺は、賭けてみたい。」

と言つて剣崎さんは行つた。

「剣崎君!？」

俺は隣で啞然としている飛翔に言つた。

「俺達も剣崎さんを追いかけるぞ。」

「え？」

「すまないが二人は広瀬さん達と一緒にいてくれ。」

「ああ、分かったぞ刃。」

「いつてらっしゃい、マスター、飛翔。」

俺達はディガイザーに乗り込み剣崎さんの後を追つた。

第12話『B・心の弱さと打開策』（後書き）

（後書きコーナー）

サ「さあ、レヴァこれはどういう事ですか？」

レ「まてサヤいきなりすぎるぞ。っていうか作者、説明してくれ。」

斬「まあ、ぶっちゃけると刃は人間であるレヴァを巻き込んでしまったという事をずっと悩んでいたっていう心の弱かった部分を書いただけだが。」

サ「それでなんでレヴァだけがマスターと甘い雰囲気になっているんですか。答えになっていませんよ。」

斬「なんだそんなことか。心配しなくても君もあんな展開にする予定だから心配しなくても良いぞ。」

サ「それでしたら。」

レ「つ、疲れた。」

斬「海人様、感想有難う御座います。さてここで報告ですが明日から1月9日まで更新がストップするかもしれません。あくまでも現時点でのことなので詳しくは言えませんがその時はよろしく願います。」

レ「次回は？」

斬「今回はブレイド編のフィナーレ」B・全ての敵をも受け入れた者だ。」

サ・レ・斬「それは、次回で。」

第13話『B・全ての敵をも受け入れた者』（前書き）

第13話です。また暫く投稿できないかもしれません。

遂にブレイド編の最終回、それではどうぞ。

第13話『B・全ての敵をも受け入れた者』

剣崎さんを追っていくとどこかの公園で止まった。デイガイザーから降り奥へ進んでいくと、剣崎さんは一人の男と出会っていた。

「あれは・・・睦月さんか。」

「よかった！前に橘さんが、この辺りにお前を捜しに行ったからさもしかしてって。」

すると睦月さんはこんなことを言った。

「とうとう、決着をつけるつもりですか？」

剣崎さんは驚いた顔をしたが睦月さんは首で、来いと仕草をして奥に進んでいった。

奥に進んでいくと球場の観客席についた。そこで睦月さんはいきなり剣崎さんに殴りかかってきた。しかし、剣崎さんはその拳をかわし、言った。

「今日、来たのは戦うためじゃない。」

「どうせ、戦う運命だ！」

と再び殴りかかってきたが、剣崎さんは腕を捕まえた。

「始のカードを、まだ持っているな？それを渡してくれ！」

睦月さんは剣崎さんの腕を払った。

「やっぱり、貴方もカード集めしてるだけですか。」

「違う！始に返してやりたいんだ。」

「返す・・・？ジョーカーに？」

「十三枚のカードが揃えば今度こそあいつはジョーカーを抑え込むことができるかもしれない。」

「ジョーカーを？無駄ですよ、あんな怪物。」

すると、唐突に睦月さんはカードを取り出した。

「これが欲しいんですか？」

「ああ、頼む。」

睦月さんは近くの椅子に座りながら、

「簡単には渡せませんね。このカードより価値のあるものと交換なら、考えてもいいですよ。」

と剣崎さんに交渉してきた。

「烏丸所長から貰った新しい力、俺にください。」

「ラウズアブゾーバーのことか？」

睦月さんは無反応だった。

それでも、剣崎さんはラウズアブゾーバーを取り出した。

「良いんですか、剣崎さん？」

「ああ、刃。これも始の為だ。」

「本当にいいのか？」

そして、剣崎さんは睦月さんに渡したと同時にカードを取った。

「今はキングフォームになることはできない。」

剣崎さんはバイクの所に戻っていき、バイクに乗って行った。

もちろん、俺と飛翔も一緒にだ。

《あとはハートのカテゴリーキング・・・必ず見つけてやる。》

暫く走っていると突然向いの車線から橘さんが出てきた。俺達が止まると橘さんも止まった。

「橘さん？」

「相川始の為にカテゴリーキングを探してるのか？」

「なぜ、それを・・・。」

「ジョーカーは確かに危険だ。だが、何故奴を人間に戻そうとする？ 奴は所詮アンドットだ！」

それを聞いた剣崎さんは言葉を強めながら、

「でも、あいつはジョーカーに戻りたくないと思っています。」

それを聞いた橘さんは眉を潜めた。

「たとえば、あいつの正体がジョーカーだとしてもあいつは人間になるうとしている。自分の運命と戦っているんです!」

橘さんは考えこんでしまった。

「ハートのカテゴリーキングはすでに封印されている。」

と言つて橘さんはカードを剣崎さんに見せた。

「渡すには……条件がある。」

剣崎さんはその条件を飲んですぐに始さんのところに向かった。

俺はディガイザーを運転しながら剣崎さんに話かけた。

「剣崎さん、本当に良かったのですか。バツクルまで渡してしまつて?」

「ああ、これで始が元に戻ってくれるなら俺はなんだつてするさ。」

「剣崎さんはそこまでジョーカーである始さんを思っているんですね。」

そして、橋の下をいつていたらいきなり改造実験体であるトライアルFが襲つてきた。

「剣崎さん!? あれはトライアルFか。」

「来い……剣崎、来い!」

剣崎さんは立ち上がりながら、

「今はまだ行けない! 橘さんにもそう言つた筈だ!」

「来い。」

それでもトライアルFは剣崎さんに襲い掛かつていった。剣崎さんは攻撃をよけ変身しようとするが、バツクルがないことに気が付いた。

「剣崎さん、ここは俺達が。」

俺と飛翔はそれぞれベルトを付けた。

「変身!」

『KAMEN RIDE DEGAIDE』 『KAMEN RIDE DECADE』

俺達は変身してトライアルFに攻撃していった。しかし、トライアルFは俺達の攻撃をもとめせず剣崎さんを付け狙った。

「俺と来い！」

剣崎さんは攻撃をよけ続けカウンターの蹴りを決めるがトライアルFは剣崎さんの首を捕まえ放り投げた。しかし、剣崎さんはその隙にバイクに乗り込み逃げることができた。

「よし、俺達もいくぞ飛翔。」

「おう。」

俺達は素早く弾幕を張りその時の煙を利用してトライアルFの追撃から振り切った。

剣崎さんに追いついた時は剣崎さんは誰かと電話した後だったよ
うだ。

「剣崎さん、大丈夫ですか。」

「ああ、心配するな飛翔。じゃ、先を進むか。」

俺達は森の中へと入っていった。

どんだん奥に進んでいくと、うめき声が聞こえてきた。すると奥からジョーカーが出てきた。

「始……。」

剣崎さんがカードを取り出そうとするといきなりジョーカーが剣崎さんに飛びついてきた。

「剣崎さん！？」

飛翔は変身しようとしたが剣崎さんに止められた。

「まて、飛翔！攻撃するな。」

「始！」

剣崎さんが叫ぶとジョーカーの姿は始さんの姿に戻ったりと繰り返し始さんの姿になった。

「始！俺だ！解らないのか？」

再び始さんはジョーカーの姿に戻ってしまった。

「俺が憎いのか・・・？俺がアンデットと融合しているから・・・お前にとつては敵なのか！？それとも・・・」

ジョーカーは再び剣崎さんに攻撃していった。それでも剣崎さんはよけ続け言葉を続けた。

「俺がお前をジョーカーに戻してしまったからか？」

ジョーカーの動きが一瞬止まった。

「俺が出来るのは・・・これだけだ・・・！」

その隙に剣崎さんはカードを取り出した。

「これを使え！始！」

剣崎さんはジョーカーに近づいていった。するとどこから攻撃が飛んできてジョーカーと剣崎さんは吹き飛んでしまった。そのとき剣崎さんはカードを落としてしまい、それを拾っていたら後ろからトライアルFが掴みかかってきた。それでも剣崎さんは叫んだ。

「始、これを使え！俺を信じろ！！」

と言つてジョーカーにカードを投げた。するとトライアルFは言った。

「無駄だ。もうジョーカーは人間に戻ることは・・・できない！」

だが、それを聞いて意外にも叫んだのは飛翔だった。

「誰が戻れないって決めた、確かに今では戻るのは難しかもしれない。でも、どんな怪物だって人間の心を持つている奴はいるんだ。そしてそいつを信じている奴がいればできないことなんてない。」

「飛翔！」

その言葉を聞いてトライアルFは叫んだ。

「貴様・・・何者だ。」

「俺は自分探しの旅をする、通りすがりの仮面ライダーだ。覚えてなくていい！！」

飛翔はドライバーを腰に付けた。

「変身」

『KAMEN RIDER DECADE』

変身をして飛翔はディケイドになって剣崎さんを救うためにトリアルFに攻撃していった。しかし、そのときを待っていたように川面からミラーモンスターである ディスパイダー が出てきた。
「く！？またかよ。」

俺はそれを見ながらジョーカーに近づいていった。

「飛翔も剣崎さんもお前のためにここまでやってくれたんだ。お前もそれに答えやろうぜ。」

ジョーカーは震えながらも？A「チェンジマンティス」をラウズした。

『CHANGE』

ジョーカーは 仮面ライダーカリス に変身した。だが、すぐに腰をおってしまった。俺はそれを見ながらも同胞である者を信じながらドライバーを腰に付けた。

「変身」

『KAMEN RIDER DEGAIDE』

俺はディガイドの変身してカリスの次の行動をまっした。

「剣崎・・・」

カリスは剣崎さんの方を向いた後、決心したかのように？K「エボリュションパラドキサ」のカードを取り、立ち上がりラウズした。

『EVOLUTION』

認証音声が届いたと同時に十三枚のカードがカリスの頭上に上がりラウザーに全て入っていった。すると再び水飛沫のエフェクトとともにカリスは ワイルドカリス へとパワーアップした。

それと同時に俺の手には二枚、ディケイドの手には一枚のカードが握られた。

「これは・・・刃さん！」

「ああ、俺達も行くぞ。」

トリアルFはワイルドカリスに任せた俺達はディスパイダーの相手に向かった。

「一気に行くぞ。」

俺達はカードをそれぞれドライバーに装填した。

『FINAL KAMEN RIDE BLADE KING』

『FINAL KAMEN RIDE CARIS WILD』

ディケイドはDブレイド・キングフォームへ、俺はDワイルドカリスへそれぞれ変身した。

「すごい、これが『FINAL KAMEN RIDE』カードの力！」

「ああ、さつさとやるぞ飛翔！」

俺は二枚、飛翔は一枚のカードを装填した。

『ATTACK RIDE KINGURAUZA』

『ATTACK RIDE CARISARROW』 『ATTAC

K RIDE WILDSLASHER』

Dブレイド・KFはキングラウザーをDWカリスはワイルドスラッシャーがついたカリスアローを持って切りかかった。

デイスパイダーの足は簡単に切れていき無防備になったところで止めをつけるべくカードを装填した。

『FINAL ATTACK RIDE B・B・B・BLADE』

『FINAL ATTACK RIDE CA・CA・CA・CA

RIS』

俺は「ワイルドサイクロン」をDブレイド・KFは「ロイヤルストリートフラッシュ」を繰り出し、消滅させた。

どうやら、ワイルドカリスも戦いを終えており倒れている剣崎さんに駆け寄っているところだった。

「剣崎。」

「始。。。」

剣崎さんはそのまま気絶してしまったようだ。

ワイルドカリスが剣崎さんを持とうとすると、いきなり橘さんが現れた。

「剣崎!？」

「変身」

『Turn Up』

橘さんはギャレンに変身してワイルドカリスを殴りつけた。

「はあ!」

ギャレンは剣崎さんに駆け寄った。

「剣崎!」

するとギャレンラウザーを取り出し、ワイルドカリスを撃った。

そして撃ちながら剣崎さんを連れて行った。

「あ、待て!」

飛翔が止めようとするが俺は飛翔を止めた。

「待て、俺達が介入できるのはここまでだ。」

「え?」

「ここから先は剣崎さんや始さん達だけでやれなければならない。」

俺は変身を解き、苦渋の顔をしながら言った。

それに分かってくれたのか飛翔は何も言わなくなった。

「すまない、始さん。俺達が手伝えるのはここまでなんだ。」

すると、始さんも変身を解きつつ、

「いや、ここまでで十分だ。ありがとう、剣崎を手伝ってくれて。」

「始さん、剣崎さんのことよろしく願います。」

飛翔は始さんに頼んだ。

「ああ、任せろ。」

そして、俺達はその場から離れていった。

森の中の広い場所に俺達は居た。サヤとレヴアには連絡して広瀬さん達に言ってもらってきている。そして、俺はライダーパスを取り出しゼロライナーを呼び出した。

「もう行くんですか?」

飛翔は聞いてきた。

「ああ、これ以上俺達がいるとこの時間にどんな影響を与えるか解らないからな。」

飛翔は名残惜しそうな顔をしたが、すぐに戻し乗り込んだ。

「さて、次の物語にいくか。」

全員乗り込み、俺はゼロライナーを動かし次の時間へ向かった。

第13話『B・全ての敵をも受け入れた者』（後書き）

（後書きコーナー（と言う名の会議））

刃「おい、作者。どういことだ、いきなり俺を呼び出して。」

サ「そうですよ。このコーナーは私とレヴアさんで仕切る筈です、何故マスターがここにいるのですか？『ブレイドの物語編』が終わったばかりというのに。」

斬「その点についてはな、実は『女教皇』からお前達に依頼がきているからさ。」

刃「依頼だと？」

斬「ああ、要約すると、『インフィニティ』と言う組織を調べてきて」だそうだ。」

刃「『インフィニティ』？・・・ああ、その組織なら知っているぞ。確か並行世界の『魔法少女リリカルなのはの世界』にできた組織だろ。」

サ「マスター、何故知っているのですか？」

刃「曲がりなりにも様々な世界を旅しているんだ知識として知っているだけさ。」

斬「ほう、それなら話が早いな」だが、情報は教える。」・・・分かってるよ。組織名『インフィニティ』構成員は12人で能力はほぼ全員チート級でなかには何人かの『神属』がいて転生者もいる

らしいぞ。」

刃「ふむふむ、なるほどな。だが、思ったんだが何故『女教皇』自らがいないんだ？自分が行った方が早いだろうに。」

斬「その件についてだが理由は『統治外世界』だからだそうだ。」

サ「なるほど、だから『統治外』でも干渉できる私達が行くのですね。」

斬「ああ、そうだよ。それで刃、この依頼受けてくれるか？」

刃「ああ、俺個人もその転生者に興味が出てきたこの依頼受けよう。」

サ「マスター。」

斬「任せたぞ、刃、サヤ。」

刃「ああ、いくぞサヤ。」

サ「マスターとなら何処までも。」

斬「ということで刃達は白蓮様の作品「魔法少女リリカルなのは」I for You, We for You」に出ますのでそちらも合わせてお願いします。因みにライダーは出ません。次回は『K・敗北と破滅の力』です。」

刃・サ・斬「それでは。」

第14話『KU・敗北と破滅の力』（前書き）

新年明けましておめでとうございます、と言っても新年に入って2回目の投稿ですが。

前回の投稿で挨拶していなかったので改めて挨拶しておきます。

さて、今回からはKの付くライダーの物語です。

三人いますが読んでからのお楽しみです、それとディガイドに新フォームがです。

それではどうぞ。

第14話『KU・敗北と破滅の力』

ゼロライナーが目的の時間に向かって走っている中、俺は飛翔に話しかけた。どうやら飛翔はまだ『ブレイドの物語』のことを気がかりにしているようだ。

「飛翔、お前まだ気になるのか？」

すると、飛翔は顔をこちらに向けながら言った。

「……ええ、本当にこれでよかったのか気になって。」

「はあ。」

俺はため息を吐きながら言った。

「いいか、飛翔。俺達がいなくても物語の結末は変わらない。むしろいた方が悪くなる可能性が高いんだ。それにあくまでもこの旅の目的はお前の『自分探し』とライダーがどういう者かお前に教えるための旅だ。そこをはき違えるな。」

「でも……。」

まだ、飛翔が考えているので俺は切り札を切った。

「今だからこそ言うが、俺はライダー全員の未来を知っている。だから心配するな、また会えるさ。」

俺が言うつと飛翔は驚きつつも俺に聞いた。

「本当だな、刃さん？」

「ああ、俺を信じろ。」

どうやら、飛翔の悩みを消すことができたらしい。本当に世話がやける。

「それはそうと、次はどの物語なんだ。」

「次は『人々の笑顔の為に闘う者』仮面ライダークウガの物語さ。」

そして、ゼロライナーは目的の時間に着いた。

どうやら今回降りた場所は人目を考慮した廃工場だった。まあ、さすがに学習したのかと思ったが近くから戦闘音が聴こえてきた。

「っ！？刃！」

レヴァにも聴こえたらしく、俺に言ってきた。

「ああ、分かっている。いくぞ、みんな。」

俺達は走って音の聴こえた方へ行った。

すると、青のドラゴンフォームに変身している 仮面ライダークウガ がカブトムシ種のグロンギであるゴ・ガドル・バと対峙していた。

「『隠者の尖兵』いや、グロンギか。」

俺は誰にも聞こえないように呟きこの戦いを傍観することに決めた。

ガドルは持っていた銃型の武器でクウガを撃ち吹き飛ばした。クウガは吹き飛ばされたが、すぐに近くにあった角材をつかんでタイタンフォームに変身した。すると角材は タイタンソード に変化した。

「すごい。」

レヴァは初めて見たクウガの能力に感嘆しているようだった。

ガドルは銃で何度も撃ったがタイタンフォームの防御力は高く、クウガは接近することができ、タイタンソードで銃をはじめ飛ばした。ガドルは距離を取りその動きを一瞬止めた。それをチャンスと見たのかクウガはタイタンソードを両手で持って、必殺の突きである カラミティタイタン を繰り出した。ガドルを貫いたかに見えるがガドルを貫くことはできていないようだ。

「そんな、あの一撃が止められた？」

飛翔は目の前のことが信じられないようだ。すると、ガドルはタ

イタンソードを掴み、それを別の剣へと変えてしまった。

「こしやくな！」

ガドルはクウガの顔に張り手を食らわし、ひるませた。ガドルはその隙に剣を自分の腹から引き抜き、逆にクウガに攻撃を仕掛けた。ガドルはタイタンフォームの防御力を上回る攻撃でクウガを追いつめていった。だが、クウガはガドルが止めをさそうと大振りの攻撃をしようとした瞬間にマイティフォームへと超変身した。

「超変身」

そして、一瞬の隙についてガドルの手に　マイティキック　を決め剣を吹き飛ばす事に成功した。

クウガが距離をとりポーズを決めると体に電撃が走り右足に金色の足甲「マイティアングレット」が装着された　ライジングマイティフォーム　になった。そしてガドルに走り込み炎と雷で強化された　ライジングマイティキック　を放った。

「おりやあああああああ。」

が、ガドルの体に浮き出た封印の紋章はすぐに消えてしまった。するとガドルはグロンギ語でこんなことを言った。

「ボボチバサザ、ボグツバゲ（この力は、こう使え）。」

「ん、グロンギ語か？ほんとグギグギうるさいな。」

「それ士さんも言ってたぞ。」

「刃、なんて言っているんだ。」

グロンギ語が解らない二人に俺は教えた。

「「この力は、こう使え」だとさ・・・って何！」

すると、ガドルの眼は金色になり後ろに下がり力を入れると体までもが金色に変化した。

「金色の力。」

クウガは敵がその力を使うことに驚いているようだ。

「あれは　ライジング　の力！ふう、さすがゴ集団最強なだけあるな。他とは格が違う。」

刃は一人納得していたが、飛翔とレヴァは何のことかさっぱりだ

ったようだ。

「おい、刃！あれは一体どういう事だ！」

「そうだぜ、刃さん。それにあんなクウガ俺は見たことがない。」

俺は二人に説明した。

「あの状態は ライジング と言って雷の力を宿した状態でこの世界のクウガにとっては普通なんだよ。だが問題はあのグロンギもその力を使っていると言うことだ。」

それを聞いた二人の顔は絶望的になっていた。

「そ、それじゃあのクウガは・・・ああ、勝てないだろうな。」
「！？」

俺は飛翔の言葉に重ねながら言った。

ガドルはクウガに走り込み雷が宿った飛び蹴りを放った。クウガは向かえうったがモロに食らって吹き飛ばされてしまった。

だが、クウガは瓦礫の中から生還してきたがその姿は不完全なグロージングフォーム になってしまい変身が解け倒れてしまった。それを見たガドルはこんな事を言った。

「ゴセザ、ザバギバシグラ、ゴ・ガドル・バザ（俺は破壊のカリスマ、ゴ・ガドル・バだ）。」

そして、後ろを向きつつ、こんな事を言って去って行った。

「ボンバチバサゼボソゲバギゾ、ザ【ダグバ】（ダグバは、こんな力で殺せないぞ）。」

「さあ、俺達も行くぞ。」

俺は啞然しているみんなを見ながら言った。

「は？あの人は良いのか。どう見ても重体じゃないか。」

レヴァは怒った口調で言った。

「ああ、あの人は大丈夫だ。すぐに助けが来る。今は俺達も行動を起こさないと。」

「起こすってどこか行くあてがあるのか、刃さん？」

飛翔は解らないといった口調で言った。

「どこってそれはおいおい話ささ、サヤ、場所は大丈夫か？」

「ええ、マスター。既に場所は把握しています。」

「よし。」と俺は笑顔で頷き、歩いて行った・・・だが次の瞬間俺の手には黒い銃（クウガのペガサスボウガンを黒くしたやつ）があり、後ろに二発撃っていた。

「刃、いきなりどうした？」

レヴアは不安になりつつも聞いた。

「いや、なんでもない《ダグバの気配に今はまさか・・・》。」

俺は表面上は笑顔にしていたが、内心では殺意が出てきていた。

とある廃工場の中に一人の男がいた。

「くそ、なんだったんだあれは。チャンスだったのに。」

と自分の計画が邪魔されたことに怒りを露にしていた。すると他に誰もいない筈なのに男以外の声が聞こえた。

「そうか、お前かさっきのは。」

「だ、誰だ。」

そこには何時もは紅の瞳が金色に変わっている刃が立っていた。

「き、貴様はさっき私の吸命牙を撃った人間か。」

「そうか、やつぱりあれは吸命牙だったか。大方、油断している所を狙ったんだろうが俺がいる限り無意味だな。」

刃は冷たく言い放った。

「だが、俺の仲間を不意打ちで狙った罪だ。生きて帰れると思うな。」

すると、男は、

「人間如きが ファンガイア に楯突いた事を後悔させてやる。」
と自身の姿を鷹に似た ホークファンガイア に変えた。

「ふ、人間か。殺気が大きすぎて解らないのか？まあ、良い。殺してやるよ。」

刃は腰に デイガイドライバー を付け何時もとは違うカードを

装填した。

「変身」

『KAMEN RIDE DEGAIDE END』

刃の姿は何時ものディガイドに金のラインが体中に入り金の装飾が付いた黒い翼が付いた破滅の力を持つ ディガイド・エンドフォーム（これからはEFを付けます）になっていた。

「なんだ、そのキバの様な姿は？まあ、いい殺してくれる。」

ホークファンガイアは一瞬怯んだが見かけだけだろと思うディガイド・EFに自身の体組織から作った剣を持って突っ込んでいった。だが、ディガイド・EFはそれを軽くよけ逆にサモンドライバーで切りつけた。

「が！？貴様あ、よくも。」

「遅いお前が悪い。」

ディガイド・EFはドライバーに一枚のカードを装填した。

『ATTACK RIDE DARK BLAST』

左腰に付いていたRB・プロトはガンモードになりながらディガイド・EFの手にいき、持ったと同時に撃ち放った。すると銃身が分裂しながら銃弾を放ち全てホークファンガイアに命中した。

「ぐううううう、ならば。」

すると、ホークファンガイアは背中にステンドグラス状の翼を生やし上空から攻撃を仕掛けた。

「翼か・・・」

ディガイド・EFは動じずにサモンドライバーを鎌状の形態である サイズモード に変え、カードを一枚装填した。

『ATTACK RIDE DARK SLASH』

電子音が聞こえると刀身を禍々しい光が包みこんだ。そして背中の翼を使い一気の距離を詰めホークファンガイアの翼を切り落とした。

「があああああああああ。」

「お前、もう死ね。」

ディガイド・EFは黒い紋章が描かれたカードをサモンドライブに装填した。

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DE GUIDE』

サモンドライブ・SFの刀身を黒い3Dカードが包み込みその刀身を大きくしていった。

「はああああああああああ。」

ホークファンガイアに デイメンションクラッシュ を叩き込み、悲鳴を上げさせる事もなくその身を消滅させた。後に残ったものはファンガイアの体を構成していたステンドグラス状の破片と何かのエネルギーだけだった。

「ライフエナジーか。まあ、足しにはなるだろう。」

ディガイド・EFは変身を解き、手をライフエナジーにかざした。すると刃の顔にステンドグラス状の紋様（渡がキバに変身するときに浮かぶやつ）が浮かび、ライフエナジーを吸収した。

「・・・戻るか。」

刃は右目の色を紅に戻しつつ、仲間の元へと戻っていった。

第14話『KU・敗北と破滅の力』（後書き）

（後書きコーナー）

サ「さて、今回から超古代の戦士 仮面ライダークウガ の物語です。」

レ「っていつか、最初から負けていたけど大丈夫なのか？」

サ「マスターの話ではあれはグロンギでも上位のゴ属最強の戦士らしいですよ、まあ勝つらしいので大丈夫なのは。」

レ「そ、そうか。それにしても刃の奴、私達から離れて何をしていたかと思ったらあんなことをしていたのか。」

サ「ええ、私はマスターと常にリンクしているのである程度は知っていました。」

レ「一人で無茶はして欲しくないよな。」

サ「そうですね。作者さん、感謝コーナーと次回予告を。」

斬「海人様、有難う御座います。今回は『KU・新たな力と破滅再び』だ。」

サ・レ・斬「それでは、次回で。」

第15話『KU・新たな力と破滅再び』（前書き）

クウガの物語二話目です。

今回はタイトル通り、刃が再びあの姿になります。
それでは、どうぞ。

第15話『KU・新たな力と破滅再び』

サヤ達と合流した俺は警視庁に向かっていた。理由は 仮面ライダー クウガ の正体である五代雄介がどうなったか知るためである。だが、案の定警視庁は先程出現していた未確認生命体第46号であるゴ・ガドル・バの対応で職員が走り回っていた。受付けで自分たちが五代雄介の知り合いだと言うと、受付けは杉田と言う刑事を紹介してくれた。

「雄介さんと言う人の知り合いだと言うだけで紹介してくるなんて慕われているんだな。」

飛翔が半ば啞然としていたが俺はそれをスルーして教えてくれた場所に向かった。そこには少し中年太りで髪が薄い真面目そうな人がいた。おそらくこの人が紹介された杉田さんのだろう。

「話は聞いている、私が杉田守道だ。君達が五代の知り合いか？もしかして、あのことも・・・」

松倉さんは周りを気にしながら聞いてきた。

「ええ、そうです。もちろん彼がクウガと言うのも知っていますよ。」

すると、杉田さんは安堵した表情になったがまたすぐにその表情を暗くした。

「そうか・・・もうニュースで知っていると思うが五代は重体で今関東医大病院に搬送された。今度の未確認はかなりの強敵らしい。」

「そうですか・・・なら僕達は病院に行きます。」

「すまないな、こんなことしかできなくて。」

杉田さんは申し訳なさそうな表情をしていた。」

「いえ、教えてくれて有難う御座います。それでは。」
俺達は警視庁を後にして関東医大病院に向かった。

関東医大病院についた俺達は通路である女性と会った。その女性は沢渡桜子と言う人でクウガである五代さんのサポートをしているらしい。

「じゃ、貴方達は五代君に助けられてその時クウガのことを知ったのね。」

俺は沢渡さんに嘘の説明をしていた、これなら五代さんが俺達のことを知らなくても大丈夫と思って考えたのだがレヴァと飛翔はお気に召さないようだ。

「ええ、それで杉田さんから五代さんがここに搬送されたと聞いたので見舞いにきたのですよ。」

沢渡さんは疑う事なく信じているようだ。まあ、五代さんがあんな性格だからな。

そして俺達は五代さんの病室に入ってしまった。そこには医者が計器を見ながら五代さんの病態を確認していた。すると扉を開けた音でこちらに気づいたようだ。

「沢渡さん、それにそちらは・・・？」

「初めまして、黒滅刃です。こっちはサヤでそっちは・・・」

「ヴァティ・レンです。」

「飛翔です。」

俺達は一人一人挨拶をしていった。

「ニュースを聞いてきつと此処だと思って。」

沢渡さんが代表して答えた。すると沢渡さんはベットに近づきながら、

「どうですか、五代くんは？」

心配そうに聞いた。医者は沢渡さんを見ながら、

「驚異的と言うか奇跡的な回復能力です。心配は要りませんよ。」

と答えた。すると沢渡さんは笑顔を作りながら、言った。

「だと思っていました。」

「え？」

医者は呆然とした。

「あの・・・お願いがあるんです。私のつて言うより五代君のなんですけど。」

沢渡さんは思い詰めながらも答えた。

「椿さんにもっと強くなれるようにして欲しいって。」

医者・椿秀一は暗い顔になりながら五代さんの顔を見た。椿さんは窓の所まで移動し外を見ていた。

「椿さんが悩むのも分かります。私だって反対しました、でも五代君どうしても強くならなきゃ駄目みたいで。」

椿さんは再び五代さんに顔を向け、俺達は黙って沢渡さんの言葉を聞いていた。

「五代君こんなことを言っていました。」

その言葉を聞き椿さんは沢渡さんに顔を向けた。

「みんなの笑顔を見たいからただ自分の出来ることをする・・・ただそれだけだよ。」って。」

椿さんは五代さんの顔を見ながら言った。

「だったら俺もただ俺が出来るだけの無理を。」

それを聞いた沢渡さんは安堵の表情になった、だがその時いきなり警報が鳴り響いた。どうやら五代さんの容態に変化があったようだ、そのまま五代さんは処置室へと運ばれていった。レヴァはそれを見ながら聞いてきた。

「大丈夫なのか、刃。このままって事はないよな。」

「五代さんを信じよう。あの人はこんなことで倒れたりはしない。」

処置室内ではある準備が進められていた。

「五代、強くなったお前の頑張り信じているぞ。」

そして、処置が始まった。

*

数十分後、椿さんによる五代さんの処置が終わり五代さんは元の部屋へと戻された。

話を聞く限りじゃ五代さんは自分で心臓を止めたらしい、

《ほんと、人間ってのは面白いな。》

そう思いながら俺は話を聞いていた。

その後、俺等はそれぞれバイクに乗って都内を回っていた。俺とサヤは《ディガイザー》にレヴアと飛翔は俺が風虎からあらかじめ受け取っていたディザンド専用バイク《ディザンダー》に乗って。理由は今回俺達が駆除する敵が《ファンガイア》だと俺がみんなに教えたため飛翔が、

「なら、出てくるのを待っていても始まらないしこっちも動こう。」

と提案したから、この様な状況になった。俺はディガイザーに付いている通信機能でレヴアに連絡をとっていた。

「そっちはどうだ？」

「駄目だ、痕跡すら残っていない。」

どうやら、ファンガイアが人を襲った時に残るガラス状の痕跡すらも残っていないらしい。

「当てが外れたか。」

「どうするんだ、刃？」

「そつだん、ピー・・・ん、通信か？」

すると、杉田さんをお願いして許可を貰っていた警察の無線から通信がはいってきた。

「全車に連絡！B9号の現在地は世田谷区セントラルアリーナ、周辺各局は特別な支持が無い限りアリーナの周囲半径三キロの住民の避難誘導にあたってください。」

「どうやら、マーキング弾を当てていたB9号が見つかったらしい。刃！」

「ああ、俺達もセントラルアリーナに向かうぞ。」
俺達はその場から移動を開始した。

数分後、セントラルアリーナで合流した俺達は松倉さん達と会った。

「どうもです、杉田さん。そちらの二人は初めてですね、黒滅刃です。」

「君達が松倉さんが言っていた、俺は一条薫、刑事だ。」

「俺は桜井剛、一条さんと同じ刑事です。」

その後、サヤとレヴァ、飛翔も挨拶をして俺は杉田さんに状況を聞いた。

「それで、杉田さん状況はどうなっているんですか？」

だが、それを一条さんが遮ってきた。

「待ってくれ、君達一般人が未確認に関わろうなんて「いや、彼等なら大丈夫だ。」？松倉さん。」

杉田さんは一条さんに声を遮るように言った。

「彼等は自分達で戦う力を持っている。ここは俺の顔に免じてくれ。」

すると一条さんは、

「分かりました。杉田さんを信じます。」

と言ってくれた。

「それで、どうだ中は？」

杉田さんは一条さんに聞いた。

「第46号とB9号の怪人態である47号が中で激しく争っているようです。」

「それって仲間割れってことですか？」

レヴァは疑問に思ったのか聞いていた。

「確証はないけど見た感じはそう見えた。」

と桜井さんが答えてくれた。

「そうか。」

杉田さんは少し焦りながら、

「こうなりや、科学研の神経断裂弾を待つしかないな。刃君すまな
いが周辺の警備を手伝ってくれないか？」

「了解しました。民間協力ということで手伝わせてもらいます。」
さあて、どうなるかな？

俺達は神経断裂弾がくるまで周辺の警備を手伝う事になった。

*

それから三十分たった頃、突然バイク音が聴こえてきた。
「着たか！」

どうやら神経断裂弾が届いたようだ。

「神経断裂弾、確かにお届けしました。」

持ってきた警官は一条さんに渡しながら言った。

「ご苦労さまです。」

「ご苦労さん。」

「ご苦労です。」

一条さん達は三者三様の返事をして受け取った。

一条さん達はすぐに拳銃に神経断裂弾を装填していた。

「五代さんがいない分これで片を付けるわけですね。」

桜井さんは弾を込めながら言った。

弾を込め終えた一条さん達が突入しようとする中から鳥の様な

怪人が飛び出して行ってしまった。

「今のは47号！杉田さん奴を見失わない内に仕留めて下さい。4
6号は俺が。」

「分かった、気をつけろよ。」

と言うと杉田さんは桜井さんを連れて行ってしまった。

「レヴァ、飛翔、お前達も杉田さん達をフォローしに行ってくれ。」

「分かった、行くぞ飛翔！」

「ああ、二人も気を付けて！」

俺は飛翔とレヴァを行かせ、俺とサヤは一条さんのサポートにまわることにした。

「一条さん！微力ながら手伝います。」

「分かった。だが、無茶はしないでくれよ。」

俺達はアリーナの中に突入していった。

暫く進んでいるとどうやら、アリーナ内の競技場に着いたようだ。周囲を警戒しながら歩いていると突然別の通路からガドルが出てきて一条さんを殴りつけてきた。

「一条さん！」

だが、一条さんは吹き飛ばされながらもガドルに向けて神経断裂弾を撃っていた。ガドルは予想外の攻撃にかなりのダメージを負ったらしく一条さんに近ずきながらも倒れてしまった。

「はあはあはあ。」

一条さんはどうやら無事のようなのだ。するとどこからか足音が聴こえてきた。聴こえてきた方に顔を向けるとそこにはバラのタトゥーがある女が出てきた。

「B1号！？」

するとB1号と言われた女はこんなことを言ってきた。

「リントも我々と等しき存在になりそうだな。」

その言葉を聞いた一条さんは拳銃をB1号に向け撃とうとした。だがその瞬間ガドルが起き上がり一条さんの首を締め出した。

「く、がああ。」

「一条さん！」

すると、ガドルは一条さんを客席から下に吹き飛ばし、剣を出し襲いかかろうとした。しかし、間一髪で何者かがバイクでガドルを

吹き飛ばした。その者はヘルメットを外し、一条さんに走りよって行った。

「一条さん！」

「五代……」

その者は五代雄介その人だった。五代さんはガドルを見ながら腹部に両手をかざした。するとそこから待機音を放ちながら変身ベルト アークル が出現した。

「変身」

五代さんがポーズを決めながら左腰のボタンを押すとその姿は超古代の戦士 仮面ライダークウガへと変身した、だがその姿は最初から ライジングマイティフォーム だった。

「五代。」

「ずっと金で行けそうです、早く逃げて下さい。」

「この近くの雑木林に追い込むといい、俺は周辺の避難を徹底させる。」

「お願いします。」

クウガはガドルを殴りつけながら移動していった。

「さて、俺達も行くぞ。」

「え？行くてマスター、さすがに危ないのでは？」

「爆発のことなら大丈夫だ、それに始末しなきゃいけない奴もいるようだしな。」

俺はある場所に殺気向けながら移動していった。

アリーナ周辺、警官達が避難をしているすぐ近くにその男はいた。「くそ、なんだあの餓鬼はこの俺様を見つけるなんて折角あの黒髪の小娘のライフエナジーを喰おうとしたのに。」

どうやらこの男はある少女を狙っていたようだ。

「ほんとファンガイアは卑怯な真似が好きなようだ。」

「！誰だ！」

すると建物の影から刃とサヤが現れた。

「っ！？てめらはさっきの。へっへっ獲物から来るなんて俺は運が
良い。」

どうやらこの男が狙っていたのはサヤのことだったらしい。

「さっきは油断したが今度こそはお前さん達のライフエナジー貰う
ぞ。」

すると男は顔の下半分にステンドグラスの紋様を浮かばせるとそ
の姿を カメレオンファンガイア に変えた。だが、刃は怯えずむ
しろ右眼の色を金色に変えドライバーを腰に付けていた。

「サヤ、この辺りに結界を張れ。この屑を潰す。」

サヤは言われた通りに結界を張り後ろに下がっていった。

「行くぞ、屑。」

そして刃はカードをドライバーに装填した。

「変身」

『K A M E N R I D E D E G A I D E E N D』

刃は再びその姿を破滅の姿 デイガイド・エンドフォーム に変
え、言い放った。

「さあ、裁きの時だ。」

戦闘が開始された。

戦いは終始デイガイド・EFが有利に進んでいった。序盤はカメ
レオンファンガイアがカメレオン特有の能力を使って姿を消し攻撃
を仕掛けていたが、

「へっどうだ俺の姿が見えないんじゃないや攻撃できまい。」

「・・・姿を周りの景色に同化させただけか。」

デイガイド・EFはそう言うとその足元に獣が四本の翼を広げた
様な黒い魔方阵が現れた（解る人はBLAZBLUEのラグナが
蒼の魔道書起動時の魔方阵を黒くしたものと思って下さい）。

「そこか。」

デイガイド・EFはサイズモードにしたサモンドライバーで何も

無い虚空を切り裂いた。するとそこには左腕が切り落とされたカメレオンファンガイアが姿を現した。

「があああああ、俺の腕がああああああ。」

「サヤを狙った罪だ、すぐに死ねると思うな。」

そこからは一方的だった。どんなにカメレオンファンガイアが姿を隠してもすぐに見つけ出されその体はサモンドライバーにより切り裂かれていった。さらに逃げようにもサヤの結界で逃げることも出来ず、カメレオンファンガイアには恐怖しかなかった。

『ATTACK RIDE DARK SLASH』

デイガイド・EFは斬撃を強化したサモンドライバーでどんどんカメレオンファンガイアの体を切り裂き左腕も切り落とした。

『ATTACK RIDE ZANBATTOSO-DO』

さらにデイガイド・EFはその手にザンバットソード（ザンバットバットが付いていない状態）を持ち構えた。それを見たカメレオンファンガイアが遂に心が折れ投降してきた。

「た、頼む。さっきまでは俺が悪かった、もうあんた達は狙わないし人間も襲わないだから許してくれ。」

それを聞いたデイガイド・EFはザンバットソードの切っ先を下に向け、

「そうか……。」

と言った。それを聞いたカクレオンファンガイアは内心でほくそ笑んでいた。

《くつくつく、これでこいつから逃げてしまえばこっちの物だ。》

だが、次の瞬間その思いは虚しく散った。

「だが、お前の判決は死だけだ。」

『FINAL ATTACK RIDE DARK KI・KI・KI・KIVA』

デイガイド・EFはドライバーに黒い紋章が描かれたカードを装填した。すると、ザンバットソードの刀身は黒くなっていきそのまま切りつけ ファイナルザンバット斬 を繰り出した。カクレオン

ファンガイアは悲鳴を上げる間の無く体をステンドグラス状にして粉々に砕け散った。

ディガイドは変身を解き、刃の姿に戻り前と同じ様にライフエナジーを吸収した。だがそれでは物足りなかったのかステンドグラスの破片を踏みつけようとした。しかし、そこにサヤが静止の声を放ちながら抱き着いてきた。

「マスター！そこまでにしてください。もうこれ以上は良いです！」すると、刃の右眼は元の紅に戻った。

「サヤ、そうだよなこれ以上する必要は無いな。ありがとう止めてくれて。」

刃はサヤの頭を撫でながら礼を言った。因みにこの時サヤの顔は下を向いていたので顔が赤くなっていることに刃は気づいていなかった。

刃がサヤの頭をなでていると突然アリーナ近くの雑木林から辺りが明るくなるくらい火柱が上がっていた。

「遂に アメイジング ままでいったか。これで……。」

「マスター。」

サヤは心配そうに刃を見上げた。それに気づいた刃は心配するなと言うように頭を撫でた。

「これで遂に アルティメット の鍵が外れた。後は五代さんがどのような選択をするかだ。」

刃はそう呟くとサヤと共にその場から移動していった。

第15話『KU・新たな力と破滅再び』（後書き）

（後書きコーナー）

サ「今回はマスターがなった　ディガイド・エンドフォーム　についてです。」

レ「ほんと、なんなんだあの姿は？他のライダーの武器をカメンライドしないで使っていたようだが。」

サ「そのところは作者さんにお任せします。」

斬「あいよ、ほれ。」

仮面ライダーディガイド　エンドフォーム

残虐的になった刃が変身した時の姿。元々のディガイドの姿に金のラインが入り金の装飾が付いた黒い翼を持つ。ディケイド激状態にあたる姿。この姿ではダークライダーの武器や能力をKRしなく使える。『ATTACK　RIDE』には全て最初に『Dark』がつくようになる。

『サモンドライバー』に鎌の『サイズ・モード』が追加される。

単体での必殺技は『ディメンションブレイク』。『サイズ・モード』の必殺技は『ディメンションクラッシュ』。

変身音は『KAMEN　RIDE　DEGAIDE　END』

斬「って言う感じかな。ザンバットソードが使えたのはあくまで過去のキングが使っていたからと言う位置づけだ。それと刃が残虐的で変身すると必ずっていうほどの姿になってしまったため制御できているわけじゃないぞ。」

レ「刃も大変なんだな、感謝コーナーと次回予告。」

斬「海人様、有り難う御座います。次回はクウガ編も終わりまで持っていく・・・かな？」

サ「はつきりしないですね。」

斬「こっちも色々事情があるからな。」

サ・レ・斬「それでは、次回で。」

第16話『KU・幸せな時間』（前書き）

第16話、です。

すみません、これ一話では最後までいけなかったので分けて投稿します。

それでは、どうぞ。

第16話『KU・幸せな時間』

アリーナの駐車場

そこに一条さんとレヴァ達はいた。どうやらレヴァ達の方にはファンガイアは現れず第47号も杉田さんと桜井さんが神経断裂弾でしっかりと仕留めたようだ。

「一条さん、そちらは大丈夫でしたか。」

「刃じゃないか。何処に行っていた心配していたんだぞ。」

「そ、それよりも、一条さんはここで何を？」

俺は取り敢えずファンガイアと俺達の事情を隠すことにして話をそらした。

「何って五代を待っているのさ。」

すると、バイク音が聴こえてきた。どうやら五代さんがバイクビートチェイサーに乗ってきたらしい。

五代さんはヘルメットを取ると一条さんにサムズアップをした。すると一条さんも返して二人は笑いあっていた。そんなとき五代さんは俺達のこと気づいたようだ。

「君は確かあのアリーナの中に居た・・・。」

「久しぶりですね、黒滅刃です。でも直接話すのは今回が初めてですね。」

「五代、どうやら彼等は前にお前に助けてもらった人達のようにな今回は手伝って貰ったんだ。」

「そうだったんですか、改めて五代雄輔です。」

「そうだ、刃。君達はどこか宿は決まっているのか？もし、決まっていなかったら杉田さんが警視庁で寝泊りしてくれって言っているんだが。」

警視庁か。まあ情報も入るだろうし、寝泊りするならうつてっけだな。

「分かりました。ありがたくその言葉に甘えさせてもらいます。」
こうして俺達は警視庁で厄介になることになった。

その日の夜、五代さんを含め俺達は喫茶ポレポレに居た。なんでも警察の捜査協力をしてくれた御礼として五代さんが手料理を振舞ってくれるそうだ。

「これは、凄いな。」

俺は目の前にある料理の数々に見とれていた。俺自身、料理の自信はかなりあるほうだったが五代さんもなかなかのもののようにうだ。

「これは、隠し味にあれを使っているのかな？ いや、それとも・・・」

飛翔にいたっては料理の味を盗もうと必死になっている。

「どんどん、食べてください。おかわりはまだあるので。」

五代さんも俺達に料理が好評のようで嬉しいようだ。他にも喫茶ポレポレのマスターである飾玉三郎、通称おやっさんや五代さんの妹である五代みのりさん、おやっさんの姪である朝日奈奈々さんも色々とよくしてくれた。特におやっさんにいたっては俺がコーヒーが好きだと知って俺に喫茶店のマスターであることもあって美味しいコーヒーの入れ方を教えてくれたりもしてくれた。

そして、そんな時間も過ぎそろそろ警視庁に帰ろうとした時飛翔が五代さんにある事を頼んでいた。

「五代さん、どうか俺に料理を教えてください！」

どうやら飛翔は五代さんの料理に感銘を受け詳しく教えて貰いなくなったようだ。すると五代さんは飛翔に笑いかけながら、

「ああ、良いよ。それじゃ、明日またここに来てよ。その時にでも教えて上げるからさ。」

と言った。

そんなこんなで俺達は警視庁に戻って行つた。暫く進んでいると不意にレヴァが話しかけてきた。

「なあ、なんでファンガイアはこんなに出てこないんだ？ 痕跡までないなんておかしすぎやしないか？」

確かにそれは俺も考えた、しかしファンガイアの多くが単独で行動しているのでこれはその為だと考えていた。それをレヴァに説明すると不に落ちていない感じだったが納得してくれた。それに安心していた俺はレヴァの呟いた言葉に気付かないでいた。

「……それだけが理由じゃない気がするがな。」

ある廃工場

ここには四人の男達が集まって話をしていた。そのうち三人は執事服を着た男で、四人目は貴族が着る様な服に黒いマントを羽織っていた。執事服を着た三人の男の一人が自分の主である者に報告していた。

「伯爵様、どうやら配下のファンガイアはこの男にたおされたようです。」

男は一枚の写真を伯爵に渡した。その写真には刃の姿が写っていた。

「ほう、この男が我が配下を殺したのか。これだけだはそこら辺の子供にみえるがな。」

伯爵は嘲笑っていた。

「しかし、事実です伯爵様。この男は キバの鎧 に似たものを装着して戦っていました。」

「それが本当なら少し厄介だな……ふむではこの我も動くとするか。我自らがこの男を血祭りにあげようおぞ。」

その夜、廃工場には笑い声が満ちていた。

警視庁

警視庁に着いた俺達は受付けに案内してもらって警察のお偉いさんが泊まるような場所に案内された。どうやら杉田さんの計らいだそう。まあここまでは良かった、問題はここからだった案内されたのは二部屋だった。そう問題とは部屋分けのことだ。俺達は四人つまり二人で一部屋の計算だ。当然俺は飛翔と同じ部屋になろうとしたがサヤとレヴアの二人はそれを許さなかった。二人からしたら俺と一緒に良いとのことだった。二人の威圧に負けそうになった俺は飛翔に助けを求めたが既に飛翔は二人に買収されているらしく無駄に終わってしまった。つと言う訳で現在俺は二人と一緒に部屋に居る。最初はせめて一人だけと言ったが、サヤとレヴアが一気に喧嘩に発展しそうな雰囲気になってしまったので今にいたる。まあ、当の二人の機嫌が良いのは不幸中の幸いだろう。だが寝る前になって再び問題が起こった。

「なあ、なんで二人してそんな格好なんだ？」

「そんな事は良いだろ。それより早く真ん中に来てくれこっちは寒くてしかたがないんだ、なあサヤ。」

「そうですよ、マスター。早く来てください。」

そんなに寒いなら服着ろよ。此处、十二月だぞ。

そう、この二人の格好は二人して下着姿、しかも、十二月半ばと言つ冬真つ盛りの季節の中でだ。とその時俺は確信した。ここで言うておくが飛翔がいる部屋はこの部屋の向かい側だ。飛翔としては明日の事もあるからもう寝てるだろう。更にこの部屋は警視庁の奥にある為滅多に言うか人が来ない。ここまで考えれば分かる、この二人は俺を獣にする気だ。まあ、元々『アンデット 皇帝の下僕』に化け物である俺が今更獣て言うのはおかしいかもしれないが表現としたら合っているだろう。まあ、レヴアに関してはともかくサヤまでとはある程度分かっていた分驚きは少ないが。はあ、よりによって今か

よ。まあ、グロンギの方はともかくファンガイアが動くかもしれないのにな。俺は二人の意思を聴くために最終確認をした。

「二人とも、本当に良いのか？俺は確かにお前ら二人の事は好きだし愛している。だが・・・俺は化け物なんだぞ。」

最後は間を開けながらも俺は言った。

「ああ、私の意思は前に言ったときと変わらん。それに・・・」

「マスターなら私達二人を平等に愛せると信じていますから。」

俺は二人の答えを聞くと同時に真ん中に行き、二人の唇にキスをした。

「・・・覚悟しろよ。」

「っ／＼はい。」

この夜が俺達三人にとって最高の夜になったのは言うまでもない。だが、幸せな時は突然の終わりを迎えた・・・。

*

五日後、その日、俺は一人でデイガイザーに乗って街をブラブラしていた。飛翔はグロンギの動きがない為ポレポレにいる五代さんに料理を教わりに、サヤとレヴァの二人は警視庁の部屋で待機していると言っていた為、俺一人、外で行動していると言うわけだ。暫くデイガイザーを走らせていると通りかかった公園から突然悲鳴が聴こえてきた。

「!？」

俺はすぐさまデイガイザーから降り、公園に走っていきその光景を目撃した。それは知らない者が見たら異質と言える光景だろうな。ぜなら、何かに襲われたのだろう子供から年寄りまで十数人が体の色素が抜けたかのように透明になって倒れていたのだから。これだけの大規模を隠せないと思った俺はすぐさまデイガイザーに戻り、通信機能を使って警視庁に連絡した。

「警視庁捜査本部に連絡、こちらは民間協力者の黒滅刃。都内の公

園にて謎の未確認に襲われた十数人を見つけた。至急、応援と杉田さん達を頼む。」

俺は取り敢えず死体を動かさないように杉田さん達が来るのを待った。

十数分後、杉田さん達が応援の警官と共にやって来た。サヤモレヴァと一緒にディザンダーに乗り来ていた。どうやら、飛翔と五代さんは少し遅れるらしい。

「刃、これは一体どういうことだ？」

「詳しいことは後で話す。」

俺は聞いてきたレヴァを落ち着かせ、杉田さんに話をした。すると、一人の刑事が死体に触ろうとしていた。

「これは、一体どうなってるのやら。」

「待て、それに触るな。」

俺は大声で止めようとしたが既に遅く、刑事が触った死体は崩れてしまった。

「!？」

どうやら、杉田さんと桜井さんは啞然として声が出ないようだ。それはそうだが、たださえ死体が透明なだけで異様なのにそれが触っただけで崩れてしまっただけは何も言えなくなるだろ。だが一条さんだけは違った。一条さんは俺を凝視していたのだ。多分、さっきの一言で分かったのだらう。俺が今回の未確認の事を知っていると言う事を。一条さんは俺に聞いてきた。

「刃、君は今回の未確認の事を知っているな。」

「え、それはどういうことですか。」

桜井さんもこっちを見てきた。

「さっき、彼はあの刑事が触る前に「触るな」と言っていた。と言う事は先に触って分かったのか、過去に同じ事を体験しているのどっちかになる。だが、先に触っていたのなら会った時に言う筈

だ。だがそれが無かったから後者だと思っている。違つかない？」

「本当に一条さんは鋭いですね。」

俺は観念して話すことにした。まあ、元々話す予定だったからまだ良かったが。

俺は一条さんの鋭さに舌を巻いた。

「説明してくれないか？」

「ええ、しかし五代さんと飛翔が来てからです。」

それから、約十分後五代さんは ビートチェイサー に乗ってきた。どうやら飛翔は後ろに乗せて貰っていたようだ。

「すみません、遅れました。一体何があったって言うんで・・・す・・・か？」

どうやら五代さんは周囲に流れていた気まずい雰囲気気づいたようだ。

「いや、状況は俺が話す。」

一条さんは五代さんと飛翔に今回起こったことを説明していた。どうやら飛翔は以前行っただけで言っていた キバの世界 で同じ現象を見ていたようだ。俺の方を見ながら話すべきか悩んでいるのが分かった。

「それで今回の未確認についてだが刃から説明を貰う。」

一条さんがこっちを見てきたので俺は話すことにした。

「まず、今回の未確認ですが我々が知っている通りなら ファンガイア と言う敵です。」

「ファン・ガイア？」

「ええ、グロンギとは違う種族の敵で吸血鬼の元になった奴等です。奴等は人間のライフエナジー・・・まあ生命力と言えば良いですが、それを狙う奴等の総称です。」

「つまりそのライフエナジーを吸われたからこの犠牲者達はこの様

な状態になっていると?」

「ライフエナジーを吸われた人間は一様にこのように透明な状態になってしまいます。」

「それで君達は?」

「我々はファンガイアを倒すためにここにきました。その途中で未確認に襲われたところを五代さんに助けてもらったと言っわけです。」

「そうだったのか。」

杉田さんは難しい顔をしながら納得してくれた。まあ、嘘は言っていないしな。グロンギに襲われた以外はだが。

「って言うことは君達にも闘う力がある、ええ、ありますよ。クウガとは別ものですが。」・・だよね。」

五代さんはなかなか鋭いところを突いてくるな。

「よし、君達の事情は分かった。引き続き民間協力者と言うことで協力しよう。」

「ええ、有難う御座います。ファンガイアはステンドグラス状の体をしているので未確認とは簡単に見分けが付くと思いますよ。」

「よし、では我々は一端署に戻って今後の計画を建てよう。」

さてダグバが出てくるまでに終われば良いが。

俺達は警視庁に戻っていった。

第16話『KU・幸せな時間』（後書き）

（後書きコーナー）

サ「と言つ訳で今回は杉田さん達にファンガイアのことを話しましたね。」

レ「あの状況じゃしかたないだろ、刃も苦渋の選択だっただろうさ。」

サ「まあ、私達は晴れてマスターと結ばれることができたので良いのですが。」

レ「そうだな、苦労したかいがあつたな。よし気分が良いから今日はここで終わろう。」

サ「そうですね、作者がいないこの隙に終わりましたよ。」

サ・レ「それでは。」

斬「まったく、勝手に帰りやがって後片付けするこつちの身にもなれよな。」

斬「海人様、感想有難う御座います。次回は『KU・敵の正体と笑顔を守る者』です。」

斬「それでは、次回で。」

第17話『KU・敵の正体と笑顔を護る者』（前書き）

遅くなりましたが、やっとで17話投稿です。

今回でクウガ編は終わりです。

それでは、どうぞ。

第17話『KU・敵の正体と笑顔を護る者』

あれから、警視庁に戻った俺達は杉田さんが他の捜査本部の人達に事情を話している傍ら今後のことを話していた。

「敵の狙いは多分俺でしょう。」

俺が言つとみんなは驚きながらも質問してきた。

「理由はあるのか？」

聞いてきたレヴァに微笑みながら俺は言った。

「実質今までファンガイアと接触して倒していたのが俺だ。つまりもし敵が複数だったら俺の情報が漏れている可能性が高い。」

まあ、今までの二戦は遠くから妙な視線があったしな。

「だとしても、敵が何処に潜んでいるのか解らないからしな。」

「そこなんですよね。」

俺は一条さんに賛成しながら考えていた。確かに敵の狙いが分かっても敵が何処にいてどう動くのか解らなければ意味がないからな。

「それでも、全力を尽くすだけですよ。」

五代さんのこの言葉を最後に今日の会議は終わった。

あれから二日たった時、動きがあった。なんと市街地に三体の未確認が出現し人々を襲っているとのことだ。しかも、襲われた人の体が透明になったり、未確認の体がステンドグラス状の光沢を放っているという報告も入ってきた。

「遂に動いたか。」

俺達はすぐにそれぞれのバイクに乗り込み、現場へと向かった。

「人間共よ、我等が糧となるがいい。」

蜥蜴をふつとうさせるリザードファンガイアが辺りにいる人に吸命牙を放っていた。さらにその近くでは鋏形をふつとうさせるスタッグファンガイアと虎をふつとうさせるタイガーファンガイアが同じようにライフエナジーを吸収していた。

「ふう、これだけのライフエナジーがあれば。」

とタイガーファンガイアが言っていると突然バイク音が聴こえてきた。

「来たか！」

するとそれぞれのバイクに乗り刃達がその場に到着した。

「ファンガイア！てめえらタダで済むと思うなよ。」

「いいだろ、来い！我らが相手をしてやろう。」

すると何処からか枢が出てきた。

「さあ、蘇れ我らが同胞よ。」

タイガーファンガイアが枢に手をかけると枢にライフエナジーが集まり一つの形を作った。

「あれは・・・。」

「ファンガイアの再生術か。」

レヴアの呟きに刃が答えた。集まったライフエナジーはホークファンガイアへと変貌した。

「ぐおおおおおお。」

たかだか、雑魚を再生させた程度で、今の俺を止められると思うな。

「行くぞみんな。」

俺はドライバーを腰に付け、カードを出しながら言った。

「ああ。」

「分かってるよ、刃さん。」

「ええ。」

上からレヴア、飛翔、五代さんの順で答え、それぞれ変身の準備をした。

「……変身」……

『KAMEN RIDE DEGAIDE』『KAMEN RIDE DEZANDE』『KAMEN RIDE DECADE』

刃はデイガイド、レヴアはデザインド、飛翔はデイケイド、五代さんはクウガに変身した。

「刃！？その姿は！？」

「五代さん、今は戦いに集中してくれ。」

五代さんは俺達に変身したことに驚いたが俺が諭すとそれ以上何も言わないで戦いに集中しだした。

「飛翔は蜥蜴を、五代さんは鋏形を、レヴアは再生した鷹を、俺は虎の相手をする。……行くぞ。」

俺達はそれぞれの敵に駆け出していった。

「我らの計画邪魔はさせんぞ。」

俺は刃さんに言われ、蜥蜴……リザードファンガイアと戦っているが敵はなかなか手強かった。

リザードファンガイアは体から剣を出し匠な剣術でデイケイドに攻撃していった。上段切りからの返す形で下段切り、突きからの払い切りと流れるような剣術で追い詰めていった。だがすぐにデイケイドもカードを使い対抗していった。

「ファンガイアで剣使いならこいつだ。」

『FORM RIDE KIVA GARULU』

デイケイドはDキバ・ガルルフォーム（ここからはGFと表記）

になると同時にガルルセイバーで反撃をしていった。

「キバだと!？」

「くらえ。」

「ぐ、小癩な。」

リザードファンガイアはすぐに切りかかっていったがDキバ・G Fになったことで脚力が上がり攻撃を回避する余裕ができてきた。

「くそ、ちょこまかと。」

「そこだ。」

Dキバ・GFは小刻みに動きリザードファンガイアを翻弄し冷静さが無くなってきたところを攻撃していった。

「ぐ、舐めるなあああああ。」

「!（動きが短調になったな、これなら。）決める。」

Dキバ・GFは勝負を決める為、カードを装填した。

『FINAL ATTACK RIDE KI・KI・KI・KI
VA』

電子音が鳴り響くと周囲は満月が浮かぶ夜になった。Dキバ・GFはガルルセイバーを口に銜えて飛び掛り一刀両断する。ガルル・ハウリングスラッシュを繰り出し、リザードファンガイアを一刀両断した。

「ああああああああ。」

リザードファンガイアはステンドグラス状になり、爆発した。

「ぐおおおおおお。」

「くそ、理性が無いのか?こいつは。」

再生ファンガイアである鷹・・・ホークファンガイアと戦っているが理性があるとは思えない攻撃のせいで苦戦している。くそ、聞いていないぞ刃。後でとっちめてやる。

そんな事を考えながらディザンドは戦っていた。だがやはり一人

では苦勞する為か仲間も呼ぶことにした。

「こいつで。」

『KAMEN RIDE IXA』

デザインズの目の前に複数の虚像が出現しそれが重なると白き聖職者の様な 仮面ライダーイクサ が召喚された。

「その命、神に返しなさい。」

イクサはそう言うとともに顔面部のシールドを開け、イクサ・バーストモード（ここからはBと表記）になり固有武器であるイクサカリバーをカリバーモードにしてホークファンガイアに上段切りを放った。更に怯んだところをデザインズとイクサが同時に切り裂き追加ダメージを与えた。

「ぐおおおおおおおおお。」

それに怒ったのかホークファンガイアは今までより一際大きく叫び、背中にステンドグラス状の翼を生やし上空から爆発する羽根を飛ばし攻撃してきた。これによりデザインズとイクサは吹き飛ばされたがすぐに立ち上がった。

「そっちがそれならこっちはこれだ。」

デザインズは一枚のカードを装填した。

『ATTACK RIDE SONIC BOOM』

デザインズがドライバーを振ると斬撃が飛び、ホークファンガイアを切り裂いた。更に、

「落ちなさい。」

イクサがイクサカリバーをガンモードに戻し、援護射撃を行ったことでホークファンガイアは撃ち落とされた。その隙を逃さずデザインズは二枚のカードを装填した。

『ATTACK RIDE CROSS ATTACK』『FIN
AL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DEZANDE』

イクサは右腰から金色のフェッスルを取り出し、ベルトに差し読み込めた。

『I・X・A・C A・L I・B E R・R・I・S E・U・P』

電子音が鳴るとイクサはイクサカリバーを顔の近くまで持っていた。すると眩いフラッシュがホークファンガイアの目を潰した。

「がああああああ。」

目を潰され悲鳴を上げているホークファンガイアにデザインドは3Dカードが刀身を覆って行き完全に覆われると光を纏った刀身になったドライバーで切り裂く。デイメンシヨンスラッシュを、イクサは胸の部分に紋章を浮かべながら光を纏ったイクサカリバーで一刀両断する。イクサ・ジャツジメントを同時に放った。それを喰らったホークファンガイアは悲鳴を上げることもなく、体をステンドグラス状にし爆発した。

「さあ来い。古の戦士。クウガよ。」

スタッグファンガイアはクウガに向けて言い放った。

「何故そのことを？」

クウガはファンガイアが自分のことを知っていることに驚いているようだ。

「我々はそれだけ長く存在する。唯それだけだ。」

スタッグファンガイアはそう言うと言が歪曲している剣を二振りだし、クウガへと切りかかった。クウガは回避しているが敵の攻撃が激しく反撃ができない状況が続いた。

「く、それなら。」

すると、クウガの体に電撃が走っていった。

「超変身」

クウガは金の紫の力と呼んでいるライジングタイタンフォーム（以後RTFと表記）に超変身した。

「姿が変わった如きで。」

スタッグファンガイアは動じずに切りかかるがクウガ・RTFの防御力が予想よりも高く逆に剣を一本奪われてしまった。すると、

奪われた剣が目の前でライジングタイタンソードに変えられ反撃を受けた。

「ぐ。」

「よし、これならいける。」

クウガ・R T Fは高い防御力と攻撃力でどんどんスタッグファンガイアを追い詰めていった。

「まだまだ、我はいける。」

と言うとスタッグファンガイアの体が突然消えた。次の瞬間クウガの体に鋭い衝撃が何回を走った。

「うあああああああ。」

スタッグファンガイアは離れた場所に出現した。

「ふ、その姿。防御が硬いようだが早すぎる攻撃には弱いようだな。」

「ぐ、くそ。」

次に今の攻撃を受けたらやられる。でも、ここで負けるわけにはすると、クウガの頭にある考えがよぎった。

そうか、これなら。

すると、クウガは立ち上がりその姿を変えた。

「超変身」

クウガは金の緑の力である ライジングペガサスフォーム（R P Fと表記）に超変身し、その場で瞑想し始めた。それを好機と見たのかスタッグファンガイアは再び高速移動をし、止めを刺そうとした。

「これで終わりだー。」

「！そこだ。」

クウガ・R P Fは持っていたライジングペガサスボウガンで何もない虚空に ライジングブラストペガサス を撃った。すると、そこからスタッグファンガイアが胸にクウガの紋章を浮かび上がらせ出現した。

「み、見事だ。」

スタッグファンガイアは最後にそう言うと静かにその身をステンドグラス状にして爆発した。

「さすが、我らが同胞を倒しただけあるな。」

俺はタイガーファンガイアと組合っていた。やはり俺が睨んだと
うり再生術が使えるだけあって上位のファンガイアのようなだ。

「・・・・・・・・・・」

デイガイドは無言を通しつつ、タイガーファンガイアを押し返した。

「ふむ、無言か。ならこれでどうかな？」

タイガーファンガイアは押し返されたまま、距離を取り再び再生術を行使しようとした。しかし、腕を上げた瞬間いきなりタイガーファンガイアの右腕が燃えた。

「がぁ、何！」

すると、デイガイドの足元にはカメレオンファンガイアの時に使った黒い魔方阵が浮かんでいた。

「何！まさか、私の術を妨害しているのか。」

デイガイドはそれにも答えずRB・プロトをソードモードにして切りかかった。しかし、タイガーファンガイアも両腕の爪でむかえ打ってきた。

「例え術が使えなくても。」

しかし、デイガイドは冷静にカードを一枚ドライバーに装填した。
ATTACK RIDE SLASH

電子音が鳴り響くとRB・プロトの刀身は分裂し、タイガーファンガイアを襲った。

「ぐおおおおおおおおお。」

そのまま、デイガイドは何度も何度も切って行った。まるで、目

障りだとも言う様に。

「があああああ、人間風情があああああ。」

タイガーファンガイアは激情しながら突っ込んできたがディガイドは除け背中を蹴って吹き飛ばした。

「……………これで、終わりだ。」

ディガイドは止めを刺す為に一枚のカードを装填した。

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DE
GAIDE』

ディガイドの目の前に3Dカードが十枚出現した。

「はあああああああ。」

ディガイドは上空にジャンプし、ディメンションキックを放った。それを喰らったタイガーファンガイアはそのまま体を爆発させ消滅した。

「……………刃（さん）……………」
マスタ

どうやら他のみんなもそれぞれのファンガイアを倒したらしく、集まってきた。これで一安心だな。

だが、そう思った矢先新たな声が響いた。

「どうやら私の配下は全滅したようだな。」

「……………!?……………」

一斉に声の方向に向くとそこにはフードで顔を隠しながらマントを付けた男？がいた。

「……………お前は誰だ。」

刃が警戒しながら聞いた。

「我か？我は水妖^{すいよう}。偉大なるファンガイア族の伯爵なるものよ。」

「伯爵だと？貴様何の目的でこんなことを。」

刃はなお警戒しながら聞いた。

「ふん、そんなもの。人間を殺す為に決まっておろう。」

「貴様！」

刃が声を荒らげたが次に水妖伯爵が言った言葉によって全てが静まり返った。

「何を言っている。貴様こそ何故同じファンガイアの手から人間を護る？」

「……！？」

クウガは愚か応援に来ていた杉田さん、一条さん、桜井さんまで愕然としていた。

「刃がファンガイアだと。」

「あれだけの魔皇力を行使していたのだ。嘘とは言わせんぞ。」

水妖伯爵は畳み掛ける様に言った。

「刃……本当なのか。」

「……。。。。。。。」

デイガイドはその言葉に対して無言だった。

「ふ。」

すると、水妖伯爵は突然不意を撃って攻撃してきた。

「！？五代さん危ない。」

デイガイドはクウガを庇いその攻撃を受けた。するとデイガイドの変身が解け、刃は突然苦しみだした。

「ぐ、ぐがああああああああああ。」

「刃！？貴様、刃に何をした！」

デイザンドは殺気を出しながら水妖伯爵を睨みつけた。

「ふむ、まあ教えてやろう。そいつが喰らったのは極限まで闘争本能を掻き立てる魔術攻撃だ。本来ならそのクウガに当てて 究極の闇 の存在にしようと思っていたがまさか庇うとはな。」

「究極の……闇。」

クウガは思い当たるのか呟いていた。

「ぐうううう、がああああああ。」

刃はかなり影響を受けているのか右眼が金色に染まり、顔にはステンドグラスの模様が浮き出ていた。

「ははははは、まだ自我を失わないその精神力は褒めてやるがそろそろ幕引きだ。」

水妖伯爵が腕を高く上げると先ほど倒したファンガイアの死体であるステンドグラスとライフエナジーが集まってきた。

「何をする気だ？」

「こうするのさ。はっ！」

ライフエナジーが一つの固まりになったかと思うとなんと金色のサバトへと変貌した。

「な、なんてデカさだ。」

「一条さん、早く避難を。」

クウガは啞然としている一条達に避難を促した。

「五代、お前は？」

「ここで、みんなと食い止めます。」

「く、分かった。無事に戻って来いよ。」

「はい。」

一条は杉田達を連れて避難していった。すると、それを待っていたかのようにサバトはクウガ達を襲いかかったきた。

「くくくああああああ。」

クウガ達は吹き飛ばされてしまったが、すぐに体勢を立て直し行動を開始した。

「超変身」

マイティフォームに戻っていたクウガは再びライジングペガサスフォームに超変身しライジングペガサスボウガンで撃っていた。

『ATTACK RIDE BLAST』『ATTACK RIDE SONIC BOOM』

デイケイドとディザンドはライドブッカーとドライバーを使い遠距離攻撃をしていた。しかし、サバトはそんな攻撃を物ともせず反撃してきた。

「やれ、サバトよ。奴らを潰してしまえ。」

水妖伯爵はサバトの頭の上から指示を出した。するとサバトは体

に生えている鎌のような腕を使って攻撃してきた。

「く、どうすれば。」

クウガはなんとか戦況を立て直そうとしたが、そこに水妖伯爵の声がきた。

「もう諦めろ、ましてや戦いに意味を持つことが出来ない貴様にこの状況で何ができる？」

「違う、俺には。」

クウガは否定しようとしたが容赦なく言葉は続いた。

「人を助ける為か？その程度では何の意味も無い。だからこそ弱いのだよ。」

「く……。」

クウガは何も言えなくなっていたが、その時ディケイドは言葉を紡いだ。

「そんな訳無い。」

「ああん。」

「俺は何時も人々の笑顔の為に戦っている人を知っている。例えばそれが自分を傷つけることだとしてもその人は誰かの笑顔を守る為だったらなんだって出来る。そしてそれを支えてくれる人々がいるからこそその人は戦っていけるんだ。」

「はっ！」

クウガはディケイドを見、ディケイドはそれに頷いた。

「貴様！一体何者だ。」

水妖伯爵はディケイドを睨みながらいった。

「俺は自分探しの旅をする、通りすがりの仮面ライダーだ。覚えてなくていい！！」

「く、サバト。奴らを踏みつぶせ。」

サバトはディケイド達をふみ潰そうとしたが間一髪で除け、距離を取った。

「飛翔ありがとう。」

「いえ、礼なんて。しかし、あの巨体どうすれば？」

ディケイドはサバトを見上げながら言った。すると後ろから声が聞こえてきた。

「あの水妖伯爵がいる部分を狙え。」

「……!？」

後ろを見ると髪の一房の色が黒に変わり、左眼が翡翠の色になっている刃が居た。

「刃、大丈夫なのか？」

レヴアは刃を心配して聞いた。

「ああ、サヤとユニゾンしているからな。それに俺だけ休んでいる訳にもいかないさ。」

刃はドライバーを腰に付けた。

「変身」

『KAMEN RIDE DEGAIDE』

刃がディガイドに変身すると、ディケイドとディガイドのライドブッカーからカードが出てきた。

「刃さんカードが！」

「ああ、飛翔はそれを使って準備している。レヴア、五代さん俺達は遠距離攻撃で行くぞ。」

ディガイドはサモンドライバーにカードをディザンドもドライバーにカードをクウガ・RPFはボウガンの後ろの部分を引いていた。

『FINAL ATTACK RODE DE・DE・DE
GAIDE』 『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・
DE・DEZANDE』

「……はああああああ（おりゃああああああ）……」

ディガイドは デイメンションシート を、ディザンドは デイメンションブーム を、クウガ・RPFは ライジングブラストペガサス を同時に撃ち込み命中することに成功した。

「何!？ぐああああああ。」

水妖伯爵は落ち、サバトは制御を失ったことにより暴れたした。

「飛翔、頼んだぞ。」

「ええ。変身」

ディケイドはカードをドライバーに装填した。

『K A M E N R I D E K U U G A 』

ディケイドはDクウガに変身した。

「俺と同じクウガに。」

クウガはディケイドが自分と同じクウガに変身したことに驚いていた。

「見てて下さい、五代さん。これがクウガの真の力です。」

さらにDクウガはカードを一枚ドライバーに装填した。

『F I N A L K A M E N R I D E K U U G A U L T I M A T E 』

Dクウガはその姿を 究極の闇 の異名を持つDクウガ・アルティメットフォーム（AFと表記）・レッドアイに変えた。

「それが・・・」

「ええ、クウガの最強の姿です。」

「急げ、刃。」

ディガイドが急かすとDクウガ・AFはカードを装填した。

『F I N A L A T T A C K R I D E K U ・ K U ・ K U ・ K U U G A 』

電子音が鳴り響くとDクウガ・AFはサバトに走りながらジャンプし、上空から アルティメットキック を放った。

「はああああああああああ。」

「ぐおおおおおおおお。」

サバトは悲鳴を上げながら、その身を粉々にし爆発した。

「これで、終わったのか？」

ディザンドが言つと、

「まだだ、まだ終わらぬ。」

するとサバトの破片から一人の女が出てきた。

「まさかお前、水妖か？」

ディガイドはその女が纏っていたマントやフードの破片からその女が水妖伯爵ではないかと疑った。

「ああ、そうよ。この我が水妖伯爵よ。」

水妖伯爵は今までとは違って高い女の声で話した。どうやら魔術で声を変えていたらしい。

「何故、男装なんかを？」

「私は水妖家を大きくしたかった。だが他の奴らは私が女だからと蔑む、だから私はこのまま負ける訳にはいかぬのだ。」

そういうと水妖伯爵はその姿をナマコをふっとうさせるソーンファンガイアに変えて襲ってきた。他のみんなは戦闘体勢になったが刃はそれを制した。

「ここは俺がやる。」

「刃！？だが。」

「やらせてくれ。」

レヴァは刃の硬い意思を覆せないとわかり、その場を刃に任せた。
「はああああ。」

ディガイドはサモンドライバーを持ちソーンファンガイアに切りかかった。しかし、ソーンファンガイアも剣を出し反撃した。

「なかなかやるじゃないか。」

ディガイドを刀身を受け流し、そのままサモンドライバーで撃つた。

「が、ぐううううう。」

ソーンファンガイアは苦悶の声を上げながらも攻撃してきた。

「我は負けられん。負けられんのだ。」

「……………」

ディガイドは無言になりながらもソーンファンガイアの攻撃を捌いていた。

「何故だ？」

ソーンファンガイアは突然攻撃を止めて話しかけてきた。

「何故、反撃しない？我はお前が護る人間を殺したのだぞ？」

「……………」

ディガイドは無言を貫いていたが、喋った。

「俺も同じだったからさ。」

「何!」

「ああ、そうさ。俺はお前が言ったようにファンガイアでもあるがグロンギでもあるいやこの世の怪物全部と言えるかもしれない。だがそのことで俺は仲間から避けられていたこともあった。だが俺は行動することで自分のことを分かって貰い認められることが出来た。だからお前もこんなことをしなくても出来た筈だろ!」

「!？」

ソーンファンガイアは「はっ」となったがすぐに首を振った。

「だが、だがもう遅いんだ。我は我は……………うああああああああああ。」

ソーンファンガイアは剣を持ち特攻してきた。それをディガイドは真っ向からサモンドライバーで向かえうった。

「はああああ。」

一瞬、二人は重なりあつたまま世界が静寂した。次の瞬間、水妖伯爵は人間態に戻っていた。その身をサモンドライバーで貫かれながら。

「…………わざと外したな?」

そうソーンファンガイアは自らの剣をわざと外していた。

「これで良い……………ありがとう。」

ソーンファンガイアは爆発した。

これでこの時間での目的は達成した。

翌日

刃達は人目がつかないような、森の広いところにいた。もちろん

この時間から移動する為だ。刃はそこにゼロライナーを呼んだ。五代さん達には言っておりその場にはいなかった。

「刃、本当にあのファンガイアのことは良かったのか？」

レヴァは心配しながら聞いた。

「なんでだ？」

刃は聞き返した。

「なんでだつて刃さん。だつて最後は自分から死んでいったじゃないですか。」

「は、お前達は何を言っているんだ？」

刃は本当に解らないといった顔をした。

「誰が死んだつて？」

すると、後ろからなんと死んだ筈の水妖伯爵が出てきた。それを見たレヴァと飛翔は開いた口が閉じない状態になっていた。

「な、なんでお前がここにいる？死んだ筈じゃ？」

レヴァは挙動不審になりながらも聞いた。

「ふん、どっかの馬鹿が私を生かしたからだ。」

水妖伯爵は刃を睨みながらいった。

「そう言つなよ、麗華。お前が元気になって俺は安心してゐるんだから。」

水妖伯爵、本名水妖麗華は刃の言葉を聞いて顔を赤くしていた。

「う、五月蠅い。さつさと行け、じゃないとまたお前の血を貰うぞ。」

「

「はいはい。」

刃は足をゼロライナーにかけたところで振り向きこう言った。

「またな。」

「ああ、また会おうぞ。」

麗華は微笑みながら返した。

全員乗り込んだところでゼロライナーは動きだし、この時間から移動した、次の時間を目指して。

第17話『KU・敵の正体と笑顔を護る者』（後書き）

（後書きコーナー）

斬「やつとで投稿できたー。」

サ「遅過ぎです。」（べし）↑蹴った音

斬「ぐは、……だって仕方ないだろパソコンがショートしちゃ
たんだから。」

レ「まあまあ、サヤも作者も落ち着いて。」

サ「まあ良いでしょう。それにしてもなんでマスターは麗華さんの
術が喰らったのですか。」

斬「ん、ああそのことか。それは刃は確かにジョーカーの闘争本能
を抑えることができているが完全に出来ていないわけじゃないからさ。」

レ「？意味が分からないぞ。」

斬「まあ、抑えが完全じゃないから。術によって強引的に闘争本能
が開放されたから今回の様になったってことさ。」

サ「それを私とユニゾンすることでまた抑え込んだと言う訳です。」

レ「なるほどな。」

斬「因みに今回出た、水妖伯爵こと水妖麗華ですが、モチーフは

うみねこのなく頃に に出てくる魔女ベアトリーチェです。」

サ「作者の文章力の無さのおかげで分りにくいと思いますが。」

斬「く、それを言うなよ。海人様、感想ありがとうございます。」

レ「次回はなんだ？」

斬「次回は麗華のことと『H』が頭文字のライダーの物語が始まるぞ。」

サ・レ・斬「『それでは、次回で。』」

第18話『H・説明、現れし丁』（前書き）

えー約二週間ぶりの更新、第18話です。

まず一言、スミマセンでした。こちらの都合により題名が少々変わりました、あまりこの様なことが無いようにしたいのですがもしかしたらまたこの様なことがあるかもしれません。その時はご了承ください。

それでは、どうぞ。

第18話『H・説明、現れし』

ゼロライナー

「さあ、刃。どういふことが教えて貰おうか？」

「ま、待て。何故そんなに怒っているんだ？」

ゼロライナーの中ではかなり緊迫した状況になっていた。言うのも刃がレヴァと飛翔に麗華のことを教えていなかった為にそのことをレヴァが詳しく聞こうとしているわけだが、ここでレヴァが拳を握り締め、顔に怒りをあらわにしていた為、今の状況にいたる。

「別に私は怒ってはいない。だが刃が私にも秘密にしていたからそのことに少し機嫌が良くないただけだ。」

「それを人は怒っていると言っただが？」

「五月蠅い、さっさと説明しろ。」

レヴァは取り敢えず拳を収めた。それを見た刃は溜め息をつきながらも説明し始めた。

「で、まず何を聞きたいんだ？」

「なんで刃さんに刺された筈の水妖伯sy「麗華な。」・麗華さんが生きているんだ？」

飛翔が言った言葉に訂正を加えつつ刃は言った。

「確かに俺のサモンドライバーは麗華に刺さっていたが、アイツがわざと外した様に俺も急所は外していたからさ。」

「じゃあの爆発は？」

「あれは爆発と見せかけて転移させたからさ。」

飛翔とレヴァは苦い表情をしながらも納得した。

「・・・だからと言って何故、麗華は生きている？遠くから見ている私達でさえライフエナジーが流れているのを見たんだぞ。」

実際、飛翔にも見えていた様でレヴァの隣でうんうんと頷いていた。

「それは簡単だ。俺のライフエナジーと血を飲ませて俺の眷属化させたからだ。」

「は！？・・・はあああああああ。」

レヴァと飛翔がハモリながら驚いていた。

「り、理由はなんだ？」

レヴァは兎に角落ち着けようとしながら聞いた。

「いや、実際あのままじゃ危なかったしそうとは言えほとけないから。当然の処置だと思うが？なあ、サヤ。」

「私に振らないで下さい、マスター。」

サヤは我知らずと言う顔をしていた。

「でも、そんなこととして大丈夫なのか？刃さん。」

「まあ、大丈夫だろ。それに情報も集めやすくなるしな。」

「？なんだ。」

「いや、クウガの時間はかなり最初の時間でな、これから行くのは殆どクウガの後の時間だからさ。だからその時間にいる麗華に情報を貰えるようになったって事さ。」

「なるほど。」

飛翔は納得した顔をしていたが、レヴァは俯いていた。

「だからと言ってせめて一言言っただけ欲しかった。」

レヴァは悲しそうな声を出した。

「すまないな。だか、今回の事が時間が無かったのは本当なんだ。だが、その、すまなかった。」

「良いさ。今度から気を付けてくれるならな。」

レヴァは微笑みながら顔を上げた。

「ありがとつな。さて、そろそろ着くかな？」

「そういえば、次はどこなんだ？」

「確かに聞いていないぜ、刃さん。」

「次は己を鍛えて鬼となつて戦う 仮面ライダー響鬼 の物語さ。」
そうして、ゼロライナーは目的の時間へと到着した。

ゼロライナーを降りた刃達は山の中を歩いていた。

「ところでこれからどうするんだ？」

レヴァが辺りを見渡しながら刃に訪ねた。

「取り敢えず山を降りて、『たちばな』って店に行く。」

「たちばな？」

飛翔は何故その店に行くのか解らず、刃に聞いた。

「その店が響鬼いや関東の鬼達の拠点だからさ。」

「あ、なるほど。」

飛翔とレヴァは納得し、そのまま刃の後について行った。

しかし、暫く歩いているとガサゴソとした物音と共に二人の和服を着た男女が現れた。

「人？」

飛翔は何故こんな山奥に人が、しかも登山に適していない服を着ているのか疑問に思った。

「……童子に姫か。」

刃は二人を警戒しながら呟いた。

「え？」

飛翔が刃の方を向いたと同時に二人は喋りだした。

「人がいる……。」

「……ならあの子の為に捕まえよう。」

その声は男が女の声で喋り、女が男の声で喋ると言う明らかに人では有り得なかった。すると二人はその姿を童子と呼ばれた男は怪

童子に姫と呼ばれた女は妖姫へと変貌させ襲い掛かってきた。

「な、なんだ此奴らは？」

飛翔は見たことも無い敵との戦いながらも攻撃を受け流していた。
「此奴らは童子と姫と呼ばれている魔化魍の養育係さ。」

「養育係？」

「ああ、此奴らが魔化魍を『響鬼の世界』に出てきたバケガ二級の大きさに育てているのさ。」

「そんな！」

「それが本来だから仕方ないだろ。それより行くぞ。」

刃は腰にドライバーを付けた。それを見たレヴァと飛翔も素早くそれぞれのドライバーを取り出し準備をした。

「『変身』」

『KAMEN RIDE DEGAIDE』 『KAMEN RID
E DEZANDE』 『KAMEN RIDE DECADE』

変身したデイガイドは怪童子を見て疑問に思った。

《なんだ？あの怪童子は。明らかに妖姫とは違う気を放っている。
もしかして……》

そう思ったデイガイドは二人に指示を出した。

「二人はそっちの妖姫を頼む。俺はこっちの怪童子の相手をする。」

「分かった。行くぞ、飛翔。」

「ああ。」

デイザンドとデイケイドは妖姫へと向かった行った。

「さて、行くぞ。」

デイガイドはサモンドライバーを構えた。

「『はあああ！』」

デイザンドはドライバーで、デイケイドはライドブッカー・ソー

ドモードで妖姫を切り裂いた。

「鬼じゃないが、強い！」

妖姫は切り口から白い血を流しながら呟いた。

「このまま、押し込むぞ。」

二人は同時にカードを取り、ドライバーに装填した。

『『ATTACK RIDE SLASH』』

電子音が鳴り響くと同時にディザンドはドライバーを、ディケイドはライドブッカーを振った。するとカードの効果によって刀身がディザンドは紅、ディケイドはマゼンダに分裂し、妖姫を複数回切り裂いた。

「ぎゃあああああ。」

妖姫は男の様な悲鳴を上げながら、その身を土くれに変え消滅した。

「よし、刃さんの方に行こう。」

「そうだな。」

二人はディガイドの所に戻っていった。

「はっ！」

ディガイドはRB・プロト・ソードモードとサモンドライバーの二刀流で攻撃していた。しかし、怪童子は反撃もせずただ避けているだけだった。そのためディガイドもなかなか深く斬り込めずだった。

《・・・何故、反撃しない。》

その時、一発の銃弾が怪童子の右腕に当たった。

「刃、助けにきたぞ。」

すると、そこに妖姫を倒したディザンドとディケイドがいた。しかし、それを見た怪童子はなんと元の童子の姿に戻っていた。

「「な!？」」

ディザンドとディケイドはその奇妙な行動に驚いていた。だが、ディガイドだけはある一点を見て考えていた。そしてその考えは童子の一言と流れてきた血によって確信した。

「やはり、この姿では無理か。」

「！？やつぱり、お前は……。」

童子は右腕から緑の血を流していた。

「……来い。」

「グルルルルルル。」

童子が言つと周りからワームのサナギ体が出てきた。

「何！？と言つことは奴は。」

レヴァも気づいた様だ。

「ああ……ワームだ。」

童子は流れる血を振り払いながら言つた。

「ふむ、鬼を調べる為にこの姿になったがやはり元の方が良いな。」

と言つとその姿を黒と黄色の半々の体色に右腕がカギ爪で左腕が盾状になったセパルチュラワームへと変えた。

「さあ、ゆけ我が同胞達よ。奴らを殺してしまえ。」

セパルチュラワームの号令と共にワームが一斉に襲つてきた。

「く、サヤ。お前は結界を張って防御しろ。レヴァお前は左、飛翔は右、俺は前だ。行くぞ。」

俺は二刀流のままワームに切りかかった。

「はっ！」

ディガイドは一振りで周りのワームを切り倒していった。

「はあああああああああああ！」

別の場所ではディザンドが、

「はああああ、りゃ！」

更に別の場ではディケイドがワームの群れを倒していった。

「多くて鬱陶しいな。」

ディガイドはすぐそばにいたワームを切りながら、カードを装填した。

『ATTACK RIDE BLAST』

ガンモードにしたRB・プロトを周りに向かって撃った。すると銃身が分裂し、他のワームを巻き込みながら撃ち殺していった。それでも数十匹かのワームは銃弾から逃れたのか残っていた。

「しかたない、一気に決める。」

デイガイドはカードをドライバーに装填した。

「変身」

『KAMEN RIDE GYAREN』

電子音が鳴ると前方にオリハルコンエレメントが出現しそれを潜るとデイガイドはその姿を緑の複眼を持つ仮面、銀の鎧と朱のボディースーツを纏ったDギャレンへと変えた。

「そして、これがギャレンの真の力だ！」

Dギャレンはカードを再びドライバーに装填した。

『FINAL KAMEN RIDE GYAREN KING』

すると今度は黄金のオリハルコンエレメントが出現し、それが自動的に動きDギャレンに通過しその姿を全身がブレイド・キングフォームのアンデットクレストが無い金色の装甲で覆われ、胸部にはギラファノコギリクワガタのハイグレイドシンボルが付いたDギャレン・キングフォーム（KFと表記）へと変えた。

「な、なんだあの姿は!？」

「まさか、あれがギャレンのキングフォーム!？」

デザインドとデイケイドはデイガイドの見たことが無い姿に驚きを示していた。

『ATTACK RIDE KINGRAUZA』

Dギャレン・KFの右手にギャレンラウザーを大型にし銃身を上下に一つずつ付けたキングラウザーが出現した。

「レヴァ、飛翔その場からすぐに離れる。此奴らを一掃する。」

そう今デザインドとデイケイドはDギャレン・KFの銃身の向けている方向にいるのだ。

「ま、まで。」

「刃さん！ちよつと待つて。」

『FINAL ATTACK RIDE GYA・GYA・GYA・GYA・GYA・GYA・GYA』

「はあああああああ。」

電子音と共にDギヤレン・KFの前方に10、J、Q、K、Aの五枚の立体カードが現れそこに銃弾を放ちカードを潜る度に威力を上げる ロイヤルストレートフラッシュ を放った。

「グルルルルルルルルル！？」

サナギ体のワームは全て今の一撃で消滅した。これにより残りはセパルチュラワーム一匹になった。

「さあ、後お前一人だけだぞ。」

Dギヤレン・KFは姿をディガイドに戻しながら言った。

「貴様！ならば……………」

セパルチュラワームは突然その姿を消した。

「がつ！？」

「ぐお！？」

後ろにいたディザンドとディケイドがいきなり何かに殴られたかのように吹き飛ばされた。するとその場にセパルチュラワームが現れた。

「…………クロックアップか。」

ディガイドが呟くとまたもセパルチュラワームはその姿を消した。そしてディガイドも吹き飛ばされ……………。

「そこか。」

「グルルルルルルルルル！？」

る筈だった。しかし、持っていたRB・プロトで逆に切り返していた。

「クロックアップは俺には効かないぞ。」

「馬鹿な。今のはマグレだ。」

「ならもう一回やってみるよ。それで分かる筈さ……………」

セパルチュラワームはディガイドが言い終わる前にクロックアップ

プに入った。

「お前の死がな。」

セパルチュラワームがクロックアップの世界に入るのを見るとデ
イガイドはすぐにカードを装填した。

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DE
GAIDE』

デイガイドの目の前に十枚の3Dカードが現れた。

「はああああああああああああああああああ。」

そこを潜り抜けデイガイドは寸分の狂いも無くセパルチュラワー
ムに デイメンションスラッシュ を叩きつけた。

「クロックアップじゃ俺の眼からは逃れることは出来ないさ。」

「き、貴様まさか……ぐがあああああああああああああ。」

「

セパルチュラワームは何かに気づいたようだがそれを答える暇も
無く爆発した。

「……刃、やったな。」

後ろを見るとディザンドが立ち上がっていた。どうやらさっきの
ダメージから回復したようだ。

「ああ、そうだな!? レヴァ後ろだ。」

「え?」

すると、ディザンドの後ろから蚊の様なキュレックスワームが現
れ、左手の針でディザンドを刺そうとしていた。どうやら先ほどの
セパルチュラワームが連れてきたワームがまだ残っていたらしく脱
皮していたようだ。

「レヴァさん!?」

「レヴァ!?! へくそ、間に合え!」

その時この場に有り得ない音声が流れた。

『CLOCK UP』

「……!?」

キュレックスワームはいきなり吹き飛ばされた。

『CLOCK OVER』

「馬鹿な、何故この場に？」

その場には全身がまるで蜂の様な姿に黒と黄色の配色がなされた
仮面ライダーザビー がいた。

「仮面ライダー・・・ザビー。」

ディケイドは見たことがあるらしくかなり驚いていた。

「キュルルルルルルル。」

キュレックスワームは立ち上がり自分に攻撃したザビーに怒りを
現わにするかの様に突っ込んできた。しかし、ザビーは動じず左手
に付いているザビーゼクターのゼクターニードル上部に付いている
フルスロットルスイッチを押した。

『Rider Stinging』

電子音と共にタキオン粒子が波動に変換されニードルに集中して
いった。

「はっ！」

「ギルルルルルルルルルルルルルルルルルル！？」

ザビーはそのまま突っ込んできたキュレックスワームにニードル
を突き刺し ライダーステイング を決め、キュレックスワームを
倒した。

後には戦いが終わった静けさがこの場を漂っていた。

第18話『H・説明、現れし丁』（後書き）

（後書きコーナー）

サ「さて、今回から響鬼の物語に入った訳ですが。」

レ「さあ作者どういう事だ、説明しろ。何故、鬼が出て来ない。」

斬「え、えーと話の都合上こうなっていました。すみません。」

↑土下座中

サ「はあ、それと麗華さんのことですが本当にあんな事が出来るのですか。」

斬「ああ、そのことでしたら。ファンガイアの魔術も組み合わせる一種の契約になっているので大丈夫ですよ。」

レ「まあ、良いが。しかし、最後のあれは一体？」

斬「まあ、そこら辺は次回と言う事で。」

サ「分かりました。では作者、感謝コーナーを。」

斬「海人様、感想有難う御座います。他の皆様も気軽に感想をよろしくお願いします。」

レ「で、次回は。」

斬「次回は……ザビーの正体とたちばなに向かいます。」

サ・レ・斬「「「それでは、次回で。」」」

第19話『H・虫と妖怪と惑う鬼』（前書き）

第19話です。

相変わらずの駄文ですがよろしくお願いします。
それでは、どうぞ。

第19話『H・虫と妖怪と惑う鬼』

「お前は・・・一体？」

ディガイドは変身を解き、刃の姿に戻りながら言った。既にレヴアと飛翔も変身を解いていた。

《マスター、彼は私が結界を張る前からどうやらいたようです。》
サヤが念威を使って話しかけてきた。

と言うことはこのザビーは最初から居たと言うことになるな。それにこの周りの気配も気になるな。

刃が考えているとザビーは左腕のライダーブレスからザビーゼクターを取り変身を解いた。変身者は端整な顔立ちをした男だった。

「俺の名前は寺切僧^{じきり・そう}。ZECTと言う組織に所属する者だ。」

「ZECT・・・だって！」

どうやら飛翔はZECTのことを知っているようだ。まあ、話によればカブトの世界にもあるらしいからだろうが。

「俺が聞いた話ではZECTは渋谷周辺をワームから護っている筈だが。」

刃の言葉を聞いた僧は表情をしかめたがすぐに元に戻し、話した。
「実はこの辺りにワームが出現していると言う報告を受けてね、そのついでと言う感じで先ほどの我々が開発した マスクドライバーシステム のテストをしているんだよ。」

あくまでワームの処理とライダーシステムのテストらしいその表情には嘘をついているような気配は無く、むしろこちらと友好的な関係を築きたいと言っているような笑顔である。

「そうか、事情は分かった。ならそろそろ周りにいる奴らをどかしてくれないか？」

「おっと、そうだな。みんな出てきてくれ。」

僧が言々と周りから総勢15人のゼクトルーパーが出てきた。その内の一人がヘルメットを取り僧に話しかけていた。

「隊長、良いのですか？此奴らを拘束しなくて。」

「ああ、どうやらワームではなさそうだな。」

「しかし、此奴らは妙なライダーシステムを使ってますし！」

「良いんだ、針治しんじ。俺は彼等のことを信じたい。」

針治というゼクトルーパーは最後までくい下がったが僧がそれを押し止めた。

「そろそろ、移動したいんだが。」

俺はそのやり取りを見届けると言った。

「ああ、すまない。そうだ、もし何かあればここに連絡してくれ。俺も君達の話が聞きたいからさ。」

と言うと僧は刃に連絡先を記した紙を渡した。

「すまないな、なにかあった時は連絡するよ。その代わりそっちもワームが出てきたら連絡してくれ。」

「分かった。それじゃあな。」

俺はサヤ達を連れてその場を移動した。

「よかったですか、マスター？」

サヤは刃に問いかけた。

「そうだが、刃さん。ZECTの奴らを信じて良いのか？」

飛翔はカブトの世界での教訓かZECTに疑いを持っていた。

「私も飛翔の意見に賛成だ。サヤの話では最初からあの場にいたのに助けないのもおかしいだろ。」

レヴァはサヤから奴らが最初からいたのを聞いていた。その上であの行動はおかしいと言っているのだ。

「……俺だって奴ら自体を信じている訳じゃない。俺が信じて

いるのは寺切僧個人さ。」

「「？」」

刃はそれ以上は何も言わず、レヴァと飛翔もそれ以上の追求はしなかった。

暫く山道を歩いていると、突然レヴァが訪ねてきた。

「そういえば、これからどうするんだ？あの水妖伯爵いや麗華の所にいくのか？」

刃はまだ今後の予定を言っていなかった。

「いや、この時間の麗華には会うことが出来ないんだ。」

「は？どういう意味だ？」

「どうもこうもそのままの意味だが。」

レヴァは疑問を上げるしかできなかった。

「刃さん、さすがに説明してくれ。」

飛翔は刃に説明を促した。

「そうだな、説明をしとくか。言いか良く聞けよ。最初に言っておくがこの時間はクウガの後の時間であってクウガの後の時間では無い時間なんだ。」

「「？」」

「実はな、この『始まりの地』の時間は過去に二つに別れてしまっているんだ。」

「「な！？」」

二人は絶句することしかできなかった。

「今、ここ『始まりの地』の時間は正確に言えば『渋谷に渋谷隕石が落ちたと認識されている時間』と『隕石はあったが渋谷に落ちらず大気圏で燃え尽きた時間』の二つに別れているんだ。それでこの響鬼の時間は前者の方でクウガの時間は後者の方、異なる時間の流れの為クウガの時間で仲間になった麗華にはこの響鬼の時間では会うことが出来ないと言う訳だ。解ったか？」

「あ、ああ、一応はな。しかし、それで大丈夫なのか。お前の話じやこの世界は異なる二つの時間を持っていることになるんだが？」
「まあ、今のところは大丈夫だしな。それにこれをどうこうするのは俺の仕事ではないしな。」

「じゃあ、これからどうするんだ刃さん？」

「この関東の鬼達の拠点である『たちばな』に行くのさ。」
刃はそのまま道を進んでいった。

その頃、一人のサラリーマンの男性がビルの下の通路を歩いていると、どこからか狐の鳴き声が聴こえてきた。

「わうん、わうん」

「？」

すると、向こう側から火が付いた車輪の様なものが転がってきて一瞬にしてその男性を燃やしてしまった。

「わうん、わうん」

その車輪は横側から狐の頭が出てきたかと思うと二足歩行の体まで出し、火車と呼ばれる魔化魍へと変わった。するとその隣にサナギ体のワームまで出てきたではないか。ワームはその姿を先ほど火車が殺した男性へと変えた。

「さて、行くか。」

ワームは火車を連れてその場から去っていった。

甘味処「たちばな」

「ここだな。」

刃達は目的地であるたちばなへ辿りついた。途中で魔化魍の気配がしたが近くに鬼の気配があったので多分大丈夫だろと思いやつてきた。

「いらっしやいませ。」

入ると高校生くらいの少年が迎え入れてくれた。

「四名様ですか？」

「いや、食べにきたんじゃないやなくて立花勢地郎さんに用があつてきました。」

「勢地郎さんに？じゃあ此方に。」

少年の案内にで奥にいった。そこでは勢地郎さんとその娘である日菜佳さんが風邪で寝込んでいた。

「勢地郎さん、お客さんです。」

「ん？ゴホゴホ。」

「初めまして、勢地郎さん黒滅刃です。貴方が関東の鬼の指揮官だと聞いて挨拶にきたのですが、この調子では話は無理そうですね。」

「ゴホゴホ、すまないね。折角着てもらったのに。今、風邪をこじらせてしまつてね、ゴホゴホ。それで話とは。」

「実はこの周辺に魔化魍とは違う化け物が現れまして、その対処をする為にここに着たのでその挨拶をと思ひまして。」

「魔化魍とは違う化け物？まさか渋谷隕石関連かね？」

「ええ。」

「そうか、分かった。ヒビキ君には私から言つておこう。そういえば君達はまだ子供のようだが宿は大丈夫なのかね？」

「え？いや、これから探そうかと。」

「それならそれが終わるまでは此処にいなさい部屋なら余っているから。」

「でも迷惑では？」

「いやいや、大丈夫だから。」

「ではお言葉に甘えさせていただきます。」

と言う訳で暫く刃達はたちばなに厄介になることになった。条件として飛翔、サヤ、レヴアの三人はたちばなの手伝いをする事になったが。

次の日、俺は街に来て居た。と言っても残り三人はたちばなでバイト中唯一人の俺は暇を弄ぶべく街に着たと言う訳だ。

「それにしても本当に隕石が落ちたとは思えないな。」

隕石の影響が渋谷周辺だけから当たり前と言ったらそうなのだが。

「ふう………ん？」

刃が辺りを見渡すとすぐ先に私服姿だが寺切僧が居た。

「ん？ああ、君か。」

どうやら向こうも気が付いたようだ。

「今日は非番ですか？」

「ああ、昨日はあれからワームの動きもなかったしこの所働さずくめだったからさ今日は骨休めってわけさ。」

どうやら聞いた話では彼の部隊は数日前からここに来て居たらしい。その処理などで今日までまともな休暇が取れていなかったらしい。

「そうですか。でもどうやらあんまり休めないようですよ。」

「ん？」

刃が僧の後ろを指すとそこにはザビーゼクターが居た。どうやらワームが出てきたらしい。

「はあ、仕方ない。君も手伝ってくれないか？」

「そうですね、ここで騒ぎになられても困りますから手伝いましょう。」

俺達はザビーゼクターの先導でワームの所に向かった。

ワームは何かの工場に居た。どうやら作業していた人達を襲ったようだ。

「はあ、今日は残業かな？」

「さつさと終わらせませすよ。」

刃は腰にドライバーを僧はザビーゼクターを呼び寄せ左腕に付いているライダーブレスに近づけた。

「変身」

『KAMEN RIDE DEGAIDE』
『HENSIN』

刃はディガイド、僧はザビー・マスクドフォーム（以後、MFと表記）に変身しワームの群れに走りよっていった。それに気づいたワームの群れも二人のライダーに攻撃を仕掛けてきた。

「虫には虫か？」

『KAMEN RIDE KUUGA』

ディガイドはカードをドライバーに装填し、Dクウガへと変身した。しかし、その姿は普通のマイティフォームではなく雷の力が加わった ライジングマイティフォーム だった。

「やっぱりか？まあ良い。」

自分の姿を確かめたDクウガ・RMFはそう呟くと近くのワームを殴りつけながら倒して行った。

「は、そりゃ！」

ザビー・MFも持ち前の格闘術をうまく使いワームに拳や蹴りを加えていた。しかし、ワームは物量を使ってザビーを倒そうとしていた。ザビーはまだマスクドライダーシステムを手にして日が浅く使い慣れていなかった為、流石に苦戦していた。

「それなら！」

ザビーは左腕のザビージェクター背部のゼクターウイングを上げ、内側に回転させた。

「キャストオフ」

『CAST OFF・・・CHANGE WASP』

ザビーはマスクドアーマーをパージしその姿をザビー・ライダーフォームに変えた。その際パージされたアーマーはワームに次々と当たりワームを爆砕させた。身軽になったザビー・RFは先程よりも的確にワームに拳打を加えていき瞬く間にワームの数を減らして行った。

「さて、こんなものかな？」

Dクウガ・RMFは周りを確認しつつ言った。

「そっちも終わったかい？」

ザビーが周りを警戒しつつ言った。

「そうだな、あんなのがいなかったらな。」

「ん？」

Dクウガは言いつつある一点を差した。ザビーもその方向を見るとそこには成虫体となったウデムシの様な姿をしたベルバーワームが佇んでいた。

「グルルルルルルルルル！」

ベルバーワームは両腕にある鉤ツメを使い襲い掛かってきた。ザビーとDクウガはお互い反対の方向によけ、Dクウガはがら空きの背中へとカウンターの蹴りを入れていた。それに怒ったのかベルバーワームは標的をDクウガに絞り両腕を振り回しながら攻撃してきた。Dクウガはそれを余裕を持ってよけきりその間ザビーは隙だらけになったワームの懐の入り拳打で圧倒した。

『FINAL ATTACK RIDE KU・KU・KU UGA』

Dクウガはザビーがこちらに殴り飛ばしたと同時に腰のドライバーにカードを装填し、構えをとっていた。ザビーも殴り飛ばしたと同時にザビーゼクターのフルスロットスイッチに手を伸ばしていた。

「ライダーステイング」

『RIDER STING』

「はあああああああああ！」

Dクウガは吹き飛ばされたベルバーワームにライジングマイティキックを繰り出し、再びザビーの方へ蹴り返した。

「は！」

ザビーも蹴り返されたベルバーワームに寸分たがわずライダーステイングを決め、ワームを倒した。

「これで終わりか？」

ディガイドは変身を解きながらザビーに聞いた。

「ああ、そのようだ。部下に確認させたがもうこの辺り周辺にワームの反応は無いらしい。」

ザビーも同じく変身を解き言った。

「そうか。じゃ、俺はもう行くぞ。」

「後の事は任せてくれ。」

刃はその場から去りたちばなへと戻っていった。

その日の夜、少年安達明日夢は転校生桐矢京介と夜の街を歩いていた。すると京介は何かを見つけたのかしきりに頭を動かしていた。

「なんだ、あれ？」

すると向こう側から前日サラリーマンを燃やしたあの魔化魍、火車が鳴き声をあげながら転がってきた。

「わうん、わうん、わうん」

「わ！？」

明日夢と京介は間一髪よけた。しかし、火車はそれでも執拗に二人に狙いを定めていた。するとそこにバイクに乗ってイブキと天美あきらがやってきた。その間火車はその姿を狐が二足歩行する様な姿へと変えた。

「わあ！？」

「魔化魍！？」

「魔化魍？」

京介は驚いていたが明日夢は相手が魔化魍だと気づいてようだ。すると二人の後ろからイブキが出てきた。

「イブキさん！」

「明日夢君。」

イブキは明日夢に逃げるよう促し、明日夢は京介を連れて避難し

た。それを見たイブキは変身鬼笛を取り出し鳴らし、その身に青い風を纏った。

「は！」

イブキはその風を払いその姿を仮面ライダー威吹鬼へと変えた。威吹鬼は火車へと攻撃を仕掛けた。しかし火車も負けじと攻撃を防いだり反撃したりとしていた。あきはそれを見届けつつ携帯を使つてたちばなへと連絡した。

その頃、たちばなでは響鬼と飛翔が店内の掃除をしていた。そこに香須美がやつてきた。

「ヒビキさん！今、あきらから応援に着てほしいって連絡が。」

「よし・・・待つてたぜ。」

ヒビキは独特な敬礼のようなポーズをしながら答えた。そこに刃も帰つてきた。

「飛翔、俺達も行くぞ。」

「了解！」

三人はたちばなを出ていった。

戦いは威吹鬼が苦戦する結果になっていた。火車が首の車輪から火の輪を放ち威吹鬼を攻撃した。あきはディスクアニマルを起動し援護をおこなったがそれすらも余り効かずピンチに陥っていた。しかし、そこに響鬼が火車を後ろから蹴り込み威吹鬼を助けた。

「おい、大丈夫か？」

「響鬼さん。」

響鬼は後ろから音撃棒・烈火を取り出し突っ込んで行つた。

「今日の俺は強いぜ。」

火車は首から火の輪を出し響鬼を攻撃したが響鬼はそれを烈火で払いながら突っ込み火車に攻撃した。しかし火車はその一撃をよけ

逆に音撃棒を一本奪い投げ捨ててしまった。そこに明日夢が音撃棒を拾いに行き響鬼に投げた。

「サンキュー、少年。」

響鬼は再び攻撃を仕掛けたが、火車はまた車輪の状態に戻ると逃げてしまった。

「響鬼さん！」

「追うぞ。」

「はい。」

響鬼は威吹鬼を連れて火車を追っていった。

響鬼と威吹鬼は火車を見失っていた。どうやら火車は逃げ足が速かったようだ。そこに刃と飛翔が合流した。

「どうやら逃したようですね。」

「あれ、そちらの方々は？」

イブキが刃達を見つつ聞いてきた。

「ああ、初めましてですね。俺は黒滅刃、そしてこっちが飛翔。」

「この二人は何か用があつて2、3日こっちにいて俺達のサポートをしてくれるらしい。」

「へえ、そうなんです。初めまして僕はイブキ、そしてこっちが。」

「天美あきらです、よろしく。」

その後、ヒビキと刃と飛翔はイブキ達と別れたちばなに戻って行った。

あれから俺達はちばなに戻ろうと道を帰っていたしかし、その途中で俺は妙な気配を感じた。

「誰だ、俺達を尾行しているのは。」

「刃さん、何を言つて？」

「そうだぞ、刃。いきなり何言っているんだ？」

二人はどうやらこの妙な気配に気づいていないようだ。すると、
「ほう、私の気配に気づくとは貴様何者だ？」

すぐ側の角からサラリーマンが出てきた。

「そうだな、あえて言うなら・・・化け物か。」

「どちらにしろ、貴様等にはここで死んでもらう。」

男はそう言うのと体に力を込め始めた。しかしそれよりも先に刃は動いていた。

「・・・そうか、だったらお前が死ね！」

刃は虚空から剣を出し、男の体を貫いていた。この時の事を後に飛翔はこう表していた「残酷なまでに冷たい目をしていた」と。

「がは!？」

「ちょ、おい刃。何をしている!？」

「何って害虫駆除だが？」

この時、刃の右目は金色になっていた。どうやら刃自身も今自分の中のジョーカーが目覚めていることが分かっていないようだ。今の刃には解らない事だが麗華が強制的に闘争本能を活性化させた時の影響でジョーカーの制御が甘くなっているのだ。

刃が剣を引き抜くと男の体から緑色の血が滴っていた。

「み、緑色の血だと!？」

「ヒビキさん、こいつは人間じゃありませんよ。」

飛翔は緑色の血に驚いているヒビキに言った。

「ぐ、貴様。覚えておけよこの借りいずれ返す。」

男は刺された傷口を抑えながら去っていった。その場にサナギ体をワームを残しながら。

「グルルルルルルルルルル!」

「が!？ぐ、が!？」

「ワーム!？刃さん!」

飛翔は刃に言うが何故か刃は突然呻き声を上げ下を向いたまま動かなかった。

「ち、少年取り敢えず刃を助けるぞ。」

ヒビキは変身鬼角を取り出し近くの壁にぶつけ額に持っていた。
「そうですね。」

飛翔も腰にドライバーを付けカードを取り出した。

「変身」

『KAMEN RIDE DECADE』

「はあ！」

飛翔はディケイドにヒビキはその身に紫の炎を纏いそれを振り払って響鬼へと変身した。

「行くぜ少年。」

「はい。」

響鬼は音撃棒・烈火をディケイドはライドブッカー・ソードモードを手に取りワームの群れに飛び込んだ。

「は！」

響鬼は烈火から火の弾を出す 鬼棒術・烈火弾 を使い刃に群がっていくワームを燃やしていた。ディケイドも、

『ATTACK RIDE SLASH』

スラッシュの効果で刀身が分裂するようになったライドブッカーでワーム共を切り刃の元へと走り込んでいった。

「刃さん、刃さん！」

刃の元に辿りついたディケイドは刃を揺さぶっていた。どうやら呼びかけただけじゃ反応がなく揺さぶっているようだ。すると呼びかけと揺さぶりが効いたのか刃の右目が元の紅に戻り意識がはつきりした。

「は！？俺は・・・何を？」

「刃さん！？良かった。」

「飛翔？・・・ワームか。」

刃は自身の周りがワームに囲まれていることに気づいた。

「刃さんどこまで覚えていますか？」

「完全に覚えているのはあのサラリーマンの男が出てきた所までだ。」

後の事は・・・断片的だな。」

「刃！？無事か。」

周りのワームを蹴散らしつつ響鬼も出てきた。

「ええ、大丈夫ですよヒビキさん。それと周りの奴等は魔化魍じゃ無いんで無茶はしないで下さい。」

「それは見れば分かる。よし、なら行くか。」

刃は腰にドライバーを付けカードを取り装填した。

「変身」

『KAMEN RIDE DEGAIDE』

デイガイドは変身すると同時にカードを取り再びドライバーに装填した。

『ATTACK RIDE BLAST』

電子音が鳴ると左腰に付いているRB・プロトがガンモードとなりデイガイドの手にき、ワーム目掛けて放った。しかし、ワームの数はデイケイドや響鬼までが倒し減ったにも関わらず最初の頃よりも増えていた。どうやら騒ぎに駆けつけてきたようだ。

同族意識なのか？と刃は一体どのくらいの規模のワームが此処にいるのか？と二つの事を考えていた。

「響鬼さん、ここは俺と飛翔で片付けるので下がってください。」

「ん？そうだな、俺の技じゃ一気に倒す事は出来ないしな。任せたぜ。」

響鬼は刃に言われた通り周りのワームを倒すと後方に下がった。

「飛翔、行くぜ。」

デイガイドはデイケイドに金色の紋章が描かれたカードを見せながらいった。

「ああ、待ってたぜ。」

そう言つとデイケイドも自身のカードを取り、二人は同時にそれぞれのドライバーに装填した。

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DEGAIDE』

たちはなに帰ってすぐ俺は部屋に行きサヤに体を診てもらった。レヴァと飛翔は邪魔になっては行けないともう一つの部屋に居る。サヤは両手を青く光らせかざして目をつぶっていた。こうする事によって俺の体の状態などが分かるらしい。

「マスター、終わりました。」

サヤが目を開け言った。

「どうだった？」

「マスターが言った通り麗華さんの魔術による後傷症のようです。」

「そうか。で治せるのか？」

「治せるには治せますけど無理に治そうとすると逆にジョーカーとのバランスを崩しかねないので自然に治るのを待った方が良いでしょう。」

「なら仕方ない。暫くはこのままだな（もしかしたらジョーカーの力を使う時が来るかもしれないしな）。」

「マスター？」

「いや、なんでもないさ。そろそろ寝るか？」

こうして一日が過ぎていった。

第19話『H・虫と妖怪と惑う鬼』（後書き）

諸事情により無しにします。

第20話『H・動く虫』（前書き）

お待たせしました、第20話です。

此方の諸事情により前20話と19話を統合したのでこれを20話とします。

それでは、どうぞ。

第20話『H・動く虫』

次の日、たちばなでのんびりしていた俺の所に一人の女性が来た。

「貴方が黒滅刃ですか？」

「ん？そうだが何か用か？」

女性は長い茶髪でスレンダーな体型にビジネススーツを着た女性だった。

「私は美川咲、みかわさき寺切隊長の補佐をやっている者です。隊長が貴方と話をしたいと言う事なので御同行お願いしますか？」

話ねえ？まあ断る理由も無いし良いか。

「分かったでも後一人連れて行くぞ？」

「分かりました。」

俺はサヤを呼び、美川の案内について行った。

案内されたのは港近くのカフェテラスだった。どこかのビルにでも連れていかれるのかと思っていただけあって少々意外だった。

「咲、案内ありがとう。」

「っ！？隊長、任務中ですよ！」

「ははは、そうだったなすまん。気を悪くしたか？」

「いえ／＼」

咲と名前で呼ばれたからか美川は顔を赤くしていた。

「別に俺達がいるからって、気を使わなくても良いけど？」

刃はその光景を見ながら言った。

「べ、別に隊長と私はそんな関係では「じゃなんで顔を赤くしてい

るんだ？」っ！？そ、それは・・・／＼」

「刃、そろそろ俺の秘書を弄めるのをやめにしてくれないか？」

「・・・俺を呼んだのは何故だ？」

「まあ、コーヒーでも飲みながら話そうじゃないか時間はあるだろう？」

俺はコーヒーをサヤはフルーツジュースを頼んだ。

俺達は飲み物を飲みながら話をしていた。

「ワームがか？」

「ああ、どうやら何体かのワームは君が言っていた魔化魍の養育者である童子と姫に擬態して魔化魍を育てていることがわかった。だが、何故奴らがそんなことをしているのかまでは分からなかった。」

「そうか。けどこれが有力な情報になっているには変わらない、ありがとうここまで調べてくれて。」

「何、困った時はお互い様だしな。」

そう言う僧はコーヒーを飲みんだ。俺達もそれに習って飲み物を飲んだ。喉を潤すと僧は言った。

「そっちは？」

「ああ、どうやらこの街には今ワームのリーダー格らしき奴と魔化魍の火車が居る。」

「ワームについては知っていたが魔化魍までか。分かった部下に探らせてみる、情報ありがとう。」

と言って僧は席を立ちつられて僧の隣で紅茶を飲んでいた美川も立ち上がった。

「いや、こっちこそ情報を貰ったんだお互い様さ。・・・気をつけろよ。」

「そっちこそな。」

「隊長、そろそろ。」

「また何かあったら連絡する、それじゃ。」

僧と美川は伝票を持ち行った。それを見届けてからサヤが口を開いた。

「まさか 恋人 と 隠者 がこの時間で結託していたと思っているんですか、マスター？」

「あくまで可能性の一例でな。まあ大方あのリーダー格のワームが考えたとしても思っておくさ。」

「そうですね。くれぐれも無茶はしないで下さい、まだジョーカーとのバランスは完全に戻っていないので。」

「分かっているさ。」

俺とサヤもたちはなへと戻って行った。

その日の夜、俺がたちばな店内でお茶を飲んでいると明日夢がやってきた。

「明日夢か？どうしたんだこんな時間に？」

「実はヒビキさんに会いたくて来んだけどいるかな？」

すると、奥からヒビキが出てきた。

「おう、どうした少年？こんな時間に？」

「あ、あの少し良いですか？話を聞いてもらいたくて。」

「話かあ？でもなあ？」

珍しくヒビキさんが困っていた。どうせおやっさんと日菜佳さんが心配なのだろうと思い俺は助け船を出した。

「行ってきなよ、俺の他にアイツ等もいるんだ、心配することは無い筈さ。」

「刃。でもなあ。」

「くどいぞ。俺が良いって言っているんだ、行ってやれよ。」

「サンキュ。」

ヒビキは刃に敬礼のようなポーズして、明日夢を連れて行った。

「……………慣れない事をするもんじゃないな。さて、部屋に戻るか。」

刃は残っていたお茶を一息に飲むと部屋へと戻って行った。

次の日、たちばなでの部屋でレヴアのディザンドライバーの調整と改造をしていると突然声が聴こえてきた。どうやらヒビキさんと誰かが話しているようだ。

「じゃあ、みたらし団子お願い！」

「みたらし団子ね？」

そう言うヒビキさんが奥に来た。しかも、みたらし団子の準備に取り掛かったのかと思ったがどうやら違う物を作るようだ。

「何してるんですか、ヒビキさん？」

と飛翔がヒビキさんに聞くと、

「？おお、少年か！いや、ちよつとあの子に折角だから限定商品の物でも食べさせようと思ってな。」

店内の椅子に腰かけている少年を指しながら言った。あれは確か桐矢京介とか言う明日夢と一緒に居た奴だったな？

「へえ、そうですか。あ、俺はちよつとサヤを連れて外に出てくるので飛翔とレヴアの事お願いします。」

「気をつけてな。」

俺はレヴアに調整と改造が終わったディザンドライバーを渡しサヤを連れて外に行った。途中で桐矢とかいう奴が俺を睨んでいたが俺は気にせずに素通りした。

外に出た俺は暫くディガイザーに乗りあちこちを走っていた。すると後部座席に乗っていたサヤが何かに反応した。

「マスター！近くに魔化魍です！」

「分かった。しっかり掴まっておけよ。」

俺はディガイザーのスピードを上げながら魔化魍の反応へと向かって行った。

着いた場所には先日逃した火車と威吹鬼さんがいた。どうやら威

吹鬼さんの音撃管・烈風では攻撃力が足りずに苦戦しているようだ。近くに行こうとしたらそこに丁度凱火に乗ったヒビキさんとディケイダーに乗ったレヴァと飛翔が着た。ヒビキさんはヘルメットを取ると音角を使い響鬼に変身し、火車に向かって行った。それに気づいた火車は響鬼に火の輪を放ったが響鬼はそこから更に響鬼・紅に二段変身し火車に殴りかかった。

「は、は、さ、せりゃ！」

響鬼・紅は華麗なフットワークと格闘術を使いながら火車を徐々に追い詰めて行った。火車をそれから抜けようと狐の様な状態から火の輪の状態に変わって、響鬼・紅に攻撃したが響鬼・紅はそれを音撃棒・烈火を使いはじき飛ばした。

「行くぜ！」

「グルルルルルルルルルル！」

響鬼・紅は戦いの決着をつけるべく烈火を振り上げながら火車に走りよった。

「音撃打・灼熱真紅の型！」

火車は避けることが出来ずまともにくらいその身を枯れ葉に変え消滅した。

「よし、気分爽快。」

「響鬼さん、ありがとうございます。」

「気にするな、威吹鬼。」

二人が和こんでいると刃が割って入ってきた。

「響鬼さん、和こんでいるところ悪いですがまだ終わっていないようですよ。」

刃が言うところ童子と姫更にサナギ体のワームが出現した。

「な、なんですか此奴らは？」

「あれはこの前出てきた・・・」

出たな、しかも童子と姫が居ると言うことはこいつらだな火車を育てたのは。

「私達の子をよくも！」

「この怨み晴らさせてもらっ！」

「よく言っな。奪った姿と記憶なの？」

「それでも。」

「貴方達を殺す。」

そう言っつと童子と姫はその姿を本来のワームの姿であるシロアリに似たフォルミカルビュスワームとフォルミカルビュスワーム・オキユルスへと変えた。

「あの童子と姫まで！」

「響鬼さんと威吹鬼さんは下がって下さい、ここは俺達に。」

「でも！」

「威吹鬼、刃に任せるぞ。」

「え？」

「刃だけじゃなくて少年達も居るんだ。任せても大丈夫だろ。」

と響鬼は言いながら下がった。それを見た威吹鬼も渋々と言った様だが下がってくれた。それを見届けた刃はサヤに指示を出した。

「サヤ、響鬼さん達の周りに結界を張って待機していてくれ。ワームがクロックアップで行く可能性があるからな。」

「分かりました、マスター。」

サヤも響鬼達の所まで下がりその周りに通常では見る事の出来ない結界を張った。

「行くぞ、レヴァ、飛翔。」

「ああ。」

「待ちかねたぞ、刃。」

三人はそれぞれのドライバーを取り出し刃と飛翔は腰に付け、三人はカードを出し装填した。

「変身！」

『KAMEN RIDE DEGAIDE』 『KAMEN RIDE DEZANDE』 『KAMEN RIDE DECADE』

「レヴァ、雑魚は任せた。俺は飛翔と成虫を狙っ、行くぞ飛翔！」

三人はデイガイド、ディザンド、ディケイドに変身しワーム達に

向かった。

「おいおい、雑魚と言ってもこの数を私一人でか？」

まったく刃の奴後で覚えておけよ。

ディザンドの前にはおよそ二十体近くにサナギ体ワームが居ただが、ディザンドは臆することなくドライバーを構えた。

「信頼されているのなら期待に応えないとな。」

ディザンドは走り出し近くに居たワームを切り裂いた。切り裂かれたワームは緑の炎を上げ爆発した、それが開戦の合図となりサナギ体のワームはディザンドへと突っ込んできた。ディザンドは冷静に対処し一端ワームから距離を取り、カードを装填した。

「ワームが相手なら！」

『KAMEN RIDE KICK HOPPER PUNCH
HOPPER』

ドライバーを振るとディザンドの目の前に 仮面ライダーキック
ホッパー と 仮面ライダーパンチホッパー が現れた。

「行くぜ、相棒！」

「兄貴と一緒にならどこまでも。」

キックホッパーとパンチホッパーはワームへと殺到していった。

その間にとディザンドはここで重大な事に気づいた。

「しまった！？他の武器が無いじゃないか。」

ここで説明するがディザンドの新たな力にはどうしても他の武器が必要である。しかし、ディザンドの周りにはそれが無い状況なのである。そんな訳でディザンドが考えていると、

「レヴア、これを使い！」

「え？」

ディガイドがディザンド目掛けて何かを投げた。それをキャッチするとそれはサモンドライバーだった。

「恩にきるぞ、刃！」

デザイナーはすぐにドライバーへとカードを装填した。

『ATTACK RIDE SWORDZECTOR』
するとサモンドライバーはサソードゼクターへと姿を変えた。

「これが新しい力か、良し！」

デザイナーは右手にデザイナードライバー、左手にサモンドライバーを変化させたサソードゼクターを持ちワームを切り裂いていった。

「は！」

「ふ！」

キックホッパーとパンチホッパーも持ち前の格闘術でワームの数を的確に減らしていった。

『ATTACK RIDE CROSS ATTACK』

ある程度減ったことを確認したデザイナーは止めを刺す為にカードを装填した。認証音声が流れるとキックホッパーとパンチホッパーは動き出した。

「「ライダージャンプ」」

『RIDER TUMP』

「「ライダーキック（パンチ）」」

『RIDER KICK』 『RIDER PUNCH』

キックホッパーはライダーキックをパンチホッパーはライダーパンチをそれぞれの脚や腕に付いているアンカージャッキを使い連続で決めた。しかしそれでもワームは少量残っていた。

「なら、これで！」

デザイナーは再度カードをドライバーに装填した。

『FINAL ATTACK SA・SA・SA・SWORD』

「はああああああ！」

デザイナーはサソードゼクターを使いライダースラッシュを放ち残りのワームを倒した。

「行くか、相棒？」

「そうだね、兄貴。」

ワームを倒し終えたのを確認したのかキックホッパーとパンチホ

ツパーは消え去っていった。同時にサソードゼクターも元のサモンドライバーへと戻った。

「さて、刃達の所に行くか。」

ディザンドは呟くとディガイドとディケイドの元へと向かった。った。

サナギ体のワームをレヴァに任せサモンドライバーをレヴァに投げた俺と飛翔は成虫体ワームであるフォルミカルビュスワームとフォルミカルビュスワーム・オキュルスの前に立った。

「飛翔、カブトと鍬形で一氣に片付けるぞ。」

「でも、刃さんZECTの奴らが辺りにいるかもしれないから使わない方が良くないじゃ？」

どうやら飛翔はZECTが居るのにカブトと鍬形・・・ガタツクのカードは使っても大丈夫なのか心配しているようだ。

「ああ、そのことなら大丈夫だ。実は他の場所でもワームが出現しててな、ZECTの奴らにはそっちにいらしてもらっているだから・・・」

ディガイドはガタツクのカードディケイドに見せながら言った。

「思いつき行くぞ！」

「ああ！」

ディケイドもカブトのカードを取り出した。

「変身！」

『KAMEN RIDE GATACK』

『KAMEN RIDE KABUTO』

電子音と共にディガイドはディガイドガタツク（ディガイドはDと表記します）に、ディケイドはDカブトへと変身した。

「は！」

俺は両肩に付いているガタツクダブルカリバーを構えながら飛翔はカブトクナイガン・クナイモードを構えフォルミカルビュスワームとフォルミカルビュスワーム・オキュルスへと切りかかった。

「は、は、せりゃ！」

DGガタツクは二本のカリバーを巧みに使いフォルミカルビュスワーム・オキュルスを切り裂き、

「は、は！」

Dカブトはカブトクナイガンでフォルミカルビュスワームに袈裟斬りを食らわせた。そして二人はほぼ同時に二体を蹴り飛ばした。

「決めるぞ！」

DGガタツクとDGガタツクの声に反応したDカブトは止めのカードを装填した。

『FINAL ATTACK RIDE GA・GA・GA・GA
TACK』

『FINAL ATTACK RIDE KA・KA・KA・KA
BUT』

二人は同時に飛び上がり二体に ライダーキック を放ち倒した。

二人がフォルミカルビュスワームとフォルミカルビュスワーム・オキュルスを倒すとその場にデザインドが駆け寄ってきた。

「二人とも大丈夫か？」

「誰の心配をしているんだレヴァ？無事に決まっているだろ。」

「そうだよレヴァさん、大丈夫だって。」

「そうだな、なに心配しているんだろうか私は。」

三人は同時に変身を解きながら言った。

「さて、あんまりサヤを心配させるのもあれだな、ヒビキさん達の所に戻るか？」

そう言っ て刃達はヒビキ達の所へと戻っていった。

「おのれ仮面ライダーめ！この怨み晴らさせてもらっ ぞ！」
その頃、ビルの上にいた男は街を見ながらそう呟いていた。

俺はヒビキさん達と合流し、たちばなに帰っている最中に自分の右腕を見ながら考え事をしていた。

《もしあのワームが 隠者 の息がかかった奴なら……ジョーカーの力と 蒼 の力を使わなくてはいけないな》

本来あつてはならないイレギュラーの力と神の影響が無い俺が【破壊】した世界の力……使わなくても良い自体になれば良いが。

第20話『H・動く虫』（後書き）

（後書きコーナー）

サ「今回はワームが本格的に動きましたね。」

レ「そうだな、まあ私達の敵じゃないがな。それよりも新しく出てきたデザイナーライバーの力を説明してくれよ。」

サ「そうですねでは説明します、作者さん。」

斬「結局俺かよ、まあ良いや。今回出た新しい力は武器を他のライダーの武器に変える力だ。因みにこれは元々デザイナーライバーに備わっていた『解析』の力を限定的に戻した物だから厳密には新しい力とは言わないな。けど他の『DCD』シリーズ以外のライダーが限定的だが他のライダーの力も使えるから結構強いぞ。」

レ「なるほど、確かに便利だな。」

サ「それあの最後のマスターの言葉は一体なんですか？」

斬「次回に説明するが、まあ知る人は知っているあの力だ。」

サ「マスターを一体どこまでチートにするつもりですか？」

斬「さあな。海人様、天の道行く妄想者様、感想ありがとうございます。」

レ「次回は？」

斬「響鬼の物語編の終わり・・・・・・・・の予定です。」

サ「はつきりしないですね。」

斬「それは仕方ないさ。」

サ・レ・斬「それは、次回で。」

第21話『H・装甲する鬼、破滅の断片』（前書き）

お待たせしました、第21話です。

今回はまさかの16000字前後あります。

これで響鬼の物語編は終わりです。

それでは、どうぞ。

第21話『H・装甲する鬼、破滅の断片』

次の日、どうやらおやつさんと日菜佳さんの風邪は治り二人は元気に仕事をしていた。だが、久しぶりに出てきたらしいみどりさんが言ったある一言によってこの空気は壊れてしまった。

「小暮さんがいらっしやるって！」

「こ、こ、小暮さんって・・・あの小暮さん？」

「はい。」

この一言によりおやつさんは気が動転しかけていた。・・・ひとと波乱ありそうだな。

あの後、俺と飛翔はトドロキさんとヒビキさんの調査の手伝いをしていた。因みに俺はトドロキさんの、飛翔はヒビキさんのサポートについている。それぞれの場所についていた俺達は一斉にディスクアニマルを放った。だが暫くして戻ってきたアニマル達には当たりはいなかった。その後、トドロキさんはその事を報告する為にヒビキさんに連絡していた。

「あ、ヒビキさんすか？そっちどうすか？こっちは全然当たりこないすけど？」

「こっちも全滅そうだ、まあじっくり攻めようよ？」

「いやーヒビキさん、あれじゃないすか？姫も童子も全滅したってことすかねえ？俺達結構やつけたし？」

それを聞いた俺はトドロキさんに言った。

「それはないですよ、トドロキさん。アイツ等はまだ残っている筈ですよ。」

「そうすかね？」

「そうですよ。」

その後、電話を終えた俺達は残りのアニマルが戻ってくるのを待った。暫くするとディスクアニマルの一匹である瑠璃狼るりおかみが戻ってきた。それをトドロキさんが音錠で解析するとどうやら当たりだったようだ。トドロキさんはすぐに携帯でヒビキさんに連絡した。

「あ、ヒビキさん？きました、当たりです。」

「場所はこの近くの川原ですね。」

俺とトドロキさんは途中でヒビキさんと飛翔と合流し、魔化魍の居る川原へと向かった。川原に着くとヒビキさんとトドロキさんは素早く音角と音錠を使い響鬼と轟鬼に変身した。

それを見ていた飛翔は一向に変身しない刃にへと聞いた。

「なんで変身しないんだ刃さん？」

「《あれはスーパー童子とスーパー姫か》ん？まあ、待て。俺達の出番は二人が危なくなってからだ。」

そうして戦いを見ているとスーパー童子とスーパー姫は強く二人を川に吹き飛ばしどこかへと行ってしまった。吹き飛ばされた二人は二手に別れて追うそうだった。

「飛翔、お前はヒビキさんの方に行け。俺はトドロキさんの方に行く。」

と言うと俺等も二手に別れて二人を追っていった。

轟鬼さんと一緒にどこかに行ったスーパー童子を探していたが森に入って暫くした所で見失ってしまった。

「は、あれ？いないなー？・・・はあ。」

そう言いつつトドロキさんは顔の変身を解いた。

「だめだ、どこいったんだ奴らは？」

「まあ、見失ってしまったから仕方ないですよ。」

「はあ。」

トドロキさんがため息をつきながら歩いていると、
「わあーーーーー!？」

いきなりトドロキさんの体が空中に逆さまで飛んでしまった。どうやら簡単な縄の罠に引っかけたしまったようだ。

「わ、わ、わ、なんだこれ？」

「未熟者！」

トドロキさんがパニックになっていると何処からか声と共に「バシ！」と言う音が鳴った。どうやらこの罠を作った者がトドロキさんの尻を何かで叩いたようだ。

「おい、なんだよ!？」

「トドロキさん、落ち着いて。今降ろしますから。」

俺はサモンドライバーを出し、縄を撃ちトドロキさんを降ろした。

その頃飛翔と響鬼は、刃達と同じ様にスーパー童子とスーパー姫を探していたが見失ってしまったていた。

「見失ったな。」

「一体奴らは何処に？」

そう言つとヒビキも顔の変身を解いた、するとどこからか何かがヒビキ目掛けて飛んできた。ヒビキは反射的にそれを弾いた。

「ん？竹？」

「なんでいきなり竹が？」

飛翔が言つといきなり周辺から大量の竹が降ってきた。

「ハ、ハ、ハ、テリヤ！」

「ハ、ハ、ハ、サ！」

それを飛翔とヒビキは反射的にかわしたり脚や手で弾いたりした。
「誰だ？せこい攻撃する奴は？」

するといきなり白い物体が飛んできた。ヒビキがそれを反射的にキャッチするとそれは豆腐だった。

「豆腐？」

「なんでこんな所に？」

その時何かが「バシ！」と音を建ててヒビキの尻を叩いた。

「ちよつとー誰だよ？」

「未熟者！」

ヒビキが言うのとドロキの時と同じ声がヒビキに言った。それ以降は何も起こらず二人はさっきの出来事に呆れながらも刃とドロキとの集合場所に向かって戻っていった。

その後、たちばなに帰った俺達はそのまたたちばなの手伝いに戻った。なんでも小暮さんが来る前にたちばなをピカピカにしないといけないらしい。もちろん俺は飛翔とレヴアに任せて奥に引っ込んだがな。もちろん理由はあのまま出ていると客から女扱いされるし、たちばなの女衆に何されるか分かったもんじゃないからだ。

奥の部屋で俺はある物を出していた。それは過去に俺が消滅させた世界の遺物で幅広の刀身を持つ独特な剣だった。俺はそれを感慨深けに見ながら呟いた。

「使わなければいけない自体に成らなければ良いがな。」

「スウウ」

「？」

部屋の襖が開いた音を聞き振り返るとそこにはサヤが立っていた。

「マスター、その大剣は？」

「何、久しぶりに手入れでもしようと思って出ただけさ。」

と俺が大剣をしまおうとすると、

「違いますね。」

サヤが凜とした様子で否定した。

「何？」

「私は知っているですよ、マスターがその剣を日頃からいつでも使えるように手入れをしていた事をまるで贖罪のように！」

サヤにしては珍しく語尾を荒らげながら言った。

「マスター、貴方はまだあの世界の事を。」

その時俺の頭にあの世界の事が浮かんだ。どんな破滅のループだろうがそこから抜け出す為に一人ひとりが懸命に抗っていた世界が。「サヤ、俺はあの世界を消滅させた責任をとらないといけないんだ、例え何があってもな。だからこそ俺がコイツ等を使うのは。」

すると突然空中に様々な武器が現れた。蛇の頭を象った物が付いている鎖や白い鞆に収まった刀や一对の銃など十数個もあった。それを見たサヤはため息を吐きながら言った。

「マスターの決意は分かりました。私はマスターについて行くと決めたのでマスターの決定には逆らいません。」

「サヤ。」

「でもマスター、前にも言ったと思いますが無茶だけはしないで下さい。いくらアンデットの体にも力を持っていると言っても限界はあるのですから。」

「そうだな、そうするさ。それよりもだ、サヤ。」

「はい?」

「お前は俺に用があつてきたんじゃないのか?」

「あ?」

サヤには珍しく忘れていたらしい。まあ、言おうとしてあの場面に遭遇したから仕方無いがな。どうやら小暮さんの歓迎パーティーらしい。たまには悪くないな。

その後、行つて後悔したのは言うまでもない。

暫く小暮さんの歌を聞き、小暮さんが 百年時計 を歌っている時、突然日菜桂さんが携帯を取り出し電話をしていた。それを見た俺は悟った。スーパー童子とスーパー姫を見つけたのだと言う事を。日菜桂さんが電話を切るを予想した通りの事だった。どうやらイブキさんが戦っているらしくあきらが応援を呼んでいるようだ。俺達は歌っている小暮さんを置いて現場に向かった。途中で一端トドロキさんが抜けたがすぐに追いついてきた。着いた時には威吹鬼さん

はスーパー童子の攻撃をくらい吹き飛ばされていた。それを見たヒビキさんとトドロキさんはすぐさま音角と音錠を使い響鬼と轟鬼に変身した。この時、俺達は変身していなかった。理由はまたワームが出てきた時に対応出来るようにとあんまり歴史に影響を与えないようにする為である。

「待たせたな。」

「響鬼さん！」

三人は連携を使いながらスーパー童子とスーパー姫に攻撃をしていくがスーパー童子とスーパー姫は舞っている様な攻撃で逆に三人を吹き飛ばしてしまった。すると突然突風が吹いたかと思うとそこから地獄の番犬ケロベロスを模した様な魔化魍が現れた。

「カッコイイ！」

「カッコイイ。」

スーパー童子とスーパー姫は子供の様に無邪気に喜んでいた。するとその魔化魍は三つの頭で響鬼達に攻撃してきた。

「くっそー、こうなったら！」

アムドセイバー

すると轟鬼は車に戻り、車から装甲音刃を出した。装甲音刃を構えた轟鬼は下に付いているスイッチを押し起動させたが突然弾きとばされ変身が解けてしまった。

「トドロキ、こいつは駄目だろ！」

と言いつつも響鬼が使ってみたがやはり結果はトドロキと同じで吹き飛ばされ変身が解け、装甲音刃もスーパー童子に盗られてしまった。しかしあるうことかスーパー童子とスーパー姫はお互いに装甲音刃を奪い合いながらどこかへ行ってしまった。

「やったー盗ったー。」

「あー返せー！」

その間に三つ首の魔化魍は威吹鬼を吹き飛ばし、その身を枯れ葉に変え消えてしまった。さらにスーパー童子とスーパー姫も装甲音刃を奪い合いながらどこかへ行ってしまった。

「なんなんすかね、アイツ等？」

何もできなかったヒビキ達は苦虫を噛み潰した顔をしながらたずんでいた。

その後、たちばなに帰ったヒビキさん達はみどりさんに連れられ地下の研究室に行った。なんでも何故変身できなくなったのか調べるそうだ。その間に俺はサヤにあることを頼んだ。

「サヤ、俺は少しの間ある場所にレヴァを連れて行ってくる、その間飛翔の事を頼む。何かあれば連絡をしてくれ。」

「何処に行くのですか、マスター？」

「ああ、恋人の所さ。」

話を終えた俺はおやっさんにサヤと飛翔の事を頼んだ後、レヴァを連れて行った。

あれから三時間ぐらい経過した頃だろう、俺とレヴァは山道を歩いていた。

「おい、刃！こんな山に一体何の用があってきたんだ！」

後ろでレヴァが不満を漏らしていた。まあ、不満を漏らすのも仕方ないだろう何故ならこの山に入ってから今までレヴァは一人で襲ってくる魔化魍と戦っていたのだから。俺か？俺は勿論傍観していたよ。因みに魔化魍をこっちに寄せ付けないようにすることも出来たがレヴァの戦闘経験を増やす丁度良い機会だと思いそのままにしていた。

「そうだな、此処まで来たんだそろそろ話しても良いか。実はなこの山には 二十二の神 の一柱である 恋人 が居るんだ。」

「は？確か前にお前から聞いた話ではお前の主である 皇帝 っていう神がこの世界を統治してお前達 アンデット 皇帝の下僕 は皇帝の手足となって敵対している他の神からこの世界を守護している……だったか？」

「ああ、大体合っている。そして今から会う 恋人 は敵対側だ。」

「まさか倒すのか？」

レヴァは真剣な顔になりながら聞いた。

「いや、今倒したら歴史を狂わすことになるしな。会うのは聞いた
い事があるからさ。」

「聞きたい事？」

「行けば分かるさ。」

そういうとレヴァは何も言わず黙々と歩いた。それから暫くした後、サヤから念威があった。内容はなんでもヒビキさんとトドロキさんが変身能力を取り戻す特訓を小暮さんから受けるから飛翔も同行したいというものだ。俺はサヤにお前が様子を見ているのなら良いぞと返事をした。まあ、サヤがいればアクシデントは無いに等しいからな。

あれから、さらに1時間ほど歩いてやっと目的地に着いた。目的の場所とは森の中にある洋館だった。俺はノックもせず洋館の中へと入っていった。入っていった洋館の中は日光に照らされて以外と明るいうだ。

「誰もいないのか？」

そうレヴァが呟くと、

「誰か入ってきたかと思えば皇帝の下僕か。」
アンデット

奥から着物を着た男女が出てきた。

「初めましてだな 恋人。今日は聞きたい事があって来たんだ。」

「聞きたい事？ふむ、実験も波動を抑える為に待たねばならないし敵である筈の者が何を聞きたいか興味もある・・・よし、話を聞こうじゃないか。」

「では、聞こう。この頃、鬼達の前にワームが出始めている。それにお前達は関与しているのか？」

「ワーム？・・・ああ、隠者の虫か。あんな虫共に興味は無いし手を組む義理もないな。それに分かっているだろ僕達にとって

は実験の方が大事なんだ。」

「そうか、邪魔したな。」

と言つて刃はレヴァを連れて出て行こうとした。

「待ちたまえ。こっただけ情報を出してそっちは無いと言うのは無いんじゃないか？それに君は 皇帝の下僕 の筈だ。僕達をほおつておいて良いのかい？」

「…… コダマ には氣をつける。」

「コダマ？」

「それとここでお前を滅することは陛下も望んでいないだけだ……
……俺から言えるのは此処までだ。行くぞレヴァ。」

刃はレヴァを連れ洋館から出た。

「ねえ、あの子達あのまま返して良かったの？」

女は男に疑問を出した。

「下手に手を出して 皇帝 に目をつけられたら厄介だからね。それにあんな少女達を無闇に殺すほど僕も堕ちてはいないからね。」

男は女の疑問に答えた。

「ん？今、何か聞こえなかったか？」

「いや、何も聞こえていないと思うがどうかしたか刃？」

刃は首を傾げながら言った。

「いや、もの凄く氣に触る事を言われた氣がしたが？空耳だよな？」

刃は疑問を浮かべながらもたちばなへと戻って行った。

森から出てディガイザーで道に戻っている最中、刃はある氣配を感じた。

「これはあの時の改造魔化魍の氣配か？それにこれはまさか……
……！」

その時、サヤから念威が入った。

《マスター、魔化魍とワームです。こっちでも日菜佳さんから連絡があつたので先に行っています。》

《こつちでも感じた。すぐに行く。》

刃は念威を切った。

「どうしたんだ刃？」

「レヴァ、ルート変更だ。魔化魍が現れたそれにワームもだ。しっかり捕まっている！」

「は？え？ち、ちよつと待てー！ー！」

刃はレヴァの静止を聞かずにディガイザーのスピードを上げ気配があつた方向へと向かった。

着いた時には状況は響鬼達の有利になっていた。どうやら鬼への変身能力も小暮さんの特訓で元に戻つたらしい。さらに響鬼はスーパー童子が持つていた装甲音刃も叩き落とす事で取り返し、響鬼はそれを使い装甲響鬼へと強化変身を果たした。

「ほう、鬼への変身能力をこんな短時間で取り戻ただけでなく装甲音刃まで使えるようになるとは。」

「刃さん。」

「マスター遅いですよ。」

刃はサヤと飛翔の元に行きながら言った。

「まあ、そう言うなよ。それでも急いで来たんだ。」

「ひ、酷い目にあつた。」

刃の後ろからレヴァが酷い顔をしながら現れた。それを見た二人は、

《《此処に来るまでに一体何が？》》

と刃に恐怖心を抱いていた。

刃達が話をしている最中に改造魔化魍と響鬼の戦いは進んでいた。装甲響鬼となつた響鬼は装甲音刃を使い自分の音撃を最大限まで上げ装甲音刃の刀身に炎の剣を出し切り裂く。鬼神覚醒で改造魔化魍である鎌鼬を切り裂いた。

「やった！流石響鬼さんだ。」

飛翔は純粹に響鬼を褒めていた。スーパー童子とスーパー姫は鎌

鼯が倒されたのを見るとそのまま逃げるように帰っていった。このままワームの介入が無くこの場を終わるかと思われたが、

「さっさと出てこいよ虫ども、居るのは分かつているぞ。」

「我らの気配が分かるとはやはり貴様、皇帝の下僕か？」

森から出てきたのはこの間、刃に刺されたあの男だった。

「下僕ね、一体何の事だ？」

刃は男が言った下僕と言う言葉に反応しながらも男を注意深く観察しながら聞いた。

「しれた事を、我が主は何でもお見通しだ。だが、分からんな。」

「何？」

「何故、人間でも無い貴様が人間を助ける？」

「な!？」

「刃が人間じゃないだと？」

「じゃまさか、魔化魍じゃ？」

上から威吹鬼、響鬼、轟鬼はそれぞれ反応していた。その反応を見ていた刃は苦い顔をしていた。その様子を見ていた男は周りからサナギ体のワームや童子、姫に擬態したワームと魔化魍を呼びながら言った。

「所詮、化け物の貴様には何も出来ない。そのまま散れ！」

男は一斉に攻撃命令を出した。それに対して

「おい、刃さん。確かにあんたはあの男が言った通り人間じゃない、でもそれがどうした？」

「飛……翔？」

飛翔は刃に語った。

「おやつさんから聞いたことがあるんだ。戦国時代、当時の鬼達は人々から魔化魍と同じ様に忌み嫌われていた。それでも鬼達は例え化け物と罵られても人々を魔化魍から守ったらしい、どうしてだと思っ？」

「……それが使命だからか？」

「いや、人が好きだったからだそうだよ。例えば自分の身が人間じゃ

なくも人を護る、刃さんあんたと何処が違うって言うんだ？」

「そうだが、刃。例えお前が人間じゃなくてもお前は俺等の仲間だ。」

「そうすつよ。刃は俺等の仲間す。」

「僕達を助けてくれた借りをまだ返していないしね。」

「飛翔、響鬼さん、轟鬼さん、威吹鬼さん。俺は・・・俺は！」

刃は四人の顔を見ながら呟いた。

「マスター、行きますよ。」

「刃、先はまだ長いんだ。こんな所で腐っているわけにはいかない筈だぞ。」

「サヤ、レヴァ。俺は・・・！」

「ぐぬぬぬぬ、貴様ああああ、貴様等に一体何者だ！」

男は飛翔と刃を指差しながら言った。それを聞いた刃と飛翔は腰にドライバーを付けながら男の方を向いた。

「俺は自分探しの旅をする通りすがりの（全てを断罪する）仮面ライダーだ！覚えてなくていい（記憶に刻み込んどけ）！」

「全員殺せーーーー！」

男は配下の奴らに指令を出した。だがそこに数々の銃弾が飛び敵の出鼻をくじいた。刃達が銃弾が飛んできた方向を見るとそこにはゼクトルーパーを率いた僧と美川がいた。因みに美川も今回はゼクトルーパーの服を着ていた。

「僧、遅いぞ。」

刃が言うつと僧は刃の近くにきながら言った。

「これでも急いできたんだ。それに間に合っただろ？」

僧は笑いかけながら刃に言った。それを見た刃は笑い返しながら前を見た。

「行くぞ、みんな。」

刃がカードを出すのを合図に飛翔とレヴァも同じ様にカードを出し、僧もザビーゼクターを呼び出した。

「『変身』」

『KAMEN RIDE DEGAIDE』
『KAMEN RIDE DECADE』
『KAMEN RIDE DEZANDE』
『HENSIN』

四人は一斉にディガイド、ディケイド、ディザンド、ザビーに変身し、敵へと向かっていった。

「ゼクトルーパー隊、撃てーーーーー。」

ザビーの号令の元ゼクトルーパー隊の面々は一斉にサナギ体ワームに向けてマシンガンブレードの銃口を向け発砲した。どうやらいつも僧のつかかっていた針治も今回は何も言わずに仕事をしていた。集中砲火を受けたサナギ体ワームはその身を次々と緑の炎へと変えていった。中には成虫体になったワームもいたがその時はキャフトオフライダーフォームとなったザビーがライダーステイングを食らわせ倒していった。

「行くぜ、少年！」

「はい、響鬼さん！」

ディガイドは元に戻った響鬼、威吹鬼と共にワームやワームが擬態した童子、姫の相手をしていた。この三人はディケイド、響鬼が前に出てライドブッカー・ソードモードで切ったり、音撃棒・烈火で打撃を食らわしたりし討ち漏らした奴を下がっている威吹鬼が音撃管・烈風で撃ち倒していた。更に、

「鬼棒術・烈火剣」

『ATTACK RIDE SLASH』

響鬼は烈火の先端から火の剣を、ディケイドは刀身をマゼンダ色の分裂させ敵の数を減らしていった。

「ハアアアアアアア！」

ディザンドは轟鬼と共にそれぞれの愛剣で敵を切り裂いていった。

「まだまだいくつすよ！」

そう言つと轟鬼は己の拳に電撃を纏わせ、敵を殴りつける 鬼闘術・雷撃拳 でワーム共を倒した。それを見ていたディザンドは、
「私も負けられんな。」

と言うとカードを一枚ドライバーに装填した。

『ATTACK RIDE SONICBOOM』

「ハ！」

ディザンドがドライバーを一振りすると斬撃が飛び、ワームを一斉に倒した。

「ハ、ハ！」

ディガイドは右手にサモンドライバー、左手にライドブッカープロト・ガンモードの両手持ちでワームや擬態童子、擬態姫の数を減らしていた。

「・・・多いな。」

ディガイドは小さく呟くとカードを二枚取り出し一枚をドライバーにもう一枚をサモンドライバーに装填した。

『ATTACK RIDE BLAST』

『ATTACK RIDE SLASH』

ブラストの効果で左手のライドブッカープロトが放つ銃弾は黒色に分裂し、サモンドライバーの斬撃も黒みがかつた銀色に分裂し敵の数を更に減らしていった。

「そろそろ頃合だな。」

ディガイドはそう言つと金色の紋章が描かれたカードを取り出し

装填した。

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DE
GAIDE』

ディガイドは デイメンションキック を目の前に残っていたワームへと放った。するとそれに呼応してか、

「ライダーステイング」

『RIDER STING』

ザビーはザビーゼクターのフルスロットスイッチを押し ライダーステイング を、

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DE
CADE』

「ハアアアアアアア！」

ディケイドはディガイドと同じ様に金色の紋章が描かれたカードをドライバーに装填し、

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DE
ZANDE』

「ハ！」

ディザンドも金色の紋章が描かれたカードをドライバーに装填し強力な斬撃を飛ばす デイメンションブーム をそれぞれの目の前に残っていたワームや擬態童子や擬態姫へと放ち倒した。

「これで終わりだな。」

全ての敵を倒したディガイド達は男の前に集まった。しかし男は顔に憤怒の表情を浮かべながらも、

「まだ終わりでは無い、行けバケガニよ！奴らを薙ぎ払え！」

男がさういうと地面から巨大なバケガニが姿を現した。

「おいおい、まじかよ。」

「な！ゼクトルーパー隊、全員下がれー！」

響鬼とザビーがさういうとバケガニは右の鋏を使ってディガイド達を薙ぎ払った。薙ぎ払われながらもディガイドとディケイドはお

互いの武器でバケガニへと射撃を行ったが効果は余りないようだ。しかしその時ディガイドとディケイドのライドブッカードからカードが飛び出した。どうやら力を取り戻したようだ。

「く、だがそれなら奥の手を使うだけだ……飛翔！」

「え？なんだよ、刃さん。」

「あれをやる、準備しろ！」

「あれ？……了解！」

飛翔は刃が言おうとしている事を察し、すぐに準備に取り掛かった。

さて、響鬼さんはつと……！！

「見つけた！響鬼さん！」

「ん？どうした少年？」

するとディケイドはあるカードを見せながらこう言った。

「響鬼さん、すつごく、くすぐつたいですよ。」

「は？」

『FINAL FORM RIDE HI・HI・HI・HIBI
KI』

電子音が鳴るとディケイドは響鬼の後ろに行き、背中に手を突っ込んだ。すると、響鬼の背中から赤い円状の機械が出てきたかと思うとその身を赤い機械の鳥 ヒビキアカネタカへと変えた。

「しょーねーん！一体どうなってんだ、俺の身体は！」

響鬼はいきなり姿を変えられた事にかなり驚いているようだ。

「響鬼さん、説明は後でするので今はあのバケガニをひっくり返して下さい！」

しかしディガイドはそんな響鬼をせかし、急かされた響鬼は、
「ちょ、ちよつと！……仕方ない、行くぜ！」

一声鳴くとバケガニに横から体当りをし、そのまま懐に入りひっくり返した。響鬼がバケガニをひっくり返している間にディガイドはディザンドとザビーに指示を出した。

「僧、お前はゼクトルーパー隊を下がらせろ！レヴア、お前はこれ

を使って準備しろ！」

そう言つとディガイドはディザンドにサモンドライバーを投げた。

「ああ、借りるぞ刃！」

『ATTACK RIDE ONGEKIZAN RETURAI』

認証音が鳴るとサモンドライバーは轟鬼が持つ音撃弦・烈雷へと変わった。それを見た轟鬼が何か言っていたがそれをスルーしディガイドは、

「飛翔、今だ！」

「はい！」

『FINAL ATTACK RIDE HI・HI・HI・HI BIKI』

すると、ヒビキアカネタカは更に ヒビキオングキコ に超絶変形し、バケガニの腹に付いた。そこにディケイドが飛び乗り手に持った音撃棒・烈火で音撃を始めた。

『ATTACK RIDE BLAST』

更にディガイドはブラストで威力と弾数を増やしたライドブッカイプロトの銃弾でひっくり返つて音撃を受け暴れているバケガニの足を撃ち抜き、動きを一瞬止めた。

「今だ、レヴァ、轟鬼さん！」

「よっしゃー行くつすよー！」

「任せろ、刃！」

『FINAL ATTACK RIDE TO・TO・TO・TO DOROKI』

二人は同時にバケガニへと烈雷を突き刺し音撃を開始した。

「音撃斬・雷電激震！」

音撃の威力が更に上がる中、威吹鬼も烈風でバケガニに鬼石を撃ち込み、烈風に音撃鳴 鳴風 を取り付け音撃を始めた。

「音撃射・疾風一閃！」

そこにディガイドも黒い音撃棒を取り出し、空中に音撃鼓を模した物を創りそこから音撃をしサポートに入った。辺りは鬼達とディ

ガイド達が奏でる音撃の演奏により壮大な風景が広がっていた。

「隊長。」

「これが音撃……。」

美川とザビーも初めて見る鬼の音撃に壮大感を感じていた。

「ハアアアアアアアアア、ハ！」

ディケイドの最後の一叩きによりバケガニは大量の枯れ葉となり消滅した。

「さあ、今度こそ最後だ！」

ディガイドは今度こそ唯一人になった男に言った。

「このままでは、このままでは終わらんぞ——！」

そう言う男はその身を成長体ワームであるフォルミカルビュスワーム・マキシラへと姿を変えた。それを見たディガイドは、

「みんな、ここは俺一人に任せてくれ。」

と言った。そこに譲れない意思を見たディザンドは、

「分かった！みんな、ここは刃に任せよう。」

とディガイドを後押しし、他のみんなもそれに同意し下がっていった。

「サヤ、行くぞ。」

「マスターとならどこまでも。」

ディガイドがサヤを呼ぶとサヤはそれに従いディガイドへと近づきそして……、

「「ユニゾン」」

サヤは光の粒子に変化し、ディガイドの体へと吸い込まれた。するとディガイドの体から神々しいオーラが溢れていた。

「さあ、裁きの時だ！」

「舐めるなよ！餓鬼がー！」

フォルミカルビュスワーム・マキシラはそう叫びながら突っ込み左腕の爪を振りかざしてきた。

「甘い！……ハ！」

ディガイドはその爪をよけ、両手にライドブツカープロト・ガンモードとサモンドライバーを持ち至近距離から銃弾を放った。

「グオオオオオオオオオ！」

「まだまだ！」

『ATTACK RIDE SLASH』

そのままディガイドはスラッシュを使い、フォルミカルビュスワーム・マキシラの体を切り裂いた。それを喰らったフォルミカルビュスワーム・マキシラは反撃として口から蟻酸を吐こうとしたが、

《マスター、攻撃がきます。避けて下さい。》

「了解、フ！」

とユニゾンしているサヤのサポートにより避けられてしまった。

「ハア！」

更に攻撃を避けたディガイドはそのままライドブツカープロト・ソードモードとサモンドライバーで十字に切りはじき飛ばした。

「ぐ、私は・・・私は我が神の力を授かったというのに！」

「所詮、お前はその程度だったという訳さ。・・・これで散れ。」

ディガイドは止めの為のカードを装填した。

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DE
GUIDE』

「ハアアアアアアアア！」

「グアアアアアアアアア！」

ディガイドはワームの魂すら消滅させる為に神の力を込めた。デイメンションキックを放ちフォルミカルビュスワーム・マキシラを完全消滅させた。・・・この時、完全に終わったと思いきや油断しきっていなければこの後の事を防ぐ事ができたかもしれない。・・・。

フォルミカルビュスワーム・マキシラを倒した俺達はそれぞれ変身を解き（鬼の面々は顔だけだが）お互いの苦労を労っていた。

その時、僧の後ろからどこか暗い顔をしながら針治が近づいていた。この時、俺は少し針治の表情に不信感をもったが疲れのせいだと思っってしまった。

「おお、針治！今回はお疲れだったな。」

針治を見つけた僧は手を上げながら近づいた。まさにその時だった針治は僧に対して左腕だけをワームの様な腕に変え、僧を刺した。俺達はそれを見た時、一瞬だけ呆然としたが美川だけは憤怒の表情になりながら、

「隊長！貴様、隊長に何を！」

と言った。しかし当の針治は刺していた腕を引き抜くと元の腕に戻しながら僧の左腕に付いているライダープレスを奪った。

「針治、お前どうして？」

僧は刺された場所を抑えながら聞いた。すると針治は、

「ありがとうよ、隊長。あんたのおかげで邪魔なワーム共を始末する事が出来た。」

と言った。それを言うとは今度は刃を見ながら、

「よう、糞皇帝の下僕！まさかあのワームだけが我らが神 隠者様から力を貰ったと思っっている訳じゃないよな？お前らアイツらを困め。」

といい刃達の周りをゼクトルーパーが囲った。刃は僧を刺された怒りと皇帝を糞呼ばわりされた怒りを内に秘めながらユニゾン中であるサヤに念威を送った。

《サヤ、今すぐ針治を含めたゼクトルーパーを調べろ。》

《はい………結果が出ました。どうやら針治さんを含めたゼクトルーパー全員が ネイティブ です。》

そうか……と頷きながら刃は心の中では自らを戒め続けた。僧が刺されてしまったのは自分がワームばかりに気を取られネイティブの存在を考えていなかったからだ、この状況を作りだしてしまったのは自分が慢心してしまった結果だと。

《マスター。》

そんな時、サヤが刃に話しかけた。

《自分一人のせいとは思わないで下さい、気付かなかったのは私も同じですから最後まで私も一緒にです。》

《サヤ。》

二人が念威で会話をしていると、

「さあて、そろそろお前達を始末しないとな……変身！」

ライダーブレスを左腕に付けた針治はザビーゼクターを呼び出し、ザビー・マスクドフォームへと変身した。

「資格者でもないのにゼクターを呼び出す……上位ネイティブの能力を持っているのか。」

「さあ、これでチェックメイトだ！」

針治の言葉を合図に周りにいるゼクトルーパーは一斉にマシンガンブレードを構えた。

「くそ！」

「俺達、ここまでなんすか？」

レヴァは苛々しげに呟き、トドロキはまるで世界の終わりの様な顔をしていた。

「美川さん。」

「え？」

そんな中、俺は美川さんに話しかけた。

「俺がアイツに突っ込むのでその隙に僧の手当をしてくれ。今ならまだ間に合う。」

「え！でもそれじゃ貴方が！」

「俺は大丈夫です。でも他のみんなが動揺すると思いますのでみんなを静止させておいて下さい。」

ここまで懇願する刃に確固たる意思を見たのか美川は引き下がった。

「分かったわ。気を付けて。」

その言葉を聞いた俺はザビーを見ながら準備を始めた。

「来い、死神の大剣！」

刃が叫ぶと虚空からたちばなで刃が整備をしていたあの独特な剣が出てきた。

「は、今更そんな剣を出した所で何を！」

圧倒的に優位に立っているからかザビーは動じることはなかった。

「刃……さん？」

「刃、お前何を？」

突然剣を出し、動揺している二人を見て微笑むと刃は剣を左腕に逆手で構え、ザビーへと走り出した。それを見たゼクトルーパーの一人が、

「た、隊長どうしますか？」

「あ？今更俺達の優位は変わらん、俺の合図があるまで待機だ。」

その時、刃は走りながらも呟き準備をしていた。

《サヤ、行くぞ。》

《はい、マスター。》

「第666拘束機関解放、次元干渉虚数方陣展開！」

刃が呟くと同時に刃の右腕は黒く変色し手の甲に紅い宝玉が出現し、服越しからでも分かるほど両腕の刺青が蒼く輝きだした。

「神の扉^{ユニ・オブ・ゲート}レベル1解放、ジョーカー^{ジョーカーズ・クレセント}の紋章接続！」

《神の扉レベル1解放及び、ジョーカーの紋章接続、認証しました。》

「《行くぞ。》蒼の魔道書、起動！」

手の甲の紅い宝玉が瞬き、獣が四本の翼を広げている様な紋章が現れると刃の体は赤黒く所々緑が入った毒々しいしかしどこか神々しいオーラを纏い、そのままネイティブが地球に持ち込んだ金属の中で最高の金属と言われるヒイロカネで覆われているザビー・マスキッドフォームの左腕を………切り落とした。

「は？」

この瞬間ザビーは自分の身に何が起きたか理解できていなかった。それもそうだろう、まさか防御力で優れているマスキッドフォームで腕を切り落とされるとは夢にも思っていなかった筈だ。刃はそれに

より作った隙で、

「美川さん、今だ!」

「は!僧さん。」

美川さんは僧の元に向かった。これで僧はなんとか大丈夫だろ。

と刃が内心で思っているとき、

「た、隊長の援護だ!」

「お、応!」

やっとでゼクトルーパーは何が起こったのか理解したようだ。しかし刃は慌てず、

「やらせるかよ!」

とゼクトルーパーに手をかざすと、

「な、何だ!?」

「体が……動かないだと!?」

刃はカテゴリーページ本来の能力である PRISON を使い、ゼクトルーパー達の動きを完全に止めた。一方、左腕を切り落とされたザビーは切り落とされたのがライダーブレスが付いていた左腕だった為切り落とされた衝撃で変身が解けてしまっていた。

「馬鹿な!マスキッドフォームの状態の俺の腕を切り落とすなんて、そんな事が……そんな事が!」

刃は今まで誰にも見せた事が無い様な冷たい顔をしながら変身が解けた針治の方を向いた。それを見た針治はあまりの恐怖で顔を引き攣らせながら仲間を見捨てて逃げ出そうとした。勿論 隠者と繋がっている奴を見逃すほど、刃は甘くはなかった。

「ヒ、ヒイイイイイイイイ!」

「縛れ ウロボロス。」

刃が手を振ると虚空から緑色のオーラを纏った蛇の頭を模したものが付いている鎖が出て、逃げ出そうとしていた針治を縛り付けた。刃はウロボロスで縛った針治の近くまで来るとサモンドライバーを取り出し、針治の右腕を撃った。

「グ、グアアアアアアアア!」

それを聞いた刃は手を止めると飛翔達の方を向き言った。

表情こそは無表情だったがそれを聞いた響鬼達はあまりの刃の豹変ぶりに目を見開いていた。

「一体、彼に何が？」

だが飛翔とレヴァは違った。二人は刃がこちらを向いた事で原因が分かっていた。普段なら紅い筈の右眼が金色に変わっていることに、そしてサヤとユニゾンする事で翡翠色になっている筈の左眼まで金色になりかけている事に。

「ああ、かなりジョーカーの影響が酷いようだな。しかし、一体何故？」

そこまで聞いて飛翔は思い出した。以前の『クウガの物語』の時、刃がどうゆう状態になっていたのかを。

その頃、刃は無残に転がっている針治の頭を掴み持ち上がった。すると針治を掴んでいた右腕はまるで闇を広げるように一回り大きくなり刃の足元に闇の空間を形成していた。

「闇に……クワレロ！」

刃が叫ぶと足元の空間から一斉に闇がまるで槍の様に針治の体を貫き、その身をまるで喰らったかの様に消滅させた。

「た、隊長――！」

ゼクトルーパー達が叫んだが刃が振り向いた瞬間一斉に口を閉じた。ゼクトルーパー達は悟った、次は自分達の番だと。すぐさまゼクトルーパー達は自分達の本来の姿であるネイティブの姿に戻るが、依然体を自由に動かす事が出来ずに逃げる事すら出来なかった。その間に刃は一瞬にゼクトルーパー・・・ネイティブの元に移動し、

「ヒ！？来るな、来るな――！！？」

「お前・・・死ね。」

無慈悲に死神の大剣を突き刺し殺した。そこからは光景はまさに地獄絵図と言われてもおかしくないものだった。そのまま立て続けに二体のネイティブを刺し殺した刃は PRISON を解除し、今度は逃げ惑うネイティブを一体ずつ殺していった。ある者は縦真つ二つに切り裂き、ある者は四肢を奪った上で右手で潰したり、またある者は人間の姿に戻って命乞いをしたが頭を足で潰し更に頭が無い体を 超自然発火能力 で燃やしつくしたりとしていった。

《これが本来の刃と言う事なのか？・・・だがそれでも私は》

レヴァは漠然と今の刃に恐怖を感じていた。それでも一緒にいると言ったレヴァの心情には焦りは存在していなかった。

暫くすると刃は残っていた全てのネイティブを殲滅しみんなの前に来た。このままではみんなまで攻撃されると思われたが、

「グ、ガ、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

みんなの前に出てきた刃は突然頭を抑え叫びそのまま倒れてしまった。このとき、やっと全てが終わったのだとみんなは悟った。しかしそれは同時に飛翔とレヴァが、刃いやアンデット本来の恐ろしさを知った時でもあった。

あれから三日後、刃はたちばなでの自室で目を覚ました。

「マスター！」

隣に座っていたサヤは刃が目覚めたのを見るとその目に涙を貯め

ながら刃に抱きついた。

「サ・・ヤ、俺は一体？」

そこにレヴァが来てひと悶着あったが、刃はサヤから今までの事を聞いていた。

「そうか？俺はジョーカーの本能に吞まれかけていたのか？」

「ええ、それをユニゾン状態だった私が内部から半ば強引に止めたのでこのような結果に。」

「いや、そうでもしなければ止まらなかったさ。それより僧は？」

「僧さんでしたら・・・。」

とある病院の一室、そこに僧は入院していた。

「よう！どうやら目を覚ましたようだな、刃。」

「僧、俺のせいで。」

包帯姿の僧を見た刃は苦い顔をしていた。

「そんな顔をするな。今回の事は君のせいじゃないさ。」

「・・・・・ありがとうな。」

僧は「はは。」と笑い返してくれた。その後、俺達は雑談などをして時間を潰していた。暫くしてそろそろ帰るかと思いついた時、俺は質問した。

「そつえば、ZECTはどうするんだ。アイツ等の事に関しても報告しなくちゃいけないだろ？」

俺は言いたくない質問だと分かりつつも言った。

「俺達はZECTに残るよ。確かにこのケガじゃもうザビーになる事は出来ないけど他にもやれる事はあるからな。それに・・・。」

「それに？」

「調べなければいけない事も出来ましたから。」

美川さんが最後を引き継ぎながらも答えてくれた。

「・・・・・そうか。・・・・・そろそろ時間だから行くよ。」

「ああ、何かあったらZECTに来いよ。力になってやるから。」

「その時は力を借りるよ。・・・・・またな。」

「またな。」

俺達は病院を後にした。

病院を後にした俺達は最初にこの時間にきた時の森に向かう為、
たちばなから出ようとしていた。流石にあの時の俺はおやっさんの
耳にも入っている筈なので誰も見送りにはこないと思っていたが杞
憂に終わったようだ。そこにはヒビキさんを始めたたちばなの人達が
全員いた。

「みんな、なんで？」

「いや、君がいなくなると聞いてせめて見送りだけでも思っ

てね。」

「イブキさん。」

「あの時はびっくりしたっすけど、また会おうっす。」

「トドロキさん。」

「刃、少年またな。」

ヒビキはあの独特のポーズを取りながらとそれぞれみんなから別
れの言葉を貰い俺達はたちばなを、この時間を後にした。

「まさかゼロライナーで時間を移動していたとは、探しても見つ
からない筈ですね。」

ゼロライナーで次の目的地に向かう刃達を見つめていた影があっ
た。

「デイガイド……いえ『お義兄ちゃん』。」

闇は動き始めていた。

第21話『H・装甲する鬼、破滅の断片』（後書き）

（後書きコーナー）

サ「さあ、今回で響鬼の物語編も終わりましたが、作者さん？」

斬「ん？どうした？」

レ「ただだけ詰め込んでいるんだ、この駄作者がああああ！」

斬「ちょ、え？ごわあああああああ」↑思いつきりレヴァに殴られた

サ「そうですよ、作者さん。長い、駄文だし、マスターは暴走しかけるし。」

斬「だってこれを分けるのは丁度良い部分が解らかったからですし
「言い訳無用！」グハ！？」

サ「まあ仕方ありませんから今回はこれくらいにしておきましょう、レヴァさん。」

レ「そうだな、今回は許してやる、今回は！だぞ。」

斬「グ、グフウ。海人様、感想ありがとうございます。誤字、脱字、質問がありましたら感想までお願いします。」

サ「次回はなんですか？」

斬「次回とその次の回は一端、間章に入ります。」

レ「そうか。さっさと書けよ?」

斬「努力します。」

サ・レ・斬「」「それでは、次回で。」「」

第22話『間章・それぞれの戦い』（前書き）

第22話です。

これと次回は間章になります。
それでは、どうぞ。

第22話『間章・それぞれの戦い』

『響鬼の物語』の時間から出た何時間たっただろうか？いや、この場所では時間なんて関係ないだろう。何の運命の因果かは知らないが今俺達はターミナルの駅長室にいる。因みに俺達と言ったがこの場にいるのは俺だけで後の三人はターミナルを散策しにいつているが。何故俺達が此处にいるのかと言うと、そうあれは『響鬼の物語』の時間からゼロライナーで出た時だった。

「マスター、武士さんから通信ですよ。」

「武士から通信だって？」

こんな時に一体なんの用なんだ、まあ 白衣の変態 って呼ばれるほどの男だ、どうせろくな事じゃないな。と思いながら俺は武士との通信を繋いだ。

「やあ、久しぶりだね刃君。元気にしてたかい？」

そこには白衣の上に黒のコートを羽織り笑顔を浮かべている男、白衣の変態 こと玄金武士が映っていた。

「まあまあだな。それでどうしたんだ武士、陛下からの伝言か？」

「いや、そろそろゼロライナーのメンテナンスをしなきゃいけないから君達にターミナルに行って貰おうと思っただけ。」

「ほう。分かった、それでその間俺達はどっしろと？」

「他の人達は自由で良いけど、君は駅長に会ってほしいんだ。」

「駅長に？なんでまた？」

「行けば分かるよ、それじゃよろしくね。」

と言い武士は通信を切り、俺達はターミナルへと向かった。

そして、現在俺は駅長室に来たは良いが駅長から後一人来るから待ってくれと言われ待っている状況な訳だ。だが、流石に待ち疲れた俺は駅長にまだか聞いた。

「駅長、その待っている人はまだこないのか？」

「そうですねー？そろそろだと思いますが………とどうやら来たようですよー。」

と駅長が言っていると駅長室のドアが開いた。待たされた分の文句でも言おうと顔を上げると、

「どうやら待たせてようだな？すまなかった、そして久しぶりだな黒滅刃。」

「……風虎か？」

そこには 白衣の変態 玄金武士や俺と同じ カテゴリページであり 白い独裁者 の別名を持つ白刀風虎がいた。

「ではー、人も揃いましたし始めましょう。」

再開を祝いたかったが駅長の言葉にさえぎられ俺達は話をしだした。

「それで俺をここに呼んだのはなんでだ？」

俺はまず最初に聞きたかったことを聞いた。

「それは私から、実は貴方に回収してもらいたい物がありましたー。」

「

「回収して欲しい物？」

「ええ、実は前にあつた牙王の事件の事なんです。」

「確かどこからか『INFINITY』のチケットを手に入れた牙王とか言う奴が放置されていたガオウライナーを発掘というか掘り出して暴れていたって言う話ですよ。」

「そーなんですよー。仕事というのはその牙王が持っていたINFINITYのチケットを回収して欲しいと言う事なんですよー。」

それにしても牙王はどこからINFINITYのチケットを手に入れたんだ、まあ龍水から盗ったと言われても納得が付きそうだがと俺が思っていると駅長は何処からか銀色のライダーパスを取り出

し俺の前に置いた。

「聞くところによれば貴方は既に複数のライダーシステムをお持ちのようですね。まあそれは差し上げますのでお守り程度にお持ち下さい。」

「・・・分かりました。この依頼、任せて下さい。」

俺はライダーパスを受け取りながら言った。すると今度は風虎が口を開いた。

「それじゃ、私からだが、そのINFINITYのチケットをあの赤髪の・・・飛翔といったかその子にINFINITYのチケットを渡してくれ。」

「何故だ？」

「流石に対応に困っていたからさ。それにお前はもう気づいていると思うがあの子は陛下統治の世界の人間では無い。むしろ女教皇側というのが私達の意見だ。ならばその子に持つてもらっていた方が何かと便利だ。」

それを聞いた俺は頭を抱えながら風虎に聞いた。

「普通に渡しても良いのか？」

「いや、それだと特に 月 や 運命の輪 に奪われた時が面倒だ。渡したら使すべき時が来るまで忘れてるように記憶を封印しておけ。」

「・・・分かった。これで終わりか？ 終わりならそろそろアイツ等の所に行きたいんだが。」

と俺が言っていると風虎が手に持っていたバックから何やら大きなアタッシュケースを取り出してきた。風虎がそれを開けると中にはマゼンダ色をしたタッチパネル式携帯電話型ツールとクウガからディケイドの紋章が描かれているカードが入っていた。

「これは・・・ケータッチか？」

「そうだ、ディケイドがコンプリートフォームになる為に必要不可欠な物だ。」

「だが、これは本来は士が手に入れなければいけない物じゃないの

か？」

「その事なら心配するな、門矢士なら既に『ネガの世界』で手に入れている。これはあらかじめもう一つ作った物だ。」

「これを飛翔にか？」

俺は風虎を見据えながら言った。

「ああ、お前から渡してくれ。」

「……その代わり渡す時期はこっちで決めさせて貰うぞ。」

「私はもとよりそのつもりだ。お前を信用しているんだからな。」

「ならその信用に答えられるよう俺は頑張るだけさ、それじゃあな。」

「

と言い俺はドアノブに手をかけたが、

「待て、これも餞別として持っていていけ。」

風虎が俺に黒い物とカードを投げてきた。

「ん？これは？」

見てみるとそれは黒いケータッチとケータッチに対応するカード（俗に言うコンプリートカード）だった。

「デイガイドにケータッチは無かった筈だが？」

デイガイドはあくまでもデイケイドのプロトタイプとして作られていた筈だから強化形態は皆無の筈なのだが。

「ああ、それはサヤにお前の戦闘データを随時送ってもらっているからな。そのデータとデイケイドのデータを元に作ったから性能はお墨付きさ。」

サヤ、お前何時の間に！

「だから、無理はするなよ。」

俺はいきなり風虎が言った言葉に耳を疑った。

「は？何を言っているんだ。」

「今言っただる戦闘データは送ってもらっていると、しかも自動的に。」

ここで風虎は真剣な顔になりながら言った。

「お前、『力』を使っただろ。」

「・・・・・・・・・・。」

「『力』を使うなどは言わないだが、お前が無茶をして心配する者がいることも忘れるな！・・・・私が言いたいのはそれだけだ。さっさと行け。」

風虎は顔を赤くしながら言った。・・・・本当、俺達って緑色の血なのになんで赤くなるんだか。

「忠告感謝するよ、それじゃあな。」

俺は今度こそ部屋から出て行った。

「彼に言わなくて良かったのですか、『彼女』が動き始めている事を言わなくて？」

駅長は目の前で茶を優雅に飲んでいる風虎に話しかけた。

「さつきもいったら、私はアイツを信頼しているとそれにこの事はアイツ自身が解決することだ。私達が介入するものでもない。」

そういうと駅長は笑顔を浮かべながら部屋から出て行った。私が他人を信頼するのがそんなに珍しいか？

ターミナルを回っていた俺とレヴァさんは刃さんに呼ばれ外の時の砂漠を歩いている。サヤさんは先に戻っておけて刃さんに言われていたからこの場にはいなかった。ターミナルから結構遠く（遠くと言ってもターミナルは近くにある様に見えるが）に來ると突然刃さんが俺達の方を振り向き異常な殺気を放ちながら言った。

「レヴァ、飛翔、俺と・・・・・・戦え！」

「レヴァ、飛翔、俺と・・・・・・戦え！」

俺は二人に振り返り言った。すると二人は、

「刃・・・・・・・・さん!？」

「・・・・・・・・」

飛翔に関しては俺の殺気に怯んでいるが、レヴァは逆に睨み返していた。ほう、俺の殺気を受けて怯みもしないとは・・・なかなか――

――と思いながら俺は手を飛翔の方に向け、

「飛翔!？」

躊躇なく火柱を上げた。

「よく、避けたな。」

しかし、飛翔は直前で気付いたレヴァに突き飛ばされ避ける事ができていた。

「刃、お前!」

「レヴァ、お前は分かっている筈だ・・・俺は本気だとな。」

そう言う俺は虚空から一対の白い銃を取り出し二人に向けて撃った。それをレヴァはデザインドライバーで弾き、飛翔は紙一重で避けていた。

「魔銃 ベルヴェルク・・・・刃、本当に本気なんだな？」

「・・・・・・・・」

レヴァの問いかけに俺は無言でベルヴェルクを虚空に戻し、サムンドライバーを取り出しカードを装填した。

『K A I J I N R I D E L I O N F A N G I R E 』

電子音が鳴り響き刃がレヴァに向けてサムンドライバーを撃つと三つの虚像が出てそれが集まると全体的に塔の意匠があり両肩には天使がラッパを吹いている様な意匠があるファンガイア チェックメイトフォー の一人ルークである ライオンファンガイア が立っていた。

「殺れ、ライオンファンガイア。」

そう言う刃は飛翔の方へと向かった。

「うおおおおおおおおお!」

残されたライオンファンガイアは雄叫びを上げ、レヴァへと向か

ってきた。

「刃…….ならば此奴を倒してお前の所に行くまでだ！」
レヴァはそう言うと言った。デザインドライバーを構え直し、カードを装填した。

「変身！」

『KAMEN RIDE DEZANDE』

レヴァはデザインドに変身し、迫りくるライオンファンガイアへと向かっていった。

「さあ、どうする飛翔？俺と戦うか？それとも……このまま無残に殺されるか？」

飛翔の前に来た俺は飛翔に問いかけた。その時刃は確信していた、飛翔は戦う方を選ぶと。なぜなら飛翔の目を迷いながらも戦う事を決めた目をしていたから。

「刃さん……正直俺は貴方とは戦いたくない。でも刃さんが立ち塞がるなら俺は……。」

そう言いながらもドライバーを持つ飛翔の腕は震えていた。――

――この後に及んで甘いな、なら――俺は腰にナイトラウザーを出現させカードを手に持った。

「飛翔、あの時俺はジョーカーの本能に支配されそうになりながらも言った筈だ。お前は甘いと、その甘さを無くさない限りは俺に殺されるだけだ。…….変身！」

『CHANGE』

刃はWAのカードをナイトトラウザーにラウズしその姿を 仮面ライダーレイブ に変えた。

「レイブ、刃さん俺は…….俺は！」

飛翔は刃がレイブになるのを見ると手を震わせながらもディケイドドライバーを腰に付け、カードを手に取った。

「俺は戦う！俺はここで立ち止まるわけにはいかないんだ！…….

・変身！」

『KAMEN RIDE DECADE』

飛翔はカードをドライバーに装填し、ディケイドへと変身した。それを見た俺は飛翔へと言い放った。

「それで良い……さあ、行くぞ！」

俺は右手にレイブラウザーを出現させると、同じくライドブッカー・ソードモードを構えたディケイドへと向かった。

「グルルルルルルルル」

「ち、なんて力だ。」

ディザンドは目の前で唸っているライオンファンガイアを見ながら言った。――流石はチェックメイトフォーか――

――ディザンドは過去に刃が言っていた事を思い出していた。――

――ファンガイアの中でも特別な四人のファンガイアである構成されたチェックメイトフォー、その中でもチェックメイトフォーの頂点であるキングと姫であるクイーンを護るルークの力は四人の中でもトップクラスに入るだったか？確かにこれじゃあ唯の接近戦は危険だな――そう判断したディザンドはカードを二枚取り出し装填した。

『KAMEN RIDE DELTA DRAKE』

ディザンドは目の前に銀色でギリシャ文字のΔを模したデザインがある 仮面ライダーデルタ と水色でトンボをモチーフとした 仮面ライダードレイク を召喚した。召喚された二人はそれぞれの武器で即座に射撃を開始した。遠距離からの攻撃で一時的にライオンファンガイアの動きを止めたがすぐにそれをものともせずライオンファンガイアが唸りながら突っ込んできた。しかし、動きが止まった瞬間を見計らいディザンドはライオンファンガイアの死角に入り攻撃した。

『ATTACK RIDE SLASH』

「ハア！」

スラッシュで刀身が分裂し強化されたディザンドライバーを使いディザンドは数回に渡りライオンファンガイアを切りつけた。突然死角から切りつけられたライオンファンガイアは突進していた動きを止めディザンドを攻撃しようとした。しかし、それを狙いデルタとドレイクの二人は再びライオンファンガイアへと射撃を行いライオンファンガイアを翻弄させた。

「！今だ。」

ディザンドは思うように動けないライオンファンガイアの後ろに回り込み後ろから蹴り込んだ。蹴り込まれたライオンファンガイアは前に倒されてしまった。それを見たディザンドは決着をつける為カードを装填した。

『ATTACK RIDE CROSS ATTACK』

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DE ZANDE』

カードの効果によりまずデルタが起き上がったライオンファンガイアへとデルタムーバーを使い銀色の三角錐状のポイントを放ち動きを拘束した。その間にドレイクはドレイクグリップに付いているドレイクゼクターの羽根を折りたたみ銃身へとタキオン粒子をチャージしていき、ディザンドはディザンドライバーの刀身に3Dカードが巻き付き光の刀身を形成していった。それを見たデルタは空中へとジャンプし三角錐状のポイントに蹴り込む。ルシファーズハンマー放った。それに続いてドレイクが銃身に貯めたタキオン粒子を球体状にして放つ。ライダーシューティングを、それを後押しするようにディザンドが形成した光の刀身から斬撃を飛ばす。ディメンションブームを放った。

「グ、ガアアアアアアアアアア！？」

三つの必殺技を喰らったライオンファンガイアはその威力に耐えきれず苦悶の声を放ち爆発した。それを見届けたデルタとドレイクは姿を霞の様に消滅させて消えた。

「よし、これで終わりだな。」

ライオンファンガイアを倒し安堵していたが、そこに爆発音が轟いた。

「！？あの方向は・・・まさか！？」

爆発音がした方向に何かを感じたディザンドはその方向へと走っていた。するとそこには、

「刃、飛翔！？」

身体の各部が金色のアーマー ディアマンテゴールド に覆われ、背中に金色の翼 オリハルコンウイング を装備したレイブ・ジャックフォームがディケイドに今まさに止めを刺そうとしていた。

第22話『間章・それぞれの戦い』（後書き）

（後書きコーナー）

斬「今回はレヴアが戦っているから俺とサヤだけでやるぞ。」

サ「はあ、貴方と二人だけなんてせめてマスターと二人っきりだったら。」

斬「まあまあ、そう言わずな。」

サ「・・・はあ、さて今回から2話は間章と言う事ですが伏線が何個がありますね。」

斬「まあ、回収自体は後になるけどな。」

サ「それにライダーパスまで一体、何個マスターにライダーシステムを所持させるつもりですか？」

斬「そう言うなって、これも後で使ったからさ。」

サ「はあ、もう良いです。」

斬「天の道に行く妄想者様、海人様感想ありがとうございます。」

サ「次回は？」

斬「次回は刃対飛翔とこの戦いの理由を話すぞ。」

サ・斬「それでは、次回で。」

第23話『間章・それぞれの戦い（後編）』（前書き）

第23話です。

今回で間章は終わりです。

それでは、どうぞ。

第23話『間章・それぞれの戦い（後編）』

「さあ、行くぞ！」

レイブは右手にレイブラウザーを構えながらライドブッカー・ソードモードを構えたディケイドへと切りかかった。レイブはディケイドがライドブッカーを構えたのを見ると牽制に銃弾を放った。ディケイドはそれをライドブッカーの刀身で弾くがその一瞬でレイブは距離を一気に詰め上段からレイブラウザーを振るった。ディケイドはライドブッカーで対応するがレイブは光速で返す形で下段から切り裂いた。

「ガ！？」

切り裂かれたディケイドは後方へと下げられた。

「その程度か？」

「まだまだ！」

後ろに下げられたディケイドは逆に開いた距離を使い右腰からディエンドライバーを取り、カードを一枚ずつドライバーとディエンドライバーに装填した。

『ATTACK RIDE BLAST』

ディケイドはライドブッカーをガンモードに変え、ライドブッカーからはマゼンダの、ディエンドライバーからはシアンの銃弾を銃身を分裂させながら放った。

「チー！」

レイブはそれをレイブラウザーで切り落としていたがシアンの銃弾はマゼンダの銃弾とは違い上下左右に分裂しながら追尾してくるので落としきれずにくらってしまった。しかし、レイブはお返しと

ばかりに、

『MIST』

カードをレイブラウザーにラウズし銃弾を一瞬の虚を突きディケイドに放った。しかも銃弾はW7の ミストフェアリー の効果で拡散弾となりディケイドは避ける事も出来ずに銃弾の雨をくらっていた。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア！？」

「まだまだ、行くぞ！」

レイブは追撃とばかりに切りかかってきた。だが、ディケイドは攻撃をくらいながらも、

《確かレイブはブレイド系のライダーだったらこっちも。》

ドライバーにカードを装填した。

『KAMEN RIDE BLADE』

「しまった！？」

レイブはディケイドライバーから出てきた青い オリハルコンエレメント の壁に吹き飛ばされ、ディケイドはその壁を通りDブレイドへと変身した。そのままDブレイドは起き上がるうとしているレイブへと駆け寄りライドブッカードをソードモードに変え切りつけた。レイブも体勢がままならないがレイブラウザーで対応した。しかし、体勢が整っていないせいかそのまま切りつけられてしまった。

「よし、このまま。」

気を良くしたのかDブレイドはそのまま更に切りつけようとしたが同じ手が二度通じるほどレイブも甘くは無かった。

『BARRIER』

ライドブッカードをレイブに振るったDブレイドだったがその攻撃はレイブに届く前に弾かれてしまった。

「何！？」

何度切りつけても結果は同じでまるで不可視の障壁があるかの様に斬撃は弾かれて続けていた。

「今のお前にその壁は壊せない。」

レイブはそう言いながらレイブラウザーの銃身をDブレイドに向け、零距离射撃で吹き飛ばすとカードを二枚レイブラウザーにラウスした。

『SLASH』

『CHAOS』

『ENDLESS SLASH』

レイブラウザーの刀身を光、闇、氷、炎の四属性が混じり合いながら纏っていった。

「く、アレをくらったら不味いな。」

ディケイドは零距离射撃をくらった反動で頭をフラフラにしながらも立ち上がり、ダメージを少しでも軽減する為にカードを装填した。

「ハア！」

レイブはDブレイドを四属性を纏った刀身で切り裂く エンドレススラッシュ で切り裂いた。

その頃、

「マスター達は一体何を？」

私はマスターに言われたように一人、ゼロライナーにいました。どのようにして待っているか考えていると突然ターミナルの外から戦いの気配を感じた。

「これは……まさか、マスター達ですか!？」

私は何が起きているのも考えずにマスターの言いつけを破り外に出て気配がする所まで走って行った、その内に不安を抱きながら

「ほう、『METAL』でダメージを減らしたか。」

レイブは エンドレスラッシュ を受けながらも立つDブレイドを見据えながら言った。どうやらDブレイドはあの時、装填した『METAL』の効果で自身を硬化させダメージを減らすことに成功していたようだ。しかし、それでもかなりダメージは通ったらしくかなりフラフラな状態だった。

《これじゃ、ヤバイな。なら空中戦で倒すまでだ。》

Dブレイドはそう思いながら、カードを装填した。

『FOAM RIDE BLADE JACK』

電子音が鳴るとDブレイドはDブレイド・ジャックフォーム（J

Fと表記）へと強化された。

「ジャックフォームか……ならば。」

それを見たレイブはそういうと右腰のラウズバンクから一枚のカードを取り、何時もと違い腰の ナイトラウザー にラウズした。

『FUSION』

レイブの前に金色のワイバーン（前足の無い龍）の幻影が現れたかと思うと次の瞬間、身体の上半身各部が金色のアーマー デイアマンテゴールド に覆われ、背中には金色の一对の翼 オリハルコンウイング が付き、胸部にはWのカテゴリーのJのワイバーンの紋章 ハイグレイドシンボル が刻印された 仮面ライダーレイブ・ジャックフォーム へと変えた。

「な！？ラウズアブゾーバー無しでジャックフォームになるなんて！？」

Dブレイド・JFはレイブがラウズアブゾーバー無しに上位変身した事に驚いていた。それはそうだろうとレイブ・JFは思った。通常ブレイド系のライダーはカリスを除き上位変身する為にはラウ

ズアブゾーバーが必要になるのだから。しかし、レイブはどちらかと言えばカリスに近い（と言うかほぼ同等）システムなのでラウズアブゾーバー無しで上位変身が出来るのだ。

「どうした、飛翔？まさか上位変身が出来ないと思っていた訳じゃないよな？」

この時、Dブレイド・JFの心境はかなり不安だった。元々のスベックが高いレイブに勝つにはレイブには無い上位変身で勝つしかないと思つてのブレイドなのに相手も同じ土俵に上がってくるとは思つてもいなかったのである。しかし、これで臆するほどDブレイド・JFも弱くは無かった。ならば今の自分が出る最高の攻撃をしよう。

「いや、それなら今できる最高の攻撃で決めるだけだ！」

Dブレイドはそういうとカードを装填した。

『FINAL ATTACK RIDE B・B・B・BLADE』

電子音が鳴り響くとDブレイド・JFは左手に持っているライドブッカーに電気をほとばしらながら三対の オリハルコンウイングを広げ空へと飛び立った。

「面白い、なら俺もやらせて貰おう。」

レイブ・JFも技を出す為にラウズバンクから三枚のカードを取り出し、ジャックフォームへの強化変身により刀身と銃身にそれぞれ ディアマンテ・エッジ と ディアマンテ・バレル が付き強化させたレイブラウザーにカードをラウズした。

『SLASH』

『SEPARATE・DO』

『CHAOS』

レイブ・JFの後ろに幻獣であるガルム、オルトロス、キマイラの絵が現れると吸い込まれるように消え、コンボの認証音を鳴り響かせた。

『J・ENDLESS CROSS』

Dブレイド・JFと同じようにレイブ・JFは二本になった強化

レイブラウザーに四属性を纏わせながら、背中にある一対のオリハルコンウィングを広げ空に飛び立った。お互いに空に飛んだ二人は空中で向き合うとそれぞれの属性が纏った武器を構え、

「ウオオオオオオオオ！」

正面から二人は激突し、その衝撃により爆発を引き起こした。

「なかなかだな。だが、まだ俺には届かなかったようだな飛翔。」

「刃、さん。」

競り勝ったのはレイブ・JFだった。レイブ・JFは二本になった強化レイブラウザーを巧みに扱い一本でDブレイド・JFが持つライドブッカーを受け流すともう一本でDブレイド・JFの腹部を切りつけていたのである。しかもディケイドは爆発の衝撃により変身こそは解けなかったものの元のディケイドの姿に強制的に戻ってしまった。それを見ながらレイブ・JFは一本に戻った強化レイブラウザーを構え直しながら倒れているディケイドに歩み寄った。

「飛翔………終わりだ。」

「刃！」

するとそこにレヴァが走って来た。どうやらライオンファンガイアは倒されてしまったようだ。

「レヴァ、そうかライオンファンガイアを倒したのか。」

レイブ・JFはレヴァの方に顔を向けそう言うのがすぐに倒れているディケイドに顔を戻し強化レイブラウザーを振り下ろした。

「やめるーーーーー！」

レヴァが叫んだ刹那、

「墜ちろ、ブラックインフェルノ！」

声と共に黒い炎の固まりがレイブ・JFとディケイドに墜ちた。

「!？」

それに気づいたレイブ・JFは右腰から素早くカードを取ると強化レイブラウザーにラウズし、

『BARRIER』

ディケイドを庇うように防御した。

「今は・・・サヤか。」

「マスター、貴方は一体何を？」

レイブ・JFがターミナルがある方向を見るとそこにサヤが立っていた。どうやら走ってここまで来たらしく服や髪には砂が付いていた。

「そうだぞ、いきなり私達を殺そうとして！」

レヴァは顔に怒りをあらわにしながら言った。

「いえ、マスターはレヴァさん達を殺そうとは思っていないかったですよ。」

「それは、どういう事だ？」

レヴァの言葉を否定したサヤに飛翔は変身を解きながら質問した。

「そうだぞサヤ、私なんてライオンファンガイアと戦わされたんだぞ？」

「そこですよ、レヴァさん。」

「「？」」

サヤはキョトンとした顔をしている二人を見ながら言った。

「もし、本当に二人を殺したかったら怪人を呼び出さずに自分で殺つた方が早いですし、さっきの飛翔とマスターの戦いもマスターがキングフォームかワイルドフォームになれば簡単に終わっていたじゃないですか、そうですねマスター？」

「本当、サヤには敵わないな。」

そう言いながら刃は変身を解いた。

「じゃあなんでこんな事を？」

「それは多分、二人の本気の実力を見たかったんじゃないですか？」
「本気の？なんで？」

飛翔は刃へと問いかけた。

「俺がジョーカーの本能に負けた時の為さ。……二人がどう思っているか知らないが俺だって完全じゃないだからもしもの時の為にこんな事をしたのさ。」

「な！？で、でも一言言ってくれば。」

レヴアは絶句しながらも聞いた。

「言ったらお前達は心構えが出来てしまう。普通はそれでも良いが何時なるかも分らないからな、それに飛翔の甘い部分も治したかったしな。」

そう言つと刃は飛翔の方を向きながら、

「良いか飛翔。人は誰も甘い部分を持っているこれは仕方がない事だ。でもな戦いの時はその甘さは捨てる、敵に甘さを見せてはいけない。それが俺がお前に教えたかった事だ。」

と言つた。それを聞いた飛翔は、

「ああ、すぐは無理かもしれないけど頑張るよ。」

と言つた。すると刃は今度はレヴアの方を向きながら、

「レヴアすまなかつたな、でも俺は「それ以上言つな。」レヴア。」

刃の言葉をレヴアは遮つた。

「お前が私達の事を信じている事は分かつているし私もお前の事を信じているだから、謝らないでくれ。」

「……そうだな、ありがとうな。」

刃が微笑みながらレヴアに言つた。

「わ、分かれば良いんだ、分かれば。」

レヴアは顔を赤くしながら答えた。――その顔で微笑む

なんて反則なんだよ／＼ああ、可愛い／＼――刃が聞いた
ら絶対に怒る事を考えながら。

「ふふ、雨降つて地固まる、ですかね？」

「茶化すなよ、サヤ。……お前もありがとうな。」

「いえいえ、私はマスターに仕える存在ですから。」

礼を言つた刃にサヤは笑いながら寄り添い言つた。それを見たレ

ヴアが、

「ってサヤ、何抜け駆けしてるんだ！」

と言うと刃が、

「ん？ならお前も来いよ？」

と言い、レヴアはサヤとは反対側に寄り添った。それを見た飛翔は内心仲の良い姉妹にしか見えないと思ったとか。

「さて、そろそろ行くか次の時間に。」

刃はそう言い、ゼロライナーへと戻って行った。次なる時間に向かう為に。

第23話『間章・それぞれの戦い（後編）』（後書き）

「後書きコーナー」

サ「さて、後書きですね。」

レ「そうだな、良し。作者サヤが今回使った攻撃魔法の説明を頼む。」

斬「ん？そうだな・・・ほれ。」

ブラックインフェルノ

サヤが使う攻撃魔法の一つ。空中に灼熱の黒い炎の固まりを作り、対象範囲を燃やす広範囲殲滅魔法。

レ「は！？待て、って言う事はだ！あの時サヤは周りまで巻き込む攻撃をしていたって言う事か？」

サ「え？あー、まあ、そういう事です、テヘ。」

レ「テヘっじゃないだろ！殺す気か！」

サ「まあまあ、マスターが防いでくれたんですから。過ぎた事を言っても仕方ないですよ。」

レ「誰のせいだよ。」

斬「まあ、落ち着けよ。では、天の道に行く妄想者様、海人様感想ありがとうございます。」

サ「今回は、何ですか？」

斬「今回は・・・・・・・・・・・・・・・・Fの世界だ。」

レ「F？Fって言うと・・・・・・・・。。。」

斬「言わんくて良い！」

サ・レ・斬「それは、次回で。」
「」
「」

第24話『F・彷徨える魂、水の妖女』(前書き)

第24話です。

今回から『ファイズの物語』に入ります。

それでは、どうぞ。

第24話『F・彷徨える魂、水の妖女』

「さあ、次の時間に着いたぞ。」

そう言いながら刃はゼロライナーから降り、それに続き残りの三人も降りた。

「で、ここは何のライダーの時間なんだ？」

飛翔は辺りを見回しながら言った。飛翔がそう言うのも無理は無い何故なら此処は例によって例のごとく人目を避けた山の中である。「ここか？ここは『ファイズの物語』の時間さ。」

「それでこれからどうする？」

レヴァは飛翔と同じ様に辺りを見回した後、質問した。

「ん？そうだな・・・取り敢えず俺は一人で行動する。お前達はお前達で行動してくれ・・・それじゃ、また後で。」

そう言つと刃は一人で山を降りて行つてしまった。

「ちよ、マスター！？」

「何かあつたら連絡しろよー。」

サヤが引きとめようとしたが、刃はすぐに見えなくなつてしまつた。

「・・・どうする？」

「取り敢えず山を降りますか？」

サヤの意見により三人は山から下山していった。

「さて、確かこつちだったよな？」

山から降りた俺はある場所を目指し歩いていた。因みに黒い男物の上下の服装であるにも関わらず歩く度に周囲主に男から好意的な

視線を浴びていた。

く、耐えろ、耐えるんだ俺。

そう思いながら暫く歩き続けると道の先に大きな屋敷が見えてきた。その屋敷は洋風の結構な年代を感じさせる造りで周りを森で囲まれていた。俺は心の中で――――ほう。――――と思いながら門に行った。すると、

「何かご用ですか？」

門の内側から作業服を着た老人に声をかけられた。俺はその老人からある気配を感じながらも答えた。

「ええ、水妖麗華さんに用があつて来ました。」

すると、その老人は目を見開きながらも、

「お嬢様に？お名前を伺つても宜しいですか？」

と訪ねてきたので言つと、老人は近くにあつた守衛室に行き門を開けてくれた。

「どうぞ、こちらです。」

俺は老人に案内されながら屋敷へと入っていった。

一方サヤ達は、

「はあ、マスターは一人で何処か行ってしまうしこれからどうしましょう？」

山を降り、近くにあつた公園のベンチに座りながら考えていた。

「どうするって言つてもなあ、ファイズを探すしかないか？」

とレヴァは言った。

「そうですね。……ん？」

飛翔が公園の向こう側を見ながら同意すると、向こうから女の人
が走ってきた。――――泣いている？――――と飛翔が見
ながら思っていると携帯で電話をしようとしていた女の人に男が歩
み寄り女の人の携帯を取ってしまった。二人は揉めていたようだが

飛翔達が座っている所までは声が届かずそのまま二人は別々に何処か行ってしまった。

「ん？どうした、飛翔？」

そんな飛翔をレヴァは何を見ているんだ？という顔をしながら声をかけた。

「え？いや、なんでも。」

飛翔はレヴァ達の方を向きながら言った。その後三人はこの後どうするか意見を出し合っていた。その間にも飛翔はさっきの二人の事を考えていた。あの二人には何かあると思いながら。

中に入った俺は今度は白髪のお執事によって屋敷の中を案内して貰っていた。因みにどうしてここまで親切なのか聞くと、

「いえ、お嬢様に貴方が来たら私の所まで案内してと仰せ니까っているからです。」

と答えた。暫く屋敷の中を歩き二階の奥の部屋まで案内された。部屋の前に来るとお執事は扉をノックし、

「お嬢様、刃様がお見えになりました。」

と言った。すると中で物音がし止むと中から、

「入れ。」

と声が聞こえた。

「失礼します。」

お執事が扉を開け入るのを見ると俺もそれに続き中に入った。

「ご苦労、お前は下がって良いぞ。……久しぶりだな、刃よ。」

そこには青い髪をポニーテールにした『クウガの物語』の時間で別れた時と変わらない姿をした麗華がいた。

「では、私はこれで。」

そついうと俺をここまで案内したお執事は部屋から出ていった。俺は麗華を見ながら言った。

「久しぶりだな、麗華。四年ぶりだっけか？」

「四年ぶり？・・・ああ、そうか今の貴様は知らないのか。」

——知らない？何を？—— 俺はそう思うと麗華

に聞いた。

「どついう事だ？」

「は？・・・はあ、あのな妾を眷属にしたのはお前自身だぞ。その本人が知らないなんておかしいだろ？」

そう言われた俺は暫く考えた。すると、

「・・・あ、思い出した！そうか、お前は時間の影響を極力受けないんだったな。」

「やつと思いだしたか、馬鹿者が。因みに過去・・・今から一年くらい前か？その時のお前は『今のお前は簡易的な特異点だ。』と言っていたぞ。」

そうだった、そうだった。

と俺は心の中で思いながら言った。

「じゃあ、俺がここに來た理由も分かるよな？」

「ああ、これだろ。」

と言うと麗華は数枚の紙を渡してきた。俺はそれを受け取るとすぐに内容を読んだ。

「・・・なるほどな、この時間では他の怪人達は動きを見せていないのか。」

「ああ、全くって言うて良いほどな。どうやらオルフェノクの組織であるスマートブレインの存在とラッキークローバーの存在が主な理由らしいな。」

「・・・そうか。」

俺は紙を机に置くとそのまま考え込んでしまった。

オルフェノク

今までの時間と違いこの時間で主に活動しているのは 操縦者のみ、戦車はこの世界を支配する事はないから本気で動いていると考えるべきか—— と思の海に沈んでいると、

「な、なあ刃。ずっと屋敷で考えているのもあれであろつ、気分転

換に外に出るなんてどうだ？」

麗華が隣から言ってきた。

「俺は構わないが、お前は良いのか屋敷から出て？」

「構わん、それにお前の為にその資料を調べて屋敷に缶詰め状態だったのだぞ？妾だって褒美くらい貰っても良かるう？」

「そうだな。」

と言うと俺と麗華は気分転換も兼ねて外に出た。

外に出た俺と麗華はデイガイザーに乗り、気晴らしにと色々な所を回っていた。麗華にとっては久しぶりの外らしく結構楽しんでいった。

「やはり、たまには外に出るのも良いな。」

「屋敷に籠っているよりは良いだろうよ。」

そんな会話をしながら大きな橋の下を通ろうとした時だろうか、前方から戦闘音が聴こえてきた。スピードを上げ、急いでいくとそこにはギリシャ文字の△を模した仮面ライダー　デルタ　がフジツボの特質を備えた　バーナクルオルフェノク　と蜥蜴の特質を備えた　リザードオルフェノク　二体のオルフェノクと戦闘を行っていた。戦闘はデルタが一对二と不利な状況だった。デルタはそのパワーを使って戦っていたがバーナクルオルフェノクが受け流し、リザードオルフェノクが切り裂くというコンビネーションにより追い詰められていた。

「ハア！」

更に追い打ちにとバーナクルオルフェノクが投げたハンドボール大の爆弾を受けたデルタは近くにあった車に打ちつけられベルトが外れ変身が解けてしまった。

「三原君！」

痛みでうめく男・・・三原修二に女の人が駆け寄った。しかし、その間にもバーナクルオルフェノクとリザードオルフェノクは近寄

り二人を殺そうとした。その時だった。

「止せ！」

戦場に静止の声が入り、その方向を見るとそこにはさっき飛ばされたデルタのベルトを付けた乾巧が立っていた。

「乾さん！」

三原を支えている女・・・阿部里奈は歓喜の声を上げた。巧はオルフェノクの方を睨みながら右手にデルタフォンを持ちあの言葉を口にした。

「変身！」

『STANDING BY・・・COMPLETE』

デルタフォンをベルトの右腰に付いているデルタムーバーに付け、巧はデルタへと変身した。それを見た二体のオルフェノクを標的をデルタへと変えて攻撃した。デルタは荒々しいラフファイトで対抗するが流石に二人はきついのか徐々に圧されてきた。

「麗華、しっかり掴まれよ。」

「分かっておる。」

それを離れて見ていた俺達はデルタを助ける為にデイガイザーを走らせた。トップスピードで突っ込んだ俺達はそのままバーナクルオルフェノクとリザードオルフェノクを突き飛ばす事に成功した。

「・・・は？」

三原と阿部とデルタに変身している巧はいきなりバイクで突っ込むという端から見たら馬鹿きまわりない所業をした俺達を見ながらポカンとしていた。突っ込んだ刃と麗華はデイガイザーから降り、刃はオルフェノクの前に、麗華は三原と阿部の二人の前に立った。

「麗華、その二人任せたぞ。」

「仕方ないのう、その二人もうちょっと下がっておれ。」

「貴方達は一体？」

阿部はいきなり出てきた麗華に質問した。

「妾達か？妾達は・・・そうだな？唯の化け物だ。」

麗華は刃を見ながらそう言った。

「おい、ちょっと待て！アイツ等は俺がなんとかする！だから下が
つてろ、このままじゃ死ぬぞ！」

デルタは声を荒らげながら言った。しかし、刃は冷淡に、
「死ぬ気は無い、それにアイツ等じゃ俺は殺せないしな。」

デルタの静止を流しながらオルフェノクの前に進んだ。

「人間如きが、俺達に敵うかよ。」

リザードオルフェノクは明らかに声に油断を混ぜながら言った。

「ああ、唯の人間だったらな。」

刃はそう言っていると腰にドライバーを付け、カードを装填した。

「・・・変身」

『K A M E N R I D E D E G A I D E 』

刃はデイガイドに変身し、近くにいたリザードオルフェノクを殴
った。

「ガ！？」

「何！ファイズ、カイザ、デルタ以外のギアだと！？」

リザードオルフェノクは避ける間も無く殴られ、バーナクルオル
フェノクは見たことも無い戦士に動揺していた。

「行きますよ、乾さん。」

「お前？・・・いや、行くぞ。」

デルタは何故見ず知らずの相手が自分の名前を知っているのか気
にしたが、今更些細な事だとすぐ意識を戦闘に戻した。そこからは
ほぼ一方的だった。デルタは持ち前のラフファイトでバーナクルオ
ルフェノクを圧倒し、デイガイドはライドブッカープロトとサモン
ドライバーの両手持ちでリザードオルフェノクを圧倒し二体のオル
フェノクを撃退した。

それを見届けるとデルタは変身を解き巧の姿に戻ったがそれと同
時に力尽きたように倒れてしまった。

「乾さん！」

阿部が倒れていた巧に近寄った。このままじゃいけないと思った

俺は二人に軽い自己紹介をした後、巧さんを手当できる場所へと連れていこうと提案し俺達は移動していった。

その頃、サヤ達三人は、

「わああああああ！」

「いやほうほうほう！」

「あははははははは！」

何故か遊園地にいた。どうやらファイズの変身者探しがうまくいかず気晴らしも兼ねてこの遊園地へと遊びに来ていた。しかし、

「はあ、やっぱりマスターとが……。」

「そうだな、サヤ。やっぱり、刃と一緒にじゃないと……。」

「はあ。」

「二人共、落ち込み過ぎ。」

飛翔は兎も角、サヤとレヴアは刃と一緒に良かったらしく楽しさもあるがやっぱり寂しさの方が大きいようだ。

《どうしよう……》

飛翔が対応に困っているとそこに一組のカップル(?)が通った。
「ん？あれは確か……？」

その内の女の人は飛翔が朝公園で見かけたあの女の人だった。

「なあ……やっぱり草加に連絡した方が良くないか？アイツ、この男は俺達の敵だって言ってたし。」

「何言ってるの？乾さんは私達を助けてくれたのよ！」

「それは俺にだって分かってる……でも。」

三原と阿部は巧をどうするか話し合っていた。刃と麗華はその会話には混ざらずに少し離れた場所にいた。

「あの者も大変なようだな。」

「そうだな。今まで人間と誤っていた人が化け物だったんだ、そりゃ戸惑うさ。」

二人からこれまでの経緯を聞いた刃と麗華はそう客観的に見ていた。

「乾さん！」

突然の阿部の言葉にそっちを見ると巧が起き上がっていた。

「あの二人を尾けて意味があるのか？」

前に歩いている二人を見つからないように尾けながらレヴァはそう飛翔に言った。

「あの二人は何かあると思った、二人とも頼みます。」

「まあ、良いですけど。」

あの時、一緒に歩いている二人を見かけた飛翔はレヴァとサヤにお願いして三人で二人を尾けていた。

「どうです？少しは気分転換になりましたか？」

男の人の方である木場勇治は女の人の方である園田真理に声をかけた。

「・・・ええ。」

真理が笑いかけながら言うと、

「嘘がつかないのですね、園田さんは。」

と木場は言った。それを言われた真理は俯いてしまった。ふと真理が前を見るとそこには知らないスーツ姿の男が二人いた。

「なんですか？」

木場が聞くと片方の男が木場が持っているケースを一瞥すると、

「そのベルトを寄越せ！」

と叫び二人はバーナクルオルフェノクとリザードオルフェノクに姿を変えた。

「オルフェノク！」

真理が叫ぶとバーナクルオルフェノク木場に殴りつけた。殴られた木場は路面に転がったがすぐさまケースからギア一式を取り出しベルトを腰に付けファイズフォンを取り出し変身コードを入力した。

『STANDING BY』

ファイズフォンが認証音を鳴らすと木場はファイズフォンを高く持ち、

「変身！」

ベルト ファイズドライバー に付けた。

『COMPLETE』

再び認証音が鳴るとフォトンストリームが木場の体に沿ってながれ、強く発光するとその姿をギリシャ文字のΦを模した仮面ライダーファイズへと変えた。

「ハア！」

ファイズはバーナクルオルフェノクへに一撃加えそのまま連続攻撃をした。しかし、攻撃を決めたところでリザードオルフェノクが攻撃をしそれ以上の追撃が出来ず、そのまま今度はさっきの三原が変身したデルタの時のようにオルフェノクはコンビネーションを混ぜながら攻撃した。

「命が惜しければベルトを渡せ！」

「今度こそ！」

「くそ。」

ファイズは徐々に追い詰められていた。

「待つて！何処に行くの、乾さん？」

「さあな？」

起き上がった巧はそのまま廃工場から動こうとしていた。まるで

自分に関わるなどでも言うように三原と阿部を突き放して。

「教えてくれ！君は味方なのか？・・・敵なのか？・・・人間なのか？・・・オルフェノクなのか？」

三原が質問すると巧は立ち止まり、

「分からない・・・俺にも。」

「その答えならば、私が教えた筈です。」

巧が答えたその瞬間だった、工場の後ろの入口から スマートブレイン 社長・・・村上峽児が現れた。

「あれは？」

「スマートブレイン社長・・・村上峽児だ。」

刃の質問に麗華が答えた。その間にも村上は悠然と歩きながら近づいてきた。

「飛翔、行くぞ！」

ファイズがやられるのも黙って見ておくほどレヴァ達も甘くは無かった。走りだした二人はファイズに止めを刺そうとしたバーナクルオルフェノクとリザードオルフェノクを蹴り、ファイズを救助した。

「大丈夫ですか？」

飛翔が聞くと、

「ええ、ありがとうございます。それで、貴方達は一体？」

と答えた後ファイズが逆に質問してきた。

「俺達は通りすがりの仮面ライダーですよ。」

飛翔はかつて共に旅をした仲間の口癖を言った。

「仮面ライダー？」

ファイズは疑問に思ったがそれ以上は聞かなかった。

「ち、貴様ら！」

「殺して差し上げますよ！」

蹴られたリザードオルフェノクとバーナクルオルフェノクは怒りながら立ち上がった。

「飛翔！」

「ええ！」

レヴァと飛翔はすぐにそれぞれのドライバーを出し、準備した。

そして、

「変身！」

『KAMEN RIDE DECADE』

『KAMEN RIDE DEZANDE』

二人は同時にカードを装填し、ディケイドとディザンドに変身した。

「ウオオオオオオオ！」

変身したのを見た二体のオルフェノクは雄叫びを上げながら突っ込んできた。しかし、

『ATTACK RIDE SLASH』

ディケイドとディザンドはスラッシュのカードを装填し、威力を高めたライドブッカーとディザンドライバーで切り伏せた。ここからは圧倒的だったバーナクルオルフェノクをファイズに任せた二人はそれぞれの得物でリザードオルフェノクを切り裂いていきどんどん弱らせていった。バーナクルオルフェノクを任されたファイズも冷静に攻撃を捌きながら逆に攻撃を加えていき、バーナクルオルフェノクを圧倒した。

リザードオルフェノクを弱らせたディケイド、ディザンドの二人は止めにとカードを装填した。

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DECADE』

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DEZANDE』

「ハア！」

ディケイドは十枚の3Dカードを通って相手を切り裂く デイメ

ンションスラッシュを、デザインドはデザインドライバーに3Dカードを纏わせ形成した光の刀身で相手を切り裂く　デイメンションスラッシュ　でリザードオルフェノクをクロスに切り裂き倒した。バーナクルオルフェノクを殴り飛ばしたファイズは左腰からデジタルカメラ型の　ファイズショット　にファイズフォンの表面に付属している　ミッションメモリー　を抜き取り、ファイズショットの中央部スロットに挿入した。

『READY』

認証音が鳴るとグリップが飛び出てファイズショットは　ナックルモード　へと変形した。それを手に付けるとファイズはバーナクルオルフェノクへと走り、その途中でファイズフォンを開きENTERキーを押した。

『EXCEED　CHARGE』

二度の認証音が鳴るとファイズドライバーからファイズショットへフォトンブラッドの赤い輝きが走り抜けた。

「ハア！」

「グオオオオオオオオ！」

バーナクルオルフェノクは　グランインパクト　をまともにくい背中から赤いΦの紋章が出る青い爆発を起こしその身を灰に変え消滅した。

「ハア、ハア。」

安堵したその時だった。

「矢駄なく。僕の獲物だったのに。まっ良いけどね。君を倒した方が、面白いし。」

後ろから　ラッキークローバー　の一員である北崎が現れた。

「誰？」

ファイズは知らない相手に戸惑いを見せたがお構い無しに北崎その身をドラゴンオルフェノク・魔人態へと変えた。

「!？」

それを見たファイズはドラゴンオルフェノク・Mを殴ったが、余

りの防御力に効かず逆に爪で切り裂かれてしまった。

「！？飛翔！」

「分かってます！」

そこにリザードオルフェノクを倒してきたディケイドとディザン
ドが加勢にきた。しかし、

「グア！？」

「ガ！？」

ドラゴンオルフェノク・Mのパワーに力負けしてしまいそのまま
ファイズ共々攻撃され続けられた。

「貴方はオルフェノク。それ以外に生きていく道はありません。」
「確かにそうかもな。でも、お前の仲間になるくらいなら死んだ方
がまだだよ！」

村上の言葉に巧は否定の答えを言った。それに対して村上は、
「そうですね、私に恥を欠かせるんですか。それならば、お前に生
きていく価値は無い！」

と激昂し、その身をローズオルフェノクに変え巧に襲ってきた。
そうはさせないと巧の前にベルト デルタドライバー を付けた三
原が立つが変身する前に殴り飛ばされてしまった。

「三原君！？」

吹き飛ばされた三原に阿部が駆け寄る。その間にローズオルフェ
ノクは巧を殺そうとするが巧もその姿をウルフォルフェノクに変え、
ローズオルフェノクと相対した。

「ゲ！？」

三人は三度殴られたが距離が開いた隙にファイズは左手首に付い
ている腕時計型 ファイズアクセル から アクセルメモリー を
取り、ファイズフォンに付けた。

『COMPLETE』

ファイズは胸部アーマーが展開し同時にフォトンストリームの色も銀色に変化、目の色も黄色から深紅の赤色に変わったファイズ・アクセルフォームになり、ファイズアクセルのスイッチを押した。

『START UP』

すると周りの景色がファイズを除いて遅くなり、その間にファイズ・AFはドラゴンオルフェノク・Mにアクセルグランインパクトを放った。その時だった、ドラゴンオルフェノク・Mはアクセルグランインパクトは当たった直後にその身を抜け殻の様に扱いその背中からドラゴンオルフェノク・龍人態へと姿を変え出てきた。ドラゴンオルフェノク・Rはファイズ・AFも速いスピードで動き三人に更なる攻撃を開始した。

「フ、ハ、サ！」

「ハア！」

ローズオルフェノクとウルフォルフェノクは激しい攻防を繰り返していた。しかし、ウルフォルフェノクが距離を取った時ローズオルフェノクが額から無数の薔薇の花びらを出しウルフォルフェノクを攻撃したことで一気に戦況を動かされてしまった。その頃、俺はデルタに変身して土竜の特質を持つモールオルフェノクと戦っていた。そうなった経緯は巧さんがローズオルフェノクと戦い始めた時に俺も加わろうとしたら、このモールオルフェノクが、

「社長の邪魔はさせん！」

と割って入ったからだ。因みに当初はディガイドで行こうとしたがまだ変身するべき時では無いと思い、倒れている三原から、

「三原さん、これ借ります。」

と言いデルタギアを拾った。

「貴方、それは！」

デルタの恐ろしさを知っている阿部は止めさせようとしたが、

「大丈夫ですよ、分かっていますから。」

と刃は断り麗華に、

「二人の事を頼む。」

と頼んだ。デルタドライバーを腰に付けた俺はデルタフォンを口元に持つて行き音声コードを言い、

「・・・変身」

『STANDING BY・・・COMPLETE』

ドライバーの右腰に付いているデルタムーバーにデルタフォンを取り付け、変身した。

「これが、デルタ。」

変身した俺はデルタの感触を確かめるように今の姿を見回し、

「ふむ、殺るか。」

モールオルフェノクとの戦いを始めた。そして時間は現在に戻る、あれからウルフォルフェノクはローズオルフェノクに投げられ、元の姿に戻ってしまった。ローズオルフェノクは動けない巧の前まで来ると首を掴みその身体を持ち上げた。

「ア！ガ、ガアアアアアアアアアア！」

「乾さん！」

阿部の声も虚しくローズオルフェノクは腕に更に力を込めていった。

「巧さん！」

戦局はまさに絶体絶命のピンチだった。

第24話『F・彷徨える魂、水の妖女』（後書き）

今回は何時も後書きとは違い私一人でやります（殆どこの形式に変わるかもしれませんが）。

今回からファイズに入りました。この時間での敵は作中で麗華が言っていたようにオルフェノクだけとなります。その変わり出てくるオルフェノクの数には原作よりも多くなりますが。

今回登場したオリジナルオルフェノクのリザードオルフェノクは姿としてはブレイドに出てきたリザードアンドレッドを灰色にしたものと思ってくれば幸いです。

天の道を行く妄想者様、海人様、感想ありがとうございます。
それでは、また次回で。

第25話『F・ファイズ2・赤の救世主』（前書き）

お待たせしました、第25話です。

今回はタイトルにも出ているあのフォームが出ます。

それでは、どうぞ。

第25話『F・ファイズ2・赤の救世主』

「ガ！？グ！？ガアアアアア！？」

「ハハハ」

ファイズは魔人形態に戻ったドラゴンオルフェノクに踏みつけられていた。ディケイドとディザンドはファイズを助けようとしたが、龍人形態のスピードと魔人形態のパワーに圧倒されずに変身解除までさせられていた。そして、

『ERROR』

ファイズは強制変身解除させられ、元の姿に戻ってしまった。

「木場さん！」

真理が叫んだその時だった、ドラゴンオルフェノクの目の前に紙飛行機が横切ると突然ドラゴンオルフェノクは北崎の姿に戻り何処かに去ってしまった。その間に真理とサヤは三人を助け起こすところから離れる事に成功したのだった。

「ガアアアアアアアアアア！」

「フフフ。」

巧はローズオルフェノクによって首を締められていた。

「糞が！」

「グオオオオオオオオオオ！」

俺はモールオルフェノクによって足止めされ、助けに向かう事が出来ないでいた。

「木場さん、大丈夫ですか？」

「レヴァさんに飛翔も大丈夫ですか？」

真理とサヤはそれぞれ支えている人に聞いた。

「僕は大丈夫です、大したことないから。」

「私も大丈夫だ。」

「俺も。」

三人は結構なダメージを受けていたが幸いそこまで深い傷ではなく大丈夫なようだ。その時だった、突然木場の携帯が鳴った。木場は痛む体をフェンスに預けながら携帯を取り出し電話に出た。

「はい？」

『木場か？今何処に居る？手を貸してくれ。』

「ハアアア！」

ローズオルフェノクは再び額から薔薇の花びらを出し、巧に攻撃した。

「ク、うあ！？」

巧は生身の状態ながらも必死に防御した……その時だった。突然車とバイクが来たかと思うと、

「巧！」

「マスター！」

車の中から真理、サヤと、

『STANDING BY』

ファイズドライバーを付けた木場が出てきた。そして、

「「刃^{さん}！」」

バイクからはレヴァと飛翔が降りてきた。二人は俺の所に駆け寄ってこようとするが俺はそれを手で制した。

「変身！」

『COMPLETE』

木場はファイズに変身するとローズオルフェノクへと向かった。しかし、それでもローズオルフェノクは臆する事無くファイズを向かえ撃った。ファイズは流れる様に拳を繰り出していくがそれでもローズオルフェノクには及ばず逆にピンチへと徐々に追い詰められていった。その時、サイドバツシャーに乗り草加が駆けつけた。状況を素早く確認した草加はカイザドライバーを腰に付け、カイザフォンに素早く変身コードを打ち込んだ。

『STANDING BY』

「変身！」

『COMPLETE』

草加はローズオルフェノクへと向かいながら、カイザフォンをカイザドライバーに付けXを模した黄色の仮面ライダー カイザに変身し、ファイズの援護を始めた。

カイザが加わった事でファイズも先ほどよりは攻撃を加えていたがそれでもローズオルフェノクは二人と対等に戦った。カイザが持ち前のパワーで動きを止めようとするが、ローズオルフェノクはそれを振り払いカイザをファイズへと投げ、そのまま二人を吹き飛ばした。しかし、二人も距離が出来た事で、ファイズはデジタルトーチ型の ファイズポインター に、カイザは双眼鏡型の カイザポインター にそれぞれの ミッションメモリー を付け、

『READY』

『READY』

キックモード に変えると、それぞれ右足首に取り付け、ファイズフォンとカイザフォンのENTERキーを押した。

『EXCEED CHANGE』

『EXCEED CHANGE』

二人はそれぞれのデバイスにフォトンブラッドがチャージされると同時にローズオルフェノクに向かってファイズは赤い円錐型のマーカーを、カイザは黄色い四角錐のマーカーを付けた。

「グオ!?」

ローズオルフェノクはマーカを付けられた事で苦悶の声を上げた。二人はその隙にファイズは クリムゾンスマッシュ を、カイザは ゴルドスマッシュ を放つ為に飛び蹴りを放とうとした。しかし、

「グオオオオオオオオオ、ハア!」

ローズオルフェノクは一際声を上げるとその身を赤い薔薇に変え、その場から消えてしまった。

「何!?!?!消えた?」

ファイズは技を回避させられた事に疑問を投げたが、その場には赤い薔薇しか残っていなかった。

「FIRE」

『BURST MODE』

ファイズとカイザが来たので俺は目の前に敵に集中した。俺は音声入力でデルタムーバーを光線を三点発射する バーストモード にするとモールオルフェノクに向かって撃った。モールオルフェノクはさっきまでの近接戦闘から遠距離も混ぜた戦闘に俺の攻撃方法が変わった事に戸惑いを見せ、その攻撃を避けきる事が出来ずに当たってしまった。

「グオオオオオオオオオ!」

モールオルフェノクは苦悶の声を上げたが俺はそれを気にせず、更に攻撃を加え畳み掛けた。殴りや蹴りの攻撃の最後にもう一度蹴りを入れ距離を取ると俺はデルタドライバーに付いている ミッションメモリー をデルタムーバーに付けた。

『READY』

ミッションメモリー が付いたデルタムーバーは銃身を伸ばしポインターモード へと変形した。俺はそれを口元まで持つてくると、

「CHECK」

と言った。

『EXCEED CHANGE』

音声入力によりデルタムーバーにフォトンブラッドが貯まると俺は銃身をモールオルフェノクに向け撃った。すると銀色の三角錐のマーカーがモールオルフェノクを捕まえた。モールオルフェノクは苦悶の声を上げながら逃げようとするが逃げる事は出来なかった。

「ハ！」

俺はモールオルフェノクまで飛び上がるとマーカーに向かって飛び蹴りを放ち敵を倒す。ルシファーズハンマーでモールオルフェノクを貫いた。俺がマーカーを通り抜けると、モールオルフェノクは赤い爆発と赤い△の紋章を残し灰となり消滅した。

「巧ー！？」

刃が皆がいる所に戻ると真理は巧を追って外にいつてしまった。

俺はそれを見ると右腰のデルタムーバーからデルタフォンを取り変身を解除した。

「三原さん、これを。」

「あ、ああ。」

俺はデルタギア一式を三原さんに返した。平然としている俺を疑問に思ったのか阿部さんが話しかけてきた。

「貴方、何か身体に異常は無いの？」

「《異常？ああ、デルタの後遺症か》ええ、大丈夫ですよ。別になとも。」

阿部さんは怪しんでいたが俺が素直にデルタギアを返した事や平然としている事をしっかりと確認するとそのまま引き下がった。しかし、草加はそうはいかなかった。

「普通の人間がデルタに変身して何も無い筈が無い。君は、本当に人間か？」

本来デルタは普通の人間でも変身する事が出来るように設計されているしかし、デルタには闘争本能活性化装置 デモンズスレートが装備されている。これは不適合者を極めて攻撃的な性格に変貌させる物の為、オルフェノクやオルフェノクの記号の影響が強い者でなければ適合しない代物になってしまっている。つまり草加は適合出来ている俺をオルフェノク又はオルフェノクの記号を持つ者と思っているようだ。

—— まあ、敵としてだろうけどな ——

俺はそう思いながら答えた。

「俺は・・・化け物ですかね。」

「ッ!？」

俺は冷たい殺気を草加に放ちながら言い、そのままサヤ達を連れてこの場を後にした。あくまでも敵では無いと言う事を教えながら

その日の夜、俺は麗華の屋敷にいた。麗華がどうしても言うから俺だけ泊まる事になったのだ。ん？サヤ達はどうしたって？ああ、アイツ等はんでか知らないが野宿するらしい。流石に止めたがどうしても言うから俺は何も言わず、『響鬼の物語』で貰ったキャンプ用のテントや道具を渡した。そうでもない俺が心配だからだ。まあ、そんなこんなで今、案内された部屋のベッドに横になつているところなのだが、

「なあ、何故お前が居るんだ？」

「何故ってここが妾の寝室だからだ。当たり前だろう？」

「はあ。」

—— やけに部屋の配色に青が多いと思ったら、理由はこれか ——

隣で寝間着姿の麗華を見ながら溜め息をはくと、横から麗華が抱

きつてきた。

「お、おい！？麗華、いきなり抱きつくな。」

「別に良いではないか。それともなんだ、抱きつくのに理由があるのか？」

「……俺の負けだ。」

「それで良い。そもそもこんな美人に抱きつかれて抵抗する方がおかしいだろ？」

「……嫌いな奴なら美人でも抵抗するさ。」

「お前は私が嫌いなのか？」

刃が言つと麗華は涙目をしながら刃の顔を覗き込んできた。

「……そんな訳ないだろ。もし俺がお前の事が嫌いだったら眷属にすらないし、あの時点で見殺しにしている。だから心配するな。」

「本当か？」

「ああ。」

刃が麗華の頭を撫で微笑みながら言つと麗華は顔を綻ばせ、刃の胸に顔を埋めた。

「お、おい！？麗華！？」

「……」

「麗華？」

「……すーzzzz……」

返事をしない麗華に疑問を持ち、顔を見ると麗華は既に眠っていた。

「もう、寝たのか？まあ、今日は色々あったしな。……俺も寝るか。……おやすみ、麗華」

刃はそのまま、麗華の頭をもう一度撫で、優しく抱きすくめ眠った。

その頃ある川辺では、

「それにしても本当に良かったのですか？レヴァさん。」
「ん？」

サヤ、レヴァ、飛翔の三人がテントを張り野宿していた。因みに既に夕食も食べ、今は寝る前のティータイムの様な状態である。

「マスターを一人で麗華さんの所に残した事です。」

サヤは持っていたティーカップを机に置きながら言った。因みに中身は紅茶である。

「まあ、良いんじゃないか。」

「え？」

レヴァはサヤと同じようにティーカップを机に置きながら言った。
「だって私達は刃と想いを分かちあっているから良いけど、彼女はまだまだし、何より少なくとも一年以上は会っていないと言う話だし、今日ぐらいいはと私は思っている。」

「レヴァさん……そうですね。今日は、いえこの時間にいる間ぐらいいは彼女にマスターを任せましょう。」

「そう言う事だ。さて飛翔も寝たようだし私達も寝るとするか？」

「そうですね。」

そう言ってレヴァとサヤはテントの中に入り、眠った。

次の日の朝、俺と麗華は外にいた。情報集めでも良かったがあれだけ調べていればもう有力情報も無いだろうと思い、それなら後は時に任せるという事で外に散策がてら散歩しているという訳だ。
「それにしても良いのか刃？こんなにのんびりしていて？」

麗華が歩きながら聞いてきた。因みに今の麗華の服装は動きやすい青のトレーナーに同色のズボン、上に黒い上着を羽織っているという格好だ。

「後は時間の問題だろうな。まあ、気楽に構えるさ。」

刃は歩みを止めずに答えた。因みに刃は格好は普段の黒の上下に袖無しの上着を羽織っている状態だが、髪は結ばずに垂らしている状態なので端から見ればボーイツシュ系にしか見えない状態だ。

「そうなのだろうが……ん？」

そんな時、刃達の前方に黒い布を頭に巻いた白髪の男と二人のスイツを着た男が揉めているのを麗華は発見した。最初こそは唯の喧嘩だと思ったが様子が尋常では無く、スイツ姿の男二人が姿を蝶の特質を備えたバタフライオルフェノクと梟の特質を備えたオウルオルフェノクに姿を変えた事で二人は黒い布を巻いた男を助ける為に走った。

「ハア！」

「ガ！」

刃達は二体のオルフェノクを蹴り飛ばすと、黒い布を巻いた男の元に駆け寄った。

「大丈夫か？」

「あ、ああ。」

——ん？この人——

刃は男を見た時、一瞬目見開いたが、すぐに振り払い目の前の事に集中する事にした。

「く、この餓鬼が。よくもやりやがったな。」

「殺してやるよ。」

二体はそう言うのと灰色の翼を背中から広げ、空中へと飛び上がった。そしてオウルオルフェノクは翼から灰色の羽根を、バタフライオルフェノクは鱗粉を黒い布を巻いた男と麗華に向けて飛ばしてきた。

「な！？」

「まずは、その青髪の女と爺からだ。」

「くそ、間に合え！」

刃はすぐさま二人を突き飛ばすと二体のオルフェノクの攻撃を自らの身で受けた。辺りは鱗粉による爆発と羽根の弾丸により爆発音

と煙に満たされた。

「刃！？」

麗華が叫ぶが返答は無く、やられてしまったのかと思ったその時、
『K A M E N R I D E D E G A I D E 』

電子音が鳴り響き、煙が消えるとそこにはディガイドに変身した刃が立っていた。

「刃！無事だったか？」

「ああ、なんとかな。」

ディガイドは麗華の方を向き答えた。しかし、その声はさっきまでよりどこか弱々しかった。

「麗華、お前は下がってその人を守ってくれ。こいつらは俺がやる。」

ディガイドはサモンドライバーを構え、二体のオルフェノクの方を見ながら言った。それに対し麗華は、

「いやだ。妾はそなたと共に戦う！」

ディガイドの隣に立ち、空中にいる二体のオルフェノクを睨みながら言った。

「お、おい！？」

「舐めるなよ！妾にだって戦う力はある、それにそなたは少し過保護過ぎだ。妾だってそなたの隣で戦いたかったのだ。少しは信用しろ。」

そういうと麗華の瞳は虹色に顔の下半分はステンドグラス状になり、その次の瞬間麗華は、ナマコをふつとうさせるアクアガラスのファンガイア、ソーンファンガイアへと姿を変えていた。それを見た二体のオルフェノクと黒い布を巻いた男はギョ！？としていたが、ソーンファンガイアは構わず二体のオルフェノクに自身に蓄えている水を使い水の弾丸を放った。流石に牽制目的に放たれた物なので大部分は避けられたが、意表をついたものだった為、何発かはオルフェノクに着弾しダメージを与えた。

「グー！？」

「この女!？」

二体のオルフェノクはソーンファンガイアを睨みながら苦悶の声で放った。

「麗華……無理はするなよ。」

「は、妾の実力とくと見せてやる。」

ディガイドはソーンファンガイアに言うと言つとサモンドライバーとライドブッカープロト・ガンモードを構え、ソーンファンガイアもそれに答えながら自らの身体から大剣・マンイーターサーベルを生成し同じように構えた。

「さあ、行くぞ?」

ディガイドの言葉と共に戦いの幕は落とされた。

暫くして、戦いは圧倒的なまでにディガイドとソーンファンガイアの勝ちで終わった。まあ当たり前と言えば当たり前であるディガイドは言わずとも、ソーンファンガイアでさえエクメイトフォアのクイーンに匹敵するほどの能力を持っている為に並のオルフェノクでは勝負にならなかったのである。序盤こそはオウルオルフェノクとバタフライオルフェノクは空中から攻撃を仕掛けるという戦法で戦っていたが、ソーンファンガイアの広範囲の水の弾丸とディガイドのサモンドライバーとライドブッカープロトによるディガイドブラストにより撃ち落とされてからは、ディガイドがDGファイズ・AFへとカメンライドした事で超高速の世界からの攻撃によりオウルオルフェノクとバタフライオルフェノクは呆気なく倒されたのである。

「ふう、終わったか?」

「ああ、終わりだ。」

ソーンファンガイアとディガイドはそれぞれ変身(?)を解き、元の姿に戻った。そこへと先ほど助けた黒い布を頭に巻いた男が近

づいてきた。

「君達は一体？それにその血は？」

「ん？」

男が刃の右腕を指差し、そこを見てみるとそこから緑色の血が流れていた。

「……………（あの時か）。」

どうやら刃が二体のオルフェノクの攻撃から守る為二人を突き飛ばした時、少しだけ攻撃が当たっていたようである。

「確かに俺達は人間じゃない、でもそれは貴方もだろ？」

と刃が言つと男はギョっとしながら、

「……………気づいていたか？」

と言った。

「ああ、貴方を助けた時に貴方からオルフェノクの気配がしましたから。」

「……………私もさっきのオルフェノクのように殺すのか？」

「まさか、貴方が人を襲わない限りはしませんよ、えーと。」

刃が質問に答え、名前を言おうとすると、

「花形だ。そやつは元スマートブレイン社長、花形だ。」

麗華が教えてくれた。それを聞いた刃は驚きながらも、

「何故貴方がオルフェノクに？」

と聞いた。

「私はオルフェノクは滅ぶべき種族だと思っている、その為だ。」

「……………。」

刃はその答えに言葉を出す事が出来なかった。

「私は急いでいるのでそろそろ行く。では、また会おう。」

「……………ええ、ではまた。」

そう言つと花形は去つていった。刃はその背中を——同

じオルフェノクでもこうまで考えが違う人物がいるのか。——

——と考えながら見えなくなるまで見ていた。

時間を少し巻き戻し、刃と麗華がオルフェノクと遭遇した頃サヤ達はと言うと、

「ハア！」

「ハアアアアアアアア！」

ディケイドとディザンドは激しい切り合いの応酬をしていた。勿論殺し合いでは無く模擬戦だ。表面状はどちらも拮抗しているように見えるが、よく見るとディザンドの方が剣の腕は勝っている事が伺える。それもその筈であるディザンド・・・レヴァの家系は代々一つの流派を受け継いできた家系でその影響もありレヴァも幼少の頃から剣の腕を磨いていたのである。

上段切りから返しの形で下段切り、袈裟斬りからの二段構えの変則切りなどディザンドは多種多様の剣技を繰り出していた。しかし、それを迎え撃つディケイドも負けてはいなかった。ディケイド・・・飛翔自身は記憶が無く、門矢士達との旅でもまともな剣技を習っていた訳では無いがそれでもたぐいまれないバトルセンスで喰らい付いていた。レヴァ・・・ディザンドはそれを見ながら、

——まさか、ここまで私の剣に喰らい付くとはな。——

と心の中で感心していた。因みにサヤは簡易イスに座りながら近くで観戦していた。程なく二人は互いにディザンドライバーとライドブツカー・ソードモードを切り払い、距離を開けた。すると唐突にディケイドが言った。

「そういえば、巧さんあれから見つかったのかな？」

「なんだ、飛翔。模擬戦とは言え戦闘中に別の事を考えるとは。」

ディザンドはディザンドライバーを下に向けながら飛翔に言った。

仮面で表情を見る事は出来ないが顰めっ面をしている事だろう。

「いや、唯ふと心配になって。」

「むう・・・・・・・・・・。」

ディケイドの答えにディザンドは唸りながら考え初めてしまった。実はサヤを含めたこの三人も巧達がローズオルフェノクに襲われた廃工場で阿部から今までの事を聞いていたのだ。それにより飛翔は巧の事を心配するようになっていた。

「だって幾ら自分の正体がオルフェノクだと周りにバレたからって真理さん達の前から消えるなんてそれだけ真理さん達の事が大切じゃないと出来ないじゃないか。」

「いや、しかしだな」

「だとしても、本当にそれだけなのでしょうか？」

「サヤさん？」

二人が会話しているとそれまで椅子に座っていて見てただけのサヤも加わってきた。

「彼にだって他の理由があるかもしれませんよ？」

「他の理由って？」

「例えば、何時人間の心が消えてしまつか分からない・・・とか。」
「あ」

飛翔は思い出していた前に刃が言っていた事を。刃は言った――

――オルフェノクはいずれ人の心無くしてしまう可能性がある。あるし人間を見下している奴らが多い。だから、人との共存を望むオルフェノクは一握りしかない――と。しかし、それと同時に思い出してもいた士達と行った『ファイズの世界』の事を。そこでその世界のライダー・・・ファイズだった少年、尾上タクミは周りから軽蔑されると分かっていても自らの正体であるウルフルフェノクになってある人を救った事を。その事を思い出しながら飛翔は言った。

「だとしても、きっと真理さんなら巧さんを受け入れてくれると俺は信じるよ。」

飛翔が言ったその時だった。

「だったら確かめてみるか？巧さんの居場所なら分かったからな。」

「「刃！」」
「刃！」」

「マスター！」

後ろから刃と麗華が現れた。

「実はここに来る前に木場さんから連絡を貰ってな。話に寄れば巧さんは木場さん達と一緒にいるらしい。」

と刃は普通の携帯より少し大きく、黒の配色にオレンジの線が入った携帯を見せながら言った。

「本当か！良かったあ。」

変身を解いた飛翔は脱力したかのようにイスに座りこんだ。

「マスター、珈琲です。」

「ん？ああ、ありがとう。」

サヤは刃に珈琲を注ぎ持ってきた、今は模擬戦を止めた為みんなテントの所に戻ってきている。

「ふむ、そなたあのオルフェノクが心配だったのか？」

麗華は飛翔に聞いた。

「当たり前だろ。あんなにボロボロだったんだ心配しない方がおかしい。」

飛翔は当然と言わんばかりに言った。

「ふ、何時何時いつなとき、人の心を失ってしまうか分からない奴にでも手を差し伸べるか。本当に人間は不思議だな。」

ファンガイアからしたら人間の行動は不可思議なのだろう、麗華は飛翔の言った事を笑いながら解釈していた。

「まあ、どちらにしろ彼が本来のファイズなんだろう。話を聞いても良いんじゃないか？」

同じく変身を解いたレヴアは飲んでいた珈琲を机に置きながら言った。

「まあな。どちらにしても、行くのは明日だ。明日は真理さんも行くらしいからそっちの方が都合が良いしな。」

そう言つと刃は珈琲を飲んだ。

「都合が良いって？」

飛翔がこっちを向きながら聞いてきた。

「真理さんもいるから俺達の事を一度に説明出来るだろ、だからだ。」

「ああ、なるほど。」

そう言つと飛翔は納得したのか目の前にあつた珈琲に口を付けた。

あ、あれはブラックじゃなかったか？

気付いた刃が飛翔に言おうとしたがそでに遅く、飛翔は飲んでしまつていた。あまりの苦さに飛翔が悶えたのは言つまでもない。

暫く雑談しており、日が暮れてきた頃、

「お迎えに上がりました、お嬢様。」

一人の黒い長髪の女の子が訪ねてきた。

「ん？もうそんな時間が、ルシファー？」

「ええ、時間です。」

「ふむ、仕方ないか。」

麗華は少女と話をしていた。内容からしてどうやら今日はもう帰るらしい。

「なんだ、帰るのが麗華？」

「ああ、すまぬな。」

「いや、気にするな。それより彼女は？」

「おお、そうであつたな。紹介する我が専属の従者の一人、ルシファーだ。」

「初めまして、刃様。お嬢様の専属従者が一、ルシファーでございます。」

そういつと少女は一礼した。

「ルシファー、ね。一と言つと他にも専属従者が居るのか？」

「ああ、他にもレヴィアタンやサタン、ベルフェゴレ、マモン、ベルゼブブ、アスモデウスの七人が私の専属の従者だ。その他にも

シエスタ姉妹という妾の私兵もいるぞ。」

「そこまでは聞いていないがな。それにしても名前が全員 七つの大罪 なんだな。」

と刃が言うつと、

「ええ、なので知っておられる方からは 煉獄の七姉妹 と言われている。」

「・・・七人姉妹なのか。それで仲は良いのか？」

「え？ええ、まあ・・・」

刃の質問にルシファーが言葉を濁すと、

「ククク、仲は良いのだが、そやつは長女なのによく妹達にからかわれての。それは見物だったわ。」

麗華が笑いながら言った。それにルシファーが顔を赤らめながら反応した。

「お、お嬢様。それは言わない約束ですよ／＼」

「おお、そうだったかの？」

「お嬢様へ。」

——こうして見ると仲の良い姉妹だな——

刃はそう思いながら二人のやり取りを見ていた。

「麗華さん、帰らなくてもよろしいのですか？」

何時までも麗華とルシファーが痴話喧嘩をしているのに見飽きたのかサヤが声をかけた。

「ん？おお、そうであつたな。ではな、他の者達はまた今度紹介するぞ。」

「では、皆さん、失礼します。」

そう言つて麗華とルシファーは屋敷へと帰っていった。

「ふ、賑やかだったな。」

「それにしても従者がいるなんて、麗華さんの実家…水妖家ってかなり位が高いのか？」

流石に疑問に思ったのか飛翔が聞いてきた。

「ああ、伯爵だしな。結構ファンガイア族では名家らしい。なんでもクイーンの家だとか。」

「そ、そうなんだ。」

飛翔は想像よりも麗華が偉い事に若干驚いていた。まあ、当たり前か。

「さて、そろそろ飯にするか。」

「そうだな、よし飛翔。手伝え。」

「おう。」

そう言っただけで飛翔は飯の支度を始めた。

——たまにはこんなのにのんびりするの悪くはないな——

その日、刃はそう思った。

翌日、俺達は木場さんに教えてもらった場所に真理さんと共にいた。

「そうか、木場の奴がそんな事を。」

「うん、悩んでいるのは人間の証拠だって。……もっと自身持ちな

よ……巧は巧なんだから。」

真理さんは巧さんに諭すように言った。因みに俺とレヴァ以外はソファに座っており、席順は右のソファにサヤと真理さん、俺の目の前のソファに巧さん、飛翔の順で座っており、俺は巧さんと飛翔が座っているソファの前に机を隔てて立ち、俺の横に同じようにレヴァが立っている。

しかし、巧さんは真理さんの言葉を否定するかのように首を横に振り、

「真理……違うんだよ……以前俺はお前を……」

頭を抱えてしまった。しかし、それを聞いた真理さんは、

「巧…もしかして誤解しているんじゃない？」

と言った。それを聞いた巧さんは頭を上げ、それを見た真理さんは続けて言った。

「流星塾の同窓会の日の事…」

「誤解？」

「巧は私達の事助けようとしてくれたんだよ。私…思い出したの私達を襲ったのは巧じゃなくて別のオルフェノクだって。」

それを聞いた巧さんは呆然としながら、

「俺じゃ……ない。」

と言った。

「だからこれ…これは巧の物だよ。ファイズとして戦えるのは巧しかない。」

真理さんは床に置いていた手提げのバックからスマートブレインのロゴが付いたケースを取り出し机の上に置いた。中に入っているのは間違いなく ファイズギア だろう。

「……もし、お前の言う通りだとしても……駄目だ！」

巧さんはそう言うケースを真理さんの方に返した。

「巧さん、どうして?!」

飛翔が言うと巧さんは姿勢を変えながら、

「俺は自分が怖いんだ。今が平気でも……何時、人間の心無くすか分からない……澤田の様に……」

「巧……」

——これが巧さんの心の闇か——

俺は三人のやり取りを見ながら、そう思った。流石の真理さんも今の巧さんにかかる言葉が無く辺りは沈黙していた。丁度その時だった。いきなり真理さんの携帯が鳴った。真理さんは慌てて携帯を出し、電話に出た。

「はい、もしもし……草加君が！」

どうやら事態が動いたようだ。

阿部さんの話ではどうやら草加さんが一人でオルフェノクを倒しに向かったらしい。流石に違和感を感じ俺達も向かってみると状況は圧倒的に不利な状況だった。カイザの変身が解け、草加さんはいまにも殺されそうになっていた。敵は三人、ドラゴンオルフェノクとオクラの特質を備えたオクラオルフェノクとトビウオの特質を備えたフライングフィッシュオルフェノクだ。あのドラゴンオルフェノクがラッキークローバーだとするとあのそれに従う二体のオルフェノクも結構な手練という事だろう。

—— しかも、周りにもオルフェノクがいるな ——

更にどうやらこの状況を見ているオルフェノクが数体居ることに俺は気づいた。

「草加君!？」

「草加君!」

阿部さんと真理さんは素早く草加さんの安否を確認めるとすぐにそれぞれのバイクにくくり付けているケースを外し、そこからフェイスギア と デルタギア を取り出し腰に付け、それぞれ変身コードを入力した。それを見た飛翔も二人を助ける為に二人の元に駆け寄り腰にドライバーを付けた。

『STANDING BY』

「変身!」

『ERROR』

「キヤア!？」

真理さんは変身コードを入力したフェイスフォンをフェイスドライバーに付けるがエラーの音声と共に赤い電撃が走り、身体を吹き飛ばし廃棄されていた貨物車に叩きつけられてしまった。

「真理い。」

それを見た草加さんは呻きながらも真理さんを助けようと手を伸ばすが今の草加では動く事すらままならなかった。阿部さんと飛翔

も真理さんが吹き飛ばされたのを見て助けようと思ったがすぐに助けに入る事が出来ないと悟るとすぐ様オルフェノクを倒す為に行動を起こした。飛翔は左腰のライドブッカーからカードを、阿部さんはデルタフォンを口元に持って行き、

「……変身！」

「変身！」

『STANDING BY・・・COMPLETE』

『KAMEN RIDE DECADE』

飛翔はドライバーにカードを装填、阿部さんはドライバーの右腰に付いているデルタムーバーにデルタフォンを付けそれぞれディケイドとデルタに変身した。

「ッ！？ウアアアアアアア！」

「ハアアアアアアアア！」

デルタとディケイドは雄叫びを上げながら三体のオルフェノクへと向かっていった。しかし、三体のオルフェノクは全く動じる事なく二人に迎え撃ち、戦闘経験の浅い阿部さんが変身したデルタはドラゴンオルフェノクの拳をともに喰らった後、オクラオルフェノクの斧の攻撃を喰らいベルトがとれ変身が解除されてしまった。ディケイドはある程度戦う事が出来たが流石に三対一では無理があったのか遠距離からフライングフィッシュオルフェノクの攻撃をデルタと同じように受け吹き飛ばされてしまった。それを見た真理さんが再びファイズフォンに変身コードを打ち込み変身しようとしたが、結果はさっきと同じで今度はドライバーまで外れてしまった。しかも、ベルトが外れたこの時を狙っていたのか今まで潜んでいただけの行動しなかったオルフェノクが姿を現した。その数、四体。

「チ。」

「お、おい刃。止める！」

俺は隣から聞こえたレヴァの静止の言葉を聞かず次の瞬間、生身で超高速の世界に入った。

「真理!？」

俺は真理が変身出来ずに吹き飛ばされたのを見ていてもたっても
いられずファイズドライバーを取りに行こうとしただが、その時だ
った。いきなり四体のオルフェノクがファイズギアとデルタギアが
落ちている所に現れた。

「な!？チィ!」

俺はその時、オルフェノクの姿になろうとした。そうすれば俺は
人間の心を無くしてしまうかもしれないけど少なくとも真理達は逃
す事が出来ると思ったから。どんどんオルフェノクが各ギアに二体
ずつ近づいていく中、俺が決心したその時、

「グ!？ガアアアアアアアアア!？」

突然黒い物がオルフェノクの周りを通ったかと思うとオルフェノ
ク達は空中へと浮き上がりそのまま吹き飛ばされた。

「な、一体…何が」

俺がそこまで言った時、丁度ファイズギアとデルタギアが落ちて
いる所の中間地点に長い白銀の髪を翻しながら所々傷だらけになっ
た刃が現れた。

「刃!お前何、生身でクロックアップ使っているんだ。生身だと身
体にダメージがくるって分かっている筈だろ!」

呆然としている俺達は尻目に金髪の何処かスポーツ系を思わせる
女――確かレヴァとか言ったか――が現れた。そ
の言葉に再び刃を見た俺は気づいてしまった人間では明らかに出来
ない事をする刃が決定的に人間では無いと決める物を。

「刃・・・お前その血・・・」

所々裂けていた服の隙間から見えた刃の血は少なくとも人間を表
す赤では無く鮮やかな緑色だった。

「刃！お前何、生身でクロックアップ使っているんだ。生身だと身体にダメージがくるって分かっている筈だろ！」

超高速の世界・・・クロックアップの世界から出ると後ろから明らかに怒っているレヴアが近づいてきた。それに答えようとした時、巧さんの方から声がかかった。

「刃・・・お前その血・・・」

その言葉に自分の身体を確認すると確かに血が流れていた。しかも、今その血は腕を伝って外に流れているからさっきまで見えなかった阿部さんや草加さん、真理さんそしてまだ隠れているであろう三原さんにも見えている筈だ。俺は巧さんの方を向きながら言った。「すみません。騙していた訳じゃないですけど、必ず後で話すので今は目の前の事に集中して下さい。」

「・・・分かった。」

そう言う巧さんは素早くファイズドライバーに走りよると腰に付け、ファイズフォンに変身コードを打ち込んだ。

「巧い」

『STANDING BY』

「変身！」

『COMPLETE』

待機音が鳴るファイズフォンをファイズドライバーに付けると身体に沿って赤いフォトンストリームが流れ、次の瞬間にはその身を仮面ライダーファイズに変身させた。俺はそれを見ると倒れているデイケイドに、

「飛翔！お前は巧さんを手伝え、行けるだろ？」

「ああ、この程度で終わる訳にはいかない。」

と言った。巧さんがファイズになったのを見た真理さんは立ち上がりオートバジンに駆け寄ると荷台から赤い箱型の機械を取り出しそれをファイズへと投げた。

「巧！」

「？」

「もう一度変身コードを入力して！」

真理さんに言われたファイズはドライバーからファイズフォンを取りその機械に取り付け、

『AWAKENING』

変身コードを打ち込んだ。

『STANDING BY』

すると突然赤い箱型の機械・・・ファイズブラスターが発光し、ファイズの触角が衛星イーグルサットから信号を受信すると赤いフォトンストリームはフォトンブラッドが流れていない黒色のブラックアウトストリームに変化し、背部にはPFFがフォトン・ワールド・フローターが装備され複眼が黄色、その他の基本カラーが赤に変わったファイズの最強形態 ファイズ・ブラスターフォームへと強化変身を果たした。

第25話『F・ファイズ2・赤の救世主』（後書き）

と言う事で今回の25話でした。

前回からデルタに変身した刃ですが、精神に変調は起こりません。まあ、それも刃がオルフェノクの細胞（というか記号？）を持っているからです。

刃の今回使用していた携帯は分かる人には分かるあれです（描写が分かりにくいかもしれませんが）。

そして今回判明した刃の人間態でのクロックアップ使用可能！しかし、劇中でレヴァが言っているように人間態で使うとリスクがある為、あくまで緊急用です。

更に今回初登場した麗華の従者であるルシファー。モデルは勿論『うみねこのなく頃に』の煉獄の七姉妹の長女ルシファーです。口調が結構うる覚えなので自信はありませんが。

因みにこの七姉妹及びシエスタ姉妹ことペンドラゴンの私兵達の出番は『過去の物語編』ではあんまりありません（え！？）。ですが、その後には出番を増やしていくので。

海人様、感想ありがとうございます。

では、また次回で会いましょう。

それでは。

第26話『F・人間の証、流星塾の真実』（前書き）

第26話です。

今回は555の重要な部分の一つである澤田のあれが出ます。

それでは、どうぞ。

第26話『F・人間の証、流星塾の真実』

「あれがファイズ・ブラスターフォーム・・・」

ファイズがブラスターフォームへと強化変身するところを見ながら俺は呟いた。フォトンブラッドが全身に流れ赤くなったスーツ、背部にはマルチユニットである PFF、まさに別名である 赤の救世主 を名乗るに相応しい姿だった。

「グ、オオオオ！」

俺はクロックアップで吹き飛ばしたオルフェノクが起き上がるのを見ると隣にいるレヴァにいった。

「レヴァ、二体ずつ仕留めるぞ。俺はこっち、お前は阿部さんの方にいる二体だ。」

「・・・分かった。無茶はするなよ。」

と言うとレヴァは走ってもう片方にいるオルフェノクに向かっていった。

「・・・やった後に言っなよ。」

俺はそう呟くと、腰にドライバーを付けカードを装填した。
「変身」

『KAMEN RIDE DEGAIDE』

ディガイドに変身した俺は両手を叩き合わせると両腰からライドブッカープロトとサモンドライバーを取りながら、

「さて、さっさとやるか。」

と言い目の前の二体のオルフェノク・・・亀の特質を備えたトータスオルフェノクと蜻蛉の特質を備えたドラゴンフライオルフェノクへと向かっていった。

「まったく刃の奴は本当にどうしようもないんだから。」

私は前にいる——見た感じ兎と蠅螂だよな——

ラビットオルフェノクとマンティスオルフェノクを見ながら呟いた。どうやら二体共に訳も分らない内に攻撃を喰らい、吹き飛ばされた為、相当気がたっているようだ。

「……行くぞ。」

私はドライバーを出し、精神を集中させながらカードをデザインドライバーの罫にあるカード挿入口に装填し刀身をポンプアクションの要領で前へスライドさせた。

『K A M E N R I D E』

「変身！」

『D E Z A N D E』

変身の掛け声と共に柄にあるグリップのトリガーを引くと、レヴァの周りに赤、緑、青の周りに虚像が出現し同時に刀身から紅のライダープレートが飛び出した。虚像がレヴァに付きスーツを形成するとライダープレートもスーツの仮面へと付き、スーツを紅色に染めデザインドへの変身が完了した。

「ハアアアアアアアアア！」

デザインドに変身したと同時に私は前へと走りだし、ラビットオルフェノクへと切りつけた。

「ガア！」

「ッ！？貴様！」

切りつけられたラビットオルフェノクは仰け反った、そこに追撃しようとするが庇うようにマンティスオルフェノクが両腕の鎌を振り上げて攻撃してきた。すかさずドライバーを使い受け流すがこの事により仰け反っていたラビットオルフェノクは体勢を立て直していた。

「これは、苦しいか？」

私はそう呟きながらドライバーを構え直した。

「ハア!!」

「グ、オオ!」

ディケイドはドラゴンオルフェノクとオクラオルフェノクをファイズ・BFに任せ、フライングフィッシュオルフェノクの相手をしていた。さっきからライドブッカードをソードモードにし接近戦を仕掛けていたが、どうやらこのオルフェノクは武器がモリを発射する巨大な水中銃なだけあって接近戦は苦手なようで先程の様に苦戦せずに攻撃をする事が出来た。

『ATTACK RIDE SLASH』

「喰らえー!」

「グオオオオオオオオオ!」

ディケイドはスラッシュで斬撃を強化し、更に攻撃を重ねていた。しかし、流石のフライングフィッシュオルフェノクも一筋縄では行かず距離が出来たらその巨大水中銃でディケイドへと攻撃をしていた。

「グア!?糞、それなら。」

そう言いながらディケイドはライドブッカードからカードを取り出すとドライバーに装填した。

『FORM RIDE KUUGA DRAGON』

ディケイドはDクウガ・ドラゴンフォームにカメンライドと同時に出現したドラゴンロッドを持ってフライングフィッシュオルフェノクへと攻撃をした。

「ハ、フ、オリヤ!」

「ガ、グ、グオ!?」

Dクウガ・DFは流れる様な棒捌きでフライングフィッシュオルフェノクに攻撃した。距離が取られても脚力が強化されたドラゴン

フォームの前では相手もろくに距離を取れないのか次第に追い詰められそして、

「これで止めだ！」

『FINAL ATTACK RIDE KU・KU・KU・KU UGA』

「ハア、オリアアアアアアア」

Dクウガ・DFはジャンプするとフライングフィッシュオルフェノクへ空中からドラゴンロッドを相手に叩き込み封印エネルギーを流す スプラッシュドラゴン を叩き込んだ。

「ぬ、グアアアアアアアアアア！」

スプラッシュドラゴンを受けたフライングフィッシュオルフェノクは苦悶の声を上げ灰へとその身を還元された。

「ハ、イヤ！」

「ガフ！？」

「グギャ！？」

ディザンドは持ち前の剣術で二体のオルフェノクに引けを取らずに戦っていた。しかし、やはり多対一をやり慣れていないのか時々反撃を許してしまうが、

「ハ、ハ！」

「ギャ！？」

ディザンドが呼び出していたアギト・フレイムフォームが持っているフレイムセイバーでディザンドに反撃しようとしていたマンテイスオルフェノクを切り裂きディザンドのサポートをしていた。これによりディザンドは当初よりも比較的に有利に戦いを進ませる事が出来た。勿論ラビットオルフェノクやマンテイスオルフェノクも自らの武器や能力で応戦してくるが、ディザンドもアギト・FF自らの得物で切り裂いたり、アギト・FF特有の超越感覚の助けを借り

避けていたのでいつの間にか二体のオルフェノク追い詰められてしまった。

『ATTACK RIDE CROSS ATTACK』

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DE ZANDE』

「ハ、ハアアアアアアアアアア……ハア！」

「ウオオオオオオオオ……ハア！」

「「グアアアアアアアアアアアア？」」

ディザンドは二枚のカードを装填し、アギト・FFはフレイムセイバーの柄にある鐐にあるクロスホーンを2本から6本に展開し、敵を切り裂き炎上させるセイバースラッシュを、ディザンドはディメンションスラッシュを繰り出しラビットオルフェノクとマンティスオルフェノクを倒した。

「……流石に疲れるな。」

そう呟きながらディガイドは目の前にいるトータスオルフェノクと飛んでいるドラゴンフライオルフェノクを睨んだ。この二体はなかなか厄介で二人で連携をやりながら攻撃してくる訳では無いが、トータスオルフェノクの両腕の盾と空中に飛んでいる機動力に苦戦しなかなかなと思うように攻撃出来ないでいた。だが確かにこのままでは負けはしないがディケイドかディザンドが勝ちこつちに来てくれないと手がかかるが連携が出来ていない事で相手を一体ずつ倒すのが可能となっていた。

「さて、まずは亀からだな。」

そう言いながらディガイドはカードを一枚取り出すとドライバーに装填した。

『FORM RIDE AGITO BURNING』

カードの効果により瞬時にディガイドの姿は赤く常時展開したクロスホーンにまるで灼熱のマグマの様な赤色の上半身を持つD G アギト・バーニングフォームへとカメンライドした。D G アギト・B F になったディガイドは拳を握り炎を纏ったままトータスオルフェノクへと殴りつけた。

「!？」

すかさずトータスオルフェノクは両腕の盾は正面で一つにし防御しようとしたが、あまりのD G アギト・B F の攻撃力に逆に防御を崩された上で喰らって吹き飛ばされてしまった。それを見たD G アギト・B F はトータスオルフェノクが吹き飛ばされ茫然としているドラゴンフライオルフェノクを尻目に二枚カードを取り出すと装填した。

『ATTACK RIDE SHINING CALIBER』

『FINAL ATTACK RIDE A・A・A・AGITO』

D G アギト・B F は専用武器であるシャイニングカリバー・エマージェンモードを呼び出すと薙刀のように展開しシングルモードへと変えた。そのままD G アギト・B F はシャイニングカリバー・シングルモードを構えたままトータスオルフェノクへと歩み寄り恐怖により動けないトータスオルフェノクへと炎の力を込めたシャイニングカリバー・シングルモードで敵を一刀両断する バーニングボンバー で切り裂いた。

「ア、アア、アアアアアアアアアアアア！」

「ハア！」

「グギヤアアアアアアアア！」

トータスオルフェノクを倒したD G アギト・B F はドラゴンフライオルフェノクの方を向いた。トータスオルフェノクが倒された事を茫然としながらも認識したドラゴンフライオルフェノクは逃げられない恐怖に自暴自棄になりながら突っ込んできた。

「ア、ア、オオオオオオオ！」

「フ、ハア！」

D Gアギト・B Fはそれを避けもせず正面から殴りつけた。それによりドラゴンフライオルフェノクは吹き飛ばされた。吹き飛ばされたドラゴンフライオルフェノクはそれに出来た距離を使い全速力で明後日の方向に逃げた。それを見たD Gアギト・B Fはそれを良しとせず、

「逃げる、か。では飛翔やレヴアも周りにいない事だしこのカードを使うか。」

周りにディケイドやディザンドがいない事を確認してから、あるカードを装填した。

『FORM RIDE ORZ TAJADOR』

『タカ、クジャク、コンドル』

『タ〜ジャ〜ドル』

電子音が鳴るとD Gアギト・B Fの周りを囲む様に複数枚で色とりどりの巨大なメダルの虚像が現れると正面に赤い三枚のメダルが縦に並び一つに合わさりながら胸に付くとその姿を顔は鷹の羽根に嘴を象った外装甲に赤い複眼のタカヘッド・グレイブ、腕部は孔雀を象った装甲に左腕には専用武器タジャスピナーを装備したクジャクアーム、脚部はコンドルを象った装甲に爪先と踵にストライカーネイルとラプタードエッジが付加されたコンドルレッグに胸には金縁のオーラングサークルに不死鳥を模したオークオーツが輝く今から約800年前に存在した 仮面ライダーオーズ のタジャドルコンボへとディガイドはカメンライドした。

「さて、終わらすか。」

D Gオーズ・タジャドルコンボはそう呟くと逃げていくドラゴンフライオルフェノクへと向かってクジャクアームの背部から孔雀の羽根を模した翼を出現させ、それを一気に無数の羽根手裏剣として射出した。

「ハアアア、ハア！」

「!?!? ギャアアアアア！」

逃げる事に専念していたドラゴンフライオルフェノクは自分を追

尾しながら迫ってくる無数の羽根手裏剣に直前まで気付かずにと
もに受けてしまい地面に叩き落とされた。それを確認したDGオー
ズ・タジャドルコンボはクジャクアームの背部から普段は折りたた
められている6枚の翼　クジャクウイング　を展開し飛び立ち、ド
ラゴンフライオルフェノクの前まで行くと止めの為のカードを装填
した。

『FINAL ATTACK RIDE O・O・O・ORZ』

「ハアアアアアアアアア！」

DGオーズ・タジャドルコンボは膝から下を展開し脚部そのもの
を巨大なクローに変形させると、そのまま炎を纏わせ急降下蹴りを
する　プロミネンスドロップ　をドラゴンフライオルフェノクに放
った。

「ガアアアアアアアアアアア！」

それを喰らったドラゴンフライオルフェノクはダメージの許容限
界を超え灰となり倒された。

『EXCEED CHANGE』

「ハアアアアアアアアア……てりゃあああああ！」

「ウアアアアアアアアア！」

一方、こちらでも戦いは終盤に差し掛かっていた。ファイズ・ブ
ラスターフォームは空中からファイズブラスター・ブレイドモード
から巨大なフォトンブラッドの刃を伸ばして敵を一刀両断する　フ
オトンブレイカー　でオクラオルフェノクを倒した。それを見たド
ラゴンオルフェノクは雄叫びを上げながらファイズ・ブラスターフ
ォームに駆け寄るが、

『FAIZ BLASTER DISCHANGE』

ファイズ・BFはファイズブラスターを操作してフォトンファイ

ルドジュネレーターを展開し両肩に背負う形にした　ブラッディ・キヤノン　へと変形させ、ドラゴンオルフェノクに向けて撃った。
「う、グア!？」

撃たれたドラゴンオルフェノクはあまりの威力に逃げていった。それを確認したファイズ・BFは変身を解除しベルトを外した。そこに、

「巧!」

真理が巧の元へ走ってきた。

「真理」

「戻ってきてくれるんでしょ？ 私達のところに。」

真理は巧に戻ってきてほしい旨を伝えた。しかし、

「止せ!!!」

あろう事かそれを止めたのは草加だった。

「俺はまだ君を信用した訳じゃない…… いずれ君も完全なオルフェノクになる、澤田の様にな!」

「止めてよ! 草加君、巧はそういうのじゃない!」

「そうだ、巧さんはそこらのオルフェノクとは違う!」

そう言って向こうから先に合流して刃達がやって来た。因みに今の台詞を言ったのは飛翔だ。しかし、

「真理……すまない。」

そう言って巧はファイズギアを真理に渡すと走って何処かに行ってしまった。

「巧……」

真理を渡されたファイズギアを握りしめながらその場に立すくしていた。

その日の夜、刃達が野宿しているテントでは暗い雰囲気になっていた。もっとも暗い雰囲気になっているのは飛翔だけであって残り

の三人は普通に過ごしているが。

「はあ、なんでなんだ巧さん。一体どうして？」

「・・・何時までもお前が悩んでいても仕方がないだろ？お前が悩んだ所で何にも変わらないんだから。」

「で、でも俺にだってやれる事くらい」

そう言いかけた飛翔に刃は口を閉ざさせながら、

「良いか？先に言っておく。俺達はいくまで未来の人間だ。まあ、

俺は人間じゃないが、だからこの時間ではやれる事は限られている。不用意に未来を変えるような事をさせる訳にはいかないんだ。分かったか？」

「それは分かってたけどそれとこれにどういう関係が？」

「・・・お前がやろうとしている事はこの時間の歴史をかえかねない事、今まで通りの距離なら良いがこれ以上踏み込むのであれば俺はお前を・・・」

刃は一端ここで口を閉じた。それに何か悪いものを感じた飛翔はこれ以上聞かず、

「：分かった。気をつける。」

と言い飛翔はテントの中に入って行つた。

「流石に今の言い方は強いのでは？」

サヤは今の刃の言い方に疑問に思つたようだ。

「いずれ飛翔は俺達との旅を終えて独り立ちする。そうなれば今のように過去の時間にも関わるようになるだろう、俺はその時に飛翔に間違つた行動をしてほしくは無い。だから、俺達がそばにいる間に言い方は強くなつても教えてやるこれが言い方が強くなる理由さ。」

「そうだな。私も飛翔には剣術の基礎を教えたい、だから刃の考えに賛成だな。」

レヴァが刃の考えに賛成のようだ。

「そうですね、しかし私達がこの先、廻る時間はこの時間を合わせて残り六つ。流石に早いのでは？」

「この先何があるのか分からないんだ、早いに越した事はないだろう。人間の諺にもあるだろう『備えあれば憂いなし』ってな。」

「そうですね、マスターの考えは分かりました。」

サヤの言葉でこの会話は終わり、刃達はテントに入り寝た。

翌日、刃とサヤはあるバーの前にいた。バーの名前は クローバー
ー そうラッキークローバーの溜まり場である。しかし、刃達が待っている人物はラッキークローバーではなく、

「お前達、何で此处に？」

「なんでって貴方を待っていたんですよ、巧さん。」

そう今しがたラッキークローバーに宣戦布告をしてきた乾巧を刃達は待つていたのだ。

「俺を？何でだ？」

巧は無愛想な顔をしながら聞いた。

「そうですね……何となく、ですか。」

「はあ?!」

巧は刃の答えに大声を上げた。

その頃、レヴァと飛翔はあるガソリンスタンドで神妙な顔をして話している三原と阿部を見つけた。

「あれは、阿部さんに三原さん？どうしてこんな所に？」

と飛翔が言うと突然三原がおそらくデルタギアが入っているであろうケースをスピードを出してトラックが通ろうとしている道路に投げてしまった。それを見た阿部はすぐさまケースを取りにいったがそこにトラックが突っ込んできてしまった。

「!？」

「アイツなんて事を！」

レヴァはすぐさまディケイダーを走らせたが、間に合わず阿部とブレーキを掛け止まるうとしたトラックは止まりきれずに正面衝突してしまった。

「里奈ー！」

「くそ、間に合わなかったか！」

レヴァはすぐさま阿部の元に走り、状況を確認した。どうやら頭を強く打っており、その時に切ってしまったらしく頭から血を流していた。

「飛翔、すぐさま救急車を呼べ！急げ！」

「ああ。」

レヴァは飛翔にすぐさま刃から渡せれていた刃の携帯と同じような形をしこつちは青い塗装がされた携帯を渡すと救急車を呼ばせた。

あれから暫くしてお互いバイクの乗って移動しようとしていた時、いきなり俺達の前に澤田さんが現れた。

「！お前は・・・澤田。」

巧さんは付けようとしていたヘルメットを外し澤田さんの方を向いた。そしてヘルメットをバイクにかけるとバイクから降り、澤田さんの前に立った。

「生きていたのか？」

その問いに澤田さんは答えなかった。そして、

「俺は真理の命を奪おうとした・・・それなのに……真理は君を信じている!!」

と言い巧さんに近づいてきた。

「俺と同じオルフェノクである君を！何故だ！」

近づいた澤田さんは巧さんの肩を掴みながらいった。それに巧さ

んは一瞬気圧されたがいきなり巧さんを掴んでいた澤田さんの手が灰化した事で澤田さんは手を離し、隠すように後ろを向き膝をついた。

「灰化か。」

俺はそれを見ながら呟いた。

「澤田。」

「そろそろ限界か。…俺もやっぱり失敗作だったと事らしい。」

「失敗作？どういう事だ。」

巧さんは何故澤田さんが自分の事を失敗作と言ったのか分からず聞いた。

「もう俺はずっと前に死んでいるんだ。…俺だけじゃない俺の昔の仲間達も。」

それから澤田さんは静かに語った。流星塾の正体を。

「俺達は全員、オルフェノクに寄って命を奪われた。だが、そこから全てが始まったんだ。」

「全てはスマートブレインの陰謀だった！奴らは人工的にオルフェノクを作る実験体として俺達を選んだ。…俺達は記憶を奪われ肉体にオルフェノクの記号を入られた。そして蘇ったんだ。」

「オルフェノクの記号？」

巧さんは聞き慣れない単語に反応した。

「そうだ。いずれ俺達の身体がオルフェノクとして覚醒するように…」

「覚醒。」

澤田さんは立ち上がりながら続きを話した。

「実際は失敗だった。…唯一人…オルフェノクになった俺も！」

そこまで言うと言った澤田さんは灰化していく右腕を俺達に見せながら突然倒れてしまった。

「澤田」

巧さんは突然倒れた澤田さんを揺すった。

「澤田！！おい、おい？」

「巧さん、彼はまだ生きています。取り敢えず落ち着いて下さい。」
サヤは焦る巧さんを諭すように言った。

「巧さん、取り敢えず何処か安静に出来る場所に澤田さんを移動させましょう。」

「あ、ああ、そうだな。」

巧さんは澤田さんを担ぐと落ちないように気を付けながら俺達はバイクに乗って移動した。

「里奈」

その頃レヴア達は阿部の病室にいた。幸い阿部の命に別状をなく、怪我也頭の傷だけで済んでいた。もっともそれが原因でまだ意識が回復していないが。

「三原さん」

三原は目の前で阿部がトラックに轢かれた事で相当精神にきているようで飛翔が呼んでも返事を返さなかった。

「里奈」

三原は目覚めない阿部の手を握った。

「俺どうすれば良いんだよ?…俺は」

三原さんが両手で阿部の右手を握りながら言ったその時だった。意識が無かった阿部が目を覚ましたのである。

「里奈!」

それに気付いた三原は阿部の顔の方を向いた。

一方、先ほど倒れた澤田さんも目を覚ましていた。

「大丈夫か？」

目を覚ました澤田さんは辺りを見回してから巧さんの方を向くと立ち上がり掛けていた布を巧さんの方に投げた。

「どういづつもりだ？」

澤田さんは明らかに警戒心を出しながら言った。

「俺を助けようとも言うのか？」

「アンタも被害者だからな……」

その言葉を聞いた澤田さんはハツとなりながら巧さんを見て、そして自虐気味に笑いながら言った。

「分かったよ……何故真理が……君を信じるのか」

その言葉に巧さんは笑ったが次の瞬間、腹部を抑えながら倒れてしまった。それもその筈だ何故なら澤田さんがオルフェノクの姿であるスパイダーオルフェノクに成りその拳で巧さんを殴ったからである。いくらオルフェノクとは言え人間状態の今では流石の巧さんでも意識を手放すしかないだろう。俺はそれを見ながら元の姿に戻った澤田さんに聞いた。

「俺達も気絶させて一人で行く気ですか？」

「君達が立ち塞がると言うなら。」

そこに強い想いを感じた俺は、

「サヤ」

「何ですか、マスター？」

「巧さんを頼む。俺は澤田さんとひと足早く先に行っておく。」

「分かりました、気を付けて。」

とサヤに巧さんの事を頼み、澤田さんに言った。

「さて、行きましようか？」

「三原君、前に言ったわよね？家に帰りたいて……私もそう……」

でも帰る家なんて何処にも無い。だからみんな一生懸命生きてるんじゃないかな？・・・一生懸命生きれば今此処に居る場所が…自分の家になるから」

「・・・・・・・・・・」

三原は阿部の言葉に何も言わなかった。しかし、その目に強い光が宿っている事にレヴァと飛翔は気づいていた。

「澤田君？」

「真理、乾巧の居場所を教えてやる。」

「巧の？」

「アイツを助けてやってくれ。近くに黒髪の女の子と一緒に居る筈だ。」

そういつと澤田さんは返答も聞かずに電話をきり携帯を閉じた。

その顔には微かな笑顔が見えた。

「もう良いんですか？」

「・・・行くぞ。」

俺が聞くと澤田さんは帽子を深く被り直しながら言い目的の場所に移動した・・・・・・・・・・。

着いた場所は大きな橋の下の川原だった。そこには北崎、かげやまさ影山^{えこ}子、たくまいつろう琢磨逸郎と三人のラッキークローバーが居た。

「何故君が此処に居るんですか、我々の相手は乾巧の筈ですが？そんな少女を連れてきてまで。」

琢磨が眼鏡の位置を直しながら澤田さんに聞いてきた。俺は琢磨の少女の言葉に対して反論したかったが今はやめた。

「選手交代さ。お前達の相手は俺がする。」

「あらその貴方はやらないの？」

冴子が俺に向かって話しかけたどうやら俺も参加すると思っているらしい。その目がまるで獲物を狙う獣の目になっているのが分か

る。

——そんなに巧さんが来ていない事にイラついているのか

そう思いながらも俺は言った。

「残念だが、俺は参加しない、見ているだけだ。それとその眼鏡さん？」

俺は琢磨を指しながら言った。

「何ですか？」

「俺は男だ！」

「なん、ですって!？」

琢磨は明らかに動揺したが冴子は驚きもせず、

「あら残念。でも、ここに居る事の意味は分かっているわよね？」
と言った。

「ああ。」

「そう、二人共ちょっと頼むわ。」

「どうしたんですか、冴子さん？」

「電話するだけよ。」

と言い冴子は橋の柱の方に下がっていった。琢磨は怪訝な顔をしながらすぐに澤田さんの方を向き、北崎と一緒にジリジリと距離を詰めてきた。それに対して澤田さんも後ろに下がりながら距離を調整していった。それを暫く見ていた俺はふと冴子の話し声が聞こえたのでそちらを見、聞き耳をたてた。

「貴方どういうつもり、貴方が戦うんじゃないの？澤田君：妙に張り切っているみたい、貴方の代わりに戦うって」

『澤田が?』

どうやら電話の相手は巧さんのようだ。すると冴子はもう話をする気は無いのか電話をきり北崎の横に並んだ。

「どうした？俺が相手じゃ不服なのか。」

澤田さんはかかってこない三人に対して言った。

「別に：今日は機嫌が悪いんだ：相手が誰でも構わない!」

北崎はそういうとその姿をドラゴンオルフェノク・魔人形態へと変えた。それに呼応して澤田さんも姿をスパイダーオルフェノクへと変え、それを合図に琢磨は百足の特質を持つセンチピードオルフェノクに、冴子は海老の特質を持つロブスターオルフェノクに姿を変え澤田さんへと襲いかかった。センチピードオルフェノク、ロブスターオルフェノクの突撃を躲したスパイダーオルフェノクはそのままロブスターオルフェノクに裏拳、センチピードオルフェノクにアッパーを決めた。しかし、ドラゴンオルフェノク・Mが爪で攻撃した事により一気に形勢を逆転してしまった。そのままセンチピードオルフェノクが鞭を、ロブスターオルフェノクがサーベルで怯んだスパイダーオルフェノクを攻撃し、最後にもう一度ドラゴンオルフェノク・Mが追撃をかけスパイダーオルフェノクは川まで吹き飛ばされてしまった。

「ぐ、く、あ！」

スパイダーオルフェノクが攻撃に苦しんでいるところにサイドバツシャーに乗った草加さんが現れた。

「草加」

「澤田、どんなにお前が変わろう……とお前の罪は許されない。」

『STANDING BY』

「変身」

『COMPLETE』

「うおおおおおお！」

「グア！」

カイザに変身した草加さんはスパイダーオルフェノクへと殴りかかった。

「ちっ！」

それを見ていた俺は二人の元へ向かおうとしたが、

「あら、何処に行くの？」

「！？」

突然、光弾が飛んできたかと思うとラッキークローバー達が俺に狙いを定めており、行く手を阻んでいた。

「そこを退いてもらおうか。」

「ふふ、私は言ったわよね。此処にいると言う事がどういう事か？」
ロブスターオルフェノクは影を人間態にしながら言ってきた。どうやらカイザと戦っているスパイダーオルフェノクより先に俺を殺す事にしたらしい。

「こんな時に限って」

「ハア！」

俺が呟くと同時にセンチビートオルフェノクが持っていた鞭で攻撃してきた俺はそれを避けながらもスパイダーオルフェノクの元に行こうとしたが今度はロブスターオルフェノクがサーベルを使ってフェンシングの動きを入れながら攻撃してきた。

「フフ、ハ！」

「舐めるな！」

それに対して俺は虚空から黒剣を出し、受け流した。そこを今度はドラゴンオルフェノクが殴りかかってきた。

「ハアアアアアアア！」

咄嗟に黒剣でガードしたが流石に今の姿じゃ受け止めきれず重い一撃を喰らってしまった。

「グハ！？」

「早くオルフェノクにならないと貴方死ぬわよ。」

ロブスターオルフェノクはどうやら俺の事をオルフェノクだと思っ
っているようだ。

まあ、確かにオルフェノクの力も持っている分、あながち間違えじゃないがな

俺は内心そう思いながらも、

「残念ながら、俺はこっちで行かせてもらう。」

懐からドライバーを出すとライドブッカープロトからカードを取り出し装填した。

「変身」

『K A M E N R I D E D E G A I D E 』

俺はディガイドに変身すると両腰のライドブッカープロトとサモンドライバーを抜き、ライドブッカープロトはガンモードにして構えた。

「見たことの無いライダーギアですね？」

センチビートオルフェノクは見たことの無いギアを見て戸惑っていた。

「あいにくスマートブレイン製ではないんでね。」

そういうと俺はライドブッカープロトを三人に向けて撃ちながら、サモンドライバーで切り込んでいった。

「ハ、フ、セイヤ！」

流石に多対一は相手がラッキークローバーという事で疲れるが距離を開けるとすかさずライドブッカープロトからカードを二枚取り出し、ドライバーとサモンドライバーに装填した。

『A T T A C K R I D E B L A S T 』

「ハ！」

「グー！」

―― 良し、今だ ――

俺はサモンドライバーの追尾分裂弾で三人を攻撃しつつ、ライドブッカープロトの銃身を三人の足元に向けわざと外し煙幕を作り、その場を離れる事に成功した。

「く、逃げられましたか。」

「まあ、良いわ。どうせあの死に損ないの所でしようし、あの子は待機させているオルフェノクで殺れば良いわ。さて、私達もカイザを始末に行くわよ。」

そう言いながら三人もスパイダーオルフェノクとカイザの元へと向かっていった。

『READY』

『EXCEED CHARGE』

「ハア、セリヤアア！」

カイザは右足に付けたカイザポインターにフォトンブラッドがチャージされると飛び上がりながら右足をスパイダーオルフェノクに向け、カイザポインターから黄色い四角錐のポインターを放った。咄嗟にスパイダーオルフェノクは巨大な八方手裏剣を出し防御するがそれにより動きを止められてしまった。

「グ、ウアアアアアア！」

「オリヤアアアアア！」

それに構いなくカイザはスパイダーオルフェノク目掛けて両足飛び蹴りのゴルドスマッシュを放った。両者、少しの間は拮抗していたが、

「終わりだー！」

「！？グアアアアアア！」

スパイダーオルフェノクは防御に使っていた八方手裏剣が破壊されそのまま喰らってしまった。

「糞！遅かったか。」

そこにディガイドが現れた。

「澤田！」

カイザはそれを見ながらもスパイダーオルフェノクを狙おうとしたが、

「！？グ！」

何処から攻撃が飛んできてそれを喰らい川に吹き飛ばされてしまった。カイザは起き上がりながらその方向を見るとそこには三人のラッキークローバー達がいて、そのままセンチビートオルフェノクとロブスターオルフェノクが向かってきた。そのまま四人は戦闘になり、それを見ていたスパイダーオルフェノクは何処かへ行ってしまった。

「・・・く、此処は草加さんを助けるか。」

とデイガイドはその戦闘に介入しようとするが、

「!?!ハ!」

いきなりデイガイド目掛けて攻撃がき、その方向を見るとそこには灰色のボウガンを構えた頭に一本の角を生やし、背中にマント状の翼を持ったエイの特質を持ったステイングレイオルフェノクがいた。

「貴様の相手はこの俺だ。」

ステイングレイオルフェノクは影を真面目そうな男にしながら言った。

「・・・・・・避けては通れないか。」

デイガイドはそう言うのとサモンドライバーを構え、ステイングレイオルフェノクへと向かっていった。

「グハ!」

ラッキークローバーと戦っていたカイザは三人に半ば袋叩きの様な状態にされ、吹き飛ばされてしまった。

「グ、ウ」

「草加!」

そこに三原がバイクに乗り到着した。三原はすぐに状況を確認すると腰にデルタドライバーを付けデルタフォンを持ち、

「変身!」

『STANDING BY・・・・・・COMPLETE』

変身コードを音声入力しデルタフォンをデルタムーバーに付けデルタに変身した。

「ウアアアアアア、ハア!」

デルタは戦いへと向かっていった。

「う、ぐ、うあ。」

逃げる為に橋を渡っていたスパイダーオルフェノクは橋から足を滑らせてしまい、川に落ちてしまい元の姿に戻った。

「ハア、ハア、ウ、グ！」

元の姿に戻った澤田は痛む身体を動かし移動しようとした。するとその時だったバイクの音が聞こえたかと思うとバイクに乗り、巧、真理とサヤ、レヴァと飛翔がきた。

「澤田！」

「澤田君！」

川にいる澤田を見つけた面々はバイクから降りると急いで澤田の元に来た。

「澤田君！」

「真理、済まない。」

澤田は今にも消えてしまいそうな声で言った。

「俺は…人間としても…オルフェノクとしても…生きられなかった。」

「そんな事無い。澤田君は人間だよ、昔の優しかった澤田君のままだよ。」

その言葉を聞いた澤田は笑顔になりながら、

「…真理…真理…」

と言いながら真理の顔を触り、そして、

「澤田君？…澤田君！」

その身を青い炎で包み灰となって消滅した。

「澤田さんは最後の最後まで真理さんの事が…」

「ああ、そして誰がなんと言おうと人間だったんだ。」

飛翔とレヴァは澤田の最後を見ながらそう呟いた。巧は燃えていく澤田の帽子を見つめ続けていた。

「ハア！」

「グオ！？」

「フ、ハ！」

「ハアア！」

「セリヤ！」

一方川原では激しい戦闘が繰り広げられていた。その戦闘は二つあり、一方はディガイド対ステイングレイオルフェノク、もう一方はカイザ&デルタ対ラツキークローバーという図式だ。この二人の状況は対照的でディガイドの方はディガイドが有利に戦いが進んでいるが、カイザ達の方ではカイザ達が不利な状況になっていた。

「サ、ハ！」

「オリヤア！」

「ハア！」

「グ、ガア！？」

「グアアアアアア！？」

遂にカイザとデルタは吹き飛ばされ、変身を解かされてしまった。

「草加さん！三原さん！」

「余所見をしている場合か？」

「フフフ、ハア！」

「ハアアアアアアア！」

「何！？グ、ガアアアアアアア！？」

ディガイドも二人がやられた事に動揺し、その隙にロブスターオルフェノクのサーベルを喰らい、至近距離からのステイングレイオルフェノクのボウガン、そしてダメ押しにとセンチビートオルフェノクの光弾を喰らい二人の近くに吹き飛ばされ変身を解かされてしまった。

「ガ、グ、しまった！？」

四体のオルフェノクを止めとばかりに三人に近づいてきた。

—— 糞、このままじゃ ——

少なくとも二人がやられる・・・そう刃が思った時だった。

「草加！」

「刃さん！」

この場に巧と飛翔が駆けつけた。

「乾」

草加は巧を見ながら呻いた。

「草加、俺も戦う…人間として…ファイズとして！」

そういうと巧はファイズドライバーを腰に付け、ドラゴンオルフエノクを見据えた。

「刃さん、大丈夫か？」

「飛翔、遅いぞ。」

刃が飛翔にそう言っていると飛翔も立ちながら、

「ごめん、でもまだいけるでしょ？」

と言いデイケイドドライバーを付けた。それを見た三人はそれに呼応するようにそれぞれのドライバーを腰に付け、

「変身」

巧と草加は手動で三原は音声入力で変身コードを入力し、

『『STANDING BY』』』

「…変身！」

「変身！」

『『COMPLETE』』』

ファイズ、カイザ、デルタに変身した。

「…変身！」

『KAMEN RIDE DEGAIDE』

『KAMEN RIDE DECADE』

刃と飛翔もそれぞれライドブッカープロトとライドブッカーからカード取り出すとドライバーに装填し、デイガイド、デイケイドに変身した。

今ここにこの物語のライダー揃った。

第26話『F・人間の証、流星塾の真実』（後書き）

という訳で第26話でした。

今回はある人からデザインドの詳しい変身描写が知りたいと聞いて詳しい変身描写を書きました。読者の皆さんの助けになったら幸いです。

そして、今回刃が劇中でオーズのカードを使っていますが、オーズは800年前にも存在したという事なので「だったら、使っちゃえ！」という事で出しました。因みに プトティラ と ブラカワニ や映画で出た タマシー 以外のコンボのカードは持っている設定です。

そして今回あった澤田の死。これは555を書くのであれば抜かせないという事で書きました。自分としては苦悩してきた巧が人間として、ファイズとして戦う決心をするきっかけの一つだと思うので。

それとただいま黒服様の『仮面ライダー剣&キバ 青く輝く炎』に刃達が出演しています。よろしかったらそちらもご覧下さい。

海人様、感想ありがとうございます。

それでは、また次回で。

第27話『F・戦いの終わり、秘密の行動』（前書き）

第27話です。

今回で555編が終了なのですが、今回は何時もより短めです。理由を挙げるとしたら私の書き方がTV本編に順次ている事が関係しています。

それでも内容自体はちゃんとしているので。これからこの様な事が多々あるかもしれませんがよろしく願います。
それでは、どうぞ。

第27話『F・戦いの終わり、秘密の行動』

「……………」

ライダーとオルフェノク、数自体はライダーが勝っているが全体的に言うとある意味互角、故に迂闊に動けない状況だった。そして、

パン

最初に動いたのはステイングレイオルフェノクだった。奴が右腕を挙げ指を鳴らすと何処からか身体の要所に鋭利な刃物が生えたメカジキの特質を持つソードフィッシュオルフェノクが姿を現し、ステイングレイオルフェノクと共に前方を塞いだ。そこを、

「此処は俺達に任してくれ。飛翔、行くぞ。」

「ああ。」

とデイガイドが言い、デイケイドと共に二体のオルフェノクを向こうへ蹴り飛ばした。それを合図にラッキークローバーは一斉にファイズ達に迫ってきた。

「刃、飛翔、頼んだぞ。」

ファイズもそういうとラッキークローバーと戦闘を始めた。

「飛翔、お前はあっち、俺はこっちだ。」

そういうとデイガイドはサモンドライバーを取るとステイングレイオルフェノクへと向かっていった。

「了解！」

それを聞いたデイケイドはライドブッカーをソードモードにして

構えた。蹴られてから立ち上がったソードフィッシュオルフェノクはディケイドがライドブッカー・ソードモードを構えているのを見ると、

「この俺相手に剣か。良いだろぜ、叩き潰してやる！」

自らの影を体格の良い短髪の男に変え言い、二本の長い刀を出すと向かってきた。

「ハア！」

「オリヤア！」

「何！？グア！？」

ディケイドは巧みにライドブッカーを使っていくがソードフィッシュオルフェノクはそれをもとめず逆に二本の刀を使って攻撃してきた。剣筋こそは日々のレヴアとの模擬戦で鍛えられている御陰で見えるが相手はレヴアとは違い二刀流、荒々しい剣筋が見れてもなかなか身体が反応出来ないのだ。

「グ、まだまだ。」

「諦めろ。」

「何！」

突然ソードフィッシュオルフェノクが言った言葉にディケイドは反論した。

「諦めろと言ったんだ。例えお前が俺に勝った所でお前じゃラッキークローバーに勝つことは出来ない。ましてや裏切り者のオルフェノクが戻ってきた程度ではラッキークローバーに勝つことは出来ないがな。」

「違う！」

ディケイドは痛む身体を起こしながらソードフィッシュオルフェノクの言葉を否定した。

「何い！？」

「確かにラッキークローバーは強力だ。仲間が居ても一人一人がバラバラだったら勝ち目は無い。でも仲間が力を合わせたならどんな敵でも倒せる！それに例えオルフェノクで合っても人の心を失わな

ければ人として生きていける。俺はそんな人を知っている。」

ディケイドは今はいない心に優しさを残して死んでいったオルフェノクの事を思い出しながら言った。

「そんなのは戯言だ。」

「人の心を亡くしたお前には分からないだろうな！」

「グ、貴様あ！何者だ！？」

「俺は自分探しの旅をする通りすがりの仮面ライダーだ！覚えなくていい」

「グヌウウウウウウ！死ぬーーーーー！」

激昂したソードフィッシュオルフェノクがディケイドへと二本の刀を持って突っ込むが、

「なかなか良い事を言うじゃないか、飛翔。」

「又、ガア！？」

突然の声と共に飛来してきたステイングレイオルフェノクに当たり一緒に吹き飛んでしまった。そして、ディケイドがステイングレイオルフェノクが飛んできた方向を見ると、

「刃さん！」

そこにはディガイドが悠然と立っていた。

ディケイドがソードフィッシュオルフェノクに言葉を言う少し前、

「フ、ハア！」

「又、グオ！？」

ディガイドはステイングレイオルフェノクに対して先ほどと同じ様に有利に戦っていた。どうやらステイングレイオルフェノクは武器がボウガンという事もあって接近戦は苦手な様だ。先ほどからボウガンの側面を使って一応接近戦に対して対処はある程度は出来て

いるが、

「そこだ！」

「何！？グアアアアア！」

罅迫り合いになった時にディガイドが左腰からライドブツカーブ
ロトをソードモードにして振り抜いた事により防御出来ずまともに
喰らってしまった。両手に武器を持ったディガイドはそのままラッ
シュをかけ一気にダメージを与えた。転がるステイングレイオルフ
エノクに対して距離を詰めた時、

「確かにラツキークローバーは強力だ。仲間が居ても一人一人がバ
ラバラだったら勝ち目は無い。でも仲間が力を合わせたならどんな
敵でも倒せる！それに例えオルフェノクで合っても人の心を失わな
ければ人として生きていける。俺はそんな人を知っている。」

「・・・飛翔の奴、良い事を言うじゃないか。」

ディガイドにディケイドの言葉が聞こえた。それは紛れもなくデ
イガイドがこの時間でディケイドに知ってほしい事をディケイドが
知ったと示す言葉だった。

「それなら・・・」

ディガイドはそう良いながらカードを一枚取り出し装填した。

『FORM RIDE KIVA DOGGA』

ディガイドはDGキバ・ドツガフォームにカメンライドすると同
時に装備したドツガハンマーを振り上げ、勢い良くステイングレイ
オルフェノクに打ちつけステイングレイオルフェノクをディケイド
の方向へと飛ばした。

「ウアアアアアアア！」

DGキバ・DFはディガイドの姿に戻ると自らもディケイドの方
向へと行き、

「なかなか良い事をいうじゃないか、飛翔。」

「刃さん！」

と言った。そのままディガイドはディケイドに歩み寄り、横に並
ぶと立ち上がるうとしているソードフィッシュオルフェノクとステ

イングレイオルフェノクの方を見ながら言った。

「行けるか？飛翔。」

「何時でも！」

するとそのタイミングを待っていたかのように二人のライドブツカーとライドブツカープロトからブランクカードが飛び出した。そのブランクカードにファイズの紋章が浮かび上がると次の瞬間には絵柄が戻っていた。

「飛翔、やれ！」

「ああ。」

デイガイドに言われデイケイドはライドブツカーからカードを一枚取り出し、持っているカードより先に装填した。

『K A M E N R I D E F A I Z』

デイケイドはDファイズにカメンライドするとすぐさま持っているカードを装填した。

『F I N A L K A M E N R I D E F A I Z B L A S T E R』

電子音がなるとDファイズの姿はファイズの最強形態であるブラスターフォームへとファイナルカメンライドした。更に、

『K A M E N R I D E O R G A』

デイガイドはライドブツカープロトからカードを取り出しドライブバーに装填すると、その姿を眼は赤くΩを模したデザインに金色のフォトンストリームにローブを纏った地の帝王 異名を持つ黒色の仮面ライダー オーガにカメンライドした。

「・・・ハ！」

「ハア！」

DGオーガとDファイズ・BFはそれぞれの得物であるライドブツカープロトとライドブツカーを持ち、二体のオルフェノクへと駆け寄り攻撃した。

「又・・・何！」

「まだだ！ハア！」

「馬鹿な！？グアアアアアア！」

D Gオーガの斬撃をステイングレイオルフェノクは自らの武器であるボウガンで防御するが、オーガにカメンライドした事でライドブッカープロトの斬撃力も上昇しており、最初の一撃でヒビが入り次の斬撃で二つに切り裂かれ、自らも切り飛ばされた。

「セ、ハ！」

「ハ、セリヤ！…今だ！」

『ATTACK RIDE BRADICANON』

「ハア！」

「グオオオオオ！？」

ソードフィッシュオルフェノクは二本の刀を持ってDファイズ・BFへと向かっていくが、Dファイズ・BFはライドブッカー・ソードモードで対応しソードフィッシュオルフェノクが怯んだ所でドライバーにカードを装填し、背部のPFFを光弾を連発して発射する。ブラッディ・キャノンへと変形させソードフィッシュオルフェノクを先にD Gオーガによって吹き飛ばされていたステイングレイオルフェノクの元へ吹き飛ばした。

「飛翔、決めるぞ」

「ああ！」

D GオーガはDファイズ・BFの横に来るとオーガの紋章が描かれた黒色のカードを見せながら言った。Dファイズ・BFはそれを見ると同意しながらD Gオーガと同じようにファイズの紋章が描かれた金色のカードを取り出した。そして、

『FINAL ATTACK RIDE O・O・O・ORGA』

『FINAL ATTACK RIDE FA・FA・FA・FA・FA

IZ』

「ハアアアアアアア・…ハア！」

「ハア！」

「ウアアアアアアア！？」

二人は同時にそれぞれのドライバーにカードを装填し、D Gオーガはライドブッカープロト・ソードモードから金色のフォトンブラ

ツドの刃を出し敵を切り裂く オーガストラッシュを、Dファイズ・BFはライドブッカー・ソードモードをライフルの様に剣先から赤いフォトンブラッドをレーザー光線の様に放つ フォトンブレイカー をステイングレイオルフェノクとソードフィッシュオルフェノクへと放った。二つの必殺技を受けた二体のオルフェノクはその場にギリシャ文字の黄金のΩと紅いΦを浮かび上げさせながら灰へと変化し消滅した。

「巧！」

俺と飛翔が巧さん達の所に戻ると戦いはもう終わっていた。巧さんの方に真理さんが走っていき、巧さんはファイズの変身を解いた。

「巧……」

「真理」

「巧……もう迷わないよね？ 私達の所に帰ってきてくれるよね？」

真理さんは顔を輝かせながら言った。しかし、ここでも草加さんが、

「それはどうかな……君達二人が戦っていく決意をしたのはめでたいが……」

ここで草加さんは三原さんを見ながら、

「君は何時弱気になるか分からない。」

と言った。それに対して三原さんは無言だった。草加さんは視線を巧さんに戻しながら、

「それに君はオルフェノクだ。何時人間の心を失うか分からない。」

と言った。しかし、そこを真理さんが、

「止めて……巧もう迷わないでよ……澤田君の様にならないで。」

と静止し、巧さんに言った。それを聞いた巧さんは若干無言にな

りながらも、

「真理」

と言った。まるで同意するかのように。それを聞いた俺は飛翔に、
「飛翔、この時間を移動するから別れを言っ て来てくれ。」

と言った。それを聞いた飛翔は、

「え？でも刃さんは言わなくていいのか？」

と聞いてきた。

「ああ。俺は少し移動する前に用事があるからそつちを片付けてからゼロライナーに行く。」

と言いその場に飛翔を残し俺は移動した。

飛翔と別れた刃は周りに誰もいなく、街が見渡せる山の中にいた。
「さて、ここだな。」

そこには灰色のオーロラがまるで自分の存在を誇示するかのようにあった。本来ならこのオーロラは別の世界に移動したり、呼び寄せたりする事に使われるので本来ならこの様な形で現れる事は無い筈なのだ。しかし、世界の境界線といえど完全では無く数こそは少ないがこの様な事が起こる時もある。

「……さつさと済みますか。」

刃はそう言うのと虚空に手を翳した。するとそこに光が集まっていき一つの武器を呼び出した。それは名もない白い鎌。刃が『始まりの地』に戻ってくる三年間の間に行った世界で貰った友好の証。これ自体は戦闘用では無いがせっかくなので刃が儀式用に力を与えた物だ。刃はそれを持つと灰色のオーロラの側まで歩いた。オーロラの前までくると刃は鎌を両手で持ち構え、言葉を紡いだ。

「我は世界を守護する者、我は世界のバランスを保つ者。かの者の

力が流しこの扉をその刃で閉ざせ！」

言葉を紡ぐと刃の身体は次第に黒いオーラで包まれていき、それに呼応して鎌の刃にも黒いオーラが纏われていく。そして、

「断罪・封刃！」

黒いオーラが纏われた鎌でオーロラを切り裂いた。切り裂かれたオーロラはまるで鏡が割れた様な音を立てると粉々に砕け散り消滅した。

「……すまないな、『戦車』。だがこの時間に貴方の力が流れるのはあつてはならない事なんだ。そこは了承してくれ。」

刃はこの世界に居ない人物の名前を言いながら謝罪した。まるでその人物の仕業ではない様な口振りで。

その後、刃は懷から黒いカードを取り出すと空に掲げた。すると街の方から緑色の光が溢れたかと思うとそのカードに吸い込まれていった。光が全て吸い込まれるとカードは表には緑のラインが刻まれていた。刃はそのカードを暫く見ていると後ろから足音が近づいてきているのに気付いた。

「……何回やってもこれは慣れないな。そう思わないか？なあ……サヤ」

「そうですね。でもこれをやらなければ後々面倒な事になるから仕方ありませんよ。」

サヤは静かに刃の隣に歩いてきながら言った。その顔には何処か悲しみが張り付いているのが分かる。

「そんな顔をするな。消える訳じゃないんだ、ただ時が来るまで封印するだけさ。」

「……一時的とは言え、です。これは全ての世界でやらなければいけないのですから。」

刃はサヤの言葉を聞くと一度目を閉じ、深呼吸すると手をサヤの頭に置き撫でた。サヤは無言でされるがままになり、目を閉じた。

暫くすると刃は何も言わずに歩きだし、サヤもそれに続きゼロライナーへと向かって行った。

「さて、次の時間に行くか。」

ゼロライナーが停車している所に着いた刃はみんなを見ながら言った。するとそんな時だった。

「刃、あれ!？」

レヴァが刃の後ろを指差しながら言った。刃が後ろを向くとそこには灰色のオーロラが佇んでいた。

「オーロラ、何故此处に？」

「俺が出した訳じゃないぞ。」

「じゃあ一体何で？」

サヤ、刃、飛翔の順に疑問を言っていくとオーロラが突然動きだし、刃達を通過させた。

後にはゼロライナーが静かに残っているのみだった。

第27話『F・戦いの終わり、秘密の行動』（後書き）

という訳で第27話でした。

『例え異形であつても人の心を持っているなら人間でいられる』

これは555を語る上で絶対に欠かせない言葉だと思います。巧が人間として、ファイズとして戦えたのも澤田が身をもってこの言葉を体現したからだと思うので。

そして後半の刃が行なった行動はこれからの物語上では欠かせない物（と言うか本編と矛盾させない為）に必要な伏線です。まだ明かす事は出来ませんが次の時間でも触れていくので楽しみに。

ラストは黒服さんとのコラボに繋がった形にしました。もしよければそちらもお読み下さい。

天の道を行く妄想者様、海人様感想ありがとうございます。

次回から『D』の世界なので楽しみに。
では、また次回で。それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2875p/>

破滅の断罪者

2011年7月2日03時11分発行